

黒の剣士が白兔に転生するのは間違っているだろうか

語り人形

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二つの剣を振るい仮想世界を駆け巡った黒の剣士キリトはその死後、その魂は元いた世界を離れ異世界へと転生した。だが、何故か前世の記憶を保持したままであった。新たな生を授かった彼は迷宮都市オラリオに向かい、一人の神と出会う。

これは…白兔に転生した黒の剣士が歩む新たな物語。

原作終了後のキリトがダンまちのベルに転生したらの思い付き作品です。

目次

第1話	新たな夜明け	1
第2話	転生	5
第3話	賢神	9
第4話	恩恵	15
第5話	スキル	20
第6話	猛牛	25
第7話	劍姫	30
第8話	アドバイザー	37
第9話	絶劍	47
第10話	手合わせ	55
第11話	視線	61
幕間	道化の宴	70
第12話	怪物祭	78
第13話	怪物出現	87
第14話	怪物退治	94
第15話	街角の闘い	99
第16話	黒劍と白狐	109
第17話	お誘いと路地裏の出会い	118
第18話	買い物デート	127
第19話	新装備	135
第20話	サポーター	144
第21話	沈黙	154
第22話	心の温度	162
第23話	賢神の図書館	169

第24話	煌夜の世界	179
第25話	魔法	187
第26話	剣の記憶	197
第27話	ファミリアの呪縛	209
第28話	思惑	217
幕間	少女に囁くは、笑う悪魔	225
第29話	裏切りの末路	231
第30話	霧中の襲撃者	243
第31話	退魔の光	250
第32話	闇を祓う光剣	263
第33話	涙の果て	270
第34話	神と眷属	284
第35話	遠征までの一時	294
幕間	若猪の追憶	302
第36話	特訓の終わりに	315
第37話	宿命の邂逅	324
幕間	衝突	333

第1話 新たな夜明け

全天燃えるような黄昏の空、大小無数の浮島と赤く染まる雲勢が漂うこの世界は今、滅びの時を迎えていた。

この世界の中心軸である巨大な鋼鉄の浮遊城アインクラッド。ゲームでありながらHPが尽きれば現実の肉体が死ぬこの世界。

およそ一万人のプレイヤーの意識を現実から隔離した天空の牢獄は先刻、一人の剣士により解放され崩壊の真つ只中であつた。浮遊城の下部から少しずつ城片が無限に広がる雲海へ沈み落ちるその城を、上空から看取る者達がいた。

「なかなか絶景だな」

不意に、一人が声を出した。

白衣を羽織つた研究者のような男。その名は茅場晶彦。

少年のかつての憧れ、この世界の創造主であり、一万の人間を浮遊城に閉じ込めては魔王としてラスボスを務めた全ての元凶である男。

彼は己が夢見た城、渴望し、ひたすら追い求めたこの世界を聖騎士に扮した自らの正体を暴き立て、最終的に相討ちという形で勝利した英雄に語つた。

「私はね——まだ信じているのだよ——どこか別の世界には、本当にあの城が存在するのだと……」

そう呟やいた男は英雄に別れとゲームクリアの祝福の言葉を残し、気が付けば跡形も無く、幻であつたかのようにこの世界から退場した。

彼がどこに旅立ったか、少年を含め誰も知らない。

ある日に夢想して、純粹に追い求めた憧憬を仮想世界に求め、大勢の人々を巻き込んだ男の身勝手な行為は少年の人生に良くも悪くも強い影響を与えた。

少年はこの剣の世界から無事、現実世界に帰還した。そして異なる仮想世界に意識をダイブしては、その世界で剣を振るい、仮想世界の未来、存在の意義を見出だそうと男と同じ道を歩んだ。

——そして——

少年の人生の終着、即ち死を迎えたとき——

それは神の導きか、英雄と呼ばれた少年の御魂は自分が今まで生きていた世界を離れ、時空を越えて全く異なる世界へと流れていった。そこは男の求めた世界か、なぜ自分は仮想ではない真の異世界に転生したか、少年のその問に答える者はいない。

かくして、未知なるこの異世界で、かつて黒の剣士と呼ばれた男の新たな物語は開かれた。

——これは転生した黒の剣士が歩み
——秩序と均衡を司る賢神が紡ぐ物語。

〃〃〃

淡い緑色の壁面が広がる幅狭い通路。天井から燐光が淡く光を放ち、その下で対峙する二つの影を浮かび上がらせていた。

「ウォーシャドウか——」

そう呟いたのは年若い十代半と思われる少年だった。新雪のような真っ白な髪に深紅の目を持ち、線の細い顔立ちをした容姿はどこか、白兔を彷彿させた。

彼の装備は足元まである丈の長い黒革のコートの上に両肩と胸元を守る金属防具を身に付けた軽装、右手に持つオーソドックスな片手直剣の柄を握りしめ、前方のモンスターに向けて上段に構えた。

少年の視線の先にはユラユラと動く全身が真っ黒な人影の魔物『ウォーシャドウ』、此処、ダンジョン6階層から出現するこのモンスターは少年の戦意に反応、通路内の薄闇に紛れるようにして少年に急接近、そして細長い腕を振るい三本の鋭利な爪で、少年の細い身体を引き裂こうとする。

此処より上層に出現するゴブリンやコボルトには出せない速さと

攻撃力を持ち、更にリーチの長さや影のように黒い身体で相手を攪乱
することで、〈新米殺し〉の名を併せ持つ最初の死線^{ファーストライン}。

凶手が少年に迫り来る中、身構える少年は上段に構えた剣を振るう
のと同時に加速した。

突撃するウォーシャドウと音速の如く急加速した少年、瞬く間に両
者の距離は縮まり、二つの影が交差した。

そして……

『——!!』

ウォーシャドウの鋭利な爪が少年の細身の身体を引き裂くよりも
速く、少年の剣が閃いたことでウォーシャドウの黒い身体を斜めに斬
り裂き、二つの影に分断した。

音ならぬ断末魔を上げたウォーシャドウの身体はそのまま影が分
散するようにして消滅する。灰と小さな紫紺の石、武器でもあった鋭
利な爪のみがそこに残った。

カチリ、と剣を背中の中納めた少年は灰の中からウォーシャドウ
が残した魔石とドロップアイテム『ウォーシャドウの指刃』を背負
われたバックパックに収納し、周囲に気を配りつつ、壁にもたれかけ
てハアアと深く息を吐く。

——そろそろ地上は日暮れか？——

少年は内心でそう呟いた。背負われたバックパックは先程の戦利
品でいっぱいとなり、これ以上は入りそうになかった。

故に、少年は本日の探索を打ち切ることに関心、地上へと帰還する
ために上層へ続く階段を目指した。

白髪の少年の名はベル・クラネル。半月程前に迷宮都市^{オラリオ}を訪れて冒
険者になった者。

この都市では数多く存在する冒険者の一人である。

だが、誰が彼の正体を予想できようか。彼の前世は幾つもの仮想世
界にて剣を振るい、様々な窮地を乗り越え、全身黒尽くめの様から『黒
の剣士』の異名を持つ者。

ある世界では星王と呼ばれ、その世界の幾多の種族を纏め上げては文明を発展させ、星全体を開拓した果てに、その世界の王となり統治した人間であったことを。

以前の世界の記憶を引き継ぎ、転生した彼がこの迷宮都市で何を思っただンジョンに挑み、どのような出会いを経て冒険を歩むのか――

それはまだ彼も――神ですら知らない物語――

――

第2話 転生

全知全能の神々ですら見通せない未知の深淵へと到る穴、世界でただ唯一のダンジョンが存在することで有名な都市『オラリオ』。

その中心にそびえるのは、天まで届かんばかりの威容を誇る白亜の巨塔―『バベル』

この都市で最も高く、この迷宮都市^{オラリオ}を象徴すると言っても過言ではない巨大建築物。それは此処ではない世界、とある女が世界の理からその全能の力を奪い取ることで半神となり、自らの権威と支配を誇示し、下界の人間達に見せつけることで崇拜と畏怖を一身に集めた聖塔^{カセドラル}をある者に彷彿させた。

そんなバベルの足元にある中央広場にはダンジョンから生還した冒険者達と都市に住まう一般人が横切って行き雑然としていた。その中に混じって少年は一人、ホームへと帰路についていた。

「もう十数年経つか?」

誰かにいうわけでもなくそう呟いた。あれは十四年と半月程前、俺という人間は気づけばベル・クラネルという赤子になっていた。

しかし俺の持つ記憶が間違っていないければ、かつて俺は桐ヶ谷和人、あるいはキリトという名の人間だった筈だ。だが、その人間は自身の肉体の寿命が尽きたことにより、最期は安らかな眠りと共に死を迎えたはずだ。

それが俺の持つ、桐ヶ谷和人という人間の最後の記憶だった。

深い、海の底に沈むかのように朧気になっていく意識。そのまま永遠の眠りに就くのだろうと察していた時だった。突然、沈んだ意識に光が差し込んだかのようにして自分の意識が覚醒、再浮上した。瞼を開けると、そこは知らない天井。病室ではない見知らぬ場所と人物が視界に映った。

咄嗟に身体を起こそうとしたが妙な違和感から体に意識を向ければ、それは自身の肉体も亡くなる直前の年老いた体から、小さく弱々しい赤子の肉体へと変化―後になって気付いたが髪と目が自身の若

りし時のソレと異なっていた。

異世界転生——死んだと思っただら何故か見知らぬ場所で赤子になっていたという意味不明な展開に、当然ながら俺は動揺した。そして落ち着いた後、まず俺はアンダーワールドの時のように、また知らない内に仮想世界にダイブしたのかと推測した。

だが、現実と変わらぬ感覚はアンダーワールドと同じでもあちらとは違い、ステータスウィンドウは出せず——似たようなものは存在する——当然ログアウトもできず、GMコールも反応せず、結局、仮想世界のシステムを思わせる現象は何一つも見つけられなかった。

結果、俺の困惑をよそに赤子だった肉体はスクスクと成長し、育ての親は発達が早い俺に若干訝しみながらも惜しみ無い愛情を注いでくれた。最終的に5歳になる頃に俺はこの世界の事情を学びつつ適応してゆき、様々な事柄から俺は本当の異世界と認めざるえなかった。

神の計らいか——なぜ俺が異世界転生する羽目になったか現在も解らずにいる。確かなのはベル・クラネルという名と新たな肉体と共に、俺はこのファンタジーのような世界を生きなければいけないことだろう。果たして俺が転生した理由が存在するのだろうか？

——なお、この世界に神という超越者が存在し、何故か地上に降臨しているのを知った俺が転生して以来最大の衝撃を受けたのは、今でも記憶に新しい事実である。

……と少年が軽く過去を回想しているうちにオラリオのメインストリートに夕闇に包まれてゆき、それに呼応して魔石灯に光が灯りつつあった。

メインストリートにはヒューマンを始めとしてエルフにドワーフ、獣人といった幾多の種族が徒党を組み、近くの酒場に入る者もいれば自分たちのホームへと向かう者達が横行して大通りは溢れ、オラリオは夜の賑わいが増していく。

少年は彼らを尻目に寂れた路地裏に入る。魔石灯の明かりも届かない程に暗闇に満ちた狭い路地裏を慣れた様子で歩き、曲がり角を何度か通るうちに大通りの喧騒は次第に遠のき、少年の足音のみが響くのみであった。

しばらくすると少年の前に開けた場所が視界に飛び込み、一つの建物が映った。それは二階建ての小さな教会、色褪せた白い石壁には細長い蔓が這うように茂り、建築されてからの積み重ねてきた歴史を感じさせ、来訪者に暖かみを感じさせる雰囲気醸し出す。

この俗世から離れたような場所に存在する白亜の教会こそが少年の本拠地^{ホト}であり、少年が冒険者活動する拠点であり、自らの主と共に暮らしている生活拠点でもあった。

ギイーツと古めかしい木製の扉を開けると、まず最初に礼拝堂があった。信者が座る長椅子は無く、小さいながらもそれなりに広く適度に掃除された空間を突っ切り二階への階段——ではなく、祭壇裏の奥の小部屋に少年は入った。

そこは空の本棚が並ぶだけの部屋、しかしベルが一番奥の本棚をずらすと地下へと続く隠し通路が現れた。

迷わず少年はコツコツと階段を下る。少し下った先には扉があり、ギーツと押し開けると上とは異なり、生活感ある室内が広がっていた。部屋に入り、扉を閉めると少年は口を開いた。

「ただいま、今帰ったぞ」

帰宅を告げる少年の親しげ言葉に、室内に居た一人の少女が反応した。

「おお、よく帰ってきた。待っていたぞ、ベルよ」

室内は質素ながらもどこか落ち着ける雰囲気がある部屋。ゆったりとした生活感が伝わってくる空気が漂うその部屋の中で、ソファ―に座り優雅に紅茶を飲む一人の少女。

部屋の主は見た目にそぐわない口調、愛らしくもどこか威厳を感じさせる声でダンジョンから生還した眷属を迎え入れた。

外見は少女にしか見えないこの彼女こそが、遙か昔に地上に降臨し

たと云われる神々の一柱にして、白髪の少年に自らの恩恵ファルナを与え、眷属にした少年のファミアリアの主神。

——秩序と調和を司どる幼き賢神——

名を、カーディナルであつた。

第3話 賢神

オラリオに住む、賢神カーディナル。俺と彼女との出会いは、およそ半月程前に遡る。

.....

「ハアアアア」

まるで仮想世界かのような鮮やか過ぎる青空に、燦々と輝く太陽が真上から照らしているオラリオの大通り。そこでは今日も多くの種族が雑多に行き交い、活気を感じさせる賑わいに満ちる日常の光景が広がっていた。

そんな中、周囲の陽気な賑わいとは無縁とばかりに俺は広場にある噴水の縁に腰掛け、重苦しい、深いため息を吐きつつ一人項垂れていた。

数日前、転生してからたった一人の家族である祖父が亡くなったのを機に、生前に幾度か聞かされていた迷宮都市オラリオに着いた俺は、冒険者という職業に就くためにはファミリアに所属しなくてはいけないという話をギルドの職員さんから聞いた。

この世界では超越存在である神々から恩恵と^{ファルナ}呼ばれる力を授かることでダンジョンのモンスター達と渡り合おうらしく、恩恵を授かるには神自らがつくった派閥——『ファミリア』で神に入団を認められなくてはいけないかった。

そこで俺はオラリオの街並みを観光しつつ、探索系ファミリアのリスト用紙を見て入団を許可させてくれるファミリアを探し廻る——そこまでは良かった。

しかし.....

「もつと鍛えてから来い!!」

「入団したい? 無理無理、そんな貧相な体じゃ入れないから諦めな」

「ここは子どもが来るところじゃない、立ち去れ！」

「すまない！俺のファミリアではこれ以上団員を養いきれんのだ
!!」

「ほう……中々良い顔立ちだな。どうだ、冒険者になるよりもつと稼
げる仕事をしないか？」

……異世界でも現実には甘くなかったようだ。

零細で貧乏なファミリアの事情で団員を増やせないことを理由に
土下座で断られたのはまだマシな方で、訪れた大、中、小、様々な規
模のファミリアを訪れたが、総じて門番に貧相な外見と若さを理由に
門前払いにされ、主神の顔すら拝めさせてくれずにいた。

最後に至ってはこちら側から即刻断らせてもらった。

そして先刻、五十番目の探索系ファミリアに入団を求めると呆気無
く玉砕し、現在に至っていたのだ。

確かに自分の見た目はお世辞にも通りを歩く他の冒険者のように
背はさほど高く無く、筋骨隆々な体でもない。しかし幼年期から田舎
で農作業を手伝っていたのと、手作りの木の剣で稽古がてらトレーニ
ングをしていたので、同年代と比べると比較的体は鍛えられていると
思っている。

しかし、そんな俺の説明は一片も聞いてもらえず、邪魔だと言わん
ばかりに追い出され、流石の俺も心が折れかけていた。

一応、他にもまだ多くのファミリアの候補があり、ファミリアの系
統を無視すれば選択肢は更に広がるが、やはり俺としては当初からの
目的であった探索系のファミリアに入ってみたい気持ちがあった。

だが、俺に残された時間資金は残り少なく、のんびりとしていられな
かった。このオラリオに頼れる知り合いなど居る筈もなく、冒険者に
なるどころか今泊まっている安宿にすら居られなくなる可能性に俺
が頭を抱えていると………

「どうしたのじゃ、その少年。こんな良く晴れた日に陰気な顔をしておつて、何か困り事でも有るのか？」

「えっ」

……それはまさに、捨てる神あれば拾う神ありであろうか。俺が顔を上げればそこに、一人の女の子が立っていた。

光沢のある黒いローブと同じ素材の大きな学生帽を身に付け、魔導士の持つような背丈よりも長い杖を持った姿は見習いの魔法使い、あるいは老学者を思わせた。

帽子の縁から覗く緋色の巻き毛や、ミルク色の肌は若々しい輝きを放つ可愛らしい容姿。

だが、こちらを見つめる少女の円らな瞳がただの人間の幼子ではないことを物語っていた。鼻に載った丸眼鏡のその奥、自らの髪と同じ緋色の瞳は見る者に圧倒的な知性と叡智を感じさせ、見ているところらの深奥が覗かれるかのような錯覚をさせ、気が付けば此方が覗き込まれるかのような気さえした。

だが何よりも彼女の身に纏う空気が、威圧とはまた異なる超常の気配が、自分の本能に――矮小な存在である自分とは決定的に違う、目の前の存在は超越存在であることを報せ、其れが当たり前の事実である事を理解させた。

多くの神様が集い、神を敬うのが当たり前なのオラリオならば、本来は彼女に頭を垂らすのが正しい行いなのかもしれないだろう。

だが……俺は彼女の容姿を一目見てまるで石化したかのように体と思考が停止し、ただ呆然としてしまい、まるでそんなことをする意識は無かったのだ。

「どうしたそんな呆けた顔しておつて、この都市では神など珍しく無かろう？」

髪と瞳の色は異なれど――あまりにも酷似した容姿、可愛らしくも年寄り染みた喋り方は即座にある人物を思い起こさせた。

それはかつてここではない世界、唯一無二の親友と共に世界を停滞した秩序に支配する管理者を目指して、天高くそびえ立つ巨塔を駆け

登っていた時のこと。

親友と後輩を守る為に禁忌を犯し、探し求めていた筈の幼馴染みに囚われて冷たい牢獄から脱走するも、追っ手により窮地に陥っていた俺達を救い出し、世界の成り立ちと残酷な真実を語り、その最期は死に直面していた俺達を救う為に強大な力を持つ半神と交渉し、俺達を見逃す代わりに我が身を差し出してその命を落とした賢者――

「カーデイ……ナル……なのか……？」

「何じゃ、ワシのことを知つとるのか。何処かで出会いでもしたかのう？」

これが――俺とカーデイナルのこの世界における初めての出会いであつた。

~~~~~

あの後、落ち着いて詳しく聞いて見れば彼女は同姓同名の容姿が似た全くの別人。俺の知る賢者カーデイナルではなく、この世界特有の神――賢神カーデイナルという存在であつた。

俺がこれまでの事情を話し、入団させてくれるファミリアを探している旨を伝えると驚いたことに、彼女はならば自分のところにくるか？――と願つてもいない申し出を示した。俺がそれを断る理由は無く、即刻喜んで承諾したのは言うまでもないだろう。

こうして、ファミリアの入団に苦心していた俺はようやく自分の所属するファミリアに入ることが叶えられたのだつた。

さて、ここで少しカーデイナルと彼女のファミリアについて説明すると遙か昔の事、まだ神々が降臨して間もない頃に遡る。

千年前――当時まだ現在のような大都市ではなく、当時のオラリオに村とでもいふべき規模であつた。そこに天界の変わり映えのしな



い、贅沢な暮らしに飽き飽きした神々が地上に降臨するや、突如ただの気紛れか、ある建物をぶっ壊した。

それ自体は周囲と同じ何の変哲も無い建物なのだが、その真下が大問題だった。そこは奈落の深淵、人智の及ばぬ魔境の穴、古代より無数の怪物を産み出してきた母胎、今でいう『ダンジョン』がそこにあったのだった。

種族の垣根を越え、永い年月を経て大穴に到達した、怪物の地上進出を防ぐ蓋の役目を担っていた建物が突然崩壊したことで目を見張る程に驚愕、蟻の巣をつついたの如くてんやわんやと大騒ぎする下界の人達。それを見て腹を抱えながら笑い転げる神様方で地上はかつて無い程に混沌と化していた。

そんなどうしようもない混乱の中、カーディナルを始めとした神格的な善神様達が仲裁に入り、調停することで混乱は次第に治まり、それがきっかけとなって両者が歩み寄ることで、今に続く神と眷属の関係に繋がった。

役目を終えたカーディナルはそのまま天界に帰還すると思われたが、そのまま地上に滞在（本人曰く、休暇を取ったと言う）し、自らの知識を下界の者達に差し出してオラリオの発展に貢献し続けた。

娯楽を求めて他の降臨した神々は自らの恩恵を分け与えることで、それぞれのファミリアを組織して自分の派閥をつくる中、何故かカーディナルは神で在りながらそれをせず、長い間オラリオの住民達と交流する日々を過ごしていた。

だが、転機が訪れたのは今からおよそ十年前のある日の事。今まで眷属をつくらなかったカーディナルは突然、ある一人に自分の恩恵を与えて眷属にした。

これによりカーディナルファミリアが誕生した。とはいえファミリアができてこれといった方針は無く、他の神々のように派閥の強化も勢力争いにもまるで無関心で、たった一人の眷属と平穏な日常を過ごしていく日々を過ごすのみ。

現在は俺を含めて三人、俺が入る以前に団員が一人改宗したが冒険者を引退しているため、実質的に最初の眷属が一人でダンジョンに

潜っていた時とさほど変わらずにいた。

そんな数多く存在するファミリアとは一風変わったファミリアの主神―カーディナル。かつての恩人と酷似した容姿に、同名であるカーディナルと俺との出会いは果たして運命か、単なる偶然か？

今、目の前で寛ぎながら紅茶を飲むカーディナルを見ているも、その答えは得られない。だが俺は他人の空似であろうと、誰にも見向きされなかった自分を拾ってくれた彼女に心からの感謝をしているし、この世界で俺に愛情を注ぎ育ててくれた祖父と同じように欠けがえの無い家族だと、認識して接してくれている彼女の力になりたいと心から思っている。

それはもしかすると……かつて何も出来ずに、その犠牲を見届けることしかできなかった俺の――せめてもの償いなのかもしれない。た。

## 第4話 恩恵

「ところでカーディナル、もう一人の団員っていつ頃帰って来るんだ？」

カーディナルとベル、二人で向かい合う形で夕食を伴にしている中、ベルが口を開き尋ねた。

「合同遠征で深層に向かってしばらく経つからの……順調に進んで既に未到達階層に到達しとるかもしれんが、ダンジョンは何が起こるかわからん。」

深層ともなれば当初の予定通りに行くことは滅多に無いと聞く。だがそろそろ期間的に考えて地上に戻っては来る頃だと思われるがのう」

現在、俺の先輩と言えるカーディナルの最初の眷属は他のファミリアとの合同遠征の最中でダンジョンに潜っており、俺がファミリアに所属した時には既に出発していて少年はまだ顔を会わせたことは無かった。

実はカーディナルの話やオラリオでの彼女の評判を聞いた時から、是非とも会ってみたいとずっと思っていた。

少し耳にした範囲だけでも彼女の話は色々とぶっ飛んでおり、人外魔境であるオラリオでもその話題性は実に高いものだ。

なお、もう一人の引退している団員の方は既に顔を会わせている。だが普段生活している場所が別なので、たまにしかこのホームに帰らなかつた。

「そうか……じゃ、それは会うのが楽しみだな。でもカーディナルは眷属が元気でいるか不安にならないのか？ たった一人で全く別のファミリアに混じっているんだろう。問題は起きないのか？」

遠征相手のファミリアはオラリオでも特に有名な力ある派閥の一つであり、その中で仮に彼女がそのファミリアとの関係が悪化するこどがあれば、味方のいないダンジョンの中では彼女は断然不利となってしまう。

「その心配は皆無じゃよ。元よりどこにいても能天気なくらい元気で

無邪気なあやつに嫌悪を抱く者はそうおらん。寧ろ滅多に行く事が無い場所に訪れたことで、はしやぎ過ぎて向こうの方が振り回されるとワシは思うがの。

加えて、相手のファミリアとの関係も良好で以前にも合同で遠征をしとるからのう、関係が拗れることはおよそ有るまい」

何でも無いようにそう答えるカーディナルの言葉の節々に、彼女への深い信頼と愛情が滲み出ているのを俺は感じた。

「お主の方はどうなのじゃ、もう半月近くになるがダンジョンには慣れたのか?」

「ああ、上層は六層までならソロでも充分問題無い。至って順調さ、カーディナル」

「そうか……なら儂からは何も言うことはあるまい。だが忘れるなべルよ、ダンジョンで何が起<sup>神々</sup>こるかはワシらにも分からん、故に油断は禁物じゃぞ。」

普段はあまりファミリアの運営などにそれほど積極的ではなく、子ども達の自由に活動させているが決して無関心を装っている訳ではなく、寧ろたつた三人しかいない自らの恩恵を与えた子ども達にカーディナルは惜しみ無い愛情を注いでおり、常に気を懸けていたのであった。

「勿論さ、まだ拾ってもらった恩を返していないからな、冒険者になつて半月……まだまだ死ぬ気は無いぜ、カーディナル。」

不敵な笑みを浮かばせて、強気で応える俺にカーディナルは——  
「フフツ……其のようなことなど気にせんで良いと云うのに、全くお主らとゆうのは……」

静かに微笑むカーディナルの表情は満更でもない様に見えたのであった。

そこから夕食を終えた少年は土産話として今日の探索についての報告をする。その土産話にカーディナルは楽しげに、あるいは呆れながら聞くその様子はさながら幼子を慈しむ母親のソレであり、暫しの間、穏やかな時間が二人の間に流れていった——

.....

「さて、其れではそろそろ本日分のステイタス更新とするか、ベル？」  
「ああ、今日も頼む。」

飲み終えた紅茶のカップを置き、尋ねるカーディナルに俺は応えた。

ステイタスの更新、それは恩恵<sup>ファルナ</sup>を得た眷属が様々な事象から得た経験値を主神の手により、ステイタスに昇華させることで自らを成長させる神聖な行為。

それはまるでSAOでモンスターを倒すなどして得た経験値でレベルを上げ、それで得たポイントを振り分けて強化する行為にも似ているように俺は感じた。

そしてカーディナルにより恩恵を得た俺はダンジョンに潜った初日から毎日、更新を重ね続けてきた。

今、カーディナルは己の眷属の背に刻まれた恩恵―俺のステイタスを更新していく。俺はダンジョンに潜った初日から今に至るまでソロで攻略しており、今では六階層まで進出したが、これは本来驚愕すべきことのようなのだ。

ギルドのアドバイザーが言うには、一般的に新人冒険者が半月かつ単独で攻略する範囲は第1から第3階層辺りだと言う。

それはステイタスの伸び具合が関係しており、最初は上がりやすくても次第に数値の上昇率は落ちてゆき、地道に数値を伸ばしてゆかなければならない羽目になるからだそうだ。

俺の場合元々、前世で仮想と言えども剣の世界を始めとして、様々な世界で数えきれないほど死線をくぐり抜けてきており、培ってきた膨大な戦闘経験がある。経験した修羅場の数ならオラリオの第1級冒険者にも匹敵、あるいは上回るかもしれない程だ。

俺の魂にまで根付いた戦闘<sup>記憶</sup>勘は、幸いこの世界に転生した今でも衰えずにおり、それらの経験はこの世界において確かに力となっていた。

ちなみに聞いたところだと、現在遠征中の彼女は初日のダンジョンで調子に乗ってしまい、なんと六階層まで進出してしまった。その話を聞いたカーディナルは無言で彼女の頭に特注の長杖を振り下ろし、罰を与えた後、カーディナルから数時間に及ぶ説教を喰らってしまったのか。

「ほれ、終わったぞ」

更新は思ったよりもさほど時間を取らないのでカーディナルはあっさりと終えた。背に刻まれたステイタスは神聖文字という、いわば神々のみが扱う文字によって記されている。

基本的に俺を含めた下界の者でそれを解読出来る者はほんの一握りである。なので神々は言語がバラバラな種族でも問題無い共通の言葉である共通語コイネーで読めるようにしている。カーディナルは一枚の羊皮紙に俺の新たなステイタスを読めるよう共通語コイネーで書き写し、俺に渡す。

冒険者にとって己のステイタスは生命線であり、自分の全てを表す重要秘密と言っても決して過言ではない。公表するのは冒険者の格を知らしめるレベルのみであった。

興味深いことに、この世界のレベルは1上げるだけでも難しく、オラリオの全冒険者の半分がLv1なくらいだ。上位のレベルになる程冒険者の数は減り、Lv5・6でその冒険者は第一級と評される程である。それ以上のレベルになれば最早英雄、怪物と呼ばれる領域であった。

俺は当然ながらまだLv1の新人冒険者である。だが些か、少々：いやかなり公に言えない特殊な内容が俺のステイタスに刻まれている。カーディナルから手渡されたその羊皮紙に視線を下ろし、ステイタスに目を通して確認する。

その内容は――

ベル・クラネル Lv1 ヒューマン 男 14歳

《アビリティ》

力：H187↓G213

耐久：I96↓H106

7  
9

器用：H 1 3 4 ↓ H 1 5 8

敏捷：H 1 6 3 ↓ H 1

魔力：10

《スキル》

アクセルアサルト  
【攻撃加速】

・能動的動作の加速補正

・イメージ動作のアシスト補正

バトルボーナス  
【戦闘功績】

・戦闘時の経験値獲得量の上昇

・戦闘時の行動で追加ボーナス

・パーティを組んでいる際にメンバーにも適用

## 第5話 スキル

かつて、今はもう遙か遠い別世界のようすら感じ、されどつい先ほどまで夢を見ていたかのようにふと夢見る剣の世界<sup>S.A.O</sup>

その仮想世界を始めとして幾人のプレイヤーは自分のキャラクタービルドに合わせて無数に存在する技能を自由に習得し、鍛え上げて熟練度を上げていった。

かつて俺がインクラッドで習得していたスキルはメインである片手直剣を始めとして索敵、隠蔽、投剣、武器防御、変わり種では体術、瞑想、戦闘時回復等々、そして……黒の剣士の代名詞でもあり、象徴でもあったユニークスキル——二刀流。

いつでも自由に習得できるものもあれば、特殊なクエストや条件を満たすことで習得できるスキルもあり、その種類や数は千差万別であるため数多くのプレイヤーが何を取り、捨てるか頭を悩ませてきた。

この世界でも神の恩恵を得ることでスキルを得ることができるが、仮想世界とはかなり仕組みが異なっている。この世界で云うスキルはごく稀にある日突然発生するのもあれば恩恵を得た際に種族間で共通した内容のスキルもあり、狙って習得することは難しい。

その効果も一定の条件下で、自身のアビリティを強化、あるいは特殊な効果を持たせるなどがあり、冒険者にとって時にはレベルと同じくらい重要な要素だ。

これらのスキル保有数は個人でかなりばらつきがあり、一つ二つあれば良い方の中には一つも発現しない冒険者もいた。

さて、俺のステータスに表示された二つのスキル——

【攻撃加速】<sup>アクセルアサルト</sup> 【戦闘功績】<sup>バトルポナナス</sup>、これらは初めてカーディナルの恩恵を得た際に最初から発現したスキルである。

カーディナル曰く、最初からスキルが発現、それも二つも発現することは相当稀であるそうだ。

説明文から察するに【攻撃加速】<sup>アクセルアサルト</sup>は前世で幾度も使用したソードスキルを元に発現したと俺は推測している。

スキルの発現は種族による特徴、エルフならば魔法関係、ドワーフ



なら力と耐久、獣人はその優れた身体能力の上昇などのほか、本人の強い想いが切っ掛けに発現すると云われている。

カーディナルは、神の恩恵ファールナとは下界の子ども達の可能性を発現していくものだと言う。

俺の場合、仮想世界でアシスト無しで再現できるほどに使用してきた経験が、魂の記憶からその可能性——素質を引き出されたのではないかと俺は考えた。

ソードスキルと同じ、攻撃時のモーシヨンの加速、動きの自動操縦。だが、完全に同じではなく異なる部分も存在していた。通常、ソードスキルは通常攻撃を遥かに凌駕する威力、攻撃速度を持つがデメリットもある。使用中はシステムアシストの動きに合わせなくてはならず、無理に逆らえば発動はキャンセルされデイレイ技後硬直になる可能性がある。

また、発動後にも技後硬直があり、上位のソードスキルになるほど長くなる特徴があった。しかし、アクセルアサルト【攻撃加速】にはそれらのデメリットが無く、余程無理の無い動きでも無い限り、どのような動きも可能だ。技後硬直も存在せず、発動し終えた後、更に続けて発動が可能になった。

このスキルが発現してから、俺は戦闘時において有効的に強力な攻撃を与えることができ、ダンジョン探索の大きな手助けとなっていた。

そして、二つ目のスキル——バトルボーンナス【戦闘功績】。このスキルが自身のステータス成長に大きく関わっており、カーディナルが頭を悩ませる要因にもなっていた。

その効果は戦闘でのみ、獲得する経験値量が増加するという。具体的にいうと、モンスターと戦った際に得られる基本経験値に戦闘時の行動——どれ程ダメージを与えたか、タゲを引き受けたかななどの様々な戦闘に関する要素が経験値に上乘せされる。

この半月でアビリティが一番高い力：Gランクを始め魔力を除いて、他がHランクまで伸びたのはこのスキルのおかげであった。

戦えば戦うほどに強くなるスキル——それがバトルボーンナス【戦闘功績】

冒険者の大半はダンジョンでモンスターを倒していくことで経験値を得るが、自身より格下のモンスターからは微々たるものであり、何十、何百匹のモンスターを倒そうが雀の涙ほどの数値しか上がらないと云う。

だからと言つて、自分と同等以上のモンスターと闘えば命を落とす可能性もあった。故に、冒険者はパーティを組むことで自身の生存率を引き上げ、己の実力に合った階層、モンスターを攻略していくことで地道にステイタスを成長させていく。それが冒険者の攻略の基本だ。

冒険者は冒険をしてはいけない

一見、矛盾しているかのように思われるが、要するに常に自分の実力を過信せず安全第一で探索しろというギルドの鉄則だ。

話は戻つて、このスキルはカーディナルが知る限り俺しかない成長促進スキルであり、他のファミリアに知られば想像できぬほどの衝撃的なニュースとなり、神々が大騒ぎすると言う。

成長を促進するスキル、それだけでも充分に問題だというのに俺の場合、知られれば更に厄介なことになる効果があった。

それは――

・パーティを組んでいる際にメンバーにも適用

前例の無い、自分のスキルの効果を他者にも共有させる効果。俺がパーティを組んでいる場合、同じメンバーにも【戦闘功績】バトルボーナスの恩恵にあやかることが可能。

上述した通り、多くの冒険者がステイタスの成長に苦心している中、俺と組めば普段探索するだけで効率的に成長ができるこのスキルが知られれば何がおこるか？

それは俺を巡って熾烈な奪い合いがオラリオで発生する。

パーティメンバーに人数制限があるのかは不明だが、自分達の眷族

の成長はファミリアの派閥強化にも繋がるため、俺を囲い込むべく改宗を迫<sup>コンバート</sup>って来ることが容易に予想できる。

最悪なのは実力行使で改宗を強要するだけでなく、混乱の中でカーディナル若しくは俺が命を落とす可能性も存在することだ。レベル1に過ぎない俺ではレベル2以上の格上を相手に到底対抗できない。一応、カーディナルファミリアにはオラリオでも屈指の実力者達が存在するが、やはり大手のファミリアに対して人数も規模も劣っており、本気の戦いではこちらが苦しくなるのは否めない。

このスキルを知ったカーディナルは、その秘められた危険性に絶対に他の者に口を漏らすなど神威を漏らすほど、半ば脅すように言われたのは記憶に新しい。俺がダンジョン内でソロで活動しているのは、これが理由だったりする。

「合計で70オーバーか……少しだが下がってきてるな」

始めの頃は上層1〜3階層をメインに探索していたが、最近はゴ布林やコボルドでは何十匹か倒してようやく2, 3ポイント分の経験値を得られるので、現在は5, 6階層のモンスターを相手にしている。今日は早朝からダンジョンに潜ってこの上昇率なので、始めの頃は合計100オーバーしていたのを考えると、明らかに効率が落ちてきていた。

「言うておくが、半月経ってなおこれ程の成長をするのはお主くらいじゃぞ。一般に、新人冒険者はまだ上層の浅い階層を主に経験するのが当たり前じゃ」

効率厨の眷族に呆れて言うカーディナル。偶々、目に留まった少年を眷族にしてみれば前代未聞の爆弾スキルを発現するは、スキルがあるとはいえ新人とは思えないほどの成長ぶりに最早呆れるしかなかった。

「ちゃんと安全第一に探索しているさ、問題無いと判断して進出しているよ」

「その言葉、お主のアドバイザーの前でも同じことが言えるのか？」

カーディナルの指摘に俺はウグツと押し黙る。

冒険者一人一人に割り当てられ、冒険者に対してダンジョンの情報

を教えたり、攻略の相談にも応じるギルドのアドバイザー。当然俺にも担当の者がいるのだから、そのアドバイザーは色々な意味で俺の天敵であり、逆らう真似など出来なかった。

「まあ……」応俺の実力については教えてあります……」

しかしスキルについて教えるわけにはいかず、頼り無さそうな見た目とは裏腹にやけに戦い慣れしている理由を、以前からモンスターを相手に戦って生きてきた？ 仮想世界でだが？ という苦しい言い訳に、アドバイザーは納得はしていないようだったが、尊敬しているカーディナル様のお墨付きということで攻略階層進出の許可を出してくれたのだった。

「とにかくいつ何時、何が起きるかは誰にも予想は出来ん。故に油断はせぬことじやな」

その言葉を締め、この日は終了して俺達は明日に備えて眠るのだった。

## 第6話 猛牛

突然、楽しくゲームをプレイしていたら製作者の手によりデスマムとなってしまうたSAO、天空の鋼鉄城を舞台に数百人のプレイヤーはフィールドを開放していき、上層へ繋がる迷宮の塔を攻略していった。

彼等は攻略組と呼ばれ、閉じ込められた他の一般プレイヤーからは希望の象徴であり、尊敬と畏怖の目が向けられた。

迷宮の最前線で戦う彼等が生き延びるために最も重要視したのは何か？、適正レベルよりも充分にマージンを取ることか、あるいは現状で最高質の装備を整えることか、それともシステムに任せて戦うのではなく、己自身の戦闘の力量を上げることか、それらは間違っていないが本質ではない。

——答えは情報である。

迷宮に発生するモンスター、迷宮の構造に地形、隠されたトラップ、最もレベリングに適したスポット、貴重アイテム等々。それらの正確な情報はアインクラッドにおいて多額の金で取引される程であり、その情報一つ一つが時にプレイヤーの生死を分けたのであった。

如何に万全な状態であつてもたつた一つ——事前の情報とは話が違ふ——その差異が挑む者達に驚愕と混乱、恐怖しては恐慌——まともな思考は失われてしまい、その隙を突かれて呆気なくその命は泡沫の如く消失する。

それは創造された仮想世界に限つた話ではない。

このオラリオの地下に存在するダンジョンも知識は貴重な武器のひとつであり、それを疎かにし、愚かにも自らの未熟さをわきまえずに潜る者にダンジョンは容赦はしない。例え気づいたとしても既にもう……手遅れであつた。

しかし、世界というのは時に理不尽なことが襲いかかり、正確な情報を入手していてもそれが常に正しいことは無いのもまた——事実であつた。

くく

夢を観ていた……縦長に広がった広い空間、最奥には巨大な扉と玉座、まるで王の謁見間のように思えた。

事実、そこはある亜人の王が扉を守護しており、己の領域に足を踏み入れた挑戦者達と交戦をしている最中であつた。

プレイヤー達よりも一回り、二回り大きな赤い体に細長い耳、手には武骨な片手斧と円盾バックラーで武装していた。

王の名は「イルファング・ザ・コボルドロード」アインクラッド第一層のフロアボス。SAOというゲームをデスゲームとしてプレイヤーに知らしめた存在。

当初、プレイヤー達はこのボスの行動パターンを事前に把握しており、順調にボスの攻撃を捌き、体力を削っていった。そして、体力が一定値まで減らされたことで、イルファングの行動パターンに変化が訪れた。

武器チェンジ。バックラーと斧を投げ捨てると変わりに反りのある刃タルワール曲刀を引き抜く。

そう思っていた……

実際はタルワールでなく、もつと細長く、研ぎ澄まされた鋭い刃——カタナ”であつた。

今のプレイヤー達には使えない未知のカタナスキル。事前情報と違っていた事実<sup>に</sup>思考が停止したその隙に、イルファングはスキルを発動、カタナの猛威が振るわれて一人のプレイヤーが初の犠牲になつた。

不幸なことに、そのプレイヤーは初のフロアボス攻略の指揮を取り、集団を導いた男であつた。

指揮官を喪い、瞬く間にそれまで成立していた統制が崩れていく。

冷静を促す声も届かず、恐乱し、悪化を辿るプレイヤーの叫声と悲鳴が広間に虚しく木霊する。

そんな中、絶望に彩られた広間を照らす炎とは異なる幾線の光が舞い、一筋の流星が疾走<sup>はし</sup>った……………

そこで目が覚め、意識が覚醒する。

「また随分…………古い夢を見たな…………」

SAO最初の第一層フロアボス、イルファング・ザ・コボルドロード。フロアボスの恐ろしさを俺達プレイヤーに叩き込んだモンスター。そして、俺が黒の剣士と呼ばれるようになる切っ掛けにもなったモンスターであり、忘れ難い記憶でもあった。

あの後には幸い、最愛の人物と共に何とか倒すことができたがフロアボスがβ版の情報と異なっているのがわかり、情報を鵜呑みにし過ぎるのは良くないことを身をもって知ったものだ。

そうして、少年は部屋の中を見渡す。部屋の中には自分がさっきまで寝ていたベッドに側にある机、タンスに棚ぐらいしかないありふれた室内。この部屋はカーディナルファミリアのホームである教会、その中にあるベルが加入するまでは空き部屋だった部屋を使わせてもらっていた。

カーディナルは地下の一室に自分の部屋があり、地上の部屋に他二人の眷族の部屋もあるが、冒険者を引退している方の眷族はオラリオの別の場所に住んでおり、実質ホームには三人しか居らず、その一人も遠征の途中なので現在はベルとカーディナルしかいなかった。

この時間カーディナルはまだ眠っており、ベルは一人軽く朝食をとる。終えた後に愛用の黒コートに胸当てに肩当てといった金属防具を身に付け、ポーションや投擲針といったダンジョン探索に必要な道具を整える（これらの装備の費用はカーディナルが出資してくれた）。

カーディナルは贅沢をしないため、ファミリアの資産はそれなりにあった。

最後に現在使っている剣を背負い軽く抜き、勢いよく鞘に収める。キンツと澄んだ金属音が室内に響き渡った。

「よし、行くか！」

昨日と同じように、少年は上層六階層をメインに魔石と経験値稼ぎにダンジョンへと向かう。ダンジョンで何が待ち受けているか、少年はこの時まで知らずにいた……。

くくく

嵐の前の静けさ——という言葉を表すかのように、不気味な程の静寂がダンジョン五階層に満ちていた。

何処からか聞こえるモンスターの唸り声も、モンスターの影ひとつすら無い。まるで…何かを恐れているかのように沈黙が支配していた。

少年は半月程しかダンジョンを探索していないがこのような異変は初めてであった。緊張した空気がベルを包み、己の直感が警笛を鳴らすのを長年の経験で悟る——すぐに逃げろと。

しかし、時既に遅く、ソレは現れた。

少年の前方、その通路の曲がり角からドスツドスツと重い足音を響かせながら現れたのは、一匹の怪物。逞しい筋肉の肉体は人の体を成しているが頭部は牛のソレだった。前方に湾曲する太く鋭い角を生やし、荒い鼻息を吐きながら血走った目で目の前の獲物——白兎を見下ろした。

「ミノタウロス!? 何故この階層に！」

驚愕の声を上げたのは当然といえよう。

『ミノタウロス』—力と耐久に優れ、Lv2に分類されるモンスターカテゴライズの一体。今の俺では瞬殺される強さをもつ存在。



本来の生息域は中層―第15階層以下で出現するモンスターであり、今俺がいる上層―五階層には出現しないはずであった。

ダンジョンより産まれるモンスターはその階層からあまり移動せず、しても上下1、2階層ぐらいしか進出しない――そう、ギルドの美人スパルタアドバイザーから説明レクチャーされていた。

しかし、このミノタウロスはおよそ十階層も進出していることになる。何故此処五階層に現れたのか、当然俺の疑問に答えてくれるはずもなく――ミノタウロスは……………

「ブモオオオオオオ！」

猛り声を響かせ突進してきた。間一髪、横に避けれたが後方にあった壁はミノタウロスの突進により大きく抉られる。その威力は直撃はおろか、かすりできさえこちらの命を容易く奪うのが想像できた。

「いくらダンジョンは何が起きるかわからないといっても、これは予測出来ないだろう……」

そんな呆然とした眩きなど意に介さずミノタウロスは壁から振り向き、避けられたことに苛立ったのか鼻息が更に荒くなる。

そして、ここから俺の命掛けの逃走劇が幕を開けた。これまでの人生で最も死を感じるそれはこの世界で初めてのモンスターからの全力疾走だった。

## 第7話 劍姫

ダンジョン内の通路にて、一体のモンスター——ミノタウロスが荒く息を吐き出しては呼吸をして必死に駆けていた。その様子は本来なら追い回す立場で在りながら、今はまるでナニカから逃げているようであった。

事実、少し前にそのミノタウロスは大勢の同類達とある冒険者の一団を襲おうとした。しかし、その冒険者の一団は自分たちよりも遙かに格上の存在であり、最初の数匹が反応すら出来ずに呆気なくその命を散らされたのだ。

その光景を見た自分を含めたミノタウロス達は彼らの圧倒的な力の差に産まれて初めての恐怖を覚え、集団で後方——上層へと逃走を開始したのだった。

ミノタウロスは逃げる——今は自分一人だけ、既に大勢いた仲間はない。後ろで響く同胞の叫びに耳を傾ける余裕など無かった。

一度チラリと目を向けたがすぐさま後悔した。冒険者達の一人、自分たちよりも遙かに小さく、力強さなど感じさせない外見でありながら、瞬きするよりも速く数匹の同胞を灰へと変えた光景が今でも脳裏に浮かぶ。

ミノタウロスは走る——その動きはミノタウロスには到底捉えきれなかった。気づけばミノタウロスは自身の出せる速さの限界を越えて更に速度を上げていた。

例え中層で上位の強さを持つミノタウロスであろうと、アレに挑むなどドラゴンに挑むようなものであり、狂気の沙汰であった。為すすべも無く瞬殺される未来しか存在しない。

ミノタウロスは駆ける——もう大丈夫であろうか？ 此処まで逃げれば見失ってしまっただろうか？ たがミノタウロスは内心否定する。

今だに己の本能が危機を告げており、死神の気配はまだ己に付きまといっているような気がした。

まるで逃れられない運命を表すかのよう。

このミノタウロスは運が良かった。たまたま集団の最前線を走っており、後ろのミノタウロス達が次々に殺されている間に上層へと逃れ、入り組んだ通路に入ることによって死神から目を眩まして距離を離すことができたのだから。

——たとえば、それがほんの僅かに生命を延ばす行為にすぎなかったとしても……

ふと、ミノタウロスは身体が軽くなるのを感じた。

そして何故か視界が高くなったと思えば、そのまま地上へと落ちてゆくのを、咄嗟に手を伸ばそうとするもまるで元から存在しなかったかのように腕の感覚が無かった。

いや、腕だけでない。身体感覚が突然絶たれたように喪失していた。そのまま地面に転がり、困惑する意識が薄くおぼろ気になるのを感じた。意識が途絶える直前、ミノタウロスは首のない胴体と小さな冒険者が剣を抜き、背を向けている姿が見えたような気がした。

「こつちに逃げたのはこれで最後かな？」

首を絶たれたミノタウロスの身体が灰へと変わりゆくのを見ながら冒険者——小さな子どものような少女が呟く。

「後、数匹が逃げ込んだけど大丈夫かなー、まあアイズとベートもいるしもう倒してる頃かな」

逃げるミノタウロスを追いかける途中、数匹が別々の通路で分かれた為に少女を含めた足の早い三人が一度別れて行動してたった今、彼女が追いかけていたミノタウロスは討伐されたのだった。

「もう少しで地上オラリオなのに時間取られちゃったよ、こつちは早く帰りたいのにー」

頬を膨らまして不満を言う彼女の頭の中は、自分のファミリアのホームに帰還して敬愛する主神と再会したい気持ちでいっぱいだった。しかし、このままアイズ達のファミリアに黙って向かう訳にはいかず、帰りたい気持ちを押し殺して遠征の班に戻ろうとする――

ブモオオオオオオ

何処からか、そう離れていない場所で生き残りであろうミノタウロ

スの雄叫びがダンジョンに響いた。

「あつ、もしかして上層の冒険者と出くわしちやっただかな？ いけな  
い、急がないと！」

自分たち上級冒険者にはミノタウロスは大したことないLv2の  
モンスターであるが、大半がLv1の冒険者にとつてミノタウロスは  
凶悪な怪物である。

ミノタウロスが上層に進出した原因が自分たちにある以上、アイズ  
とベートが向かっていたとしてもこのまま無視する選択は彼女には  
存在しなかった。彼女が踏み出した時には既にその姿は無く、その場  
には灰の小山に埋もれる魔石が残るのみであった。

くくく

幾つの角を曲がったのかもはや覚えてなかった。

5階層のマップはある程度頭に入れているがダンジョンの通路は  
複雑に入り組んでおり、その地図も正確でない。通常時なら確認する  
のだが、後ろから迫る怪物ミノタウロスがそれを許すはずもなく、ただ上層に続く  
であろう道を敏捷パラメーター全開で走るほか無かった。

力と耐久に優れるミノタウロスに当初は振り切れるのではないかと  
淡い期待を抱いたが、やはりLv2にカテゴライズされるだけあつ  
て次第に距離が縮まり、迫ってくるのを振り返らずともひしひしと感  
じた。

「ヴモオツ!!」

獲物白兎を捕まえようとして前方に大きく飛び込むミノタウロス。

「うわあー!」

咄嗟に横にあつた通路に跳び入ることで危機一髪回避したベルだ  
が、間もなくこの逃走劇に幕が閉じるのを知るのはその通路の先に  
無情な壁が一面に広がるのが視界に入った時であった。

「……………行き止まりか」

目の前にある壁を睨み付けるも当然隠し通路があるはずもなく、こ

れ以上先へ行けないことを否応がなく受け入れるしかなかった。振り返れば、後ろから獲物を追い詰めたミノタウロスが―散々、手間を取らせやがって―とでも言いたげにゆっくり近付いてくる姿。通路の真ん中にいるミノタウロスの横をすり抜けるのは無理であろう。「覚悟を決めるしかないか……」

真正面から挑むのは自殺行為、ならば何とかしてミノタウロスの間をつくり、その隙に攻撃するほか無いであろう。

無謀にも背中に背負う剣を抜く少年に、ミノタウロスは嗤う。ミノタウロスは武器など持たずとも、自身の強靱な肉体そのものが凶器であり、格下である白兎に武器など必要無かった。

「シッー」

先手を取ったのは少年。剣を持つ右手とは逆の左手を腰の後ろに伸ばし、そこから細長い針―投擲針ヒツクを二本の指で掴みとるとミノタウロスの頭部―最も脆弱な部分である目に目掛けて勢い良く振る。

スキル―攻撃加速アタセの効果により左手は稲妻の如く閃き、通常よりも速く強化された投擲針シングルシュートは一瞬の輝きを残し、ミノタウロスの目元に吸い込まれていった。

そして――

「ブモオオオオオ!!」

ミノタウロスが腕で遮るよりも早く、投擲針はミノタウロスの片眼に見事命中する。片眼を潰されたことで激痛を感じたミノタウロスは苦悶の声を上げた。

生じた隙を利用し、少年は更に攻撃加速アタセでミノタウロスの死角、視野が潰れた方に急接近プレスする。

そのまま右手に握りしめた剣をミノタウロスの脇腹に水平斬りホリゾンタルを叩き込む。しかし、強靱な皮膚に刃が浅く肉に食い込むだけに留まるもそれに構わず、更に続けて追撃をしようと剣を引き抜こうとするが――

「ヴモオオオオ！」

モンスターとしての執念か、突如ミノタウロスは腕を大きく薙ぎるように振り払う。グオオンツ！と重い風切り音が鳴り、少年は吹き飛

ばされるが当たる直前に後ろに飛ぶことで、辛うじて直撃を回避する。

しかし――

「グハッ！」

薙ぎ払う際に生じた風圧で壁に叩きつけられてしまい、一瞬――衝撃で視界が暗転し倒れ込むも、少年はギリギリのところできき上がろうとする。

だが、不意打ちを食らい片眼を潰されたミノタウロスが残った眼にあらん限りの怒りと殺意を込め、白兎を叩き潰そうと拳を振り上げる。当たれば必死のその一撃を避けようと身体を動かそうとするも、その身体は意思に反して思うように動こうとしなかった。

絶体絶命――その言葉が少年の脳内に浮かび、猛牛の拳が降る――その時であった。

ヒュン

微かに、だがはつきりと鋭い音が響くのと同時に、ミノタウロスの胴体に一筋の銀線が走った。

「ヴホお？」

間の抜けた声を上げるミノタウロス。何が起きたのか、理解しようとするも既に手遅れであった。

ヒュン、ヒュヒュン、ヒュンヒュヒュヒュン。

ミノタウロスの身体全体――頭、腕、肘、胴、膝、足に幾つもの銀線が、一瞬の間にミノタウロスの身体に刻まれた。少し遅れてミノタウロスの身体は線に沿って分解していく。

そして――

ブシャ――ツと鮮やかに噴き上げる紅い血泉がこちらの方に降り注いだ。

声を上げる間もなく、正面から血の雨を浴びる。

――ベホツベホツ、一体何が起きたんだ？――

口に入った血を吐き出しつつ、タオルを取り出して顔に被った血を拭んでいると――

「あの……大丈夫……ですか？」

か細く、こちらを心配する声があった。その声があった方に顔を向けると一人の少女が立っていた。

燐光を受けて輝く長い金髪に同じく金の瞳、細い顔立ちは美少女と言っても過言ではなく、細い身体には銀の胸当てと手甲の素早さを重視した軽装。手には先程ミノタウロスを斬ったのであろう剣を携えて。

美しい顔立ちで有名なエルフや女神に負けず劣らずの神秘的な容姿は、この状況でありながら暫し見入ってしまう程だった。

「……あつすまん、えーと、君が俺を助けてくれたということの良いのかな？」

我にかえった俺が一応尋ねると、金髪の少女はコクンと頷く。その様子はつい先程ミノタウロスを滅多斬りにした少女とは思えなかった。

「ありがとな、君のおかげで命拾いしたよ」

「ううん……気にしないで……私たちのせいだから」

俺の心からの感謝の言葉に、少女はむしろ申し訳なさそうな表情で謝罪をした。訳を尋ねると少女はファミリアの遠征で地上オラリオに帰還してる途中、中層でミノタウロスの大群に遭遇、だがファミリアの仲間とミノタウロスを蹴散らすと、突如ミノタウロスは恐れを為したのか集団で上層へと逃走してしまったと言う。

俺が遭遇したミノタウロスもその中の一匹で、偶々運悪く出くわしてしまったのだろう。

「だから私たちのせい……あなたを危険な目に会わせてしまったの……ごめんさい」

頭を下げ、謝罪する少女に俺は慌ててフオローする。

「いやいや、そもそも冒険者はダンジョンで何が起ころうと全て自己責任になるんだから、君が謝罪することは無いよ、こうして助けてもらったんだから結果オーライさ」

なんとでも無いように答える俺に、てつきり怒られると思っていた少女は目を見開き、そしてクスツと微かに微笑む。

「君は…優しいんだね」

「可愛い女の子が頭を下げたんだ、これで許さなきゃ天国にいる祖父じいさんに怒どやされちゃうからな」

肩をすくめ、冗談めかして言う俺に少女はクスクスと朗らかに笑う、その様子は先程までの暗い表情が既に無くなっていた。そして、俺と少女との間に流れる空気が和やかになったところで、互いに自己紹介をする。

「俺の名はベル・クラネル、君は？」

「アイズ…アイズ・ヴァレンシユタイン」

彼女の名前を聞き、薄々予想していたことが的中する。

アイズ・ヴァレンシユタイン―このオラリオで最も有名な二大派閥の一つ、ロキ・ファミリアのLv5の冒険者。『剣姫』の二つ名を持ち、自分と同じ種族―ヒューマンの女性。オラリオの冒険者で必ずその名が上がる程に有名で自分よりも遥か高みに佇む存在。

当然ながらオラリオで冒険者活動をしている際に何度かその名前を聞く機会は幾度もあったので、その特徴的な容姿も相まって強く印象に残っていた冒険者の一人だった。



## 第8話 アドバイザー

金髪の少女―アイズは上層へ逃走したミノタウロスの討伐を終え、遠征のメンバーと合流しようとして下層へと向かっている時であった。

「あつ、アイズ―！」

突然、自分の名を呼ぶ声がしたかと思えば、いきなりアイズの目の前に一人の少女が現れた。

「あつ……リセリス」

リセリスと呼ばれた少女―アイズ<sup>L v 5</sup>でも気づかぬほどの速<sup>敏捷</sup>さで登場した彼女に一瞬、驚きながらも返事をするアイズ。

「ミノタウロスはもう討伐しちゃた？ 声がしたから向かったのは良いけど、何処にいるのか分からなくなっちゃたから探したよー」

どうやらアイズが瞬殺したミノタウロスを探していたらしく、ダンジョンを走り廻っていると丁度そこにアイズが目にと留まったので合流したらしい。

「うん、襲われてた人がいたけど……無事、助けられた」

「そっか！ 危ないところを助けられて良かったね！ じゃっみんなのところに戻ろっか」

抑揚の無いアイズの返事にリセリスは気にせずには元氣良く喋る。そのまま向かうと思われたとき―不意にリセリスはアイズから離れた位置にいる人物に目を向け、―とところで―と呟く。

「ベートは一体どうしたの？ さつきからずっとあの調子だけど」

「……………さあ？」

アイズとリセリスが目に向けた先に、一人の狼<sup>ウエアウルフ</sup>人の若い青年がいたのだった。

「何なんだ……あの雑魚、助けられた分際で……アイズと気安く話しやがって……俺だつてろくにアイズと話したことは無いんだぞ……」

信じられない現象を見たかのように眼を見開き、ぶつぶつとよくわからないことを呟く心ならずの狼<sup>ウエアウルフ</sup>人―ベート

実はアイズに少し遅れる形である場に彼は居合わせていたのだっ

た。ただ、アイズと助けられた少年の会話が始まってしまい、ベートが割り込めるような空気で無くなってしまったので、二人が別れるまで何故かずっと通路の陰に隠れていたのがあった。

もしかすると——普段、無表情で口下手なアイズが少年との会話中にベートが初めて見た笑顔を覗かせ、楽しげに会話する姿に驚愕を覚えたのかもしれない。

実際、アイズはファミリアに入ってそれなりに経つが、他の団員と親しく話す機会はあまり無い。Lv5という数多く存在する冒険者の中でもトップクラスの实力者であり、高嶺の花であるアイズに皆、遠慮してしまうのである。

彼女と気兼ね無く話すことができる者はリセリスを含めても数人しか存在しない。だからこそ、Lv1であろう少年が助けられた立場でありながら初対面でアイズと親しく会話して、彼女もそれを楽しんでいるかのような光景が——ベートには信じられなかった。

「俺だってな……ずっと前からアイズと話そうとしてるんだぞ……」  
日頃、ホームなどでちよくちよくアイズに近づいては会話しようとするベートだが、その度に邪魔者双子アマソネスの介入で失敗に終わっていたのであった。

もつとも……口下手なアイズと日頃から口が悪く威圧的で誤解を招きやすいベートが少年のように会話する場面は想像力豊かな神々でも思い浮かべることが不可能であろう。

そんな狼ウエテウルフ人の心情など全く知らず、アイズは先程の別れた少年のことを思い出す。

——あの子と話していて楽しかったかも。

見た感じ、自分よりも少し年下のような気がしたが、少年と話していると自分よりも遥かに大人びた雰囲気を感じているようにアイズは感じた。

そのせいだろうか？ 不思議なことに、少年と話してるうちに対人関係が苦手なアイズでも次第に緊張がとれていき、気付けば心の壁が取り払われていくような気さえした。

それを不快に思わず、むしろ――幼少時に父親の側にいた時の安心感のような……心の中が安らぐように少年に対して打ち解けてゆくような感覚がした。

――また、あの子に会って話してみたいな……

無意識に……アイズは少年との再会を秘かに願うのだった。

〃〃〃

「やっとさっぱりしたな」

その後、アイズと別れた少年はミノタウロスとの遭遇により探索を打ちきり、地上に帰還するとバベルで冒険者の為に備え付けられたシャワーでミノタウロスの飛び散った血を洗い落とした。

ついでに黒コートに付着した血も落として、探索前の状態へと戻しやつと人心地がついたところであった。

――剣も新調する必要があるな……今後の探索の為に予備にもう一つ用意した方が良くもな。

ミノタウロス戦で使用した片手剣は回収したが、ミノタウロスの固い筋肉に刃が耐えきれず少し欠けてしまい、少年が吹き飛ばされた際に刀身にはひび割れができてしまった。

アイズは弁償すると言ったが少年は相手が悪かったとはいえ、無茶な使い方をしたのは使い手である自分であるため、責任はこちらにあるとそれを断った。

「ホントに……ダンジョンは何が起きるかわからないもんだな、油断していないと思っていたが……気が少しばかり緩んでいたな」

少年はしみじみと噛みしめるように呟く。片手剣を鞘から引き抜き、刀身を眺める。

――すまないな……短い間だったが、ありがとう。

最後に心の中で剣に謝罪するとともに、別れを告げた少年は半壊した剣をバベルに内設された鍛冶系ファミリア―使われなくなった武

器、防具を回収し、新たに造り直して再利用する場所へと向かい、係員に渡してバベルを後にしたのだった。

〃〃〃

迷宮都市オラリオでカーディナルの世話になり、オラリオの生活にも慣れてきた俺だが、この都市に辿り着いたときの俺の状態はまさに田舎のネズミならぬ白ウサギであった。

この世界に転生してから俺が育ったのはオラリオから遠く離れた田舎であり、祖父の話や噂からしか情報が入ってこなかった。だからこそ、話に聞いたオラリオに到着した俺がこの世界で初めてみる種族に、田舎とはまるで異なる都市の発展ぶり、人の数に圧倒されるのも致し方ないはずだ。

右も左も分からない俺が最初に行動したことはオラリオを統括している機関、ギルドを訪ねることだった。そこで、まずは門番の人にギルドの場所を聞き出した俺はそこに向かい、そこで一人の女性―現在冒険者活動をしている俺の担当アドバイザーと出会った。

見た目は年若い少年の俺に対して親身に対応し、オラリオと冒険者の基礎知識について懇切丁寧に教えてくれた彼女にとっても感謝をしている―のだが……

「ゴメンナー、ベル君 もう一度言ってくれないかしら？」

白く巨大な万神殿―ギルドの内部、複数ある個室の一室内で俺は美人アドバイザーに質問を受けていた。

始まりは俺がギルドの出入り口前で、担当アドバイザーに今日あったことを報告しようかと悩んでいた時だった。

上層にミノタウロス出現という前代未聞の事件―不慮の事故のようなものだったとしても、魔石産業で成り立つオラリオを統括するギルドには無視することはできない内容である。

俺が言わなくてもロキファミリアが報告するだろうが、直接ミノタ

ウロスに襲われた当事者である俺がそのままアドバイザーに黙ったまま―彼女が事実を知ればどうなるか…まず間違いなく、怒る―超がつく程に。

美女の怒りは竜の憤怒に匹敵する―生前の祖父が遠い目をしながらそう呟く姿は―自分でも身に覚えがあるだけに―とても印象に残っていた。

とは言うものの、ミノタウロスと？そうせざるを得なかったとはいえ？交戦しましたと正直に言えば、其は其れで小言―無理、無茶、無謀過ぎる等―を頂戴することは想像に難くなかった。

もつとも、以前から俺のダンジョン進出のペース速度について色々と言言をもらっている、今に始まったことではないかもしれないが。

そうして、どのように報告言い訳しようかと物思いに耽っていると―トントントン―と肩を軽く指で突つかれたので顔を上げれば―美人スパルタアドバイザーエが目の前にいた。

くくく

エイナ・チュール―エルフとヒューマンのハーフで、母親譲りの美しく整った―しかしエルフの鋭い美貌とは違い、どこか角が取れた顔立ちを持つギルドの受付嬢であり、冒険者のアドバイザーも兼任しているエイナは最近、ある新人冒険者に頭を悩ませていた。

冒険者になって僅か半月で、六階層に進出して当たり前のように探索し、一般的なLv1の冒険者のパーティの1日分の稼ぎに相当する量の魔石―単独ソロでモンスター達を討伐している―をギルドで換金する少年。

初めて少年と対面した際にエイナは少年の容姿と若さから、冒険者としてやっていけるのか不安が生じていた。しかし、少年は最初の1週間で上層1〜3階層を問題なく攻略し、みるみるうちに到達階層を増やして征くのであった。

エイナは少年以外にも担当していた経験とギルドの資料により、一

一般的な新人冒険者の攻略ペースを把握しているからこそ、少年が並みの冒険者よりも突出していることを理解した。

——彼女もそうだけど、カーディナル様は解っていて恩恵を<sup>フェルナ</sup>与えているのかしら？

エイナがオラリオの学区に通っていた時の恩師であり、ギルドに就職した今でも親交のあるカーディナル。かの女神は己の派閥<sup>ファミリア</sup>を組織しているが、カーディナルファミリアは他の派閥からは特異な派閥として認識されていた。

少年——ベル・クラネルが加入するまではたった二人の構成員しかない小規模なファミリア。だが、その二人はオラリオに数多く存在する冒険者達の中でも数人しかいない第一級冒険者であり、特にカーディナルファミリア最初の眷族で一応団長を務めている——外見は子どもにしか見えない——彼女はオラリオ最強の剣士として、広くその名が知られる程の存在であった。

オラリオの勢力争いに大して積極的でないにも関わらず、構成員はトップクラスの実力者である派閥。そこにベル・クラネルという14歳の少年が、新人の中でも成長が著しい冒険者。果たして、カーディナルは彼らの素質を見抜いたことで眷族にしたのか？

自身の目の前で緊張した様子で座り込む、白兔を彷彿させる顔立ちの少年——ベル・クラネルをエメラルドの瞳で見下ろし、そう思うエイナであった。

「もう一度確認するけど、五階層にミノタウロスが出現して襲われたのね？」

「ええ、ですがロキファミリアの人に助けられたので無事でいられました」

現在、エイナに連行されたベルはダンジョンで発生したミノタウロス騒動について参考人として事情聴取を受けていた。

「今まで……君の探索状況について色々驚かされてきたけど、ミノタウロスに殺されかけましたなんて言うから、遂に勝手に中層まで潜ったのかと思ったわよ」

「いくら俺でもいきなり下層に進出はしませんよ、ちゃんと自分の実力を踏まえた上で攻略しています。」

「……そう言って私に何も言わないで勝手に階層進出するのはどこの誰だったかしら？」

「すみません、俺でした。申し訳ありません！」

ジトツとした目で見つめるエイナに、少年はビュンツと机に手を乗せ頭を下げる。少年にとってエイナとは恩人というのもあるが、それ以外にも潜在的にエイナに頭が上がらないものを感じていた。

「カーディナル様からも君のステイタスが進出するのに問題無い数値と言われているから、私からはあまり言わないけど……ほんとに気をつけてね、ダンジョンはステイタスが高くても死亡する冒険者は大勢いるわ。」

「ええ、承知してます。流石に中層のモンスターが上層に進出する事態はそうそうに無いと思いますが、普段の探索でも無理はしないように心掛けていますよ、エイナさん」

エイナの身を案じる言葉に少年はそう語り、そつと目線をエイナから外す。その紅い瞳の奥にエイナには推し量れない、深い色を見た気がした。

「そのわりには無茶なことしてる気がするけど……まあ良いわ、君も気をつけている様だし、これ以上私からは何も言わないわ」

エイナは座っていた椅子から立ち上がり、そのまま話は終了すると思われたが……

「じゃ、これからはもっとダンジョンについての知識を学んだ方が良いわね」

「えっ、えーとエイナ……さん？」

「そもそも、このペースだと中層近くの層にまで進んじやいそうだったから、これを機に中層について勉強会をしましょう」

エイナの宣告に少年の頬がひきつる。エイナ・チュールはギルドの受付嬢の中で冒険者にとっても人気があるのだが、彼女が自主的に開くダンジョンの講習会はスパルタでありモンスターの種類から特徴、地形とダンジョンに関する膨大な知識を叩き込まれる。

その厳しさたるや、彼女に近づこうと試みる男性冒険者達が逃げ出すほどであった。

「あく、あつ！そう言えば俺は今日、この後に急な予定があるので………」

そそくさと部屋の出口目指して退出し<sup>逃走</sup>ようとする少年だが……

ガシツ！と肩を掴まれ、有無を言わさずに再び椅子に座らされてしまった。恩恵が無い一般人であるエイナだが、その腕から放たれる圧に少年は逆らうことなど出来なかった。

「ダメよー、ベル君。元々、カーディナル様からも君がダンジョンで無茶しないようにしつかり教えてあげてくれて、言い付けられてるのよ。」

「あつ……はい……」

につこりとやんちゃな弟に言い含めるように話すエイナ―その声色と話し方は少年にとって、最愛の人物を彷彿させた―に少年は逃れられないことを悟る。

結局、少年がギルドを出たのは、ギルドに探索を終えた冒険者達が魔石を鑑定しに訪れる頃だった。

くくく

「ただいまー、カーディナル」

ホームである教会の地下室、ベルは疲れた様子でカーディナルに帰宅の言葉を告げた。

「おお、お帰りベル。どうしたんじや、やけにフラフラと疲労しておるが?」

「まあ……色々とな……」

ダンジョンでミノタウロスと遭遇し、剣姫に助けられたこと、エイナとの勉強会と、今日一日起きた出来事を報告するベル。



「それはなんとも不運じゃったな。いや、ミノタウロスと遭遇して生き延びたことを考えればむしろ幸運じゃと言えよう。」

「実際、あの時に助けられていなかったらこうして、カーディナルが淹れてくれた紅茶を飲めなかったからなく」

少年はカーディナルが淹れてくれた紅茶を飲み、疲労が溜まった肉体と精神に心地よく染み渡るのを感じながらホッと一息をつく。自分が生きていることを強く実感するのであった。

「ところで……剣姫と聞いて気になったんじやが、あやつには会わなかったのか？ 同行しとる筈なんじやが……」

カーディナルの言葉に、あつ……と少年は思い出す。

剣姫アイズの所属する派閥ファミリアの名はロキファミリア。ミノタウロスとの遭遇ですっかり忘れていたが、そもそもロキファミリアこそ、現在少年の先輩である人物が合同で遠征しているという相手のファミリアであることを。

「いや、……俺が会ったのはアイ『たっだいまー！』」

突然――前触れもなく、扉がバタンツ！と大きく開かれると同時に、地下室に響く元気一杯の声。

言葉を遮られた少年が扉の方に視線を向けると、そこには一人の少女が佇んでいたのだった。

それは――謎の少女が地下室に突入したのと同時刻の出来事だった。ダンジョン五階層に一匹のモンスター、コボルトが迷い込んでいた。この犬頭のモンスターは本来、ダンジョン上層でも浅い――1〜4階層に出現するモンスターであった。

しかし、このコボルトは多少、他のコボルトやゴブリンよりも強い程度で後は他のモンスターと変わらないが――たまたま探索している冒険者達とは運良く遭遇せずに、この五階層まで降れたのであった。五階層へとやって来たコボルトは特にこれといった目的は無く、他のモンスターと同じように迷宮をさま迷っていたが……

キラリツと、コボルトの視界の端に煌めく光が目映る。

コボルトが目を向けると、少し離れた通路の先に小さな灰の山。気になって近づき、見てみると灰の中に紫に煌めく石が埋もれていた。取り出して見ると、コボルトは知らないが、それはミノタウロスの魔石。

自分のよりも遥かに強い魔力が込められた魔石、手に取りしげしげと眺めていると……

パクつと何を思ったのか魔石を口に放り込み、噛んだ。そして、コボルトの鋭い牙にミノタウロスの魔石は呆気なく、砕かれたのであった。

## 第9話 絶剣

「たっただいまー!」

扉が勢い良く開くと同時に、明るく無邪気な帰宅を告げる声が地下室に高く響き渡る。出所である扉の方を振り向けば、そこに一人の少女が部屋に入ってきて来た。

長く伸びたストレートの髪は濃い青の色合いを持つ艶やかな藍色。紅いバンダナを巻いた小さな顔には満面の笑顔に溢れており、くりつとした瞳は瑠璃ラピスラズリを思わせる輝きを放つ。全体的に青紫色の衣装と銀の胸当ての身軽さを重視した軽装。腰に黒く細い鞘を差した姿から、少女が剣士であると予想出来た。

小柄な俺よりも更に頭一つ分ほど低く、小柄な姿はどう見ても幼い子どもにしか見えなかった。

「騒々しいぞ、もう少し静かに入室せーりセリス」

「あはは、ごめんね ―カーディナル」

嗜めるたしなカーディナルに悪びれる様子を見せず、カーディナル神に対して親しい友人かのように気安く話す少女ーりセリス。

やれやれと小さな口からため息をつくカーディナルの様子から普段からこんな感じなのだろう。

他のファミリアの主神がどのように眷族に接しているか分からないが、カーディナルは自分のことを様付けなどしなくて良い、と言つて自身の眷族には超越者としてではなく、友人かのように接している。

だから俺も他の神はともかく、カーディナルには堅苦しい態度を取らず、割と気楽に接していた。

「ん? あれ、見かけない人が居るけど、この人は?」

部屋を見渡し、カーディナルの他に見慣れぬ白髪俺の少年の姿が青紫の瞳に映り、尋ねる少女。

「お主がロキの子らと遠征に向かっている間に入団した者じゃ。ほれ、挨拶でもせんか」

こちらに視線をやり、挨拶を促す。

「えーと初めまして、俺はベル、ベル・クラネルと言つて半月程前にカーディナルに拾われて冒険者になつたものです」

初対面—というのもあるが、見た目は自分よりも年下に見えるが、間違つていなければ彼女は俺よりも年上のはずなのと先輩にあたるため、丁寧な挨拶をした。

「そんな畏まらなくても良いよ。ファミリアの団長を名乗っているけど、団長としての仕事なんてないから、名ばかりの団長なんだよね……」

あははは……と苦笑してるが、この都市では彼女の名は、子どもでも知つており、冒険者ならばその名を耳にする機会は一度や二度ではなく、剣姫と同じか、それ以上に有名な名だ。

オラリオには数多くの多種多様な冒険者が存在するが、オラリオの冒険者で最強は誰か？ と問われれば、まず間違いなくオラリオの頂点、Lv7『猛者』が挙げられる。

それ以外でも、指揮官ならば『勇者』

魔導士ならば『九魔姫』

耐久力ならば『重傑』

といった頂点には及ばずとも、各分野の中でもトップクラスの実力を持つ第1級冒険者達がオラリオの冒険者の最上位として知られていた。

では、優れた剣士は誰かと問われれば、概ね数名が挙げられた。

高度な魔法の並行詠唱と卓越した剣技を併せ持つ正義のエルフ『疾風』

攻防一体の風を操り、嵐のように剣を振るうヒューマンの少女『剣姫』

そして……オラリオの剣士達の中でも『最強？』と謳われる小さな少女。

その少女の種族はおよそ戦闘に関しては優れた力を持つとは言い難く、むしろ古代のある時から急速に衰退していったことで、他の種族からバカにされることも珍しくなかった。

だからこそ、その少女の活躍―自分よりも遙かに大きな敵に挑んだその様子から『巨人殺し』、上記の二人を上回るその圧倒的な剣技に周囲からは剣聖、剣の申し子、同族からは『架空の女神』の降臨とも呼ばれ、オラリオ―いや、世界中でその少女の存在は大きな話題になった。

死角からの攻撃にも視えているかのように反応する超反応。

同レベルでさえ、影ですら捉えるのに苦心する程の神速と比喻された敏捷。

純粹に…剣技に関して言えば頂点をも上回ると言われる程の絶対無敵の剣。

古代においても類い稀な剣の才能をもつ、空前絶後の剣士―神々が少女を讃えて名付けたその二つ名は―

### 『絶剣』

オラリオ最強の剣士と言われる小人の少女にして、数少ないLv6の第1級冒険者。そして…俺が所属している派閥―秩序の神を主とするカーディナルファミリアが団長―

「リセリス・フリーゼ、それがボクの名だよ。初めまして、後輩君！」

それが俺の目の前で朗らかに笑う彼女の名であった。

〃〃〃

「では！ 新しく入団した後輩君を祝って、かんぱうい！」

カチン！ と三つの杯が音高く響く。

「ベルはここに来るのは初めてじゃたかな？」

醸造酒を口につけ上品に啜り、ベルに聞くカーディナル。

神と言えど見た目が少女である為、飲酒しても平気なのかとベルが聞いたところ、1・2杯位なら問題無いとのこと。

「そうだな、酒場自体に入るのはここが初めてだな」

「ここオススメでね、ちよつと高いけど料理がすごく美味しくて、雰囲気も明るくてボクのお気に入りなんだ」

確かに―内心で肯定する少年。想像したよりもお洒落な酒場の中を見渡せば、酒場にはベル・カーディナル・リセリスの三人以外にも冒険者らしき者が種族に関係無くジョッキを掲げ酒を飲んで、ボリュームある料理を食し、見目麗しい店員の女性が注文を取っては、席の間を横切っていき賑わいに満ちていた。

『豊饒の女主人』―それが現在、ベル達が外食している酒場の名であった。普段はホームで食事をするのだが、今日はリセリスの遠征からの帰還と少年の入団祝いということで、容姿端麗な女性店員と料理が美味しいとオラリオで評判の酒場に訪れていた。

「値段は気にしなくて良いから、二人ともジャンジャン食べてね♪」

「うむ、ありがたく頂こう」

「それじゃお構い無く……店員さん……コレとコレ、後、この料理ください。」

遠征で得た収入で懐が豊かなりセリスの言葉により、少年は通りがかった薄鈍色の髪の店員に料理を注文する。そして運ばれてきた料理を堪能していく三人だった。

「シャーロットも来れたら良かったのにねー」

「あやつは孤児院の子ども達の面倒を見とるからな、自分一人が美味しいものを食べるわけにはいかんからの」

もう一人所属している、シャーロットと言う名の団員。

普段はオラリオに在る孤児院に住んでおり、カーディナル達が住むホームとは別々に暮らしているが、時折ホームに訪れたり、リセリスと一緒にダンジョンに潜って稼いだりするなど付き合いは今でもあった。

「でも珍しいね、カーディナルが自分からファミリアに誘うなんて、普

段は他のファミリアを進めたりしているのに」

「何、気まぐれの様なものじゃ。偶々、目も当てられぬ程しよぼくれとつた白髪頭が視界に入ったのが切っ掛けじゃからな。……そのままろくでもないファミリアに入る可能性も無きに有らず、ならばこちらのファミリアに入れてやろうと思っただけじゃ。」

「あの時はありがとな、危うく路頭に迷うところだったよ」

事実、カーディナルと出会っていなかったら少年はどうなっていたか分からない。

ファミリアの主である神々の中には下界の子どもを己の娯楽、或いは目的の為に利用し、使い潰す者もいる。そこまでいかなくてもファミリアの運営を積極的に行わず、団員達の自由にやらせ、その結果――団員達が悪行を行おうとそれを咎めずに寧ろ楽しむ者もいた。

その点、少年は神格ある神の筆頭であるカーディナルのファミリアに入ることが出来たのは幸運だったと言えた。

「優しいねー、カーディナル。ボクが初めてカーディナルに会ったときを思い出すよ」

「へえー、カーディナルとリセリスの出会いはどうな感じだったんだ？」

「お主とあまり変わらぬよ、ただ一人フラフラと歩いていたのを儂が見つけ、そこからなし崩し的に眷族にしたのじゃ。……それがまさか、色々と驚かされる羽目になるうとは夢にも思わなかったがな」

懐かしむ様に呟くりセリスにカーディナルもまた、当時のことを思い出すのだった。

初めて会った時は何の変哲もない小人バルウムの少女に思えたが、それが十年後にはオラリオで最強の剣士と言われる程に成長――なお、外見は変化無し――するとはカーディナルの予想外であった。

見た目は愛らしい少女で、しかし、種族のハンデを物とはせず外見に反した戦闘力と脅威的な成長に、当然一部の神々が放っておく訳が無く、彼女を巡って生じた騒ぎにカーディナルは振り回されつつも事態解決に向け、奔走したのだった。

——予想外という意味ではベルも同じか、……またトラブルが起きかねんな

少年も又、リセリスとは違う意味で目が離せず、スキルの効果もあるとはいえその成長ぶりは著しいものであり、このペースで成長していけば1ヶ月後にはLv1上位にも届きうるとカーディナルは推測した。

だからだろうか？　そう遠くない未来、何かしらの厄介事が発生するような……勘とでも言うべき予感があった。

オラリオに住んでいる以上、当然と言うべきか、カーディナルファミリアも他の派閥とのトラブルや騒動に巻き込まれたりした事もあった。最近はりセリスとシャーロットがオラリオでも数少ない高レベル冒険者である為、喧嘩を売ってくる派閥はそうそういない。

流石にオラリオの二大派閥になるとカーディナルファミリアも苦戦するが、その二大派閥でもカーディナルファミリア最強の切り札を前にして下手に戦争なんぞ仕掛けられないので、余程の事が無い限り、向こうからこちらには手を出してこない。

「……これもまた、下界の醍醐味かも知れんの……」

眷族をつくるまではオラリオの住民と交流し、安穏な日々を送るだけの暮らしだったが、ファミリアをつくったことで、以前よりも目まぐるしく賑やかな日常へと変わり、それを楽しむ自分がいた。

「……そして戻ったらね、でっかい芋虫みたいな新種のモンスターがうじゃうじゃ出現しててね……」

遠征で起きたハプニングを語るリセリスと、それを興味深げに聴く少年。出会って数時間で仲良さげな二人を眺めながら、賢神はグラスを口に付け、口元の笑みは隠されるのであった。



地上で三人が酒宴を楽しみ、都市に溢れる灯火が夜闇を払い、喧騒に満ちるいつも通りの日常。しかし、打って変わってその真下―ダンジョンはある一つの小さな異変が起きていた。

ダンジョン第六階層―巨大な単眼を持つカエルのようなモンスター、『フロッグ・シューター』が六階層をさま迷っていた時のこと。

通路を渡っているとき暗がりの角から小さな影が浮き出た。

冒険者かと思ひ、立ち止まり、攻撃手段である長舌を射出する用意をするフロッグ・シューター。

しかし、それは敵ではなく自分よりも少し大きい、犬のような頭に鋭い爪を持つコボルトだった。同じダンジョンより産まれる同胞だと分かり、攻撃を中断するフロッグ・シューターだが、そこで一つの疑問が浮かぶ。

――何故この階層にいる？

フロッグ・シューターが知る限り、目の前の同胞の種はそれほど力を持たないので少し上の階層を主に生息しており、此処六階層まで来ることは無いし産まれることも無い。

不思議に思うフロッグ・シューターに構わず、謎のコボルトは一直線に近づく。そして何故かフロッグ・シューターの目の前に立ち、じつと見下ろすのであった。

困惑するフロッグ・シューター。そして、コボルトはおもむろに手を後ろに伸ばしたかと思えば……………

ドシュー！

フロッグ・シューターの単眼、その瞳に向けて勢い良く徒手が突き出され、巨大な眼球が貫かれるのであった。

!!?

想像を絶する痛みにも、音ならぬ絶叫を上げるフロッグ・シューター。それに構わず、コボルトは眼球の奥に突き刺した手を伸ばし、その奥に存在する「ナニカ？」を掴み、勢い良く抜く。

ブシューアアアアー！

大量のフロッグ・シューターの血が噴出し、真正面に立つコボルトが返り血を浴びる。絶命したフロッグシューターの体が灰へと変わるもそれに見向きもせず、先程抜き取った「ソレ？」に視線を落とす。手のなかにあるのは小さな紫紺の石――魔石だった。手に持つ魔石を握り、口に近づけると……

パクツ

口に放り込み、自身の鋭い牙で噛み砕く。パキンツ！と割れた魔石は内部に蓄えられた魔力を放出し、コボルトへと取り込まれていく。僅かだが、以前よりも力が湧くような気がするコボルト。

しかし……

——タリナイ、……モツトダ……マダタリナイ……

赤い血で濡れたコボルトは更に奥、より純度の高い魔石を求め、モンスター獲物を探し歩くのだった。

## 第10話 手合わせ

麗らかな朝の日差しに照らされていく小さな教会。大通りを往来する幾多の種族のざわめきも切り離されたかのように届かぬ教会の裏にある、その広々とした空間の庭で二人の剣士が向かい合っていた。

「先手はそつちに譲るから、どこからでも向かってきて良いよ」

そう言ったのは藍色の髪をストレートに伸ばした自分よりも小さな少女、名はリセリス。小さな体にはダンジョンに潜る際の装備ではなく普段着に身を包み、右手には鞘に納まった片手剣を持ち、中段に構える。気負いを感じさせない姿勢は自然な姿の佇まい。

微笑みを浮かばせているが、その瞳はこちらをまつすぐ見通し、こちらの些細な動きも見過ごさずに捉えていた。

「じゃあ、お言葉に甘えてこつちから仕掛けるぞ」

リセリスの余裕綽々の言葉にそう返す。

実際、Lv6である彼女とLv1の俺ではその実力の差は天と地にかけて離れているので至極当然と言えよう。こちらがLv1で出せるポテンシャルを全て引き出し挑もうが、彼女からすれば素手で楽々と倒せる、それほどまでにレベル差による能力は絶対であった。

少し前に朝食をとっていた時のことだった、突如リセリスから模擬戦を誘われ、それを断る理由もない俺はその申し出を引き受けて今に至る。

カーディナルから俺の話の聞いたリセリスは、約半月で既に六階層に進出した実力―戦闘功績スルについては知らされていない―に興味を抱き、ぜひとも手合わせをしたいと思ったそうだ。

構えに応じ、俺は下段に構える。右手に持つ剣―こちらは抜き身を握りしめ、目の前の少女に全意識を集中する。

そして、無音の風が庭を吹き抜け、リセリスの長髪がなびいたのを合図にベルは地を蹴り、加速した。見えざる手に叩かれたかのように瞬時に数メートル離れたリセリスに急接近、その勢いそのまま右手の剣を斜め左上に勢い良く振り上げた。

「ハッ！」

気合いとともに短く息を吐き、攻撃加速のアシストを受けた一撃――  
下段突進技を放つ。

躊躇いもなく、想像よりも速い敏捷さで接敵してきた俺にリセリスは一瞬目を見張るも、次の瞬間には意識を切り替える。斜め下から猛然と跳ね上がって来る刃に向け、煙る速度で右手を動かし自身の鞘に納まった剣を叩きつけた。

ガギン！と金属同士がぶつかり合う音が庭に響き渡る。

リセリスの加減された一撃に剣が叩き落とされるも、想定されていたことであり動揺すること無い俺は、素早く切り返した剣を撃ち込み、連撃を繰り出した。

元々俺の実力を確かめるのを目的としているリセリスは迎撃をせず、迫りくる剣をかわすか、時には鞘で払っては受け止める。

模擬戦とはいえ、遥か格上の相手に恐れることなく始めから全力で挑んでくる白髪の少年に、リセリスは内心感嘆を抱くと同時に新人とは思えない剣技の高さに感心を覚えた。

――やはり強い！

一方、今までに無いくらい剣を振るも、こちらの攻撃を難無く退けていくリセリスに分かっていたとはいえず、俺は驚嘆してしまう。ここまで好き放題に攻撃できるのは相手が様子見に徹して攻撃を仕掛けてこないおかげだが、これがいつまでも続くとは思ってはいない。リセリスが攻勢に打って出れば為す術もなくやられるのは想像に難くなかった。

例えこの模擬戦で勝てずとも、剣士或いは男の意地として、易々と負ける訳にはいかずにいた。せめて一撃、リセリスに攻撃を与えるには守勢でいる間にリセリスの隙をつく他には無かった。

「う……うおおおー！」

己を鼓舞するとともに、更に勢いを上げる剣戟。しかしリセリスは先程と変わらずに、剣に合わせて自身の剣速を上げ、先程と変わらず

に、俺の猛攻をさばいていく。

だが契機が訪れたのは数度に渡る剣戟の後、俺が左斜めに振った剣をリセリスが鞘で受けて防御を行い、鏢競り合う形になった時だった。互いの息が感じられる程に密着し、身長差でリセリスが見下ろされるが構わず、振り下ろされた俺の剣を押し返そうとリセリスは小さな手に力を込めようとするが……

—ッ!?

リセリスの目が見開く。下部、自身の腹から衝撃を感じ取り視線を下ろすと拳が突き出されていた。

上段の攻撃にリセリスの目が逸らされた時、俺が空いている左手で正拳突打きを放ったものだ。攻撃加速スキルでブーストされた拳はゴブリンを軽く吹き飛ばす威力を秘めているが、防具を身に付けていないにも関わらず拳は腹に沈むことはなく、むしろ押し返られそうな強い腹筋が布越しから伝わってきた。

それでも一瞬の意表を突いたことによりリセリスの動きが止まった。

—ここだ!

抑え込んでいた剣を振り上げ、攻撃加速スキルを発動し、一つのイメージとともに振り下ろす。スキの少ない、獣の爪を思わせる三連斬シャープネイルりが至近距離からリセリスの小さな胴体に直撃すると思われたとき、

—ッ!!

ゾワツと背に戦慄が走った。

振り下ろす直前、顔を上げたりセリスの瞳が刃を凝視する。小さな顔には試合始めの楽しげな笑みは消え、明るい少女ではない、剣士としての顔が俺の目に映った。

そして、振るわれた絶剣。

今までのかろうじて見えた剣とはまるで違う、今の俺には残像すら見えない速さでもって、三連斬り全てが退かれ、空振りに終わる。

最後に僅かな硬直状態に陥った俺の胸元目掛け、鞘に包まれた剣の切っ先が閃光の如く、回避不能の速さで突き進み……

トンツ

胸元を軽く突く。一撃をとられた俺は模擬の終わりを悟り、剣を下ろす。その途端、今まで遠ざかっていた周囲の音が戻ってくるのを感じ、激しい動きに汗が体中から発生していたのに気付く。

「すごいね！キミの剣。思わずボクも少し本気を出しちゃったよ」

鞘に納まった剣を腰のベルトに留め、模擬戦を終えた俺に近づくりセリス。

「それでも無いさ、むしろリセリスの方が見事だったよ。流石、絶剣と謳われることはあるよ」

互いに称賛を送る。俺から見て仮想世界とこの世界では多少の違いがあるが、リセリスの強さは前世で戦ってきた剣士達と比べても、上位に入る程の強さを秘めているのは確実であった。

当然、今回の模擬戦はリセリスが俺の実力を確かめるのが目的であった為、リセリスは本気を出さず受け身になるのがほとんどであるので、正確に実力を測ったわけではない。

だがもし、本気のリセリスと黒の剣士であったときのキリト俺が戦えばどうなるか、全盛期の状態アバタイならば後れは取らないだろうが、リセリスの全力を知らない俺は彼女に絶対に勝てるかと断言は出来なかった。

そう思わせる程に、『絶剣』の二つ名を持つ少女は侮り難い強さを小柄な体に秘めていた。

「謙遜しなくてもいいよ、ボクの方がレベルが上だから君の剣を見切れたけど、君はLv1だった時のボクよりも強いよ、誰かに教わっていたの？」

「いや、基本的に我流だな、戦っているうちに身に付いた」

ベル・クラネル……いや、キリトの剣技は大部分が仮想世界、主に浮遊城アインクラッドで積み重ねてきた戦闘の経験が礎となり、アンダーワールドの美しい女剣士の手解きを除けば独学で身に付けたものであった。

「それすごいよ！独学でその領域まで上げるなんて、ボクが知る限りアイズぐらいだよ！」

興奮して自身に次いで名高い剣士である剣姫の名を言うリセリス。同じ剣士だからこそ、年齢もレベルも自分よりも低い少年が第1級冒険者にも比肩する剣技の高さに驚愕するのだった。

リセリスの純粋な称賛の言葉に悪い気はしないものの、俺は内心いたたまれない気持ちになる。上述した通り、同じ魂と云えど俺の剣技は前世キリトで培った技であり、今世ベル・クラネルで鍛え上げた技ではないからだ。アドバンテージ「記憶があったからこそ仮想世界バーチャルでない、この異世界リアルでもある程度戦えてこれたのだ。」

「おつ、おう……ありがとう。じゃあ……リセリスはどうなんだ？以前から誰かに教わっていたのか、自分で身に付けたのか？……あるいは……覚えているのか？」

俺の問いに、リセリスのつぶらな瞳がスツと細まる。

それは『絶剣』の二つ名を聞いたとき、もしやと生じた思い、自分がベル・クラネルとして転生したように、自分以外の人間もこの異世界に転生しているのではないかと幼少時から抱いてきた疑問。

リセリスとこうして会い、剣を交えては会話することで、その無邪気で天真爛漫な性格と彼女の容姿が、ベルキリトにとある闇妖精インプの少女を彷彿させるのだった。

何種族もの妖精達が飛び交う幻想世界アルヴヘイムオンラインに、突如現れた闇妖精インプの剣士。

可憐な容姿とは裏腹に、七十人近くの戦士達妖精との決闘デュエルに勝利し続けた少女。

二刀流でないとはいえ、かつて黒の剣士キリトを二度も打ち負かした眠りの騎士スリーピング・ナイト。

その最期は数多くの異なる種族の妖精達と水色のウンディーネに見送られて、妖精郷と現実世界から眩い煌めきを残し、旅立った最強

の剣士。

奇しくも目の前の少女と同じ、『絶剣』の異名を持つ剣士を想像したベルは更に話を続ける。

「昔……ずっと以前の事だが、リセリスと良く似た人と出会ってな……もしかしたら知っているんじゃないかなーと思っただんだが、どうなんだ……リセリス？」

単刀直入に、君は転生者か？ とは言わず、曖昧にぼかしながら問うベルにリセリスは………

「うーん。知らないなー、ごめんね。ボクには昔、戦い方を教えてくれた人がいたけど、剣に関してはほとんど戦闘を通して身に付いたんだよね。周りから剣聖、オラリオ最強の剣士なんて云われているけど、ボクはそんな大それた腕じゃ無いよ」

細めた目を開き、模擬戦を始める時と同じ微笑みを浮かばせる。その溜ラピスラズリ璃の瞳から真意を覗くことは、少年には出来なかった。

「そうか……悪いな、変な質問して、リセリス」

「ううん、気にしなくていいよ、それよりもボクのお願いに付き合ってくれてありがとね、ベル」

こうして、二人の早朝から始まった模擬戦は終わり、今頃カーデインルが起きているであろう教会ホームへと戻り、少年とリセリスはそれぞれの1日の活動を始めるのであった。



## 第11話 視線

お馴染みの黒コートと僅かばかりの金属防具を身に纏った軽装に、バックバッグを始めとした探索に必要な道具を揃えた俺は一人、ダンジョンを目指して大通りを歩いていった。

大通りには自分と同じく冒険者であろう集団が闊歩し、朝早くから開いている露店の店主が、コロツケのようなものを揚げながら活発な声で客を呼び込み、御者が鞭をピシヤリと打ち鳴らしては、馬が車体を揺らしながら馬車を引くなど様々な音が響き渡り、日が昇るにつれてメインストリートは賑わい、活気が増しつつあった。

—やはりLv6となると底が全く分らないもんだな。

思い出すは早朝の模擬戦。自分がLv1とは言え、こちらの猛攻を難なく受け流しては弾いていくリセリスに、Lvによる恩恵ステイタスの差を痛感するのだった。

今の自分はベル・クラネルという名の冒険者になって半月になるLv1の新人であり、仮想世界の剣士—キリトではない。

とはいえ、世界は違えど剣士として戦ってきた自分が、—見た目は自分よりも幼い—少女の剣士、その実力をほんの僅かにしか引き出せなかったことに悔しさを感じてしまうのであった。

「あれでまだ上があるんだから、オラリオが軍勢力としても名高い訳だ」

しみじみと呟く。オラリオの冒険者で最高のLv7にして最強と言われる頂点、『おうじや猛者』。レベルは劣るも、リセリスを始めとした複数のLv6の冒険者、それ以外でもLv5、Lv4と高レベルの数少ない冒険者がオラリオに存在する。

聞いた限り、オラリオ外にあるファミリアに所属する眷族のレベルは、高くてもLv2か3がやっとだと言われる。それはダンジョンとフェルナいう恩恵の成長に絶好のスポットが唯一あるオラリオとは違い、外に存在するモンスターから得られる経験値はオラリオのソレと比べて質が低く、レベルアップ成長する機会が圧倒的に少ないためだと云う。

それ故、オラリオの冒険者の質は世界で最高水準だと云われ、実際

に近隣の軍事国家の侵攻を幾度も返り討ちにする話は世界でも有名な話であった。

とはいえ、それは戦力の流出を危ぶむギルドが都市の出入りに規制をかけることで、高レベルに成るほど冒険者は容易くオラリオから出ることが叶わないのも関係していると、遙か昔からオラリオの発展をその慧眼で直に見つけてきたカーディナルは言う。

云わば、モンスターの進出を阻む為に建造された都市を囲む分厚い壁は、そのまま冒険者を外部と隔絶する役目も併せ持つと言えるかもしれない。

ちなみに、今日リセリスは遠征で得たドロップアイテムや魔石による収入の山分けなどの後始末を片付けるために、団長としてロキファミリアの元に向かっている。金銭的な交渉が得意そうに思えないが、ロキファミリアの団長とは親交があるので大丈夫と本人の弁。

― 結局、分からないままだったな。

模擬戦を終えたときの問答、遠回しにリセリスが自分と同じ転生者が尋ねたが、リセリスは関係するようないことは話さなかった。思い違い……という可能性も無い訳ではないが、どうしても俺の中でリセリスとある少女が結び付くのだった。

ある少女―それは前世で戦ってきた剣士達の中でも、とりわけ別格であり、ついで敵わなかった剣士―『ユウキ』

この世界では天界に残っている神々の手により、転生が行われるというが、それはこの地上での話であり、異世界の人間、ましてや前世の記憶を保持したまま転生されるといった話は聞かず、会ったこともない。仮に実在しても、記憶を保持しているとは限らないし、有ったとしても自分から言いふらす者は居ないだろう。

リセリスがユウキの転生体かどうかは気になるところだが、無理に追求する必要は無い……そう、ひとまずリセリスの転生者疑惑について考えるのを止め、本日のダンジョン探索の予定について思考を切り換えようとしたときだった……

ピタッ

突如、それまで動かしていた足を止め、周囲に意識を向ける。

―視られてる？

突然、ゾワツとした感覚が湧き上がると同時に、粘つくような、舐めまわすかのような視線、とても言う気配。

隠す気はさらさら無いとでも言わんばかりの無遠慮過ぎる視線、だが大通りには群衆が行き交っているため視線の出所がはっきりしないが、おそらく、視線の主はこの近辺でなく、より離れた場所から覗いているのだろうと予想する。

視線に殺意といったものではなく、こちらをじっくりと観察しているように思えた。そのまま少しの間、謎の視線は続いたが、フツと始めと同じように前触れもなく急に視線は途絶えた。

「……何だったんだ？」

そんな思いが口に出るも答える者は無く、代わりに……

「あの……………」

「！」

困惑する俺の背後から声が投げ掛けられ、謎の視線で気配に敏感になつていたので思わず勢い良く反転してしまう。声のした方に振り返れば、そこに一人の女性が立っていた。

薄鈍色の髪と瞳をした、俺よりも歳が少し上と思わしきヒューマンの女性。見覚えのある若葉色のエプロンのような服を着た姿から、記憶の一部が反応する。

「ご、ごめんなさいっ！ ちよつとびっくりしちゃって……………！」

「あ、ああ…………いや、こつちこそ悪いな、驚かしちゃって…………」

俺の挙動に驚きを示した女性は慌てて頭を下げる。その行動に申し訳なく思い謝罪した。

「それで、君は俺に何か用があるのか？」

「用という程ではありませんが…………もしかしたら昨日、お店に来てくれた方かと思ひまして、お声をかけたのですが…………」

昨日、店…………女性の言葉に脳内で反復すると先程の記憶の疼きと結び付き、あつと声を出す。謎の視線で忘れかけていたが目の前の女性

は昨日、カーディナル達と外食した酒場の店員のはずである。見覚えを感じるのも当然であった。

「もしかしなくとも、えーと……『豊饒の女主人』の店員さんですか？」  
そう答えると女性はパアツと花が咲くような笑みを浮かべ、嬉しそうに喋った。

「はい！ シル・フローヴァと申します、覚えてくれてありがとうございます！  
います！」

可愛らしく微笑み、自身の名を白髪の少年に告げる女性。

彼女が言うには、開店の準備中に何故か道で突つ立つたままの冒険者が目に留まり、オラリオでは珍しい白髪の頭から昨日店に訪れた客の一人だと思い、声をかけたのだと言う。

「でも良く覚えていましたね、あの場には他の客も大勢いたのに」

「フツ、私は店に飲みに来る人達を観察するのが好きで、昨日も働きながらお客さんを見てたんですよ。それにあの時、有名な『絶剣』さんもいましたから、とても印象に残っていました」

「ああ……なるほど、リセリス……いや、『絶剣』のことは知っているんですか？」

「はい、フリーゼさんと主神のカーディナル様が以前から酒場をご利用して下さいますので、顔見知りなんです。そう言えば……冒険者様はもしかして、カーディナル・ファミリアの方ですか？」

「はい、挨拶が遅れましたが、カーディナル・ファミリアに入りたての新人、ベル・クラネルと言います」

そう答えるとシル・フローヴァは目を丸くして驚いた。

「やっぱり！ すごいですよ！ カーディナル・ファミリアはオラリオでも有名なファミリアで、今まで入団希望者が何人か訪れたそうですが、カーディナル様に認められたという話は聞いたことがありません」

「初耳だな、その話。その割に俺はあっさり入れたんだが。」

「見たところ……ベルさんはダンジョンに向かっているところですか？」

武装装備の姿から予想した彼女の質問に、俺は首肯した。

「そうでしたか、呼び止めて申し訳ありません。探索、頑張つて下さいね」

ペコリと頭を下げ、そのまま会話が終わると思いきや、俺が別れの挨拶をしようと口を開いた時、スツとシルさんは目の前まで近づき、にこつと満面の笑顔で言った。

『豊饒の女主人』、今後ともぜひ、ご贔屓下さい。いつでもお待ちしていますよ!」

くくく

シユバツと、勢い良く突き出された槍のような長い舌を横ステップで回避し、空を突いたフロッグシューターに向かって突進、右手の剣で巨大な単眼に突き刺す。

絶命の叫びを上げ、灰に変わった元モンスターから剣を即座に抜くと同時に、背後に向かって一閃、横薙ぎに払われた剣は飛びかかってきた2体のウオーシャドウの体を同時に分断し、影の体は紫紺の煌めきを残して消滅した。

ヒユンヒユン、と剣を左右に切り払い鞘に納める。戦闘が終了した俺は通路に転がる三体のモンスターの魔石を回収した。

「こんな時に自動的にアイテムストレージに放り込めたら便利なんだから……」

この世界でダンジョンに潜る者なら誰しもが思うであろう悩み、と言うか愚痴をこぼす。SAOやALOと言った仮想世界ならば基本的に倒したモンスターの素材や、プレイヤーの装備はアイテムストレージに収納され、重量制限内ならば自由に収納、取り出し可能であった。

当然ながらこの世界は同じファンタジー世界でも仮想世界と違い、アイテムを電子の情報体に変えられて好きな時に具現化オプジェクトなんぞ出来なければ、小さくても容量が大きなバッグといった便利アイテムはこの世界に無く、基本的に自分で持つのが普通であった。

とはいえ浅い階層ならともかく、深く潜る際にはポーシヨンといった必需品が多く必要になり、壊れた際の予備の武装や魔石やドロップアイテムの回収を考えれば一人では持ちきれ無くなり、戦闘に支障をきたす。

そうならないように戦闘を行う冒険者とは別に、戦闘に支障無く動けるように荷物を携えることをメインとした冒険者、荷物持ちサポーターが存在した。

俺はまだ上層の浅いところを探索しているため、そこまで荷物には苦勞しない。しかしこの先、より下の階層を探索するならばサポーターが存在が必要になるのは必然だ。

だが、カーディナルファミリアは俺以外でも二人所属しているが、一人はたまにしか潜らないし、一人はLv6の上級冒険者、サポーターなど頼めるはずが無い。フリーのサポーターを雇うという考えも有るが、その場合だと一つの不安が有った。

それは信頼も重要だが、それだけでなく俺のスキル——バトルボーナス戦闘功績、その効果の説明は俺がパーティと認識するメンバーに経験値ボーナスの効果を付与するというもの。後方支援を主としたサポーターにどれ程影響を与えるか不明だが、組んだサポーターのステイタスが不自然な上昇を起こし、それを怪しく思った主神が調べて俺との関係にたどり着けば、面倒な事に成りかねない可能性が有る。

このスキルの効果で俺はこの半月で六階層まで単独ソロで来れたが、迂闊にパーティを組めない問題もあった。

同じファミリアの仲間であるリセリスと組めば問題無いが、Lv1と6では普段探索する階層は大きくずれる。リセリスなら文句は言わないだろうがこちらが申し訳なく感じる。もう一人の彼女は普段、地上オラリオの孤児院で孤児達の面倒を見ているので付き合わせれない。

結局、単独ソロで潜るしかない俺だが、六階層より下はまだ当分潜らないのでまだ気にしなくてもいいか……と割と気楽な事を考えながら探索を開始しようと、足を進めた時だった。

——ん？

ふと足を止め、背後を振り返る。

ダンジョン六階層は入り組んだ通路で構成され、天井の薄明かりでは全てが見通せない。そのため、影が多く通路が狭いため戦いづらい階層であった。

—気のせいかな、視られていた？

朝の時も同じようなことがあったが、あちらの隠す気無い視線と比べ、こちらは微かに一瞬だが感じた……：……ような気がした。

—朝のアレが有ったから、……少し敏感になりすぎたか？

特にモンスターや冒険者が来る気配も無く、変わらない光景に気のせいかと判断する。朝の視線で少し気を張り詰め過ぎたかと思いい、少年は再び足を動かし奥へと進むのであった。

一人の人間が三体の同胞を相手に戦っていた。

数の差を考えれば人間が敗北すると思われたが、人間—剣士は彼らの攻撃を易々とかわし、果てには目で追いきれない速度でもって反撃した。

瞬く間に彼らは灰へと変わり、その手際の早さに彼は戦慄を覚えた。

彼—コボルトは丁度、剣士が戦闘を開始するところを離れた位置で見つけ、観察していた。ミノタウロスの魔石を食らい、以前よりも大幅に力を増したこのコボルトならば、例えあの三体の同胞が相手でも

勝利することは可能であろう。

しかし、あの剣士のよう鮮やかに動けるだろうか？ 否、コボルトは否定する。コボルトにはあの剣士のように一撃も食らわずに回避出来ぬし、倒すのに時間もかかるであろうことが予想出来た。

少し前まで、このコボルトは魔石を求めて同じダンジョンから産まれるモンスターを殺し廻っていた。ミノタウロスの魔石と比べればここの魔石は圧倒的に物足りなく覚え、コボルトはより純度の高い濃密な魔石を求めて下層に下った。

しかし、

圧倒的に実力不足の問題に直面してしまった。

コボルトの鋭い歯と爪では硬い甲殻を持つモンスターには効かず、自身よりも巨大なモンスターには圧倒されてしまったのだ。

元々、ミノタウロスの魔石を食らったことでパワーアップしたとはいえ、コボルトはゴブリンに並んでダンジョンのピラミッド間では最底辺に位置するモンスターである。ミノタウロスのように膂力が殊更高いわけでも耐久に優れていることは無い。

そのような訳で澁々と実力が通用するこの六階層で力を蓄えていた。また、冒険者の存在にも気をつけなければならない。複数人で構成されたパーティーにはコボルトでは太刀打ち出来ず、一人だとしてもあの剣士のような、コボルトの目でも分かる化け物染みた実力者がおり、迂闊に手が出せなかった。

彼らが近付いてきたらコボルトは通路の窪みや隙間の影に隠れながらやり過ごし、今のように観察したりした。

今、離れたところで戦いを終えた剣士を見ると、魔石欲求とは異なる何か別のものがこみ上げてくるのをコボルトは感じた。

—どうやったたらあんな風に戦えるのであろうか？

コボルトはただ一心に、黒衣の剣士を見続けた。

コボルトの視線を視線を察したのか、不意に黒衣の剣士はまっすぐこちらを振り向いた。咄嗟に頭を引っ込め、息を潜める。気のせいかと判断した黒衣の剣士が遠ざかり、コボルトはホッと溜めていた息を吐く。



—もつと、もつと………強く成りたい……

気付けば、コボルトの中でそんな思いが生じていたのだった。

## 幕間 道化の宴

それは少年が二つの謎の視線に覗かれた、その日の夜の出来事であつた。

「よっしゃあつ、今日は宴や！ 盛大に飲めえ!!」

「!!!乾っ杯ー!!!」

朱髪の女神の言葉を皮切りに大勢の人間と亜<sup>ヒューマン</sup>・ヒューマン<sup>デミ・ヒューマン</sup> 人がそれぞれのジヨツキを掲げ、酒場は騒然とした空気に包まれた。

ここは昨夜ーカーディナルファミリアが祝杯をあげ、今日の朝ーベルに話しかけた少女が働く店、数多くの冒険者と神々に定評がある酒場ー

### 『豊饒の女主人』

この日、豊饒の女主人はロキファミリアが遠征の帰還祝いというこゝとで訪れ、大勢の冒険者で溢れていた。

「さあ団長、私が注ぎますからどうぞ沢山飲んで下さい」

「はははっ、ありがとうテイオネ、でも…さつきから僕は尋常じゃないペースでお酒を飲まされているのだが…僕を酔い潰した後、何か企んでいない…よね?」

「……………本当にぶれねえな、この女…」

金髪の美少年のような小人族<sup>バルウム</sup>の酒が尽きれば、即座に巨乳のアマゾネスが空杯になみなみと注ぎ込んで更なる飲酒を促すのを、狼<sup>ウエァウル</sup>人の男性が呆れた目でもはや見慣れた光景を見やる。

「うおーっガレス!! うちと飲み比べ勝負やー!」

「ふんっ、いいじゃろう 返り討ちにしてやるわい」

ジヨツキを両手に朱髪の女神が大柄のドワーフに勝負を申し込み、それを不敵な笑みを浮かべたドワーフが了承した。

「モグモグっ この料理美味しいんだよね〜」

「ア、アイズさん、こちらの料理とても美味しいので、一口どうですか!?!」

「うん……ありがとう、レファイヤ」

貧乳のアマゾネスが目の前に並ぶ料理の品々を片っ端から食い広げ、妖精の少女が一人静かに水を飲む金髪の少女に、料理を勧めた。

それ以外の団員も各々、グループをつくるなどして談話に花を咲かせる者達もいれば、料理と酒を味わうことに集中する者がいて、それぞれがこの宴会を満喫していくのだった。

「そう言えば…フィン、今日の宴会お前はリセリスを誘ってみると言っていないかったか？」

「ああ…残念ながら体よく断られてしまったよ、遠征で苦楽を共にしたとはいえ違うファミリアの宴会に混ざる訳にはいかないよね」

「やれやれ、またか どうせならリセリスのファミリアの主神も一緒に誘って合同に宴会すれば良いじゃないか、違う派閥とはいええ口キもそのぐらいいは許してくれるだろう？」

「それも言っただが、あの人は自分の主神とホームで祝いたいと返されてね、仕方がないから、今回も食事に誘うのは諦めたよ…ハハッ、まだまだあの人の距離を縮めるのはずっと先になりそうだな…」

「まあ…あまり彼女に迷惑をかけることだ…」

緑髪の美しいハイエルフの女性ーリヴェリアがフィンと呼んだ金髪の小人族バルウムに絶剣のことを尋ね、その問いにフィンは力の無い笑みを浮かべ、答えるのだった。

「団っ長く、ここに団長に一途なイ・イ・オ・ン・ナがいますよく さあさあ、もつとお酒を飲んで嫌なこと、悲しいこと、恋敵リセリスのことも綺麗さっぱり忘れましょう。大丈夫です、団長が酔い潰れても私が団長の隅々まで介抱なさいますから」

「いや、どこにも安心出来る要素が無いんだけどティオネ、我が姉ながら怖いわ」

両手に大量の酒が入ったジョッキを持ち、ドンツとフィンの前に置く巨乳アマゾネスーティオネ、？表面上は？甘い猫なで声で話す彼女の怪しく危険な言葉に彼女の妹のティオナがツツコミを入れた。

？遠征の時は特にリセリスさんとのトラブルは無かったのに…：やっぱリティオネさんはリセリスさんのこと嫌いなんでしょうか??

？うーん……………戦闘中は、二人とも協力してたから……………大丈夫？  
かな……………？

ヒソヒソと絶剣リセリスと怒蛇テイオネ、そして勇者フィンを含めたややこしい三角関係を心配するレフィーヤに、アイズは戦闘に関したとしか言えず口を濁している……………

「フィンはさー、リセリスのどこが好きなの？」

難しいことを考えるのが苦手な天然なテイオナが深く考えずに、思ったことを口にした。

「ちよつ、テイオナ!？」

突然の爆弾発言にテイオネは演技を忘れ、妹に声を荒げた。想い人フィンに聞かれていないか、慌てて見やると…

「うーん、そうだね……………」

しっかりとテイオナの発言はフィンフィンの耳に届いていた。固まるテイオネを意識外に、ぐいっと何杯目か判らない酒を飲み干し、フィンはだいぶ赤くなった顔で考えた。向かいに座るハイエルフが―お前、実はヤケ酒をしていないか―と言う声も届かず、やがて内容がまとまり、話しを再開した。

「あの人が小人族バルウムと言うのも最大の理由だが、それ以外でも僕よりも強く逞しいし、何よりも物事に全力でぶつかっていく姿勢は、僕には到底真似できないことだ。そんなところに僕は強く惹かれたよ。」

オラリオで二番目ぐらいに有名な小人族バルウムの第1級冒険者の惜しめない称賛が饒舌に紡がれていった。

「そして…今回の遠征では多くの想定外の事態が発生したが、誰よりも先にあの人が立ち向かい、困難な状況をむしろ楽しむように剣を振り、疾走する姿に僕は改めて感銘を受けたよ…」

今まで絶剣の活躍を知っていたが、今回の遠征で戦場の最前線で剣を振る様はフィンフィンに小人族バルウムの象徴―とある女神をリセリスに幻視した。

また、ロキファミリアとの合同遠征で彼女一人だけの参加、自分と親しい者もそれほどいるわけでも無いに関わらず、リセリスは誰とでも親しげに接することで自然とロキファミリアに溶け込んでいく様。

おそらく、いや間違いなく今回の遠征で誰よりも未知の階層を目指すことを純粹に楽しみにしていたのはリセリスであろうとフィンは半ば確信していた。

「あの人の魅力はとても語りきれないが……最近、良いなーと思ったことを上げるなら……」

—上げるなら?—

ゴクリツといつの間にかフィンの座るテーブル以外にも少し離れたテーブルに座る者達が聞き耳を立て、誰かあるいは全員の喉が鳴った。

「ボクツ娘も悪く無いなーって思ったら、あの人が更にチャームリングに見えたことかな?」

フツと微笑みながら眩かれた勇者の言葉が、酒場の静寂に響き渡った。

!?!? ガタツ!

「ウォー! ちよつ、急にどうしたんだリセリス!?!」

突然、豊饒の女主人からかなり離れたカーディナルファミリアホルムの教会で、三人が夕食をしていると、リセリスが身震いを起こして椅子を揺らす。その振動はリセリスの持っていたカップに伝わって、中に入っていた水が飛び出し少年の服にかかってしまった。

驚いた少年が何事かと問うと、

「あつ、ごめんベル。なんか……急にゾワワーって感じ? それが背後から寒気を感じて……」

「私……決めたわ……」

「えっ! ティオネ……なっ何を……?」

フィンの語りに大噴火するかと思いきや、嵐の前の静けさかのよう

に呟かれたティオネの言葉に驚くティオナ。いつでも暴走を止められるように注意しつつ、気になって恐る恐る聞いた。

「私……いや、ボクもリセリスのようにもっと積極的に前に出て、敵を殺し回る……してもっと強くなって……団長を振り向かせて見せるわ、絶対に!!!」

「いや、ティオネもボクって言わなくて良いんじゃないかなあ……？ 似合わないし？ボソツ……まあ……うん、頑張れー……」

ボクと言い直す姉の力強い宣言を聞き、ティオナはもう……ツツコミを諦め、軽いエールを送るだけに留めた。

その後、一度は静まり返った酒場もまた、それぞれが食事と談話を再開することで再び喧騒が戻り、豊饒の女主人は賑わいに満ちていった。そして、宴の盛り上がりも佳境に突入していく中……

？あの……気のせいっすかね？ ベートさん、なんか不機嫌そうに見えるんすけど……？

？そう？ いつもあんなでしょう。まあ……なんか奇行をしているけど？

？何かあったのでしょうか？

小声で囁き合う彼らが見つめる先には一人の狼ウエアウルフ人——ベート・ローガ。誰かと会話するわけでも、ロキの飲み比べに参加することはせず、一人黙々と酒を飲んでる姿があった。しかし時折、苛立ち気に舌打ちすれば、ぶつぶつと小声で何かを呟き、アイズの方にちらちらと視線を送っていた。

ベートがアイズに気があるのはロキファミアでは周知の事実だが、いつもと様子がおかしく見える彼に、三人が訝しく思っている……

「おい、アイズ！ あの時のこと聞かせろ!!」

「あの……時？」

ドンツと酒杯を叩きつけるように置き、大きな声で尋ねるベートに、何の事か分からないアイズは困惑する。

「あれだ、帰る途中で逃がしたミノタウロス、最後の一匹をお前がしただろ?! そんであん時いたトマト野郎だ!」

「ミノタウロスって大量発生で返り討ちしたら逃げたやつ？」

「それだ！ どんどん上層に上って行きやがって、俺達が泡食って追いかけていったやつ！」

トマト野郎―即ち、アイズが五階層でミノタウロスを倒した際に、飛び出た血を浴びてしまったベルのことであった。

「それでいたんだよ、いかにも駆け出しって感じのひよろくせえ冒険者がよ！」

何故か苛立たし気に話すベート、昨日の彼の話題がでてアイズは戸惑う。

「丁度ミノタウロスに襲われやがってたのを、アイズが間一髪で細切れにして助けやがったんだかよお、そいつ…自分が助けられた立場で対等でもねえのに気安くアイズと話しやがったんだよ。ずいぶん楽しげにあいつと話していたなあ…アイズ」

「たっ、楽しげに！」

「へえー珍しいね、アイズが初対面相手に」

「アイズたんが〜!? 普通に会話してたんちやうかい、ベート？」

常に人形のように無表情と言っても過言ではないアイズが、見知らぬ相手と親しげに会話する場面など、容易に想像出来ないだけに疑いの声が出た。

「その人と、普通に話していただけです」

「その割にお前え、そいつとの会話で少しだが笑っていたじゃねーかよ」

ピタッ……

ベートが喋り終えた瞬間、酒場は凍り付いたかのような静寂が発生した。

そして…

「「「笑ったー!?」」」

信じられない事実に驚愕し、叫ぶ者や思わず飲んでいた酒を吹き出してしまった者が続出した。それほどまでに、時には人形と揶揄され

る剣姫の笑顔を見た者はロキファミアリアの者達でも数える程しかおらず、その者達でも容易に剣姫の笑顔など見れなかった。

「アイズさん！ 一体どここの不屈き者ですか!! そんな羨ま…いえ、アイズさんに軽々しく話しかけた無礼者は!!」

「私達でも…滅多に見れないのに」

「その子すごいねー、ある意味偉業だね」

「ほう…あの人見知りのアイズが心を許すとは…」

「中々、興味深いね」

「全然興味深くないわー！ うちすらアイズたんのスーパーレアでウルトラプリティな笑顔なんて見たこと無いわ!!」

豊饒の女主人は一気に少し前の喧騒とは異なる騒ぎが巻き起こった。

「一体どここの冒険者だ・や・ですか!!」

「えっ、えーと…」

血涙を流す様が幻視できる三人の強い追及に、アイズは口にするのを躊躇った。ベル・クラネルという名前だが、今それを口に出せばあの不思議な雰囲気を持つ少年がどんな目にあわされるか、そう思わずにはいられなかった。

幸い、なおも興奮した三人が詰め寄り、オロオロするアイズを不憫に思ったりヴェリアが間に入ること事なきを得たが……

———  
!!?  
ガタツ!

「わあー！ ベルどうしたの!」

一方、カーディナルファミアリアでは突然、今度は少年がリセリスの時のように身震いを起こした。

「一体さつきからどうしたんじや、お主らは!! 地下とはいえ、まだ冷える程の季節ではなからう」

丁度少年が持っていた水がかかってしまったカーディナルが、眷族



二人の異変に一体何事かと疑問の声を出した。

「ああ、悪いカーディナル。いや……なんかゾクツと物凄い殺気？  
それを背後から感じて……」

奇妙なことが起こるなーと、酒場の騒動など知らずにそう思うカー  
ディナルファミリアの面々であった。

## 第12話 怪物祭

薄暗い、そこそこの広さのある室内に、音も無くそっと射し込まれた柔らかな光が薄い硝子の板を通り抜け、寝台に眠る者の頭部に撫でるように触れた。

「ん、んうう………」

外部からの刺激を受け、微かに身じろぐ。

そして―暫しの間、モゾモゾとしていると、ゆっくり、寝巻きに包まれた上半身を起こす。起こした際に、頭部の頂点に存在する耳がピョコンと動く。

ふあゝあゝつと間延びした欠伸を出し、寝惚け気味の頭を振ることで意識を覚醒させる。温もりの残る毛布から名残惜しげに抜け出すと白毛に包まれた尻尾がフワリと現れ、揺れ動いた。

「そういうえば……今日、怪物祭だったかしら？」

窓の外を見れば既に太陽が昇り、同時に外から普段に増して人々のざわめきが頭部に立つ耳に届いた。

―久しぶりに行ってみようかしら？

ここ数日、携わっていた作業を終えて一区切りがついたところだ。たまには外を出歩くのも悪くないと思いついた。

「せっかくだから、アナタも一緒に祭りを回ってみる？」

室内には彼女しか居らず、それ以外の生き物の気配はしない。ダレカに語りかけるようなその眩きの方向は彼女の視線の先、壁に飾られた一振りの鞘に納まった剣があるのみだった。

〃〃〃

「怪物祭？」  
モンスターフェア

初めて聞く言葉に俺は尋ねる。

「うん、オラリオで年一でやっている祭りがあるんだけど、ベルも一緒

に行ってみない？」

より具体的に説明すると、ギルドとガネーシャファミアという巨大派閥が提携することで行われる催しらしい。

祭りの名は『怪物祭』と言い、闘技場でガネーシャファミアのプールの調教師が観衆の前でモンスターの調教を行うとのことだった。

基本的に凶暴で、容赦無く牙を向く存在であるモンスターが調教可能というのも驚きものだが、わざわざ祭りの為にモンスターを捕獲して地上まで運ぶというスケールの大きさに、呆れやら感心を覚えずにはいられない。巨大かつ高レベルの冒険者を多数抱えているからこそ、出来る芸当なのだろう。

「まあ……最近、ずっとダンジョンに潜っているからな。よし、せっかくだ、俺も祭りを見学させてもらおうよ」

モンスターの調教というのも興味を引かれるし、この都市オラリオに来て初の祭りを味わって見るのも悪くない。

「やったー！ カーディナルも良いよね？ せっかくだし三人で行ってみようよ！」

「まあ……今日は学区も休みじゃからな。俺も特に予定は無いからの、構わんよ。」

椅子に座り、食後の珈琲を飲むカーディナルもリセリスに同意を示した。

「決まったね、じゃあ、三人で行ってみよう!!」

朝から小人の少女の元気一杯の声が地下室に響き渡る。こうして、神一人と眷族二人は怪物祭へと向かうことが決まった。少し先の未来、怪物祭で発生する騒動など知らずに……

〃〃〃

モンスターの調教が行われる闘技場に向けて大通りを歩く、祭りの影響か？ いつもより住民の往来が多く、何度か馬車が俺達の横を通り過ぎていく。

「良い天気じゃな、祭りの開催には申し分のない日よ」

カーディナルの言葉に釣られて上空を仰ぎ見れば彼女の言う通り、雲一つ無い快晴。元いた世界よりも蒼過ぎる蒼空を背景に、陽光が明るく眩しげに地上を照らしている。

普段、日中はダンジョンに潜っているために、外の日は一日の始まりを表す朝日と終わりを示す夕日しか見ないことが多い。こうして意識して蒼空を見上げるのは久しく感じた。

「冒険者つてダンジョンに行くのが普通だけど、オラリオの中も探索してみると楽しいよ。色んなお店や種族の人達がいて、いつも発見がいっぱいなんだ〜」

「まあ〜にかく広いからな、オラリオの全てを把握してるやつなんているのか?」

「あはは、ボクの知ってる猫<sup>キャットピーパー</sup> 人の情報屋さんなら全部知ってるかもね」

そんな雑談を交わしながら大通りを進んでいくと不意にこちらを呼ぶ声が聞こえてきた。

「お〜い、お待ち下されニヤ、そのカーディナルファミリアの御一行様!!」

「あれ、アーニヤじゃん。どうしたんだらう?」

変に仰々しい呼び声に振り向いてみればそこは豊饒の女主人、その店先で店員服に身を包んだ猫<sup>キャットピーパー</sup> 人の女性が、ブンブンと手と尻尾を同時に振りながら立っていたので近づいてみる。

「おはようございます、ニヤ。いきなり呼び止めて悪かったニヤ」

「一体どうしたんです。俺達に何か用でも?」

ペコリと頭を下げた猫<sup>キャットピーパー</sup> 人の店員―アーニヤさんに俺が尋ねると彼女は、はい、コレとあるものを手渡してきた。

「……何です、コレ?」

「見ての通り財布ニヤ、これをおつちよこちよいのシルに渡して欲しいニヤ」

「アーニヤ。それでは説明不足です。クラネルさんも困っています」

さらっと俺の名前を言いながら会話に入ってきたのは同じ店員服を着たエルフの女性。彼女の補足によると俺達と同じく、シルさんも

また祭り見学に行ったものの肝心のお財布を忘れて行ってしまったらしい。

「…っと言うわけで、どうか頼まれてもらえないでしょうか？ 私達では店の準備で手が離せないのです。これから怪物祭モンスターファイリアに向かう貴方達には悪いと思いますが……」

「良いよ、ボク達も行くところだったし。その依頼クエスト、引き受けた！」

「そこまで言う程では無かろう……。ともかく、シルを見かけたら渡しておいてやるのは承知した」

「じゃ、俺が先に行つてシルさんを探してみるから。カーディナルとリセリスは先に闘技場に向かつてくれ。俺は後から向かうよ」

そう言うや否や、少年は財布を握りしめて一人駆け出し、闘技場に繋がる東メインストリートへと向かうのだった。

くくく

一人の女性がカップを手に持ち、ふつくらと艶やかな唇に近付ける。その一連の所作だけで周囲にいる他の客達は彼女に見とれ、それ以外の動作を忘れる。

身に羽織った紺色のローブの布越しから抑えきれぬ魔性の色香が店内に洩れでる。彼女以外の存在は皆、『美の女神』フレイヤに意識を奪われ彼女のみしか受け入れない。

外の祭りの喧騒とは切り離されたかのようなこの喫茶店でフレイヤは大通りを埋め尽くす下界の子供達を銀の双眸で見下ろしながら、誰かを探すかのように、一つ一つ確かめるように眺めていると……

ギシリ、ギシリ

木張りの床が軋む音とともに、こちらに近づく複数の気配があった。

「よおー、待たせたか？」

「いえ、少し前に来たばかり」

俯瞰するのを中断し、待ち人である神物に視線を移す。フレイヤの瞳に手を上げ気軽に声をかけてきた朱髪にの女神、ロキと護衛である

う『劍姫』アイズ・ヴァレンシユタインが傍で立つ姿が映り込んだ。「なあ、うちまだ朝飯食ってないんや。ここで頼んでええ？」

「お好きなように」

ずけずけと椅子を引きながら尋ねるロキにフレイヤは微笑を浮かべたまま答える。アイズもまたロキの許しを得、主神の隣に腰掛ける。

そして暫しの間、他愛もない会話が二人の女神の間で繰り広げられた。

.....

「それじゃあ、こんなところに呼び出した理由をそろそろ教えてくれない？」

雑談をそこそこにフレイヤはこの喫茶店に呼び出した張本神に本題を促す。フードに顔を隠しながら暗がりの中で薄く笑うフレイヤに、ロキもまた糸目を薄く開き、ニツと不敵な笑みを返した。

「率直に聞く。何やらかす気や」

「何を言っているのかしら、ロキ？」

「とぼけんや、あほう」

何のことだかとしらを切るフレイヤに、ロキはその細目を猛禽類の如く鋭く構え、深く追及する。

「最近、よう動き過ぎやろう、自分。この前の『宴』に急に顔を出しわ、情報収集に余念がないわ……今度はなに企んどる」

「企むだなんて、そんな人間きの悪いこと言わないで？」

「じゃああしいー！」

ギロリと射殺するようなロキの眼差しを同時に発散された劍呑な神威とともに、微笑みながら涼しげに受け止めるフレイヤ。彼女達以外の客が居なくなった店内で重苦しい空気が充ちていく中、永劫に続くかと思われた無言のやり取りは……

「男か」

「……」

おもむろに、ロキが脱力。発散していた神威を霧散させたことで唐突に終わりを告げた。確信めいた言葉にフレイヤは沈黙の微笑を湛えるのみ、それは肯定の意であった。

「はあ……つまりどこぞのファミリアの子供を気に入ったちゅう、そういうわけか。『神の宴』も目当ての子供がどこの所属か調べる為の情報収集の一環ちゅうーことやな」

「……」

ロキの推理にフレイヤは否定しない。

事実、フレイヤは気に入った異性、あるいは同性の子供を見つければ『美の女神』しか持ち得ない権能——『魅了』——を使い、その子供を虜することで己のファミリアに取り込んできた。『美』に取り憑かれた者達は皆、それまで所属していた主神とファミリアのメンバーを捨て、自ら改宗を申し願ひ出て、フレイヤの元へ向かい美神の眷族となる。

当然ながら、自分の子供を寝取られて、その子供の主神が何も思わぬはずもなく、多くの神々——主に女神勢——から恨みと怒りを買っている。だが、フレイヤファミリアが強大な派閥であるために迂闊に手が出せず、泣き寝入りに終わっていた。

そんな自分の欲求に素直に従う神々筆頭のフレイヤであるが、気に入った子供を全て形振り構わずにアプローチはしない。それは断じて彼女の良心、などではない。

仮にお目当ての子供が目の前に座るロキの眷族だった場合、子供思いのロキは当然ぶちギレル。フレイヤと同じオラリオの二大派閥の一角であるロキファミリアと衝突すればフレイヤファミリアと云えど、決して少なくない損害を被る。

後は『魅了』に全力で抗い、主神との繋がりを絶とうとするならば自ら死を選択するのも厭わない者もいたりする。

そのような訳でフレイヤは予め、気に入った子供の所属する派閥を念入りに調査することから始まる。

なお、ロキの言う情報収集の一環として足を向けた『神の宴』は、結果から言うところと全く目当ての情報が入らず、徒労に終わった。

というのも現在、フレイヤが興味を抱いている子供の主神は滅多に宴に参加しない性格であるため、その主神と逢う機会すらなかったが故だ。

「で？　どんなヤツや、今度自分の目にとまった子供ってのは？　いつ見つけた？」

吐くまで帰さないと野次馬根性丸出しで問い詰めるロキに、フレイヤは再びメインストリートを行き交う群衆を眼下に置く。その銀の瞳は彼らでなく、いつかの光景……偶然目に留まった少年を映し出す。

「とても……とても興味深い魂だったわ。この私の眼を持ってしても全てを見透せなかった」

『魅了』とは異なる彼女自身の先天的能力<sup>チト</sup>。それは下界の子供たちの魂を視る目。この力を使うことでフレイヤはその者の魂の色と輝きを視認、その者の素質<sup>スベック</sup>を測ることが可能であった。

「最初は単に輝きが小さいだけだと思っただわ。大部分が深い、深い闇に包まれていて、その中心にポツンと小さな光が漂うだけの魂。でもそれは違った……闇海のずっと奥底、天上の星海の遙か先で力強く輝く恒星……それが彼の魂……いえ、それを覆う夜闇も含めて魂なのかしら？」

興味本意で聞いたロキだが、途中からフレイヤが何を言っているのかわからなくなってしまう。

フレイヤが覗いた少年の魂はさしずめ、夜空に輝く星だ。

宝石のように煌めく星々を優しく、穏やかに覆う透き通った夜のよう。その中心で燦然と輝かず、ささやかに……でも確かに力強い煌めきを放つ星のように。

その煌めきを見る者に自然と安らぎを与え、癒すかのように。

「気がついたら見とれていたわ。今まで色んな魂を視てきたけど、あんな魂は初めて」

当時の情景を思い浮かべたのか、ソプラノの声には熱が帯び、銀の双眸は妖しく揺れる。

「見つけたのは本当に偶然。たまたま視界に入っただけ」



あの時のように、フレイヤは窓の外を見下ろした。  
すると、ナニカを見つけたのか、フレイヤの動きが止まった。

「ごめんなさい、急用ができたわ」

「はあっ？」

ぽかんとするロキをそのままに、フレイヤは席を立ち、店内を後にする。

「何や、アイツ。いきなり立ち上がった」

「……」

怪訝な顔を浮かばせるロキ。

一方、アイズは先程の美神と同じように、じつと外の大通りを見続  
けていた。

— 今のは……ベル？

彼女の金の瞳には、一瞬、見覚えのある白髪の少年が群衆の群れを  
泳ぐように走り進む姿を捉えた。

~~~~~

「参ったな……」

そんな呟きが口から漏れた。

俺の目の前には数え切れない程の群衆。幾多の種族が集まるこの
大通りに圧倒されていた。

— これは思ったより時間を取られるぞ。

シルさんを探して先行したが、年に一回のお祭りであって想像以上
の見物客だ。この人だかりの中から見つけるのは苦戦するだろう。
カーディナル達を闘技場で待たせる訳にはいかない俺は一旦、この人
の波から脱け出そうと近くの横道に入ろうとした。だが、

ドンツ 「キャー！」

俺が入ろうとして角を曲がった瞬間、タイミング悪く、俺とは逆に
大通りに出ようとした人にぶつかってしまった。

「すみません！ 大丈夫ですか!？」

「ええ、大丈夫よ。ちよつとびつくりしちゃっただけ」

慌てて謝罪し、頭を下げる。その人はぶつかっても倒れることはせず、何てことはないようにしつかりと地面に足をつけていた。

台詞と声から女性と思わしきその人物は全身を魔導士のようなローブで羽織り、顔を出したくないのか？ 深くフードを被り、暗がりには隠れて顔はよく見えず。ただ、彼女の背後、腰辺りからフワフワとした白毛に包まれた尻尾が見えており、種族は不明だが獣人と予想できた。

また、腰のベルトには祭りだと言うのに黒鞘に入った剣を剣帯している。

「すみません、人を探していたので急いでいました」

「そう、気をつけなさい。今日は怪物祭だから特に人通りが多いわよ」
女性はぶつかかったことに腹を立てることはせず、気にした素振りは見せなかった。

そして、改めて謝罪を終えたベルは再び人探しを再開。横道を進んで行った。少年が行くのを見送った女性も、再び祭り見物を再開しようとして足を動か……そうとするのを中断した。

えっ、嘘……

啞然とした声に、フードの暗がりには隠された顔には驚愕したかのような表情。見開いた目をした彼女の視線の先には、腰に剣帯した一振りの黒鞘の剣。

「アナタが反応するだなんて……さっきのあの子に、何かを感じたの？」

当然、剣が喋るはずもなく、女性の言葉に返事などしない。
しかし、

あたかも女性の言葉に答えるように、ナツクルガードに嵌められた黒真珠のような漆黒の石が、微かに青白く点滅した。

第13話 怪物出現

「遅いね〜ベル……」

「やはり、この人海の中から一人の娘を探し当てるのは難しいようじゃのう」

アンフイテアトルム
円形闘技場、そのメインゲートの前で会話する可愛らしい少女の二人組。

何も知らぬ者から見ればその様子は見る者に微笑ましきを感じさせるが、その正体は片や天界に住まう神々の中でも聡明で、賢神と謳われる程の叡智を秘めた女神『カーディナル』。もう一人はオラリオでも数少ないLv6にして、『絶剣』の二つ名を持つ小人バルウムの少女『リセリス・フリーゼ』であった。

見た目は幼い子供同然の少女、実際は外見以上の年齢？一部の神々からは合法ロリと呼ばれている？である彼女らは現在、共に怪物祭を見物しに来た眷族『ベル・クラネル』との待ち合わせの最中であった。「もうショーは始まっちゃったけど、どうする？一応ボクも探し行った方が良いかな？」

闘技場内からは観客達の盛大な歓声が外まで轟き、モンスターの調教ショーが開催されたことを伝えた。

少し前にベルがシルに忘れた財布を届ける為に一人先行して、それが片付いた後に闘技場でカーディナル達と合流する予定であった。だが年に一度の祭りとあって種族関係無く集い、ごった返す人通りに手間取っているのか、精一杯低い背を伸ばしても未だに彼の目立つ白髪が見える様子は無かった。

「いや、入れ違いになる可能性が高いから止めたほうが良い。もう少し待つとしよう。一応此処、闘技場正門が入り口であることはあやつちも承知のはずじゃ。迷うことは無からう」

今にも急行しかねないリセリスを静止するカーディナル。彼女の足敏捷の早さならば手っ取り早く二人を見つけられるかもしれないが、互いに連絡する術が無い以上、無闇に動けなかった。

「んー、わかった。でも、このまま待つてるのも退屈だな〜」

とりあえず、闘技場入り口を支える太い柱の根元にある台座に立ち、白髪に黒コートを着た特徴的な様相の少年が紛れていないかと、辺りを見回した。

すると、正門付近で誘導案内しているギルドの職員達から見知った顔を発見すると、声をかけた。

「おくいエイナ！」

「ん？ あつ、リセリス！ それにカーディナル様！」

呼び声に反応したのは後輩^{ベル}の担当アドバイザー、エイナ・チュール。エイナは以前、リセリスの担当をしていたことがあり、それをきっかけに冒険者とアドバイザーの繋がりだけでなく、互いに仲の良い友人の関係になった経緯があった。またエイナがまだ幼く、オラリオの学区に通っていた当時、その時の教師がカーディナルであった為、ギルドに就職した今でもカーディナルを慕っていた。

「久しいな、エイナよ。壮健そうで何よりじゃ」

「先生…いえ、カーディナル様こそお久しぶりです」

黒色のローブに学士帽、黒の長杖^{スタッフ}を手に持つ様は学区に通っていた当時と何ら変わらぬ姿。かつての恩師カーディナルに、エイナは挨拶すると共にお辞儀を返す。

「えつと…それでリセリスとカーディナル様が此処にいるってことは、今日怪物祭に？」

「うん、そうだよ。でもベルがちよっと人探しでボク達と別れているんだよね。エイナはベルを見掛けなかった？ 後は…お金が無くて困ってるヒューマンの女性を探しているんだけど」

「ベル君？ うーん、ずっと此処で待機しているけど私は見てないわね。その女性の人も」

エイナは朝から此処で待機しているが、通る全て人々を見た訳ではない。それでもエイナが見た限り、色々印象深い担当^{ベル・クラネル}冒険者が訪れた覚えはなかった。

「そうか、分かった。すまないな仕事の邪魔をして、では儂らは立ち去るとしよう」

「滅相ありません、カーディナル様！ 私こそ申し訳ありません。

お力になれなくて…」

一応、仕事中断であるエイナを中断させたことで謝罪する恩師にエイナは慌て頭を下げ、否定した。

「ううん、エイナが気にする必要は無いよ。教えてくれてありがとうエイナ」

「うん…、こつちこそありがとうりセリス。それじゃ、ベル君に会ったら私からも言っておくわね」

「うん、分かった。じゃあまたねー、エイナ。今度またどこかに遊びに行こうね！」

申し訳なさそうに頭を下げるエイナを見て、気にしなくても良いと言うりセリスにエイナは心が軽くなった様な気がした。気兼ね無く接しできる数少ない冒険者の友人が別れを告げ、エイナも微笑みを返し小さく手のひらを振る。

そして、りセリスとカーディナルはその場を後にしようとする…：その時だった。

——グララ…：

「!？」

微かに、錯覚かと判断しそうな程の、地の震えが両足に伝わったのをりセリスは感じた。彼女を除く周囲の者達は先程の僅かな揺れに全く気付いた様子は見受けられない。

仮に気付いたとしても一般人はおろか、冒険者でも気付いたところで大したことではないと、気にも留めないだろう。

だが、その僅かな地の揺れから、彼女の「直感」が異変を察知した。次の瞬間、りセリスの空気が一変。それまでの軽い雰囲気は鋭敏に張りつめ、円らかな目が瞬いた時には何者も見逃さない鷹の目となる。そして、いつの間にか懐から十字架を取り出し、十字架の長いアーム部分を握り締める。それは手で握り持つサイズで、まるで刀身の無い剣のようであった。

がらりと臨戦態勢へ移ったりセリス。祭りを楽しむ少女でない、『絶剣』の姿がそこにあつた。

「カーディナル…」

「どうした、リセリス？」

常時の愛らしい響きの声でなく、低い、真剣味を帯びた眷族の言葉にカーディナルも異変を察した。

「ナニカが来るよ」

根拠の無い、漠然とした内容。

端から聞けば何を言っているのかと思うであろう。事実、側で聞いていたエイナは困惑していた。しかし、長い付き合いであるカーディナルは眷族を疑う真似を一切見せず、「分かった？と疑うこと無く受け入れた。そして手に持つ黒の長杖をスタッフしっかりと握り締め、周囲を警戒する。

一方、リセリスは眼を戦闘時と同じ様に、刃の如くキツと細める。「直感」に従い、視線を向けた先は広場へと繋がる大通り、そのずつと先の通り。

一般人が通る何の異常もない路上だが、リセリスが目に向けて間もなく、今度は周りの者達もはつきり感じとれる程の地響きが周辺一体に発生して……

「来る！」

ドオオオン!!

リセリスが声を発したと同時に街中から突如、膨大な土煙の噴出を伴いながら

——「ソレ」は現れた。

くくく

何度か道行く人に薄鈍色の髪の少女を見掛けなかつたか尋ねたが、全て共通して「知らない？」見てない？と返された。ならば見渡

しやすい上から探そうと家屋の屋根を飛び渡りながら、無駄にステイタスを発揮させ探すも発見出来ず。

通りに立ち並ぶ幾つもの屋台の食べ物に気を取られつつ、俺は現在、人探しをしていた。このままでは埒が明かないと感じた俺の中で、最終手段として公共のど真ん中で探^{シルさん}し人の名を叫ぶ選択肢を選びそうになったが何とか抑えた。

「財布を忘れたことに気がついて、店に戻ったか？」

流石に文字通り飛び回ったので腹が減り、休憩がてら屋台で買った串焼きにかぶりつきながらそう推測する。祭りに来て闘技場まで何も買わないとは思えず、途中で財布が無いことに気付く筈だ。

すれ違いの可能性があるが、確かめる術は無い。仮にそうだとしても、今からまた豊饒の女主人に戻るわけにはいかない。闘技場でカーディナル達が待っているのです、これ以上時間を費やせなかつた。

「案外、闘技場に行っているかもしれない……」

本日のモン^{メイ}スター^イ調教^ベシヨ^トが行われる、そちらの方がまだシルさんを見つけられる可能性が高い。ならば、そちらに行ってみるか、いい加減カーディナル達も待ちくたびれているだろう。

そして、次行く場所を決めたベルがひとまずカーディナル達との合流場所である闘技場に行こうと足を動かす……その時であった。

「モっ、モンスターだあああああっ!!」

大通りに突如響いた誰かの叫声。喧騒に満ちた空気を切り裂くように放たれたその叫びはベルがいる周辺一体を沈黙に導いた。誰もが時を止められたように硬直する中、ベルは声のした方向に振り向き、"ソレ"を見た。

それは丁度、ベルが向かおうとした闘技場方面に繋がる通りの奥。敷き詰められた石畳を蹴り碎きながら、荒々しく、まっしぐらにこちらに突進してくる巨大な影。

全身が純白の体毛に覆われ、頭からは腰をも越えるくすんだ銀色の髪が風に煽られて激しく舞い揺れる。

ベルがダンジョンを探索して、今までに一度も会ったことが無いモンスター。しかし、その特徴は以前、ハーフェルフのアドバイザーか

ら教わった知識から、あるモンスターと一致した。

それは――

「シルバーバック!?!」

ベルが現在、攻略している6階層よりも下層の、11階層に生息する大猿のモンスター。それがどういうわけか、一般人が大勢いるこの街中に出現してしまった。

『ガアアアアアッ!』

白い巨猿―シルバーバックの体を打ち震わせる咆哮が大通りに響いた。それをきつかけにして我に返った周囲の者達が悲鳴を上げ、幾重にも木霊する。

慌てて逃げ出す一般人に興味が無いのか、眼中に入れずに街路を突き進む。

「つて、こつちかよ!」

丁度、シルバーバックの進路上にいたベルは咄嗟に横に飛び込み、突進を回避した。シルバーバックはそのまま突撃して後方にあった荷車は粉碎、木屑が飛び散る。

そのまま突つ走るかと思われたが、しかし、シルバーバックはそこで急停止、反転する。振り返ったシルバーバックの視線は真つ直ぐに一人の人間に向けられていた。

シルバーバックはギロリとその人間を見下ろす。その双眼はダンジョンのモンスター達の殺意の眼差しとは違う、まるで熱に浮かされたかのようなぎらついた眼。目当てのものを見つけて興奮したのか、鼻息が荒い。

「まさか……俺?」

その視線の先はベル・クラネルただ一人。まさか、この大猿は俺を追いかけてきたのか? 呆然と、そんな思いが込められたベルの呟きの返答は……

『グガアアア!!』

盛大な雄叫びと、ベルを目標とされた突進。

シルバーバックは長く太い腕を伸ばし、ベルを掴み捕らえようと飛びかかった。

「シッ！」

咄嗟にベルは手に持っていた串焼きの串を投擲した。

アクセラアサルト
攻撃加速によるブースト効果も合わさったその一閃はシルバーバックの目を直撃すると思われたが、しかし、両腕に付けられた拘束具の鎖により叩き落とされてしまう結果に終わる。

それでも、その串の一撃を防ぐことでシルバーバックの気は逸らされてしまい、狙いが外れたその隙にベルは近くにあった路地裏に飛び込み、奥へと走った。

「聞いてた怪物祭と違うぞー!!」

群衆の逃げ惑う悲鳴と大猿の雄叫びが木霊して、白髪の少年が叫ぶも虚しく響く。

そんな混沌とした世界に銀の女神は面白可笑しそうに微笑み、脱兎の如く路地裏を駆ける少年に向けて、期待を込めて呟いた。

「さあ、頑張つてね？」

女神の試練が今、始まった。

第14話 怪物退治

突如、怪物祭で普段よりも賑わう雰囲気を持ち破るかのようから出現した「ソレ」はまるで巨大な蛇のモンスターのようであった。

しかし、頭部と思わしき部分を震わすと複数の割れ目が走り、咲いた。

『ブシャアアアッ！』

蕾から開花した「ソレ」はまさしく巨大な花であった。大きく広がった極彩色の大きな花卉。しかし、その中心には食虫植物のような口が開き、耳障りな産声を上げる。

謎の植物モンスターはその長大な黄緑色の巨躯を空中でくねらすと、近くにいた一般人を飲み込まんとして襲い掛かった。

一般人には到底避けられぬ速さで迫られ、それに加え突然の事態で一般人は固まってしまい避けることは出来ず、誰もが食われると思われた瞬間、

「ソリヤアアアッ！」

高らかに声を上げ、街路の先から猛然と疾走してきたのは一人の少女。さながら疾風のように街路を瞬時に駆け抜け、植物モンスターに急接近すると手に持つ十字架を振った。

すると振るわれた瞬間、十字架から青い光が伸長、薄い剣身が構成される。青く輝く光刃は人を食らう直前だったモンスターの首を難なく一刀両断して、人食い花の頭部を地に落とした。

ブシャアアアアッ！

頭部を失った人食い花は体液を撒き散らし空中で悶えると、やがて力尽き、ドスンと地に長大な巨躯が倒れ伏した。

「二体何だろ、コレ？」

動かなくなったのを確認したりセリスは手に持つ十字剣に流している魔力を断ち、魔力で構成された剣身を消す。

この十字架は魔力を流すと剣身が現れる魔道具だが、剣身を具現化している間は精神力を消費し続け、その消費量も大きいため燃費が

悪く、下手すれば精神疲弊する危険があるためであった。

それでも具現化された光刃は高い威力を誇り、使っていない間は十字架になることで持ち運びがしやすく、リセリスは普段から護身用に持ち歩いていた。

倒したモンスターの残骸に近づき、じっくりと観察する。Lv6に成る今まで、リセリスはダンジョンで数多くの種類のモンスターと戦ってきたが、この人食い花のようなモンスターは初めて見た。

「ダンジョンから現れたのかな？　でも、そんなこと今まで聞いたことが無いな……」

ダンジョンからこの地上まで突き破ってきたモンスターの話は聞いた事が無く、怪物祭で出す調教用のモンスターだとしても、このようなモンスターをガネーシャファミアリアが出すとは思えなかった。

第一級冒険者により一瞬で倒されたが、もしリセリスが何の武器も無かったら、倒すのに多少手間取っただろう。それ位、このモンスターの能力はLv2,3の冒険者でも相手にするには危険な強さを秘めているとリセリスは予想した。

「ボクがいたからすぐに倒せたけど……コレ一体だけじゃ『ビュン！』ッ!？」

突然、リセリスの足元から突き刺すように飛び出て来た細長い触手。不意打ちを狙ったかのようなその攻撃はしかし、リセリスがバツクジャンプした事で紙一重でかわされ、虚空を突くに終わった。

「……やっぱりまだ潜んでいたんだね」

『グシヤヤヤ!!』

リセリスの呟きに答えるように、同種の植物モンスターが三体、更に地面から出現した。どれもが既に開花した状態であり、その周りには先程の触手、いや蔓が複数生えていた。

ビュウン!!

人食い花達は仲間を瞬殺されたことで少女を危険と判断したのか、真っ先に少女に向けてそれぞれの蔓を鞭のように振るう。薙ぎ払い、振り下ろし、足元または弧を描き死角を狙った様々な攻撃を繰り返した。

うねりをあげて襲い掛かる蔓の波状攻撃に、リセリスは再び十字架に魔力を流し込んで魔力の刃を生み出す。そして猛烈な速さで迫るそれらをリセリスは目を見開き、全て蔓を捉え、迎撃した。

小柄な体を軽やかに、華麗に動かし、次々に押し寄せる攻撃を片手に持つ光剣のみで迎え討つ。一振りするごとに一本、二本、または複数の蔓をまとめて斬り落としていき、無効化していく。光刃の通り過ぎた後には青色の軌跡が少女の周囲を彩り、霞のように消えていく。

人食い花達が自らの蔓を引っ込めた時には全ての蔓が半分近くの長さで戻り、どこかおどおどしたように小刻みに震える。その様子は離れた場所で観ていた神曰く、目の前の小人の剣士に怯えているかのようであったと。

「色々気になるけど、これ以上あんまり時間かける訳にはいかないから、これで終わりね」

それはオラリオ最速の剣士が告げる事実上の死刑宣告。

目前にいる三体の新種は最早、彼女の脅威でなかった。その小さな身体を屈め、引き絞られた矢を彷彿させる前傾姿勢をとる。

そして、右手に持つ光剣を握りしめる彼女は、たった一つの単語 シングル・ワード を呟いた。

「バースト」

超短文詠唱——リセリスが唱え終えた直後、彼女の姿は閃光が如く掻き消える。同時に、人食い花達の全身に幾つもの線が走り、刻まれたのだった。

一瞬遅れて、人食い花の巨躯は線に沿ってバラバラになり、大小様々な肉塊となって地に崩れ落ちていく。

刹那の出来事に、人食い花達は反応すら出来ず彼らの意識は闇へと沈んだ。途絶える直前まで、何が起きたのか気付かずに。

「さてと、一件落着かな？」

すぐ側で佇むリセリスは、その絶命を見守る。警戒心こそ継続中であるが、凶悪なモンスターを屠った後とは思えない軽さがあった。

こうして、突然地面より現れた謎の植物モンスター達は本来想定されていた猛威を奮うこと無く、偶々居合わせた絶剣により呆気なく討伐されるに終わるのだった。

しかし、この一件とは全く別の騒ぎが発生していることを近寄ってきた主神とハーフェルフのギルド職員により知らされ、再び街を駆け回る羽目になるのは、また別の話。

~~~~~

少年を見つけたのは全くの偶然だった。

何の気なしに巨塔の天辺から地上を見下ろして、下界の子供達を眺めていた時、それが偶々目に入っただけの出来事。しかし少年は私の中で久しく忘れていた熱を再燃させるのに十分過ぎるものであった。

正直言うとも最初に魂を覗いた印象は、ぱつとしないものだった。その魂は大部分が深い夜の闇のように真っ暗であり、輝きというのは無いように見え、さしずめ星の明かりが無い寂しげな夜空のようであった。

だが古来より様々な魂、それこそ凡人から英雄と呼ばれる者達の魂を幾度も視てきた私だが、少年の魂はどこか異質に思えた。

それは黒色の魂は総じて憎悪や復讐、欲望、虚無などと言った負の感情に塗り潰された者が染まる淀んだ色だが、少年からそれらは感じられず、“少年の黒”とは何処と無く異なるような、強いて言えば暖かみのようなものを感じ取ったからだ。

その違いが何なのか気になって隈無く視続けたのが功を奏したのか、一つの星を発見することが出来た。

無限に広がる星天の遙か遠くで、肉眼に映るのがやっとな程に静かに煌めく星のような揺らめく光。

それが“少年の本来の魂”だと直ぐに悟った。私が視てきた英雄達のように燦々とはつきりに力強く輝く魂ではない、でも何故か魅入ってしまった。

精一杯目を凝らしてもその光は微かにしか視えない。

単純に少年の魂が未熟で輝きが小さいだけかもしれない。

だが私の直感、天界より不特定多数の種族の魂を視続けてきたその経験から違うと判断した。

少年の魂が小さいのではなく、純粹に遠すぎて見通せないだけなのだ。私の目をもつてしても全容が把握出来ない程に内なる世界に沈んだ魂。

まるで漆黒の夜天の中、無数に存在する他の星々に交じってひっそりと輝く小さな星かと思えば、近づいて見れば実は力強く煌めく巨大な恒星みたいな。

気が付いたら私は恋する乙女が憧れの異性を見つめるような目で、その魂に魅入り、惹かれていた。同時に少年……彼の魂の輝きをもっと引き出せないかと思った。

私の予想が間違っていないければ彼本来の輝きはあるものではない筈だ。

だから今日この日、この怪物祭モンスターファイアを利用して間近で彼の輝きを観察して、その予想が間違っていないか確かめようと決めた。

願わくは、

一瞬でも貴方の本気が見れますように  
僅かでも貴方のことが知れますように  
刹那でも貴方の近くに居れますように

だから

「期待しているわ、見守っているから……頑張つてね」

複雑に入り組んだダイダロス通り、その奥の開けた空間でシルバーバックに追い詰められた白兔を熱の込めた瞳で見つめ、愛しい恋人に向けて囁くように、そうフレイヤは呟いた。

## 第15話 街角の闘い

統一性の無い複雑に入り乱れた通路と上下に錯綜した無数の階段、シンプルな家屋が積み木のように重なり、壁と一体化した集合住宅。猥雑にして複雑怪奇、ひとたび迷い込めば二度と表に戻れないと云われる、この無秩序の領域の名は『ダイダロス通り』

奇人、変人と云われた設計者の名から付けられた住宅街はその構造から地上の迷宮と云われて治安もあまり良く無く、一般人や冒険者は滅多に近づかず、主に都市の貧民層オラリオが暮らす地域であった。

そんな迷宮街に今日、一人のヒューマンと本来なら都市に居ない筈のモンスターという闖入者が一緒に飛び込んできた。

当初はモンスターに追われたヒューマンが迷宮街の入り乱れた通路を利用して、モンスターの視界から外れて距離を離し、逃れられたかと思いきや、モンスターは幅が狭く目の届きずらい地上の迷宮でなく、建物の屋上を飛び移って移動することでヒューマンを捕捉して追跡した。

モンスターの俊敏な動きにやがてヒューマンはある広場に追い詰められ、ヒューマンは否応なしにモンスターと対峙せざるを得ずにしたのだった。

「これは不味いな……」

目の前で唸り声を上げる大猿―シルバーバックを見ながら俺は呟く。少し前に何故かシルバーバックに追われた俺は路地裏を逃げ回っている内に、このダイダロス通りに行き着き、逃げ込んだ。

オラリオのもう一つの迷宮と揶揄されるこのエリアの乱雑な構造を利用して、大猿から逃げおおせる目論見だったが、結果として大猿にはまるで通用せずに失敗に終わった挙げ句、現在俺とシルバーバックがいるこの広場まで追い詰められてしまった。

何故このモンスターを倒さずに逃げるしかなかったのか、それは今日怪物祭を観る予定だったために、ダンジョンに潜る際の武器がないのも理由の一つだが、最大の理由はこのモンスターは俺よりも断然強いからだ。

シルバーバックの出現階層は11階層、俺が今攻略している階層は最大で六階層。五階層も離れた下層のモンスターは当然ながら、その強さも比例して高い。特にシルバーバックは上層のモンスターの中でも高い身体能力を誇り、到底恩恵を授かって半月程の冒険者がたった一人で立ち向かえる相手ではない。

幾ら俺の成長速度が並みの冒険者よりも早かろうが、今の俺ではこのシルバーバック相手には些かステータスが低く、分が悪かった。

——せめて剣があれば良かったがなあ……

心の中で無い物ねだりをするが、無い物はしょうがなく剣の代わりに護身用のナイフを取り出す。

それなりに業物だが、現状これが俺が所持する唯一の武器であった。

他の冒険者が助けに来るのを期待するのは希望的観測だろう。ただでさえ迷い易い住宅街の奥にある此処までピンポイントにたどり着くのは容易ではない。

果たしてナイフ一本でどこまでやれるかわからないが、腹をくくり目の前の大猿を見据える。両腕の手首に付けられた拘束具だった鎖をジャラジャラと鳴らし、獲物を追い詰めて興奮したのか鼻息が荒い。

『ガルアアア！』

先手はシルバーバック、長い剛腕を振りかざして突っ込み、俺に目掛けて叩きつけるように振り下ろす。耐久が低めな俺が直撃すれば体が潰される未来しかないその一撃を横に回避する。

ドゴオン！

一瞬後には轟音が鳴り響き、先程まで俺が居た位置は陥没、周囲の地面にはひび割れが走っていた。砂ぼこりが舞い散る中、シルバーバックは俺を探して回避した先に視線を向ける。しかし既に俺は素早く大猿の後方に移動してナイフを構え、突進。

すれ違いざまにナイフで素早く切りつける。突進の勢いとスキルアクセルアサルトの加速が合わさった一閃は、思いのほかにシルバーバックのふくらはぎを深く切り裂き、傷口から血が勢い良く噴出する。



『~~~~!?!』

自分よりも格下だと思っていた相手からのまさかの一撃に、シルバーバックは苦痛と驚愕が入り雑じった吠え声を上げた。

それでも大猿は苦痛に顔を醜く歪ませながらも、本能のままに鎖ごと剛腕を周囲に薙ぎ払う。ブオンと唸りを上げて襲い掛かる範囲の広い攻撃を、今度は両足に力を込めて踏みしめ——ジャンプした。

上空に高く跳躍した俺の所までには薙ぎ払いは届かず、そのまま何も無い真下を通り過ぎていく。跳び上がった俺は体をひねり、シルバーバックの真上にと位置を合わせる。背に着地したと同時に落下の勢いが乗ったナイフの切っ先が、シルバーバックの背に深々と刺さった。

背中からの激痛を感じてシルバーバックは身をよじり、苦悶の吠え声を上げる。苦痛にのたうち回るシルバーバックの背からナイフを抜いて跳躍、一旦距離を置いた。

一度に続いて二度も不覚を取られたシルバーバックの振り返った猿顔は殺意と怒りで塗りたくった般若の如き形相。

最早シルバーバックの頭の中は如何にして目の前の白兎——いや、敵を殺そうとする以外に思考の余地は無かった。

戦闘が開始されて数分、片足と背中を傷つけられたシルバーバックと違って、ベルは無傷。前世で培ってきた戦闘勘とスキルを活用し、ヒットアンドウエイ一撃離脱に徹することで本来なら格上であるシルバーバックと渡り合う。

とはいえベルも余裕である訳ではない。依然としてシルバーバックとの身体能力の差は離れており、僅かでも油断すれば簡単に形勢はひっくり返る。ましてや手負いの獣はそれだけで危険である。

ベルのナイフの攻撃も通じているようである、シルバーバックの白い剛毛により威力を抑えられ、決定打に為らなかつた。

持久戦は不利と悟ったベルは焦りを抱く。

——何か、こいつの魔石まで届く武器か何かないか!?

多種多様なモンスターに必ず存在する魔石。如何に強大な力を持つどんなモンスターもこれが傷付き、崩壊すれば途端に肉体は灰へと

変わるモンスターの命の源。

シルバーバックの胸の中に存在するであろうその魔石を壊す以外にこのモンスターは倒せない。しかし俺が持つナイフでは例え攻撃加速で強化された一撃でも、シルバーバックの白い剛皮を貫くには威力不足であった。

『グルアアア!!』

こちらの悩みなど関係無いとでも言わんばかりに、完全にぶち切れたシルバーバックの怒りの咆哮が空気ごと体を震わし、周辺一体にけたたましく響き渡った。

先の戦いでこちらを危険視したシルバーバックはより苛烈に俺を攻め立てた。両腕に付けられた鎖を力任せに振り回し、こちらを近づけさせず、乱暴な勢いで出鱈目に襲い掛かるそれらを俺は必死に回避する。回避に集中して攻撃に意識を回す暇は無く、防戦一方に陥った。

徐々に勢いを増していく凶悪な鎖が俺を追い詰めるのに、そう時間はかからなかった。

それは避けられない鉄鎖の横払いを辛うじてナイフで弾いた時、強い衝撃により発生した痺れが俺の手を伝い、体全体を縛り付ける。

一瞬の硬直、それはシルバーバックにとって攻撃するのに十分過ぎる程に致命的な隙。

いつの間にか、世界が眩暈がする程に激しく回転していた。吹き飛ばされたことに気付いたのは周辺を囲む壁に全身がぶつかり、力無く地面に転がったのを認識した時だった。

「あつ、がはっ……!?!」

肺の中に残っていた空気を吐き出し、即座に立ち上がろうとして、震える体を起こそうと腕を立てる。節々に鈍い痛みが体全体に走り思った以上に力が入らぬも、気力と根性を総動員してふらつきながらも立ち上がった。

シルバーバックは虫の息寸前で、後一撃とどめを刺せばもう二度と起き上がれぬ俺の姿に沸騰していた頭が冷えたのか、落ち着いたように緩慢な動きで近付いてきた。

——此処までか……

誰がどうみても絶対絶命の危機。

ミノタウロスの時のように都合良く上級冒険者が現れる様子は無いこの状況に、諦めの悪い俺も本気で一卷の終わりを感じた。

ナイフは吹き飛ばされた際に手から離れ、今の俺は無手の状態。僅かなりとも身を守った黒コートはシルバーバックの攻撃を防ぐ程の防御力は無い。

走馬灯のように頭によぎるのは祖父を始め、カーディナルやりセリスといったこの世界で出会った人達だった。

シルバーバックは俺から少し離れた位置まで近付き、ゆっくりとした動きで剛腕を持ち上げると鎖を真上に振り回した。鉄鎖は段々と勢いが増していき、カウントダウンを告げるように風切り音が鳴り響く。

避けることの出来ない、数秒後に訪れるだろう死を……俺は黙って見ていた。

「これを使いなさい!!」

心身共に諦観に陥りかけた俺を叱咤するように、誰かの声が周辺に高らかに響いた。

「!?!」

ハツとして声のした方に振り向けば俺から見て右の建物、その屋上にはローブを羽織った人物と、そこから俺に目掛けて勢い良く回転して飛んでくる細長いナニカだった。

「ちよ、うおっ!?!」

突然の事態に驚愕と困惑が入り雑じった言葉にならぬ間拔けな叫びを出す俺。それでも体はしっかりと反応し、咄嗟にパシッと投げ込まれたモノをタイミング良くキャッチ、思った以上に重量のあるソレ

に体がよろめき、倒れそうになったがしつかりと地を踏みしめた。  
チラリと受け取ったソレに視線を向けるとソレは――黒鞘に納まった一振りの直剣であった。

『グルウアー！』

ゆつくりと剣を眺める暇は無く、僅かに動揺したシルバーバックがやや遅れて裂帛の叫び声を上げ、振り回していた鉄鎖をこちらに目掛けて叩き下ろす。

俺に対するとどめの一撃、先程までの自分なら諦めて受け入れたであらう死という終わり。

大気ごと叩き潰す勢いで迫る鎖に、脳が判断を下すよりも速く――体が動いた。

キンツ

短く、涼やかに、鋭く響いた金属音。

少し遅れて、離れた場所でドオオンと轟音が鳴った。

それは極太の鎖の切れ端だった。鎖の片方は滑らかに、何かで斬られたような切断面が日光を浴びて鈍く輝いた。

「これは……」

俺は咄嗟に体の動きに任せるままに鞘から抜き、直撃する直前だった鎖を断ち切った剣を見る。

光を飲み込み、全く反射しないそこだけ空間が無くなったような闇黒の刃。

黒水晶のように光を取り込んだ少し透明感のある漆黒の剣の腹。

柄には黒真珠のような、これまた艶やかな煌めきを放つ純黒の宝珠。

剣身から柄に至るまで黒一色の剣。剣身は薄く、少しの衝撃で碎け散りそうなガラス細工のような、儂げな印象を抱かせた。

しかし、先程の一閃はその印象とは裏腹に、鋼鉄の鎖を豆腐でも切ったかと錯覚するような僅かな感触で、空恐ろしく感じる程の切れ味であった。

実感して持つと意外に重量を感じた。恩恵で筋力が強化された冒險者は身の丈以上の大剣をも振り回せるが、この剣は片手剣で在りながら、それに匹敵する重さを秘めていた。片手で持つのがやつとな程、しかしその重さはどこか心地良く、確かな存在感が握りを通して伝わり、磁力でくつついたかのように手のひらに染み渡った。

数秒または数分、本当は一瞬に満たないかもしれないこの濃密なひとときの間を、俺はこの時ばかりは周囲の状況を忘れてこの黒剣に魅入っていた。

我に返ったのはシルバーバックのどこか困惑した鳴き声だった。慌てて目を向ければ、両腕に装着された拘束具の片方の鎖は先程のやり取りで半ばで短くなっており、シルバーバックは啞然とした様子で立っていた。

「これなら、いけるー！」

先程まで抱いていた諦念は鋭い剣で断ち斬られたように、跡形もなく無くなっていった。

依然として体は痛むが手に持つ黒剣の存在に活力が湧き上がり、アドレナリンが発生したのか痛みが気にならなくなっていく。

再び両の瞳に戦意を灯し、こちらを見やる少年にシルバーバックは気圧されて無意識に後ずさる。

自分よりも格下かと思えば予想外の反抗に自らが傷付き、やつと虫の息まで追い詰めたかと思いきや、乱入するように飛び込んできた剣を手に持った少年の姿は先程とは別人のように纏う雰囲気が一変していた。

『グッ、グギヤアア!!』

自分の中で生じた恐怖を振り払うかのように、シルバーバックは白髪の少年に目掛けて突攻した。

一刻も早く目の前の少年を潰そうと剛腕を振りかざす。

地響きを鳴らし迫り来る巨猿に、少年は慌てること無く静かに、初めて手にして間もないというのに、まるで歴戦を共に過ごしてきた相棒のように慣れ親しんだ黒い直剣を構える。

一瞬の出来事であった。

ぶつかる直前、シルバーバックの剛腕が少年の頭上に振り下ろされたかと思えば、瞬きするよりも速く、少年の剣は閃き、シルバーバックの振り下ろされた方の手首に一筋の線が刻まれた。

『~~~~!?!?』

シルバーバックが気付いた時には既に、手首より先の拳はドスンと地に転がり落ちていた。

全く目で捉えられなかった速さで振るわれた剣に拳を斬り落とされ、動揺して思わず驚愕の叫びを上げようとするシルバーバック。

しかし、少年の剣戟はまだ終わらなかった。

巨猿の意識が自分から外れた隙を抜け、巨猿の胸元まで一気に接敵、先程と同じ剣を今度は縦に四連続、一息に放った。

上段から垂直に振り下ろされた一撃目

続けて急停止したかと思えば、何かに弾かれたように勢い良くV字に跳ね上がった二撃目

更に手首を返し、一撃目と同じ斜めに振り下ろされた三撃目

二撃目と同じ跡を辿るように、先の三連撃以上に巨猿の胴体を奥深く斬り裂いた終わりの四撃目

計四回連続垂直斬り、かつての黒の剣士の十八番の技『バーチカルスクエア』

常人どころか並みの冒険者でも捉えきれない速さで、無駄の無い滑らかな動きで、振るわれた剣の四つの斬撃が周囲に正方形に広がり、霞みのように霧散。

反撃する間もなく、真正面から全ての剣撃を食らったシルバーバックであった肉塊は、操り糸を失った人形のように力無く膝をつき、地面へと倒れ込んだ。

その際に魔石を真つ二つにされたのを思い出したように、遅れて肉塊は灰の山へと変わった。

「はあ~~~~」

シルバーバックが灰の山へと変わり、吹き込んできた風に乗り崩れ去ったのを確認した俺は気が緩み、大きく息を吐くと倒れ込むようにして腰を下ろした。

すると――

『ツツ!!』

周囲から、あるいはダイダロス通り全体から爆発したような万雷の喝采が溢れ出るようにして迸った。

驚いた俺が見渡せば、歓声の発生源はこれまでの俺とシルバーバックとの鬪いを見守っていたダイダロス通りの住人達。

次から次へとシルバーバックとの激闘をくぐり抜けた俺を称え、祝福の言葉を送ってきた。

呆気にとられるも頬に笑みを浮かべ、片手を上げて手を振り住人達に応えていく俺。

そんな俺の手元で黒剣の宝珠の内部から漆黒の煌めきとはまた違う：青白い、ひっそりとした煌めきが瞬くも、周囲に気を取られた俺はそれに気付くことは無かった。

「良かった……おめでどう……」

目を見張る程の戦鬪を終えた彼に、私は祝福の言葉を呟いた。窮地に陥っていた彼を見つけて咄嗟にあの子を投げ寄越すも、彼があの子を使えるかどうか確証は無かった。

いざとなれば私が介入するつもりであったが、私の懸念を裏切つてあの子が自ら目を留めたヒューマンの少年は、予想以上にあの子を使

いこなしてモンスターを見事倒すという結果をつくり出した。

それはまるで、以前にも同じような剣を使ってきたような剣捌きであった。

眼下ではそれまで隠れていた住人達に囲まれている彼を見て、今はこのままにしておこうと決めた。後日にまた、彼とあの子に会いに行けば良い。

私とあの子の手によって生み出されたあの子がやっと見つけた使い手だ。きっとあの子の良い使い手マスターと成るだろう。

私はここを離れる最後に、子どもの門出を祝う母親の様な気持ちであの子の名を呟いた。

「本当におめでとう……エリユシデータ」



## 第16話 黒剣と白狐

怪物祭から明けて翌日、俺はホームである教会の部屋で一人、身体を休ませていた。シルバーバックとの鬪いで出来た傷もポーシヨンで回復し、しつかり休んだことでほとんど全快した。

シルバーバックとの鬪いを終えた俺はその後、駆けつけてきたリセリスと合流、ダイダロス通りを後にしたのだった。リセリスの話によると、何でも怪物祭でお披露目する予定のモンスターの何体かが脱走してしまい、俺が追いかけてまわされたシルバーバックもその内の一体だったらしい。

逃げ出したモンスターは闘技場を中心に、何故か群衆に目もくれず多方面に逃走して、リセリスを始めとした冒険者達も討伐するのに手間取ったようだ。それでも丁度、ロキファミアの冒険者達が怪物祭を見に来ており、討伐に協力してくれたお陰でさほど討伐するのに時間はかからなかったらしい。

「あれは逃走と言うより、囿……何かの時間稼ぎみたいだったよ」

出来る限り遠くへと必死に逃げるモンスター達に違和感を感じつつも、その俊足でもって片っ端から逃走したモンスター達を片付けていったリセリス。その中の最後の一体だったシルバーバックを俺が倒したという事だ。

結局モンスターの集団逃走の犯人も未だ捕まらず、嚴重に管理していたガネーシヤファミアの団員やギルド職員が、何らかの原因不明の出来事で誰一人も当時の事は覚えていないらしく、犯行声明もある訳でも無いので、今回の事件は迷宮入りしてしまったようだ。

闇派閥の犯行、悪戯好きな神の仕業といった噂が密かに囁かれているが、真実は定かで無く不明に終着した。カーディナルは今回の事件の詳細を聞いて、犯人にある程度見当がついているそうだが、明確な根拠も証拠も無いため追及出来ないらしい。

余談だが、ホームに戻った後にカーディナルにステイタスの更新をしてもらったら、カーディナルの頬が引きつる程に数値が急上昇した。シルバーバックという本来なら半月の新人には絶対倒せないモ

ンスターを、単独撃破した事に戦闘功績バトルボーナスが高く評価して、得た経験値にかなりのボーナスが上乘せされたのだろう。

実際、一度俺はあのモンスターに力及ばず、敗北するところであったのを、誰かが投げ超越した武器のお陰でシルバーバックを斬り伏せ、生き延びられたのだ。

「結局……コイツの持ち主、見つけられなかったな……」

部屋の壁の方を見やり、そこに在るモノを見て呟く。視線の先には壁に立て掛けられた一振りの片手剣。シルバーバックとの闘いで窮地に陥った俺の逆転の糸口となった黒剣。

シルバーバックを倒したあの後、俺はこの剣を投げ超越してくれた相手に礼を言おうと探したものの、相手は名乗り上げずそのまま姿を消してしまい、結局見つけられなかったのをしようがないので、黒剣をホームまで持ち帰ったのだ。

通常、武器や防具にはその銘や製作者の名前が刻まれているものだが、隅々まで目を凝らして探しても、この黒剣にはそれをあらわすものは無かった。量産品などはその限りでないが、この黒剣は到底そうには見えない。

実際使ってみてこの黒剣は少なくとも、バベルにあるヘファイストスファミア支店に飾られている武器と同程度の品質クオリティを秘めていると俺は感じ取った。

ヘファイストスファミアの陳列窓ショーウィンドウに飾られている武装は鍛冶アビリティを保持する職人によって造られた物。鍛冶アビリティはレベル2以上にランクアップした者しか保持しない発展アビリティである。

即ちこの黒剣の製作者は少なくともレベル2以上の者……それも優れた技術を持つ職人が製作した武器であり、そうであれば多少なりとも探しやすくなる。これほど特徴的な剣であれば、ヘファイストスファミアを始めとした鍛冶ファミアに誰か一人ぐらいはこの黒剣について知っているだろう。

当然ながら投げ超越してくれた相手が製作者とは限らないが、現状手掛かりはこれしかなかった。

「返すのは当然だが、やっぱり惜しくはあるな……」

壁に近づき、立て掛けられた黒剣を手取る。鞘から軽く抜くと、黒水晶モリオンの様な黒く透った刀身が覗く。それを光を呑み込む黒い刃の枠が囲んでいる。片手剣にしては薄く、武器というよりは工芸品を思わせる儚さ、美しさだが、シルバーバックとの闘いを通してこの黒剣の秘めた力を、俺は知っている。

正直に打ち明けるならば、このままこの黒剣を使っていきたい気持ちにはあった。

シルバーバックとの闘いでは手に取って間もないというのに、幾度も使用してきた相棒のように手に馴染んだ感覚。まるで前世に冒険した仮想世界、そのかつての愛剣達のように。とはいえ黙って使う気は無い。名残惜しくはあるが、本来の持ち主に帰すのが筋である。

とりあえず俺は剣の持ち主を探すためにまずは鍛冶系ファミリアを訪ねようと、剣を帯剣して部屋から出た。ホーム、教会の入り口である木製の扉を開けると……

「あら、タイミングが良いわね」

扉を開けた先には見覚えあるローブを纏う一人の女性がいた。

「あなた達に会おうと来たところなのよね、丁度良かったわ。貴方、カーディナルファミリアの冒険者だったのね」

まさかの探し人登場に啞然とする俺を見て、女性は白い尻尾をフワリと揺らし、そう言う俺の後方、背負われた黒剣に視線を送る。

それに反応した黒剣は女性に挨拶するかのようになり、淡く瞬くのだった。

くくく

場所はカーディナルファミリアの本拠地である教会に近いストリート、その付近にある喫茶店に俺と女性はいた。

「ふう……」

女性は息を吐くとパサリと頭を覆うフードを下ろし、彼女の頭の天辺に生えている三角耳が姿を露にする。

「まずは自己紹介ね、私はコウジロ・凜。種族は狐人<sup>ルナール</sup>、ヘファイストスファミリア所属の鍛冶師よ」

「ベル・クラネル、カーディナルファミリア所属の冒険者のヒューマンです」

互いに自己紹介した俺は改めて彼女の姿を見る。柔らかな白毛に覆われた耳と尻尾。肩に届く辺りで切り揃えられた自分と同じくらい真っ白な白髪。整っていて綺麗な顔立ち、外見から察するに歳は二十代後半だろうか。

「シルバーバックとの鬪い、見事だったわ」

「ありがとうございます。ですが、コウジロさんが寄越してくれたこの剣があったからこそその勝利です。あれが無かったら俺は死んでいました…礼が遅れましたが、ありがとうございます」

席を立ち、深く頭を下げる。畏まる俺を見て彼女はやわらく笑みを浮かべて言う。

「そんな畏まらなくて良いわよ、私のことは名前で呼んで構わないわ」「そうですか、それじゃ…凜さん、この剣をお返しします、どうぞ」

俺が黒剣を渡そうとして差し出すと、凜さんは何故かそれに待ったをかけた。

「返すのはいいわ、今日はその子を受け取りに貴方を訪ねたわけじゃないから」

「へっ?」

思わず俺が間の抜けた声を出すと、凜さんはくすつと笑い、続けて言う。

「今日私が貴方に会いに来たのはその子、貴方の持つ剣について頼みにきたの」

「頼み……ですか?」

その俺の呟きに彼女は頷くと、彼女は衝撃的な言葉を言うのであった。

「この子の……『エリユシデータ』の使い手<sup>マスター</sup>になって欲しいの」

.....

「エリユシデータは、私と……もう一人の製作者によって生み出された剣なのよ」

席に座り直した俺に、凜さんは黒剣：『エリユシデータ』の生み出された経緯について語るのだった。

懐かしむように過去を思い返す彼女の声が、俺達以外に客はいない、ひっそりとした静寂が満ちる店内に、紡がれた。

「あれは……私がLv5になって間もない頃ね。当時私はエルフの男性とお付き合いしていたの」

鍛冶師でありながらLv5という第一級冒険者になった彼女は当時、オラリオで広く名の知れたエルフの魔道具アイテムメーカー作製者と付き合っていたと言う。

「付き合っていたといっても、恋人のように愛し合っていたわけじゃないわ。知人以上恋人未満の関係って感じなのかしら？」

高慢でプライドが高く、融通が利かない傾向があるエルフにしては珍しく、誰に対しても紳士的で、物事に博識な人物。だが人を寄せ付けない、どこか浮世離れた雰囲気が漂う男性であった。彼にお近づきになろうとした女性は数多くいたが、その独特な空気の前に誰もが耐えられなかったらしい。

しかしそんな中、ひよんな事で出会った凜さんだけは特に気にならず、一緒にダンジョンに潜ったり、食事をするなどをした。人付き合いをあまりしないエルフの男性も何か琴線に触れたのか、彼女を拒絶せずに付き合いを続けていた。

「愛の言葉を囁き合う恋人の関係じゃないけど、当時の私はあの人のことをひそかに恋い慕っていたわ。あの人は私のことをどう思っていたか、わからないけどね」

後退も進出もしない関係、しかし凜さんはエルフの男性と一緒にいることを好ましく思っていた。他人から見れば微笑ましいか、それとも焦れったく思わせるようなエルフと狐人ルナールの関係はある日……

「別れたの、その人が所属しているファミリアがオラリオから去ることになったのをきっかけに」

二人の関係が悪くなったわけでない、二人はある意味変わり映えしない関係が続いていたが、エルフの男性が所属しているファミリアの事情で此処、迷宮都市<sup>オラリオ</sup>から去ることが決まった。

でも、それ以外に……

「その人から、種族間の問題に関して言われたわ……エルフと狐人<sup>ルナール</sup>では……子を成し得ないことを」

この世界では一般的に、異種族同士で子どもをつくることは出来ないらしい。例外はどの種族と結ばれようと、ハーフで子どもをつくれる凡庸のヒューマンと、産まれる子どもは全て女の子である戦闘民族アマゾネスだけである。

「彼からしたら、自分<sup>エルフ</sup>では女の幸せを与えられないことを氣遣って、私に言った言葉かもしれないけど、余計なお世話だったわ。そんな事、とづくに分かりきっていた事なのに……」

当時の事を思い出しか、凜さんは苛立ち気に、でも悲しげに語る。不器用ではあるが、エルフの男性も今まで自分に付き合ってきた彼女を思いやつての言葉なのだろう。

「ご免なさい、これだとただの愚痴ね」

「いえ、構いません。そのまま話を続けて下さい」

謝罪する彼女に俺は気にしてない素振りを見せ、続きを促した。

「ありがと。少し脱線したけど続きを話すとね、私は別れ話を持ち掛けられた時に一つ、彼にお願いをしたの」

「お願い……ですか？」

俺の呟きに凜さんは頷くと、テーブルに置かれたエリユシデータに視線を送り、その時の光景を思い出しながら話した。

「私と彼の初の共同となる作品、この子……エリユシデータの作成よ」

それは子どもを成し得ない凜さんが提案した、オラリオを去る彼の共同作品

エルフの男性との思い出を象徴する形見の品

オラリオでも有数の高レベルの鍛冶師の妖術と技術、アイテムメーカー魔道具作製者の神秘と叡智が込められた傑作品

それが『エリュシデータ』、狐人ルナールとエルフの製作者によって生み出された武器であり、二人の間で出来た子どもとも言えた剣。

「この子が創造されて間もなく、あの人はファミリアと一緒にオラリオを去った。風の噂だとアルテナにいますという話を聞いたわ」

エリュシデータを見つめながら、思い出に耽るように凧さんは創造の経緯を語った。

「しばらくはこの子はずっと私が使ったりしていたけど、ある日私はね……こう思ったの、もつとこの子にふさわしい使い手が居るんじゃないかって」

元は凧さんの自己満足の為に創られたような剣。

だが次第に、凧さんはエリュシデータに自分ではない、もつとふさわしい相手を使うのが正しいのでは、という思いが生じてきた。

エルフと狐人ルナールの高匠が創り出したエリュシデータは、第一級武装と比較しても高い性能を誇っていた。実際に一度凧さんの主神に視てもらったら、声をかけるまで数分間、黙り込んだままエリュシデータを凝視し続けていたという。

「でもあてがなくて、誰に使ってもらえば良いか、結構悩んだわ」

凧さんとエルフの男性の想いが込められた作品。当然そこらの冒険者に渡す気はなく、ましてやエリュシデータを十分に使いこなすことは不可能だと凧さん判断した。売りに出す訳にもいかない。

そうして悩んだ凧さんはまずは上級冒険者、それも当時の第一級クラスラスの冒険者達に試しに使ってもらった。

結果……

「エリュシデータを使った全員が、武器として満足に使えなかったの」  
ある者は剣を振った際に重心がブレて、軌道を大きく逸らしてしま  
い

ある者は妙に重く感じ、切れ味もランダムで斬れたり、斬れなかつ  
たり

ある者は逆に自らが黒い刃に傷つけられてしまったり

そのような事が頻発してしまい、結局誰も使う者はいなくなつた。不思議なことに、凜さんが使う分には問題なく使用出来るが、それ以外の者になると誰も振るえなかつた。

「その話、まるでこの剣が相手を選んでいるような気がするんですが」  
「その認識で間違いわ無いわ、この子：エリユシデータには自律意識のようなものが存在するわ」

何故そのようなものが存在するか、それは凜さんの種族、狐人ルネールの特殊な力：妖術が関係しているという。

「私の使う妖術でね、付喪術といって物に特殊な性質、能力を付与することが可能なの。この子を創る際に私はこの力を使ったのよ」

彼女が今まで創ってきた物は全て付喪術により特殊な力を秘めていて、並みの武装とは一線を画する武器、防具であつた。

エリユシデータに込められた想いは『適応』、使い手に合わせてそのスペックを変えて適合するという信じられない能力。使い手が最も力を出せるように重さ、切れ味、重心、少しだけだが時には形状を変えられることが可能だと言う。

最早、剣という無機物ではなく、一つの生き物とでも言う代物。

「言っておくけど、全てが私の望んだ能力を持った物を創りだせるわけではないわよ、込める能力によっては希少な素材を沢山使つたりして時間も労力もかかるし、耐久性が魔剣並みに落ちてしまうことだつて当たり前にあるわ」

予想外の代物に目を丸く俺を見て、凜さんは補足して言った。どうやら付喪術を使用したものはそう簡単に創り出せないものらしい。

エリユシデータは深層のモンスターからドロップした素材などが用いられており、加えて優れた知識と技術、高ランクの神秘アビリティを保持していたエルフのアイテムメーカーの力が合わさつたことで、失敗することなく成功：推し測ることが到底出来ないこの剣が誕生出来たのであろう。

ただ……

「そのせいかな、この子は相手に合わせるんじゃない、自分自身で相手を



選んでしまうの。特定の者にしか扱えないようにすることはあるけど……これは私も想定外だったわ」

凜さんは母親とでもいう存在である為、身を任せているが、何が気に食わないのか他の冒険者に対しては第一級であろうと逆らうという何とも面妖な、言うことを聞かない子どものような印象を、俺は感じた。

「こんな訳だから私もこの子の使い手を探すのを諦めちゃったのよ。仕方がないから、ずっと私が所有していたけど……昨日の怪物祭で、この子は自分から貴方に興味を示したわ」

「俺こ？」

「そう、そして貴方はエリユシデータを手に、完璧に使いこなしてシルバールバックを倒した……」

それを見た凜さんは、エリユシデータの使い手は俺しかいないと考え、それをお願いする為に今日、俺に会いに来たと言う。

「何故、俺なんでしょう？俺はまだ冒険者になって半月の新人なのに」

俺よりも強い冒険者はこの迷宮都市オラリオに山ほど存在する。一体何がエリユシデータの琴線マスタ?に触れたのだろうか、当然の疑問に凜さんは首を横に振って答えた。

「この子が貴方の何に惹かれたのか、私にもわからないわ。でも、この子が自らマスタ使い手を選んだことに、きつと意味があると私は思うわよ」  
エリユシデータは俺が異質な存在であることを感じ取ったのか、もしかすると前世の記憶を保持しているのと関係があるのだろうか？

俺と凜さん二人が見つめる先、奇しくもかつて仮想世界で俺が愛用していた黒剣、SAOが滅びる最後まで使用していた愛剣エリユシデータと全く同じ名を冠するこの剣を見続けるも、俺の疑問に『エリユシデータ』は答えることはない。

ナツクルガードに埋め込まれた、黒い真珠の如き宝珠は静謐に、純黒の煌めきを湛えるのみであった。

## 第17話 お誘いと路地裏の出会い

日の光も届かぬ広大な地下迷宮。明かりの役目を果たす天井の燐光が薄緑色の壁を淡く照らし、真下で対峙する者達の姿を浮かび上がらせた。

一人は白髪少年。厚手の黒コートを着込み、その上には両肩と胸元を守る僅かな金属防具の軽装。背には鞆が背負われており、その一つが抜かれていた。

少年と対峙するのは地下迷宮をさ迷う大蟻のモンスター。全長が少年の細い体と同程度、緋色の鎧の如き硬殻を身に纏い爛々と紅く光る双眼が侵入者の姿を捉え、巨大な歯牙をキチキチツツとかち鳴らす。

「ツッ！」

バツと先攻したのは少年だった。大蟻に目掛けて突撃、そして目の前まで近づくと手に持つ黒剣を真横に振るった。

迫る黒剣に大蟻は前腕を持ち上げ、先が鋭利に尖った鉤爪を少年に向けて向かえ撃とうとした。

しかし――

『ギッ?!』

大蟻が鉤爪を振るうよりも速く、一瞬の間に少年の剣が前腕ごと切り裂き、大蟻は苦痛の呻き声を上げる。そして大蟻が少年から意識を逸らし、動きが止まったその間に少年は大蟻の真横に回り込み、大蟻の首に目掛けて黒剣を斬り下ろす。

薄闇に満ちる迷宮内で、一際黒く煌めく刃は硬い甲殻を抵抗無く滑り落ち、内に守られていた首を一刀両断した。

断頭―ゴロンと転がり落ちる頭部、遅れて首の断面から体液がこぼれ落ち、胴体は脱力したように地面に崩れ落ちた。絶命した大蟻を尻目に、少年は天井から絶えること無く降り注ぐ燐光を吸い込む黒剣をじつくりと眺め、呟いた。

「キラーアントの硬殻もまるで問題無しか」

キラーアントの特徴の一つである硬殻を、薄紙を切ったと錯覚させ

る程の刃の鋭さは圧倒的であった。此処、第七階層から出現するキラアントの硬殻は生半可な武器では全く歯が立たない、まさに鎧とでもいう強度を誇るが、どうやらこの剣の刃の鋭さの前には自慢の硬殻も形無しらしい。

先のキラアントで丁度十体目だが、刃が欠ける様子を全く見せず、むしろこちらが物足りない気持ちになる程であった。

黒剣改めエリユシデータ。

鍛冶師 魔道具作製者

希代のルナルとエルフが共に創り出した漆黒の剣。俺にとって馴染みのある銘を持つこの黒剣に何故か俺が使い手に選ばれたことで、作製者の片割れである狐人の凜さんに譲られたのだ。

俺はその時の凜さんとの会話を思い出す。

「この剣―エリユシデータを使えられるのは俺からしても願ってもない申し出ですけど、本当に良いんですか？ 俺は大して大金を持ち合わせていませんよ」

「別にお金はいらわないわ、売りに出す為に創った訳じゃないし。それに値段を付けたら椿が打った作品よりも高く付くと思うわよ。」

それは俺にとつて都合が良すぎる話であった。

ヘアリストスファミリアの団長鍛冶師が作製した第一級武装、最低でも十萬ヴァリスはするそれらを超える代物。エリユシデータは材料からしてダンジョンの希少な素材が用いられていたり、剣自体が特殊武装のため、少なくとも億はするだろうと凜さんは言った。

そんな剣をエリユシデータが気に入ったという理由だけで無料で譲ってくれるのだから、裏を感じる程に美味すぎる内容だ。要望があっても、それもたまたまにエリユシデータのメンテという名の様子を見せに来てと言われたただだ。

「勿論エリユシデータを使うからには、オラリオ最高の剣士になるくらいの気概は持つて欲しいわ。……『絶剣』や『剣姫』を超えるくらいには」

最後に、凜さんは俺に忠告した。

―それに今は貴方がエリユシデータに認められているけど、決してその力に溺れないようにしなさい。その子の愛想が尽きれば貴方も

他の冒険者同様に、使い手として見なされなくなるわよ。

くくく

斬ったキラーアントが二十体目を辺りで俺は七階層の探索を終え、地上へと帰還した。七階層にもなればダンジョンの構造やモンスターの質も数も上層よりも厳しくなるが、新たな武器であるエリュシデータが攻略の大きな手助けとなり、複数相手でなければソロの俺でも十分にキラーアント相手でも立ち回れたのだが……

「思った以上に攻略出来たが、バックパックが邪魔になってくるんだよな」

背中ですつしりとした重みを伝えるのは剣ではなく、バックパックであった。中には探索で得た魔石とドロップアイテムがぎつしり詰め込まれており、その重みが増してくると戦闘中に身軽に動き辛くなってくるのが煩わしく感じた。

上層の上辺ならばさほど気にならなかったが、七階層になると複数のモンスターを相手に戦闘する機会が多くなるのでどうしても動きに支障が生じてくるようになる。

S A Oを始めとした仮想世界ならば容量が許す限り、どんなアイテムも情報体に変えられて自由に持ち運び出来るのだが、生憎この世界はファンタジーであっても現実、ダンジョンでは荷物は自分で持つか、荷物運びサポーターをお願いするのが一般的であった。

「その辺り、リセリスはどうしてるんだろうな……。後で聞いてみるとしてまずはエイナさんにサポーターの当てが無いか相談してみるか」  
そんな訳で換金がてら、俺はエイナさんに会いにギルドを訪れた。だが、新たな武器を得て少々浮かれていた俺は忘れていた。ギルドには凶太い冒険者も恐れ、震えてしまう鬼オウガの存在を……

くくく

「で、君はまた私に何も言わずに……勝手に下層に進出したという訳ね

」

「はっ、はい…」

穏やかに、ニコニコと口元は笑みを浮かばせているも、その瞳は据わっており極冷気に冷えた目で正座する俺を見下ろす。その迫力たるや、思わず俺は居住まいを正してしまいう程であった。

——そこに愛しき人の面影を感じながら……

ギルド本部万神殿バンテオン内の個室。防音性に優れており、冒険者がアドバイザーとの相談や内密な話をする際に利用されているこの部屋で、現在俺は最早何渡か不明なお説教を受けていた。

それは換金を終えてエイナさんに面会した時、個室に案内された俺は何も考えずに今日七階層に進出したのを告げてしまったのが事の始まりだった。

「たった半月、ソロで七階層進出なんて…本っ当くに君の成長ぶりには頭を悩ませるわね……、その分ステイタスも相応に高いのよね？」  
「はい、アビリティランクも三つがEになって、その内の一つがDに届きます。」

少年の話を聞いて思わず、エイナはくらくと常識と頭が揺れるも辛うじて意識を保つ。エイナは神のように人の嘘など見抜けないが、少年がこのような嘘をつかないことを知っているぐらいの付き合いはあった。

ましてや少年の主神はエイナの恩師、カーディナル。エイナがオラリオにいる全神々で一番尊敬して止まないと云っても過言ではない神である。

眷族子を想う彼女がステイタスを偽って伝えるのはまず有り得なかった。なので少年のアビリティが実際にEランクに到達しているのは疑いようもない事実なのだろう。

そのきっかけと思われるのが先日の怪物際の騒動、シルバーバックの単独討伐だと言う——間違っていないが正確ではない——無茶苦茶な話を聞いた時は本気で倒れそうになったが。

——リセリスも進出速度は一般的な冒険者よりも早かったけど、ベル君はそれを上回る速さなんだからな——、もく。

その見た目からあどけない兎を彷彿したエイナだが、実は鋭い牙を持ち、そこら中をアグレッシブに跳ね回る兎にエイナは内心、ハアアつと溜め息をついた。

とはいえ少年が進出に見合う実力を持つのなら、アドバイザーを勤めている彼女はそれを認めなければならない。魔石産業で成り立つオラリオを統括しているギルドにしても、有能な冒険者にはどんどんダンジョンで魔石やドロップアイテムを持って帰って欲しいのが本心だ——無論、無理をしない範囲でだが。

—でもそれだと少し気になる：いや、見過ごせないのがあるのよね  
：  
「えーと、何ででしょうか？」

正座したまま困惑する少年を尻目に、エイナは少年の体——正確には装備を見ていた。どうやらトレードマークらしい少し薄汚れた黒コート、その上に両の肩と胸を覆った申し訳ばかりの金属防具。これらは全てダンジョン初日から現在に至るまで身に付けていた防具だ。

攻撃は回避、もしくはは武器で防御するのが主体の少年は軽装を好んでいた。武器は新調したようだが黒コートはともかく、鎧はまだ使えなくはないがキラアートのような攻撃力が高いモンスターが相手だと少し、いやかなり心許ないのでとエイナは判断した。

実際、少年の武装を出資したカーディナルもこの短期間で七階層に到達するとは流石の賢神も想像出来なかった事だ。

「ベル君」

「は、はい？」

「明日、予定空いているかな？」

「……はい？」

~~~~~

エイナさんとの面会を終えた俺はギルドを出て、ホームへと帰路についでいた。

—結局サポーターの件、話しそびれちゃったな。

説教から始まり、進出の事情説明をしていたらサポーターについて頭から抜けてしまい、そのままエイナさんと別れてしまったのだ。まあ最後のお誘いで完全に頭から消し飛んだのもあるが。

エイナさんからの誘いはこうだーベル君の今の防具だと色々心配だから、ベル君が良ければ明日、一緒に見て回らない？

ギルドでも有名な美人アドバイザーのお誘い、エイナさんがここまで接してくれるのは彼女の責任感が強いのもあるが、お人良しの部分が強いのだろうと俺は見た。

それがどこかー急に見知らぬ相手にフロアボスの攻略を手伝ってくれと言われてそれを請け、そのパーティーの指揮官として勝利を導き出し、見事役目を果たした女性を思い出す。

「とりあえず誘いを受けたが…、まあ特に明日は予定ないし、大丈夫だろう」

そう呑気に言いながら俺は路地裏を歩く。

今俺が歩いている場所は夕暮れの時間帯もあつてかなり薄暗いが、ダンジョンの僅かな光でも問題なく辺りを見通せる冒険者の俺からすれば進むのに何の支障も来たさなかつた。

ピタッ

「…足音？」

ふと立ち止まった俺は周囲に耳を澄ます。耳には路地裏の奥、バタバタと慌ただしく駆ける音が響く。音の違いからして二人はいるか？

こうして耳を澄ましている間にも音の響きは強くなり、発生源がこちらに近づいて来てるのがわかった。面倒事の気配がするが、此処からホームに近いところで騒動が起きるとなれば、こちらとしても見過ごせない。俺はまず、曲がり角をそつと覗き込んでみようと思ひました。

「あうっ！」

「あっ」

俺が覗いたと同時に一つの小さな影が曲がり角から飛び出し、ゴロゴロと勢い良く転がりドンッと向かい壁にぶつかった。どうやら覗き込んだ際に出した足が引っ掛かってしまったらしい。

「すまん、大丈夫か？」

「うう……………」

相手はもぞりと痛そうに頭を抱えながら起き上がる。

「……パルウム？」

起き上がったのは少女であつた。小さな姿から子供かと思つたが、うちの団長にも似た身体つきから小人だと俺は気づく。彼女の円らで大きな瞳と俺の視線が交じり合つたのだった。

「やつと追い付いたぞ、この糞パルウムがっ!!」

俺が少女に手を差し伸べようとしたその時、曲がり角から更に一人のヒューマンの男性が飛び出した。

その逞しい見た目と背中に差した剣から、冒険者と思わしきその男は尋常じゃない怒りと殺気を周囲に振り撒きながら、少女へと詰め寄る。

「もう逃がさねえからな……………」

剣呑な光を瞳に宿し、憤怒に満ちた表情からだごとではないと判断した俺は、サツと少女を背後に庇うようにして男に立ち塞がった。

「……ああ？ ガキ、邪魔だ、そこを退きやがれ」

「事情は分らんが、とりあえず一度頭を冷やした方が良いんじゃないか？」

睨み付け、失せろと言う男に俺が軽口を叩くように言うと、男は声を荒げて叫んだ。

「うるせえぞガキツ！ 今すぐ消え失せねえと、後ろのそいつごと叩っ斬るぞ!!」

—これは…言葉をかけるだけじゃ、怒りを治めそうには無いな…

「何なんだテメエは!? そのチビの仲間かっ!」

「いや、これが初対面だな」

「じゃあ何でそいつを庇ってんだよっ!」

「そりゃあんた、大の男が小さい女の子を追いかけ回してたら、状況的にこっちに付くだろうよ」

「ッ! ……………テメエツ!」

平然と何て事もないように言った俺に、男は一瞬瞠目するも、すぐ

に湯気が出そうな程に顔を真っ赤に染め、焦れつつも思ったのか背中
に差した剣を抜いた。

「もういい、邪魔するなら…テメエからぶつ殺す…!!」

男は手に掴んだ直剣と殺気をこちらに向ける。単なる脅しではな
い、真正正銘の殺意に満ちた言葉を吐いた。

「ッ！」

殺気に反応し、バツクバツクを放り捨てると俺も戦闘体勢を取る。
手馴れた動作で抜かれたエリユシデータの闇黒の刃が路地裏の薄闇
を斬り裂き、漆黒の刀身が顕になる。

逃げずに真っ向から立ち向かった俺に男は驚き、パルウムの少女が
息を呑む音が鳴る。ちらりと後ろを見れば少女は目を見開いてこち
らを——いやエリユシデータを注視していた。

対峙する俺と男。武器と佇まいからして男はLv1だろう、男がど
れ程の強さを持つか不明だが、剣の質がこちらに分があるので決して
遅れをとらない筈だ。

——これが初の対人戦か

ギョツと柄を握りしめ、息を吐くと体から無駄な力を抜く。まずは
剣を叩き折るなどして相手を無力しなければならぬ。

今や路地裏は一触即発の空気に満ち、戦意と殺意が入り雑じってい
た。男は当初少年を駆け出しと見なし、手早く事を終えようとした
が、少年の研ぎ澄まされた空気に、思わず躊躇してしまい迂闊に動け
ずにいた。

少年と青年が相対して固まり、空気がピリピリと張り詰める中、突
如その声は響いた。

「双方、剣を納めなさい」

芯のこもった鋭い声が両者の間を割って入った。

はっと二人が振り向いた彼らの視線の先には——

紺色のゆったりとした服に身を包んだ一人のダークエルフの女性
がいた。

第18話 買い物デート

「双方、剣を納めなさい」

大通りの喧騒から外れて、魔石灯の明かりも微かな路地裏に、若い女性の凜とした音が響き渡る。

その発せられた声に先程まで剣を抜き、一触即発の状態だった者達も思わず相手から目を離し、同時に彼女を見やった。

—あの人は：

少年の視線の先に佇むのは全体的にゆったりと余裕のある紺色の服を着た妙齢の女性。

肩にかかる程度に伸びた短く暗い紫の髪に、先端が鋭く尖った耳。地味な服装に身を包めどその美貌は少しも衰えず、寧ろ暗がりにおいてその気品ある顔立ちはどこか妖しく、神秘的にも感じられる。

道行く人が思わず目を奪われる程の美貌に、鋭角に伸びた耳の特徴を聞けば誰もがエルフだと答えるだろう。しかし、彼女の晒された顔—褐色の肌を見ればその認識は少し変わる。

一般的にエルフと云われる種族の肌は総じて色白の肌が特徴だが、一部のエルフ達には彼女のカフェオレ色の肌のように褐色の肌を持つエルフの種族がいた。

それが—

「…ッ?! 今度は『ダークエルフ』か!、次から次へとお…てめえも邪魔するのかあ!」

「……ここは地上、人目が無かろうと無闇に剣を手を取って良い場所ではないわ。それにその白髪の子は私の知り合いでね、その子に手を出すのなら見過ごす訳にはいかないのよ」

一瞬、青年は瞠目するも直ぐに我に返り、女性に向かって怒鳴るように吠えたてる。それは一般人ならば震えてしまうだろう迫力を持つが、しかしダークエルフの麗人は全く意に介さず、涼しげな顔を浮かべるのみに終わった。

女性は紫水晶アメジストの瞳を細め、男に告げる。

「今だったら、五体満足のまま見逃してあげるわよ。私としてもそつ

ちの方が助かるわ——後始末する手間が省ける」

「——ッ!!?」

——ゾワッ、と周囲の空気が冷え込んだかのような静かな^{プレッシャー}圧が広がると共に、さらりと艶やかな唇から洩れ出た物騒な単語の響きは青年が怖じ気づき、無意識に後退りさせるには十分過ぎるものであり、側に居た少年でさえ対象外であるにも関わらず、冷や汗が浮かび出る程であった。

後始末——この言葉がもたらす意味を、青年は否応なしに悟った……いや、思い知らされたというのが正しい。

気のせいか、彼女と相對した青年はまるで……氷のように冷たく、刃のように鋭く張り詰めた糸に、自分の体が絡め取られていくような錯覚に陥るのを覚えた。

気付けば——シンッ、と空気が凍りつき、路地裏は静寂に覆われた。熟練の冒険者でも黙り込ませるだろうダークエルフの彼女が放つ^{オラ}威圧に、青年も少年も少女も三人まとめて彼女の作り出した網^{雰囲気}に捕われてしまっていた。

既に男が先程まで保っていた威勢は壁に沈んだ夕日と共に消え失せ……ただ、立ち尽くすのみ。そんな彼に女性は最終警告とでも言わんばかりに裾を揺らし、両手で持っていた紙袋から片手を離し、ゆつくりと大仰な動作で片腕を男に向けて伸ばす。

細く、艶かしい五本の指が広がる手のひらには何一つも武器らしき物は確認できない。にもかかわらず、容易に近付けさせないナニかを感じさせた。

「——ッ、くうっ!?!」

えもいわれぬ感覚に、遂に男は耐え切れず、女に背を向けて青ざめた顔で退散した。少女と少年は無視して、纏まりつく呪縛から一刻も早く逃れるように、路地裏の奥深くへと……。

「ふうっ……」

男が逃げ去ったことにより、それまで周囲を覆う緊張していた空気は退いて胸を撫で下ろす。そしてエリュシデータを鞘に納め、言葉と威圧感だけで男を追っ払った彼女へと礼を言う。

彼女もまた先程まで纏っていた雰囲気は鳴りを潜めて、男に向けていた極薄な無表情とは打って変わりこちらに向けて優し気な笑みを返す。

「サンキューな、シャーロット。おかげで助かったよ」

「別に礼なんて要らないわ。割り込んでしまったけど余計なお節介だった？」

「いや、俺だと穩便に済ませなかった。介入がなかったら、今頃剣を交えていたかもな」

ダークエルフの女性の名は、シャーロット・アラネア。

リセリスの次にカーディナルファミリアに入団した、その二番目に出来た団員。現在は冒険者を半ば引退しているが、その実力はリセリスと同じ第一級冒険者クラスであり、俺やあの退散した男ようなLv1の下級冒険者では圧倒的に格が違う存在であった。

「シャーロットは何で此処に？ ホームに来る途中だったのか」

「いいえ、買い物の帰り。怒鳴り声が聞こえて気になって覗いてみたら、あなた達を見かけたの」

シャーロットはホームとは別の場所に住んでいて、一人暮らしではなく集団生活を送っており、カーディナルもそれを容認している。食糧の買い出しを終えて、路地裏を通った方が早いという理由でこの付近を歩いていたところだと言う。

「ベルこそ何であの男に絡まれていたの？」

「あー、それは女の子が……あれ？」

背後を振り返るが、事の始まりであった少女はいつの間にか忽然と居なくなっていた。結局、あの男と少女との間に何があったのか判らずじまいだったが、察するに色々と訳ありの様子だ。少女もこれ以上は長居はしたくなかったのだろう。

気にはなるが、ひとまず少女の件は置いておき、シャーロットの方に向き直り、事情を説明した。

「そう、判ったわ。まああれくらいなら大して問題は起きないと思うけど、あまり他の冒険者のトラブルに首を突っ込むと、後々面倒な事になるから気をつけなさいね。」

とりあえずあなたも大丈夫そうだし、私もマリアさんと孤児院のみんなが待つてるから行くわね。近い内にまたホームに寄るって、カーディナル様とリセリスによろしく」

「ああ、わかった。助太刀ありがとな、シャーロット」

クスツと笑うシャーロットと互いに別れるたと、俺はホームへと帰宅するのだった。

くくく

翌日、俺は約束したエイナさんとの待ち合わせ場所に指定された広場で一人、銅像の前で立っていた。

空を仰ぎ見れば雲一つ無い快晴で買い物日和、集合時刻より少し前なのでエイナさんはまだ来ていない。

美人な女性との買い物。彼女には日頃から世話になっているが、今回のような事は始めてだ。

アドバイザーが冒険者と一緒に防具の買い物をする事は完全に仕事の範囲外だが、エイナさんが自主的に開いているダンジョンに関するスバルタ指導勉強会会として、彼女は根っからの面倒見の良さで親切心からくるお節介から、人に対して色々世話を焼いていく性格だ。

人によつては生真面目で、何事にも几帳面な性格から苦手意識を抱く者もいるのだろうが、エルフに由来する整った顔立ちと人当たりの良さから、冒険者や神々の中で一番人気のあるギルド職員で有名であり、リセリスも彼女とは大の仲良しでプライベートでも親交がある。かくいう俺自身も彼女の人柄を好ましく思っていた。

—こうして待っていると、何かこそばゆいな……

誰もが憧れている女性と二人つきりで買い物するという、端から見ればデートかな思うであろうこの状シチュエーション。況…というのもあるが、彼女と接しているとある女性の面影を浮かべてしまう事がたまにあるのも、理由の一つだ。

—いけないな…エイナさんに会うというのに…アスナの姿を重ねてしまうなんて

胸の内から、堪えきれない程に沸き上がってくる愛情を無理矢理奥底に押し込め、頭を振って思考を切り換えていると――

「お待たせー!」

涼風が吹き抜け、可憐な声が耳に届く。俺はパタパタと小走り近づいてくる待ち人を見て――目を見張った。

「ごめんねー、ベル君。待たせちゃった?」

エイナは担当している冒険者に声を掛ける。ベルと呼ばれた少年は普段から羽織っている黒コートとは違う服装だが、少年の見慣れた白髪で直ぐに目に映った。

「じゃあ今日はよろしくね……つて、えーと……ベル君?」

「……」

どうやら、少年にエイナの声は耳に届いていない様子であった。白髪の少年は何かに驚いたような顔でエイナをじつと見つめ、沈黙したまま立ち尽くす。

「ちよつとベル君、大丈夫?」

「……っ! す、すみません、エイナさん」

エイナが声を掛けると少年はハッと、我に返って慌ててエイナに謝罪した。

「もう私を見て黙っちゃうんだから、……そんなに私の着てる服つて変?」

「い、いえいえ、エイナさんの格好はとっても綺麗で、良く似合っています……思わず見惚れるぐらい」

エイナの服装はいつものギルドの制服ではなく、私服であった。

清潔な白いブラウスに、丈の短い赤いスカート。加えて普段身に付けている眼鏡もこの時は外しており、ギルドの職員の大人びた姿とはまるで異なる、年相応の少女の雰囲気醸し出していた。

「もう、上手なんだから……でもありがとう、ベル君」

「……はっ」

ほんのちよつぴり、頬が染まりながらハーフエルフの少女は可憐な笑みを少年に向けた。

男性ならば思わず見惚れてしまうだろうその笑顔を、少年は遠い目で―いとおしいものに向ける顔で、じつと見つめる。

―その紅い瞳の中、紅白の服を着たハーフエルフの少女に、誰かの残像を重ねて……

……

「それで、今日は何処に向かうんですか？ 知る人ぞ知る防具屋ですか？」

「うーん……あるのかもしれないけど、私には分からないかなー。まあとにかく、まずはバベルに向かいましょう」

「バベル？ 確かにあそこはヘファイストスファミリアの支店があるって聞きましたけど、俺にはまだ手が届きませんよ」

今日もダンジョンの真上で、荘厳な立ち姿を見せている白亜の巨塔――『バベル』

蓋としての重要な役目だけでなく、その内部の上階には冒険者の為の様々な施設が多く存在しており、その中の一つにオラリオで最も有名な鍛冶系ファミリアの店があるのは俺もリセリスから聞いていた。

だが当然ながら、ヘファイストスファミリアで出品されている武器は―エリユシデータ程ではないにせよ―どれもが高値であり、おいそれと手が出せる代物ではない。俺がダンジョンで蓄えてきた貯金では到底足りない。

無論、アドバイザーであるエイナさんもその事はご存じである筈だ。それについて俺が問うと、―着いてからのお楽しみに、つと返された。

道中で露店の品々を眺めながら、俺は隣で店員の呼び込みを愛想良くやり過ごしていたエイナさんに気になっていた事を尋ねた。

「そういえばエイナさんって、以前からリセリスやカーディナルと親しいんですね、どれくらいの付き合いがあるんですか？」

「うーん、カーディナル様は私が学区に通ってた頃からずっと知っているし、リセリスは彼女の名前が広まり始めた頃にアドバイザーになったのがきっかけで、互いに友人になったわ」

カーディナルから神聖語ヒエログリフなど滅多に学べられない学問や、為になる知識を沢山教わり、厳しくも正解したら優しく誉めてくれた話。

リセリスと初めて会った当初はエイナさんがギルド職員になって間もない頃であり、かなり緊張していたが、接している内に彼女の明るく親し気な態度に緩和されて、あつという間に砕けた会話をする程仲良くなつた話。

俺が初めて聞く、エイナさんと二人の様々なエピソードをエイナさんは当時の出来事を懐かしむように、顔を綻ばせて俺に語ってくれた。

「私からもひとつ聞いて良いかならずつと気になっていたんだけど、ベル君って何でいつも黒いコートを羽織っているの？ 何か拘り？」
「え、えーと拘りと言いますか：長年の習慣というかく、一番落ち着く格好を選んでいたら最終的にこうなつたしまいました……」

ゴニヨゴニヨと口をもごりながら返答する。

ある意味前世の俺のトレードマークで有った黒コート。

これは俺が初めてダンジョンに探索する時に防具選びをしていた際に、冒険者を客ターゲットに主に革や布を扱って革製の鎧、コート、ローブなどの防具に拵えている生産系ファミリアの店で売られていた売り物だ。

ダンジョンのモンスターが落としたりドロップアイテムの革を素材作製されているため、金属で出来た鎧程ではないがそれなりに耐久性は高く、軽い上に衝撃を吸収する効果もある為、軽装を好む多くの冒険者に愛用されていた。

基本的に軽装備を好んでいた俺は即座に購入を決めたが、着なれていたという理由で丈の長いコートを選びながらも、複数ある色の中から黒の色を手にとったのは黒が好きというのもあるが、やはり：俺の中で黒コートに思い入れがあつたのも否定出来なかつた。

そうして俺の最近の行動に関する小言が幾分か混じったエイナさんの雑談を交わしている内にバベルへとたどり着いた。

第19話 新装備

冒険者になってからバベルそのものには何度も足を運んではいるものの、その真下に存在するダンジョンを目当てに行くのが主な理由であり、上階に設立された数多くある摩天楼施設を目当てに上に昇る機会実はそれほど無い。

俺が公共施設がある階より上に昇ったのは、気まぐれにヘファイストスファミリアの武器・防具の店を見回った時だけ。

というのも魔石の鑑定ならば鑑定員が多いギルドの方が混雑しにくいためそちらを利用するし、回復薬や携帯食糧等の探索必須アイテムも都市内部にも幾つか店が存在するので、バベルに寄る前に調達可能だ。

武器・防具にしてもそこまで消耗してないので買い換えの必要は無く、バベルで毎回利用している施設はダンジョン帰りに利用しているシャワーぐらいだ。

今回俺とエイナさんがバベルに向かった目的は俺の防具更新。エイナさん曰く、現在俺が身に付けている防具では七階層以下のモンスター相手に少々心許ないということで、今の俺の手持ちの金でも購入可能な装備を買おうとのこと。

バベルに着き、魔石で動くエレベーターのような昇降設備で昇った先は八階。そこが俺達の今回の目的地であった。

「ヘファイストスファミリアのすごいところはね、末端に当たる職人さん達の作品をこうして下の階と同じようにお店に並べちゃうことなの」

バベル内にも数多くの支店を保有する鍛冶系ファミリアの説明をしつつ、エイナさんは近くの店舗に案内して飾られていた武器を俺に見せる。その武器は下の階で売られていた武器よりも遥かに安く、手軽に購入出来る値段だった。

「なるほど、つまり腕がまだ未熟な新米の鍛冶師スミスの作品を、同じく俺のような駆け出しや高額な武具を買える程の収入が無い冒険者相手に販売する事で、冒険者はお手頃価格で武具を購入出来る、鍛冶師は実

際に使ってもらえることでより評価を貰える。互いにメリットある取引が可能ということですね？」

店内に飾られている製品の安価な値札を見て予想した俺の答えに、エイナさんは良く出来ましたと頷く。

「流石ベル君、そのとおり！　実際に売る店側も幅広い客層を確保出来るし、悪い話じゃないからね」

また、駆け出しの冒険者と鍛冶師の中には作品を通して繋がりが構築され、面識を得た際に互いに気に入ることによって直接契約を結ぶ者もいる。

契約した冒険者が将来名を上げ、有名になればその武器を作製した鍛冶師の名も広がり、それをきっかけにより多くの冒険者がその鍛冶師を作品を求めるときもあり得る、という話だ。

「何より、特定の誰かの為に打つ武器っていうのはね、思い入れが深い分、より特別な威力を発揮するの。……なーんて、これは他の人の受け入りなただけど」

「分かります。俺も、幾度も助けられた覚えがありましたから……」

彼女の説明を聞いて、俺の脳裏には一人のメイスを携えたマスター・スミスの姿が浮かび上がる。仲間思いで、皆のために真摯にハンマーを手にとって鉄を打つ逞しい女性。彼女の作成した高性能な武器・防具には俺を含めた仲間達全員の力となり、敵の脅威から何度も守られた。

もし彼女がこの世界にいれば、間違いなく腕の良い鍛冶師になっているであろう。

「じゃあ防具屋の方に行きましょう。この階一帯はこのお店と同じような値段だから、一万ヴァリスもあれば品によっては防具一式は買える筈よ。さっ、行こう！」

——楽しんでいるなー、この人は……

自分よりも張り切っているエイナさんを見て苦笑いしつつも、彼女の導きに従って俺は防具を扱っている店へと向かった。

……………

「へえー、まだ無名の鍛冶師といっても結構な数の品が揃っているなあ……」

天井から床下まで、視界一面に広がる大小様々な武具の一群を見て
眩く。

質素ながら堅固そうな全身鎧、装飾に凝った兜や盾など種類を問わず、店内全体に陳列されている。エイナさんは別方面から俺に合った装備を探してくれており、今は俺一人でいた。

——とりあえずライトアーマーを探してみるか

俺の貯金から五万ヴァリス程持って来ているので、甲冑も買おうと思えば購入出来るが、もとより回避が主体の俺は重量ある鎧などは身に付けない。

片手で持てる円盾バックラーも店内に飾られているが、それも久しぶりに試してみたい戦闘スタイルがあるため、持っているのと邪魔になってしま
う。

——そうだ、この際に別の剣を買っても良いかもな……

左右に立ち並ぶ棚に載せられている品々を眺めながら歩いて、気付けば店の端にまで移動していた。そこあったのは鎧の各パーツ部分が詰め込まれたボックス。それらが床に並んで置かれている。

値札を確認してみると今まで見た売り物の中では少し値段が低く、客の目には気づきにくい場所に置かれていることから察するにこれらは使うには多少の問題があり、あまり評価が高いとは言えない品々なのであろう。

店側からしてもこれらが売れるとは思っておらず、とりあえず店の隅っこで適当に置いてある感があるが……その中から俺はある品に目を引く張られた。

それは他のボックスに入った防具よりも一際目を引く、白い光沢を放つ軽装金属鎧ライトアーマー。人体の最低限守るべき部分を保護するだけの構造。胸当て部分を持ち上げてみれば予想よりも軽い。しかし、それには堅固な硬さが秘められているのを俺は感じ取った。

防具の品定めをするほどの鑑定眼を俺は持たないが、この鎧は十分

な実用性を持っているのは伝わった。サイズも自分にあつらえたかのようにピッタリ。俺が探し求めていた種類とも一致している。

率直に言って、この時点で既に俺はこの作品を気に入っていた。

「値段も一万ヴァリスもあれば買えて、性能も良さそうなのに……何でこんな所に置かれているんだ」

これといった不備も見当たらず、もっと人目に付きやすい場所にあっても良さそう代物なのに、何故か薄暗い場所に置かれている。それが気になって鎧をひっくり返し、隅々まで見てみるとその理由は直ぐにわかった。

鎧の裏側には「ヴェルフ・クロツゾ」のサイン。これが顔も知らない製作者の名前なのであろう。これは別に良い、全く問題無い。

だが……次の文字が目飛び込んだ瞬間、俺は目を奪われた。

【兎^{ビヨッキチ}鎧】——もしかしくなくとも、この名前がこのライトアーマーの鎧なのであろう。

製作者の意図か、偶然か、まあ間違いないなく後者であろうが……武器というよりは愛玩動物に名付けるような独特のネーミングのこれが恐らく……いや確実にこの製品が買い手を遠ざけ、店のひっそりとした片隅に置かれている一因になっているのであろうと、俺は遠巻きに悟った。

もしエリユシデータがこのような名前を付けられそうになったら、あの意思ある黒剣は全力で抗議しそうだなーと短い付き合いながらももありありと想像出来る程だ。

「流石に武器にこのネーミングは……どうなんだ？」

何処からか、お前が言うな!! と言われたような気がするが……うん、気のせいだろう。

……

「で、結局ベル君はそれを選んじやったのねー」

「まあネーミングはともかく、性能は良いのは確かですからね。値段も質を考えれば妥当だと思いますよ」

鎧の入ったボックスを抱えるようにして持ちながら俺は答える。結局、俺はあの兎鎧ビヨンキチなる独特なネーミングのライトアーマーを購入をしたのであった。

「まあベル君がそれに決めたって言うなら……私からは何も言えないわ。最終的に実際に使う人が決めるのが大事だしね。」

「じゃあどうする？ 他に何か必要なものがあるなら、買っていく？ 私の事は気にしなくて大丈夫よ」

「ありがとうございます。実は丁度今使っている剣とは別に、もう一つ剣を買おうと思っていたところなんです」

今使っている剣―エリユシデータに不満がある訳ではない。キラアントのような硬い相手でも何ら問題なく斬れる鋭さ。それ以外でも、刀身でもろに攻撃を受けてもひび割れ一つや、何度斬ろうと刃こぼれ一つもしない丈夫さも併せ持っている強力な剣だ。

だが同時に、俺はその性能の高さに危機感を抱いていた。

エリユシデータは常に使い手である俺に合わせて、その秘められたポテンシャル力を自在に変化させている。

俺のステイタスは日々の戦闘で成長し、筋力を始めとした数値が上昇している。だがエリユシデータの握った際に感じる重量等は初めて握った時と全く変わらぬ。外見は変わらずとも、エリユシデータは俺が最適に、力を発揮できる重さ、重心にその在り方を『適応』させているからだ。

使い手に取って常に最高の状態で在り続ける黒剣―それがエリユシデータだ。

早い話、この剣の特性を考えれば武器の更新などする必要は全く無い。多少自身より強力なモンスターが相手だろうと、これがあれば容易く覆せることも可能だ。

だが、下手すれば俺は戦闘においてエリユシデータを扱う状況に慣れきってしまい、もし別の剣を握った時にその剣が元々持っている性質に違和感を抱いてしまい、それが原因で通常通りに剣を振るうことが出来なくなる可能性がある。

使い手が剣を振っている筈が、その剣に振り回されている―特定の

剣でしか自身の実力を発揮出来ず、自分自身の剣技を疎かにしてしまい、剣の性能に頼りっぱなしの剣士。

俺がエリユシデータのみで傾倒してしまえば、間違いなく俺の剣の腕は衰えてしまう。その結果、エリユシデータは俺を見限ってしまうことだって充分あり得る話だ。

それ故に俺は……武器の性能に頼らない、俺自身の実力を忘れ無いように、エリユシデータとは別にもう一つ戦闘で扱う剣を購入しようと思った。

まあ……それ以外にこの世界でもアレが再現可能かという理由も含まれているが。

そんな訳で、現在俺は今度は防具ではなく、武器屋でエリユシデータの同じサイズの片手剣が無いかと探していた。

エイナさんは理由は不明だが、少しの間離れているねと言い残し、そのまま防具屋の方に残ったままだ。

武器屋も当然と言うべきか、先程までいた防具屋と同じように無名の鍛冶師達がなけなしのヴァリスを使い、汗と涙を流し、気合いと熱意を込めて作り上げた様々な種類の作品群が陳列されていた。

ドワーフが扱うような両刃の大斧に、俺の背丈と同程度の大剣、真っ直ぐに伸びた短刀、幾本と並べられた槍などが所狭しに並ばれている中、それらを尻目に通路を歩く。

お目当ての片手剣コーナーには丁寧に飾られている剣も幾つかあったが、なかには五つの大樽に、それぞれ何十本かの剣がまとめて放り込まれたものがあるなど、やはり武器のなかでも扱いに差が存在していた。

——最低でも今まで使っていたものよりも耐久と斬れ味がある剣があれば良いんだがなあ……

大樽の一つに近づいて雑多に入れられた剣達の中に手を突っ込み、いじくり回す。中で鞘と鞘がぶつかりあい、ガサゴソと音が鳴る。堂々と飾られている剣ではなく、こちらから探しているのは別にお金をケチっている訳ではない。何となくだが……こちらの方に良い品

がある気がしたからだ。

明確な根拠など無いが、俺の長年の経験上、こういったものの中から掘り出し物が見付かる場合もそれなりにある。実際俺が購入したライトアーマーがまさにそれだ。

そして実際に剣を幾つか手に取り、重さを確かめ、少し鞘から抜いて刀身を覗くなど繰り返すこと数分後、遂に俺のお眼鏡にかなう剣が見付かった。

掴み取った剣を再び大樽に戻し、新たに別の剣を選ぼうと目を走らせた時、視界に紅い光が飛び込んだ。その紅い光の正体はエリユシデータルナティックストーンの月、石と同じように、剣の十字の柄に埋め込まれた小さな紅玉であった。

俺の目を捕らえたその片手剣を大樽の中より引き上げ、全体を眺める。

「これは……良いな……」

思わず感嘆の言葉が俺の口から出た。

最初に黒鞘から全体を引き抜くとエリユシデータと同じくらいの長さ、白い金属光沢を纏う美しい刀身が顕になる。刀身はエリユシデータと比べれば幅は少し広くて、厚さはこちらの方が断然厚く、刃の鋭さも申し分無い。

流星に重さはエリユシデータ程感じられないものの、確かに重量は伝わり一・二回、左手で軽く素振りをしてみるとそれだけでしっかりと手に馴染む感覚がした。

値段を確認するとライトアーマーより五千ヴアリス程高いだけで、鎧を購入した俺の残金でも十分に足りている。

「まさか本当に、鎧に続いて剣も掘り出し物が見付かるとはな……」
思わぬ出会いに日頃の行いの賜物かな？ つと、そんな考えが出てしまうぐらいに、俺は喜びに震えてしまっていた。

——コイツに決めた！

内心でそう叫び、俺の中で即座に購入することが確定した。エリユ

シデータに次ぐ、俺の第二の相棒が決まった瞬間であった。

——そういや、この剣の製作者は誰だ？

少しして落ち着きを取り戻した俺は改めて剣の銘や製作者の名前を確認しようと刀身をじっくりと眺めていると………

「ははあああああ———!!?」

その製作者の——覚えがありすぎる名前とあり得なさ過ぎる剣の銘を見つけてしまい、俺は目を見開き、店内全体に響き渡る程の驚愕の叫びを上げてしまった。

製作者【ヴェルフ・クロツゾ】

銘【兎剣】ウサたん

どうやら、俺とこの鍛冶師との繋がりにはよほど強固なものだったらしい。

第20話 サポーター

「お待たせ、ベル君」

最初に入ってきたフロアの入り口、その近くの柱で寄りかかっていると待ち人の声が通路に響き、俺はそちらを振り向いた。

待ち人―エイナさんは俺の腕に抱えられていた鎧一式が入った箱と武器屋で購入した直剣、その片方の小さな紅玉ルベライトが柄に填められた黒鞘の直剣をまじまじと見つめると口を開いた。

「ふーん…それが君が選んだ新しい剣？ 結構良さそうね」

「ええ、俺が探した中ではとても良い剣ですよ……名前以外は」

掘り出し物を見つけたというのに、何故か苦笑を浮かべている俺にエイナさんは？を浮かべて首を傾げる。俺は何でもありませんと流した。

武器屋で発見した直剣。売り出し物の中でも一際質の良い優秀な剣なのに、何故か今まで買い手がおらず、適当に他の剣達と混ぜて放り込まれていたのを俺が購入した物だ。今まで買い手が付かなかった理由…それはこの剣の銘ネーミング―「兎剣」ウサたんなる実に特徴的な製作者ユニークのネーミングセンスが今まで客を遠ざけていた元凶なのは間違いないだろう。

とはいえそれに目を瞑れば剣自体の完成度は高く、今後の上層攻略で使用するのに十分値する代物なのは事実であった。

「良い物が買えたそうで良かったわね。今後も武器や防具の買い換えが必要になった時に此処を利用してみると良いわよ。」

「はい。今日はありがとうございます、エイナさん」

「ふふっ、別にお礼は良いわよ。あっそうそう、はいっコレ」

買い物に付き合ってくれたエイナさんに俺がお礼を言うと、彼女からおもむろに何かを手渡された。それは細長い、腕に装着するタイプのプロテクターであった。

「これは……」

「私からのプレゼント、ちゃんと使ってあげてね？」

「えっ、でもコレは…結構高価な物では？」

唐突に手渡された贈り物プロテクターに俺が戸惑うように尋ねるのを見て、エイナさんは目を細めてフツと微笑むと語る。

「ギルドで働いているとね、冒険者の死亡報告の知らせを聞く機会が沢山あるのよね…。強い冒険者と思っけていても神様の気紛れみたいにあつさり死んじやった…そういう話を沢山知ってるわ」

——だからね…

ハーフエルフのアドバイザーは一拍おいて、胸の内に抱えている切実な想いを目の前の少年に打ち明けた。

「身勝手かもしれないけど、ベル君やりセリス、せめて私の知ってる人達が無事にダンジョンから生還して欲しいって思ってるの。…：：だめかな？」

心優しきハーフエルフのお願い。

少年は手に持っている彼女の瞳と同じ色の、緑玉色のプロテクターエメラルドを見下ろす。ひんやりとした金属特有の冷たさが伝わるソレから、陽だまりのような暖かみを感じた気がした。

そして、少年の返事は…：

くくく

「これでベル君の買い物も終わったけど、どうする？ 今お昼近いけど、どこか近くの店で食べていく？」

買い物を終えて、バベルから外に出て大通りに入るとエイナが少年に尋ねた。

「そうですね…、ここから近い場所だと『豊饒の女主人』がありますから其処にしましょうか。俺が奢りますよ、エイナさん」

「えっ、良いの!? あそこのお店って確かに料理が美味しいけどちよつと高いでしょ。武器を買ったのに大丈夫なの、ベル君？」

「残金はまだ十分有ります。それにエイナさんには今まで世話になっていますし、プロテクターのお礼もありますから」

夜は酒場、昼間はレストランとして営業している『豊饒の主人』、大衆向けにしては値段が少々高めな其処で奢るといふ少年の提案にエ

イナは驚く。

「もう、気にしなくて良いのに……でも、ありがとうベル君。それじゃ、御言葉に甘えさせて貰うね」

そうして行く先が決まったことで『豊饒の女主人』を目指して歩こうとした瞬間、

「お〜い！ エイナ〜、ベル〜!!」

突然、二人の名前を叫ぶ明るく快活な呼び声が大通りより響き渡り、二人の耳に入った。

「ん？ あの声は……」

聞き慣れた、元気澁刺とした声に少年が周囲を見渡すと、大通りを雑多に行き交う群衆の足元から一人の子ども——小人の少女が藍色の長髪をたなびかせ、人と人の間を縫うようにして通り抜ける。そして二人の前に現れ、愛らしい小顔を向けると質問した。

「やあ二人とも、今帰り？」

「ええ、そうよりセリス。丁度今からベル君と食べに行こうとしていたの、リセリスは？」

「僕は今日のお昼ご飯どうしようかな〜って、街を歩いていたら偶然二人を見掛けたんだ」

「じゃありセリスも一緒にどうだ？ 三人で一緒に食べた方が楽しいだろう。せつかくだ、リセリス分も俺が奢るよ」

少年と一緒に食事に誘うと、少女は二人の間に自分が加わって良いのかと尋ねるが少年は問題ないと頷く。エイナもまた賛成の意を出すと少女は納得し、その表情を綻ばせると三人の頭上に広がる青空のような、晴れやかな笑みを形づくると二人に告げた。

「ありがとう、二人共。ボクも喜んで加わらせてもらおうよ。それじゃエイナ、ベル、行こっか！」

リセリスはエイナの手を取って掴むと先へと導く。最初は驚いたエイナであったが、うんつと頷くと少女の手を握り返し、少女の導きに従って歩き出した。

少年にはその光景はどこか、仲の良い姉妹を彷彿させて懐かしさを感じさせるものであった。二人を見て自然と無意識に優しげな顔を

浮かべると、二人に向かつて歩き出す。

少年の抱えられた箱の中には白色の鎧に混じって、細長いプロテクターが日の光を浴びて緑玉色エメラルドに煌めいていた。

—翌日—

「よし、準備完了だな」

自分の身体を見直し、装備の最終確認をした。黒コートを羽織り、その上に昨日購入した兎鎧ビヨン吉を装着、背には黒鞆に収まった二振りの剣、エリユシデータと兎剣ウサたんが交差する。

もし、今の俺の格好を知る者が見れば“より、らしくなった”と思うかもしれない。

「さて、しばらくはダンジョンで稼いでいかないとな…」

昨日の武具購入に加え、二人の昼飯代を俺が奮発したために、残ったお金はかろうじて“じゃが丸君”一個を買える程度にしか残らず、今の俺の懐はかなり物寂しい状態だ。貯金もさほど多いわけではないため武具を更新した以上、ダンジョンで以前よりは稼ぎ上げたいところだ。

そう、決意を新たに俺は教会の扉を開く。開けた先には快晴の青空が広がり、その下で涼風が吹き抜け白髪を揺らめかす、爽やかな風で肌がそつと撫でられる感覚が心地良く伝わる。

—新しい、ナニかの予感を感じつつ、俺はダンジョンへと足を運ぶのであった。

くくく

「お兄さん、お兄さん。そこの白い髪のお兄さん」

それはバベル前に広がる中央広場セントラルパークを歩いてきた時であった。大勢の冒険者達が広場を闊歩する中、俺もそれに混じってバベルへ移動している。唐突に、少女の声自身が身体的特徴である白髪を出して俺を呼び止めた。

振り向いた先でまず最初に小山程ある大きなバッグパックに目がいくが担い手に視線を下ろせば、そこには全身をゆとりある古びたローブで身をつつみ、フードを深く被った小さな少女が佇んでいた。

その低い背丈はリセリスと同じ程度であることから察するに、この少女は小人バルウムなのだろうか？

「俺に何か用か？」

「初めまして、お兄さん。突然ですが、サポーターなんか探していたりしていませんか？」

少年の問いに少女は愛想の良い、ハキハキとした声で答える。

「んん？」

突然の状況でいぶかしむ少年に少女は更に話を続けた。

「簡単な事ですよ、お兄さん。貧乏なサポーターが冒険者さんのおこぼれにあずかりたいと自分を売り込みにきた、それだけの事です」

最後になつこりと人当たりの良い笑顔を口元につくり、付け加える少女に少年は今の流れを理解した。

「あーだいたいわかった。サポーターか……まあ確かに欲しいなあーとは思ってはいるんだが……」

ダンジョンでより長く、より深く潜り、より多くの魔石を地上に運びたいならばサポーターの存在はまさにうってつけといっても良い。

何故なら荷物持ちを担当をする彼らがいるお陰で、戦闘を担当する冒険者は必要最低限の身軽な装備でモンスターに立ち向かえる。得た魔石やドロップは他の物資と共にサポーターに預ければ良い。それで冒険者はより集中して探索にうち込められる。

小型のバッグパックを持つ俺の身なりから単独探索ソロ探索であろうと見当をつけた少女の売り込みは、ダンジョンで稼ぎを増やしたいと思っていた俺からしたら実にタイミングが良い誘いであった。

「ただ、

「ちよつと訳あつてな、気軽に他のファミリアとはパーティを組めないだよ、俺。だから悪い、他の冒険者を誘つてくれないか？」

初対面である彼女の事を直ぐには信用出来ない、僅かであるが警戒しているのもあるが、俺には迂闊に身も知れぬ相手とパーティを組められないスキル（理由）が存在していた。

曖昧に理由をぼかして売り込みを断る俺に、少女は焦つたように早口で捲し立てる。

「ファミリアの関係の話でしたら、それはきつと大丈夫です！ リリ…あつ、申し遅れましたがリリの名前はリリルカ・アーデと言います。

…話を戻しますがリリの主神のソーマ様は他の神様達のことを未
来永劫無関心なので、そちらの神様がソーマ様を目の敵にしている
限り、ファミリア間での抗争が勃発することはまずないと思います」

どうやら俺がサポーターを雇う事に積極的でないのをファミリア
関係が理由と勘違いしたらしい。

カーディナルと他の神々との関わりはあまり知らないが、カーディ
ナルは自分から敵をつくるような性格でないし、まず他の神に対して
一方的に敵意を抱き争いを引き起こすことは決して無いと断言でき
る。

ただ気になるのは……

「ソーマ？ それが君の所属するファミリアの主神なのか？」

「はい、そうです。リリの所属しているファミリア、「ソーマ・ファミ
リア」の主神様です。割と有名な派閥だとリリは思っています」

少女―リリルカ・アーデによると「ソーマ・ファミリア」はオラリ
オに数多く存在するファミリアの中では中堅に値し、とりわけその規
模―ファミリアの構成員…神ソーマの恩恵を授かった眷属の数はオ
ラリオでもトップクラスらしい。

また、規模の割に神ソーマは他の事柄に対しては全くと言ってもい
いほど無頓着であり、専らホームで常に自身の趣味に勤しんでいるら
しく、ファミリアの運営に関しては眷属に全て丸投げしているとの事
だそうだ。

「そうか、ありがとな教えてくれて。俺はまだオラリオに来て日の浅

い新人だからな、オラリオ^此の常識はあまり知らないんだ」

「いえいえ、大したことではありませんから、リリにお礼は結構です。……ただ凶々しく感じるかもしれないかもしれませんが、リリに感謝して下さるのであればどうか、リリを雇ってくれないでしょうか？ 実はリリ、今とてもお金が心許ないのです。」

何でも構成員の数こそオラリオでもトップクラスであるものの、団員達の仲間意識はほぼ皆無に等しく、同じファミリアに所属しているだけの他人、といった認識が強いらしい。

その中でも目の前の少女は……

「リリは見ての通り体がこんなに小さくて、腕つぶしもからつきしなんです。」

だからサポーターをやっているんですが、ファミリアの方々からは邪険に扱われてリリが頼み込んでも仲間に入れさせて貰えません。なので他のファミリアの冒険者様達ならばとお願いしているのですが……」

結果、サポーターとして雇ってはくれるもののその扱いは以前とはまるで変わらず、分け前である報酬もたまにしか貰えずそれもごく僅かであったという。

「役立たずの身のリリにはホームにいると肩身が狭いので、今も安宿を巡って寝泊まりを繰り返しています。」

なのでどうかお願いします、冒険者様！ 今のリリは、リリはお金^金がとても必要なのです。このままでは今いる宿屋にすら泊まれずに、野垂れ死んでしまいます!!」

「おつ、おう……まあとりあえず、君の話は大体わかった」

若干押され気味になるも、ひとまず彼女の裏事情について聞き終える。前のめりになるほど飛び出た言葉には彼女の必死な思いが込められており、少なくとも嘘を言っている様には見えなかった。

本音を言えば、恵まれた環境にいる自分には想像つかない程の苦労を重ねてきたのであろう、目の前の少女の助けになりたいと少年は思っている。

それは前世から変わらない、少年の――桐ヶ谷^{キケリ}和人^ト自身の、根っから

のお人好しから来るものであった。

さて、どうするか……

戦闘功績は俺と組んだパーティメンバーに対して、戦闘での行動に応じて獲得する経験値を増加させる効果を持つ。

仮に目の前の少女とパーティを組んだ場合を考えると彼女はサポーターを受け持っているので直接的には戦闘に参与しない筈だ。ましてや本人も自嘲したとおり、自らの戦闘力が低いからこそ、彼女はサポーターとしての道を選択したのだ。

モンスターとの戦闘で関与しても精々弓やボウガンといった、ある程度の技量があれば誰でも扱える遠距離武器で援護射撃をするのがやっとであろう。ならば戦闘功績の影響をさほど受けないと予想できる。

カーディナルからは俺が他所のファミリアの冒険者とパーティを組むつもりならば、くれぐれも戦闘功績の存在を知られるな、っと厳重注意されているだけでパーティを組むこと自体は禁止されていない。

「あの、分け前は収入の三割もいただければリリはそれで構いません。短い間だけでも、どうかリリを雇ってくれないでしょうか……」

個人的都合で頭を悩ませる俺に、少女は俺がまだ自分のことをまだ信用できていないから自身を雇う事を躊躇っていると判断したのか、悲痛な思いを声音に滲ませ、恐る恐るに言った。

只でさえ小さい体をより縮こませる彼女を見て俺は決断した。

——これ以上悩んでいってしまうのがないか

そして少年は少女に向けて自らの答えを出した。

「わかったよ、リルルカさん。俺もサポーターが欲しいと思っていたところだ。短い間だが、君を雇ってみるよ」

少年がそう答えるとリルルカ・アーデは誰の目でもわかる程の喜びを隠さず、歓喜を顔にした。

「ありがとうございます!! リリはお兄さんの期待に応えられるように充分に働きます。短い間ですが、よろしくお願いいたします」

深々と頭を下げ、感謝の言葉を言う彼女に俺は苦笑いを浮かべる。

サポーター^{彼女}を雇う事を決めた訳ではあるが、しかし、俺は最後に彼女を視てからずつと気になっていた事を口に出した。

「ところで、リリルカさん。最後に一つ確認させても良いかな？」

「はい、何でしょうか？」

「俺達、会うのはこれが初めてか？」

それは一昨日の路地裏の出来事、俺は荒ぶる冒険者に追われていた小人^{バルウム}の少女と遭遇した。シャーロットが介入してくれたお陰で何事もなく済んだものの、いつの間にか件の小人は姿を眩ましていた。

これと言った確証はないが、俺の中で目の前の少女と路地裏の少女の外見的特徴が似ているように思えた。

静かに紡がれた少年の問いかけに、リリルカ・アーデは……

「はい、お兄さんとリリが会うのはこれが初対面です」

「なら、そのフードを取って俺に顔を見せてくれないかな？」

少女の目深に被ったフード、顔の上半分を覆うそれに隠された素顔を見せて欲しいという少年の要求に少女は動揺し、体を震わすと「わかりました……」とぼつりと呟き、要求に従ってフードを手に取り、後ろへと下げるのであった。

そして、

「こ、これで良いですか？」

「君は……獣、人なのか？」

さしもの少年も目の前の光景に目を見開き、呆然とする。

少年の視界の先、少女の頭上には小さな獣の耳がそこにあつた。ぴこぴこ動くそれは付け耳といった偽物などではなく、紛れもない生体器官の一部である「耳」、そのものであった。

「リリは犬^{シアンスローブ}、人の獣人なんです」

少年に自身の耳を凝視されて恥ずかしそうにモゾモゾと動くと、とどめといわんばかりにローブ下で隠されていた尻尾を少年に見せつける。

左右に軽く揺れる尻尾を見て、少年は自身の予想が外れた事を認めざるを得なかった。

「どうでしたか、これでリリが人違いであることを証明出来たでしょうか？」

「ああ、そうだな。疑って悪かったリリルカさん。申し訳ない」

少年の謝罪を受けて小人改め犬パルウムシアンスロープの少女は満足そうに頷くのであった。

「自己紹介が遅れたが、俺の名前はベル・クラネル、新人の冒険者だ」
「そうですか、では改めて自己紹介します。リリの名前はリリルカ・アーデというしががない貧乏サポーターです。これから是非、よろしく
お願いいたします、ベル様！」

互いに自己紹介を交わす中、それまで無邪気な色合いを持っていたリリルカの瞳は妖しげに揺らめき、口元には小さく、自身でも気付かぬ程のうっすらとした弧を描くのであった。

第21話 沈黙

これまでリリルカ・アーデは蔑まされ、地べたに這いつくばりながらもサポーター業を通じて様々な冒険者の闘いを間近で見続けてきた。

その全てはLv1の下級冒険者であるが大半がLv1の平均的な強さであり、この時点でいわばモンスターとの戦闘において自分自身の得意な得物―ナイフや大剣に槍、斧、刀、弓などを用いた戦闘スタイルが各自で確立している。

複数の異なる種類の武器を自在に扱い、時には体術をも駆使する武神の眷属達や、逆にたった一本の剣のみでモンスターに立ち向かう少女の剣士などのように、冒険者の戦い方は千差万別だ。

リリルカ・アーデには自身と同じ小人という種族を抱えながらも神々から都市最強の剣士、最高の指揮官の二つ名を与えられた二人のような才能がなかったことにより、やむを得ず多くの冒険者から落ちこぼれ、寄生虫と揶揄される専門の荷物運びの道を選択した。

とはいえ自身の実力が低いと自認しているからこそ、悪辣な冒険者の側でずっと必死にサポーターを続けて培ってきた観察眼は確かなものであり、本人は複雑な思いを抱くだろうが蓄積してきた知識と経験による迅速な行動、全体を俯瞰し、冷静沈着に的確な状況判断を行う能力は独学とは思えない程に優秀なものであった。

『ギンシャアアアアアア！』

金切声を轟かせ、大顎を開き、前方に鋭く伸びた牙を向けて襲い掛かる大蟻―キラアアント。猛烈な勢いで突進してくるキラアアントを前にして標的である冒険者は慣れた動作で己の武器を抜く―シヤラントと鞘と刀身が擦れる冷たい音が通路に反響し、冒険者は腰を少し落として武器を構える。

その構えは様々な冒険者を見てきたリリルカには初めて見るものであった。冒険者―ベル・クラネルが手に握るのはありふれた種類の武器である片手直剣―それが二振り、同サイズの黒と白の剣が対となって左右の手に納まっていた。

二刀流―両手に二つの武器を携えて同時に操るスタイル。刀身の短いナイフや双剣または直剣と短剣を組み合わせるなど素早い連撃をメインとして、オラリオでもそれなりに二刀流を嗜む者達もいるが、目の前で戦っている白髪の冒険者の長剣そ二刀流れはオラリオではあまり見かけないものだ。

当然ながら二つの武器を同時に扱うには相応の技量が必要となる。長剣二つともなればその分取り回しも難しくなる為、大半の冒険者は剣と盾を持って堅実に戦うのが一般的だ。

突進の勢いを乗せ、冒険者の頭部を食らい付かんと飛び掛かってくるキラアアント。対して少年は左手の白剣でもって正面から受け止めた。ガギンツ！ 硬い金属が衝突したような金属質の音がリリルカの鼓膜を打つ。両者の間に刹那の硬直が発生した。

―押し潰される！

少女がそう思ったのも束の間、少年は押し返そうとはせずに体を剣ごと捻る。さながら闘牛士の如く大蟻の突撃をいなし、自分の真横へと受け流した。

自らの勢いを誘導され、少年の横を通りすぎるようにして地面へと落とされたキラアアント。そのがら空きの背後に向けて、少年は右手の黒剣で一閃を下した。

『ギギイイイー!!』

断末魔を上げ、絶命するキラアアント。しかし二人はまだ警戒を解かなかった。

「キラアアント二体、来ます！」

少年に注意を促すリリルカ。自分達から離れた場所で更に二体、巨大蟻達がダンジョンの壁面から誕生したのを自身の眼が捉えた。

大蟻達は周囲を見回して二人に気がつくのと、モンスターの本能に従って突撃する。大蟻達が迫る中、今度は少年も駆け出す。両手の剣を後方に勢いよく伸ばし、黒コートの裾をはためかせながら、大蟻達に迷いなく突き進む。

そして、互いの距離が瞬く間に縮まってゆき――
「ツ！」

少年が地を力強く蹴り、勢い良く前方に飛び出すと同時に――回転した。

リルカの目には少年の体が空中に浮いたかと思えば、まるで――見えざる手が少年の体を風車の如く廻すかのように、突発的に鋭く旋つた光景であった。

少年の渦巻く体に合わせて二振りの剣もまた弧を描くと、白刃の剣が勢い良く突き出す。その切っ先は最初に向かってきた一体の大蟻の口蓋を正面からぶち込むと体内を抉り裂き、魔石ごと貫いた。

核を失い、断末魔を上げる間もなく瞬時に灰へと変わったキラアントを気に留めず、少年は続けて後ろにいた二体目に剣戟を繰り出す。最初に繰り出された白剣からやや遅れて黒剣が迫る。薄暗い迷宮内でも一際、その存在感を顕にする純黒の刃はカギ爪で攻撃する直前だった大蟻の細い手足ごと、その頭部を斬り落とした。

「流石です、ベル様！ 思わずリリも見惚れるぐらいの手際の良さでした」

称賛の笑みを浮かべつつ、さっさと魔石を回収していく少女。

当の本人はと言うと、二つの剣をヒュヒュンつと左右に振ってから鞘に納めると肩を竦めて言った。

「なありり。敬称、どうしても必要なのか？ どうにも慣れないんだが……」

「申し訳ございませんが我慢して下さい。何度も繰り返しますが、ベル様とリリの立場ははっきりと区別しなければなりません。ベル様がお優しい方なのは知っていますが、敬称を付けなければリリが今後他の冒険者様方と契約を結ぶ際に支障をきたします。どうかリリの為だと思って我慢して下さい」

これだけは譲れられないと、きっぱりと言う少女の申し出に少年はやれやれと嘆息する。既にこのやり取りは道中、何度か繰り返されてきたのだった。

「ところでベル様はその戦い方を何処で学んだのですか？ リリもこれまで様々な冒険者の方々の戦闘を見てきましたが、ベル様のは見たことがあります」

オラリオで剣を扱う冒険者はオラリオ筆頭剣士の絶剣・剣姫を始め、数多く存在する。リリルカがこれまでパーティを組んできた冒険者も、やはり扱い易い直剣を主武器にする者が多かった。だが、そんな彼女達でも二つの剣を同時に扱うという話は、リリルカが知る限り聞いたことが無い。

目の前の少年の場合、同サイズの長剣を二つ同時に持ち、戦闘中はそれらをリリルカには捉えきれない速さで自由自在に振り回している。それはあたかも、左右の剣が別々の意思を持って動いているのではと思える程に並外れた剣技であった。

しかも少年が冒険者になってまだ半月程の新人だと言うものだから、流石のリリルカもそれを聞いたときは素で驚いたものだ。どこか不思議な雰囲気を漂わせるも、まだ十代前半であろうこの少年が如何にしてこれ程の剣技を得てきたのか？ 裏の無い、素朴な疑問を抱くのは当然と言えた。

少女の質問に少年は後頭部に手を回して頭を搔くと、視線をどこか遠くに向けて曖昧な答えを返した。

「うーん、戦っている内に自然と身に付いてたな。俺はオラリオに来る以前に、モンスター相手に必死で剣を振ってきたんだ。こう見えても多少は戦い慣れしてるのさ」

「多少どころか、リリがこれまで組んできた冒険者の方々でもぶつちぎりでモンスターを倒しまくっていますよ。しかも、お一人でこの数を相手に……」

少女はジトツとした目を少年に向け、呆れて眩く。

ちらりと後ろに目を向ければ、そこには数体のキラアアント以外にニードルラビット、パープルモスといった種類のモンスターの死体。これらは全部、少年がその二剣でもって瞬く間に切り伏せたものだ。後ろのバックパックも道中倒してきたモンスターの魔石とドロップアイテムで既に結構な量が詰め込まれていた。

「正直に申しますと、リリはベル様をまだ未熟な冒険者だと見てびっくりしていました。ですが既にベル様の實力はそこら辺のLv1の冒険者と比較しても、何ら遜色ありません。これほどお強いとは思っていま

せんでした。申し訳ございません」

笑みを消し、少女は真面目な顔で謝罪する。普段ならばおべっか以外に絶対に言わないであろう本心からの言葉がこの時、自然と少女の口から零れた。

「いや、俺一人だとここまで立ち向かえなかつたさ。リリが的確に援護してくれたから、俺はモンスターを倒すことに集中できたんだ。こっちが感謝してるくらいさ」

「……」

確かに戦闘中、リリルカは自前のハンドボウガンでモンスターの注意を取るなど気を逸らして、少年が複数のモンスターを相手にしても戦い易いように援護射撃をしていた。

とはいえ彼女に言わせれば些細なことに過ぎず、先のキラアアントのように大抵の戦闘は少年が一人で対処しており、自分の援護が無かろうと少年は一人で切り抜けられていただろうと推測していた。

でも……

「そうですね。リリがお役に立てているようで何よりです。ベル様」

「ああ。今回は仮契約だが、リリが良ければこれからも頼むよ。今日はありがとな、リリ」

それが言つて当たり前であるかのように自分の知らない、言われたことが無い感謝^{言葉}を告げる少年。今日に至るまでリリルカは他の冒険者から罵倒と、薄っぺらの労いの言葉しか投げられなかった。彼らがサポーター^{自分}を使い捨てるの道具としか認識していないことは明白な事実であった。

だが、この白髪の少年は自分を荷物^サ運び兼生贄^{ボイ}ではなく、一人の人間^{リリルカ・アード}として見なし、戦闘中も常にこちらを意識してくれていた。

「変な人……」

小さく、そんな呟きが零れ落ちるも、少年の言葉が寂寥とした自分の小さな胸の内を灯すかのように、優しく染み込んでいくのを少女は感じた。

.....

「ちなみにベル様。ベル様の持っている剣、とても立派な物なのはこれまでの戦闘で十分過ぎる程知っていますが、何処で入手したのですか？ リリの目から見てもとても高価なものだとお見受けしますが……特にその黒剣は」

バックパックが一杯となったということで、一度バベルで換金しようとして地上に帰還している最中、不意に少女が少年に尋ねた。

「ん？ ああ、こいつらか。白い方のはバベルの武器屋で発掘して、黒い方ーエリユシデータは訳ありということから譲ってもらったんだ」

「訳あり？」

少女が問うと、少年は頷く。そして足を止めるとエリユシデータを鞘ごと剣帯から外し、少女に差し出して「持ってみなよ」と軽く言う。

突然のことに少女は驚くも、恐る恐る手を伸ばして少年の言った通りに持ち上げようとした。

ーしかしー

「ちよつ、何なんですかこの剣!? リリには全く持ち上げられませんよ!!」

「ああ。なんでも製作者曰く、特定の者にしか扱えないんだとか。リリのように持つことも許されないのもいれば、何故か手から滑り落ちてしまつて足を怪我した者もいたという話さ」

「何さらつとんでもない事実を言うんですかアナタは!? そういうのは渡す前に先に話してください!!」

少女は思わず敬称をかなぐり捨て、大声で怒鳴りつける。鞘に納まつているとは言え、下手したら剣の気分？ 次第で怪我を負う可能性があったことを少年は黙っていたのだ。

「ハハ、悪い悪い。リリなら大丈夫かなーって思ってたな」

悪戯が成功した子どものように、悪びれずに笑って答える少年に少女はからかわれていると知る。文句の一つでも吐き出そうとした。

だが、

「これで分かっただろう？ この剣がどんな存在なのか」

驚く程に静かに紡がれた言葉は、それまで暖かな火が灯されていたリルルカの胸中を急速に分厚い氷塊で覆った。

予想出来なかった言葉に、へっ？ つと少女は半開きの口から間抜けな声を漏らした。

硬直し、呆然とした顔を浮かべる少女に、少年は飄々と何て事のないうように語った。

「いやー、リリがずっとエリユシデータを熱心に見ていたものだから、そんなに気になるのかなと思っただけさ。まあそれはさておき、これで満足したかい……リリ？」

それまでと同じ、優しい心に心が落ち着くような口調で語る、少年の姿をした「ナニカ」。この時点で最早リルルカの中の、それまで構築されていた少年像は跡形もなく崩れさつていく。

「リリ？」と再度紡がれた呼びかけに、彼女はやっと正気を取り戻した。急ごしらえの固まった仮面^{笑顔}を己の顔に貼り付け、やや掠れた声音で返事をする。

「ばれちゃいましたか。すみません、ベル様。実はリリはこう見えて『武具マニア』なのです。ベル様の持つ黒剣が大変珍しい物でしたので、どうしてもリリの中の好奇心が疼いてしまったのです。余計な気を使わせてしまい、申し訳ございません」

につこりと清々しい笑みを浮かべて答える少女に、少年は僅かな間沈黙するとフツと笑う。

「そうか、まあ確かにこういうのは早々お目にかかれないからな。気になるのはしょうがないさ」

そう言うと少年はエリユシデータを背に装着し、「じゃ行こう」と再び足を動かす。リルルカもまたリュックを背負い直して、少年の跡を追う。

地上へと帰還する間二人は互いに一言も言葉を発さず、ただ沈黙を貫くままの道中であつた。

第22話 心の温度

「よそのファミリアのサポーター…のお……」

カップを片手に円らかな瞳を細め、眉間に小さく皺を寄せて難しそうな顔で思案するカーディナル。

その考えに耽る姿は普段の賢者然とした雰囲気を保ちつつも、その少女の外見でどこか微笑ましく見えてしまう彼女に俺は口を開いた。

「やっぱり、成り行きでパーティを組んだのはまずかったか？」

本日、サポーターの少女との初探索を終えて教会ホームに帰宅した俺は、その日の夕食でカーディナルに一連の出来事の報告をした。

とある事情スキルにより、今日を除き以前までは単独ソロでダンジョンを攻略していた訳であるが、今日サポーターの少女と初めてお試しではあるものの、パーティを組んだ事を主神に伝えたと、今のように眉を顰める状態に至ったのだ。

やらかしたかと懸念の色を滲ませて言うのと、カーディナルはカップを置き、そっと目を瞑る。そして数舜置いて、再び両の瞼を開くと真っ直ぐ俺の顔を見据えて語った。

「ベル、お主が黙って他のファミリアの冒険者と組んだ事に関して俺は何も咎めんよ。冒険者をやっておれば遅かれ早かれ、いずれそのような日が来るのは必然じゃからな。」

とはいえ、お主の場合は些か事情が事情じゃからのお……ふむ、相手の派閥にもよるが、問題は戦闘にあまり関与しなければ件のサポーターが戦闘スレ功績キルの影響を受けぬかじやな」

絶対に、決して他派閥に知られてはいけないスキル——戦闘バトル功績は俺がパーティを組んでいる場合、他のメンバーにも獲得経験値上昇の恩恵を受けられる効果がある。しかしそれは戦闘バトルに参加することで、はじめに効果が発揮できるのだ。

リリは戦闘の際はボウガンによる援護に徹して、自身は前線には飛び出さない。俺自身、戦闘スレ功績キルについて完全には把握していないが、何となく……リリのような後方支援では経験値が増加しても微々たるものである気がした。

それは戦闘功績が仮想世界での俺の闘い：一時は戦闘マシーンさながらに、がむしやらまでにモンスター達を斬り倒してきた前世の経過去験に由来してるからであろう。

「その点はまあ：問題無いと思うぜ。：カーディナルは俺がよそのサポーターと組んでも良いのか？」

「それはお主自身、そのサポーターについてどう思っておるのかじゃな。

元よりサポーターと云えど、別の派閥に所属する冒険者。直接相対したのはお主じゃ。お主の眼から見て、其奴は信用を置くに値する者なのか？」

緋色の慧眼を瞬かせ、眷属に問いを返すカーディナル。

彼女の深い叡智を覗かせる瞳に促され、少年は今日行動を共にした少女の事を思い返し、記憶を振り返ると自身の考えを主神に打ち明けた。

「少しばかり訳ありな事情を抱えているし、俺に対しても本心を隠している。正直言って良からぬ目的で近づいてきたのだろうとは思わず」

探索中、俺が彼女に気づかれないようにこっそりとその様子を伺う中、彼女は俺に対して営業スマイルを浮かべながらも手慣れた様子で魔石やドロップアイテムを回収していった。だが時折、その値踏みするような、観察するような視線が俺：特に己の愛剣達に注がれていた事に気づくのに、さほど時間はかからなかった。

……まあ正直に打ち明けるならば、最初にエリユシデータが俺にしか気づかないほどに微細な振動を送り、警告してきたのが切っ掛けであるが。

とにかく、彼女は自身が武器マニアと言ってはいたが、恐らく俺の装備を狙って近づいてきたのだろうと予想がつく。ならば後は簡単、適当な理由を言って被害に合わないうちにさっさと彼女と縁を切れば良いだけの話だ。

―だが

「でも、根は良い子だと思うぜ、サポーターの腕や知識も確かだしな。

明日の探索も彼女と組もうと俺は思っている」

「何故、其奴に拘る。そも、サポーターならば他に信用できる所から募る事も可能であろう。会って一日にも満たない相手に何を根拠に言うのじゃ。」

よもや己だけで済む問題とは考えておらんじやろうな?。」

「……」

眼鏡のレンズの奥にある瞳を猛禽類のように細め、鋭い指摘を少年に浴びせるカーディナル。

見た目こそ、うら若い少女の姿であるが彼女もまた神々の末席に名を連ねる者として、派閥を治めるファミリアの主としての責があった。事と次第によってはサポーターの少女が所属する向こうのファミリアにも関係してくる内容なので、少年と少女の間で終わる問題では済まない。

そのような意図も含んだ指摘に、押し黙る少年。

少年自身も場合によっては、己の行為が家族ファミリアに迷惑に掛け、騒動に発展する可能性もある事を自覚していたのだった。

じっと、その真意を見定めるかのようにして、少年の紅い眼を一心に見つめる賢神。

緋と紅の視線が交差する中、少年は――

「カーディナル。俺にはな…彼女が――」

――自分の想いを、敬愛する主神に対し、許しを乞うように伝えた。

カーディナルはその想い願を黙って聞くと、やれやれと呆れたように息を吐く。しかし、少年の目にはカーディナルの頬にフツと小さな笑みが見えたような気がした。

それがきつかけとなったのか、ふわりと彼女を中心にして、それまで重苦しく、緊張していた空気が緩んでは暖まるように変化していくのを、少年は感じ取った。

そうして、会話が始まる当初の和やかな雰囲気に戻っていくと――
「会話は終わった?。じゃあしばらくは、そのサポーター君は様子を
見るってことで良いね?。」

「リセリス…」

その声は、それまで一人ソファアに座って二人の会話を見守り、沈黙を保ちながら剣を磨いていた少女――リセリス。

カーディナルファミリア団長は屈託の無い、明るい笑みを俺達に向けてと共に――告げる。

「何か色々と複雑そうな話をしているけど、二人共ボクやシャーロットが居ることを忘れないでよね。困った事があれば、いつでも協力するよ。なんたつてボク達は家族なんだから」

「…ああ、そうだな」

「無論じゃ」

小さき身であれど、自分よりも遥かな高みに立ち、主神からも無類の信頼を寄せられている彼女の言葉に応える俺とカーディナルであった。

……

「まあ一応…さりげなく釘は刺しておいたから、力づくで奪うような強引な手段に打って出る事は無いと思うぜ。今日一緒に行動してみたが、かなり慎重的な性格だしな」

「ならば良いが…。まあまだ何事も生じておらぬならば、リセリスの言う様にしばらくは様子見じゃな」

空のカップにティーポットの温かい紅茶を注ぎ込む。薄い湯気が浮き上がっては空中へと霧散していくカップに口を付け、静かに上品良く飲むとカーディナルは俺がサポーターの少女と契約を結ぶ事を許容してくれた。

色々あったがこれでひとまず、サポーターの話は終了した…そう思っている――

「そうそう、件のサポーターの所属しておるファミリアの名は何じや？ 其奴が今までに他の冒険者に対し、良からぬ事しておるのであれば、それは主神の団員管理が行き届いておらぬという事になるぞ。何処のろくでなし^神じや？」

なんか妙なニュアンスを感じたような気がしたが、気のせいかと判

断して俺は彼女がソーマ・ファミアに所属していることを伝える。
するとカーディナルは何とも言いきれぬ微妙な顔になった。

「ソーマファミアか、そりやまた面倒なところにお……」

「何だ、実はヤバいファミアなのか？」

「危険、という訳ではないが、近頃やたるときな臭い噂を聞くファミアアじゃな。度々ギルドとトラブルを起こしているという話を聞くぞ」
「あ、その話ならこの前エイナも言っていたよ。ソーマファミアの人達が、ギルドの換金所で度々揉め事を起こして大変だつて」

「やれ換金額が少ないだ、もつと多くしろ、だのといった主に金絡みのトラブルがギルドで多発しておるらしく、ギルドの職員達からも煙たがられているらしい。」

「俺はソーマ個神との縁など一切無いが、まあ他の神々からの評判を纏めると総じて趣味の酒造りのみ関心を持ち、それ以外には一切の興味を抱かんといい完全な引きこもりという話じゃ。」

「俺もよその事を言えぬが、宴に一度も顔を出さなければ、交友のある神すらとんと話を聞かん」

「それ最早、何の為にわざわざ地上に降りているんだ？ という疑問が浮かぶレベルだが、意外にもそんな神がオラリオで最大の団員数を保有しておるのだから、実は神ソーマは眷属達に慕われていたりするのか、あるいは……ソーマファミアには人間を惹き付けて止まないナニカがあるという事か？」

「リリもまた金が必要と話しているので、恐らく無関係では無いだろう。」

「ふーむ。これは一度派閥内調査するよう、ギルドに進言する必要があるのお……」

「手に持つカップの底を見つめ、頭の中で思考を巡らすその顔付きは、秩序を司る神としてのソレが浮き彫りになっていた。」

くくく

「えーと…ベル様。これは一体どういう事でしょうか…?」

「んー、まあ何と言うか…」

明朝、バベル前の噴水広場。そこでサポーターの少女リリがフードの中で困惑する様子を見て、*「まあそうなるよな」*とそうなる気持ちを探る。

というのも、俺のすぐ隣を見下ろせば―

「やあ、初めまして。君が後輩君の話してたサポーター君？ 今日ボクも同行するからよろしくね！」

―オラリオでもトップクラスの實力と知名度を持つ第一級冒険者。オラリオ最強の剣士、リセリス・フリーゼがこの場にいるのであった。

「どうして此処に第一級冒険者がいるんですかベル様!? しかも同行って!!」

「ん、言って無かったか？ 俺はカーディナルファミリアに所属しているんだ。それでリセリス…内の団長様が今日は一緒に探索しなかったって言ってきたから連れて来たんだ」

より正確に言うと、暇で予定が空いている事や団長としてリリがどんな人物か見極める…というよりは、単純に興味をもったからという理由で付いてきた。

「初耳です…まさかベル様が、あの…絶剣様と同じファミリアなんて驚きです。」

何でも今までに何人もの入団希望者が頼み込んでも、入れた者は一人もいないと噂されているファミリアなんですよ」

「アハハ、カーディナルはあまりファミリアの規模を大きくしたくないみたいだからね。入団したい人達が来ると他のファミリアを紹介する位だもん」

リセリスは快活に笑うとリリに向け、手を差し出した。

「改めてボクの名前はリセリス・フリーゼ。今日は飛び入りで探索に加わるけどよろしくね、サポーター君！ ボクのことは気軽に接してくれて良いからね」

「…リリルカ・アーデ。この度ベル様とパーティを組んでもらっております、しがなさいサポーターです。よろしくお願いいたします

……」

無邪気でお日様のように明るげな笑顔を向けてくる少女の手を、リルカは恐る恐る握り、二人は握手をした。

：暖かい。そうリルカは感じた。彼女の手の温度が自分と同じ柔らかな手を通して伝わってくる。

彼女の心を表すかのようなその温もりは自身のちっぽけで、寂寥とした心の中にまで伝わり、染み込んでゆくような気がした。

第23話 賢神の図書館

慣れというのは恐ろしい……

天井からひっそりと零れ落ちる淡い燐光が洞窟を仄暗く灯し、何処かの影に潜んでいるであろう怪物達の唸り声や息遣いをする音が偽りの獣耳に微かに届く中、ふとそう思った。

冒険者になって初期の頃はビクビクと臆病に身を縮ませながら探索をしていたものの、何度か探索を繰り返していくうちに冷静に思考を巡らし、駆け引きを行えるくらいには肝が据わってダンジョンに適応してこれたのだから、我ながら逞しくなったものだ。

とはいえ少しでも気が抜ければ、吹けば飛ぶように私の命は呆気なく消えてしまう危険で過酷な場所である事には変わりはなく、通路の曲がり角や先に広がる暗闇からモンスターが現れやしまいかと常に警戒は怠れない。

結局、原初的な恐怖心が芽生えてくるのは昔も今も変わらない事実だ。

なにせ自分は弱者^{サポーター}。

ステイタスは低く、私一人では碌に戦う術^{センス}が無い。良き仲間にも恵まれず、今まで同行してきた者達も粗暴で気にくわなければ些細な事で痛め付け、自分に近づく同僚達も『分かち合い』という薄っぺらの名目で、僅かに得た稼ぎを嬉々として手酷く搾取する。例え抗議の声を上げたとしても、その返答は更なる暴力。

まさに弱肉強食。

モンスター、冒険者に関わらず、不意討ちや騙し討ちなど卑怯な手段を取る事を選択しなかったら、私はどうの昔に野垂れ死んでいただろう。

主神は酒造りに没頭するのみで、ファミリアや眷属に一片の関心も持たない。周囲に守ってくれる味方など始めから存在せず、常に孤独。真に信用できるのは己のみだ。

……そう思っていた。——あの黒衣の剣士と会うまでは、

……

冷たい刃が肉と空気を切り裂き、モンスターの苦痛の叫びが洞窟内に甲高く響き渡った。まるで柵から解き放たれた獣の如く勢いを増し、されど一層研ぎ澄まされた剣技が高速で繰り出されていく。

「おーやるね、流っ石ー。この調子だとボクの出番は無さそうだね」
「まあ…そうですね…」

目の前で繰り広げられている無双劇に驚きやら呆れを覚えつつ、自分の隣で緊張感無く、のほほんと話す彼女に同意する。

一見、ダンジョンだというのに気を抜いているように思えるが、彼女のレベルを思えば至極当然だろう。

Lv6ーリセリス・フリーゼ

またの名を『絶剣』、彼女にしてみれば現在自分達がいるこの上層はまるで大したことはなく、この七階層までの道のりは少し長い散歩をするに等しい。モンスターの脅威は言うに及ばず。

というか、第一級冒険者がこの上層にいること自体が場違いなのだ。

「リセリス様がリリの警護を下さるのは、大変感謝致しますが、よろしいのですか？　ずっとリセリス様は後方で待機していることになりますよ？」

「別にかまわないよ。ボクが上層で戦ってもしょうがないし、後輩の戦いぶりを見ておくのも団長の大事な仕事だから。…それにボクが君の警護をしているから、彼も思う存分に戦闘に集中出来るしね」

「まあ確かに…リリに気を配る必要がございませんから、昨日と比べてベル様の暴れ…ゴホン…戦いぶりに磨きが増しています」

前日以上に目まぐるしい立ち回りの戦闘は、ひとえにリセリスの存在のおかげであった。Lv6の冒険者がリリルカの守護を担当することで少年は後ろを気にする事無く、目の前のモンスターに集中して戦闘を行う事が出来たが故だ。

自然と口に出そうになった言葉を咳で誤魔化し、訂正しつつ相槌を

打つりルカ。

実際、もし某アドバイザーが目の前の戦闘を見ていたら、爽やかな笑顔で少年をお説教部屋個室に強制連行することが想像できるくらいに暴れっぷりであった。

「リセリス様…不躰ですが、一つお尋ねしてもよろしいでしょうか？」
「ん？ 良いよ」

不意に、リルルカが口を開く。急な質問にリセリスは拒まず、サポーターの話聞いた。

「リセリス様は小人バルウムでございますが、…どうして冒険者になろうと思つたのですか？」

「ボクが冒険者になつた理由？」

「はい、その…Lv6ほどの高みに至つたとなれば並大抵ではない苦労を経験してきたと思われませんが、リセリス様はどのような目的でダンジョンに潜つておられるのかと、リリは気になりました…」

名声、金、修行、未知…あるいは出会い。オラリオに訪れ、ダンジョンを探索する者達の目的は様々だ。大半の冒険者は前者の二つに属するが、自分サポーターに対しても笑顔を向ける彼女は、それらに頓着していないようにリルルカは思えた。

ましてや彼女は小人バルウム。オラリオ最強の剣士と謳われる今は無いだろうが、このオラリオに住んでいれば今まで種族の差別や偏見を受けなかつた筈がない。ならば『絶剣』は、どのような想いをその小さな胸に抱いて、『勇者』に並び立つ程の高みに至つたのだろうか。

…それは、リルルカが彼女の存在を耳にした時から、知りたいと思つていたことであつた。

「うーん、そうだね。…憧れかなあ、最初は」

「憧れ…ですか？」

リルルカが問うと、リセリスは微笑みながら過去を懐かしむように語つた。

「ボクってオラリオ外の遠く離れた村で育つただけだね、…小さい時に流行り病で家族を失つてから、一人で暮らしていたんだ。」

…幸い同じ村の人達が手助けしてくれたから、とりあえず何とか生

活出来たよ。まあ…体が小さいから、色々大変だったけどね」

さらっと紡がれた予想外に重い過去に傍らで聞いていたりリルカは驚くも、少女は気にせず続けた。

「一人暮らしになってから…一ヶ月ぐらい経った時かなあ。お師匠様と会ったのは…」

「お師匠様？ そんな方がいらつしやったんですか？」

「うん。偶々ボクのいた村に立ち寄ったみたいだね。その時に誘われたんだ。俺と一緒に来るかって」

当時はまだ幼い子供？あまり見た目は変わらないが？だった少女を誘ったのは、世界各地を放浪する旅人だった。その旅人はリセリスと互いに意気投合し、あての無い自由気儘な旅に同行しないかと手を差し伸べたのだった。

「…：初対面なのに良く信用出来ましたね。上手いこと言って子供を拐う悪人だとは思わなかったのですか？」

「アハハ、普通に考えればそうだよね。…でも、あの人はそんな雰囲気は感じなかったんだ。だからかな、この人は信用出来るって思ってたんだ。」

それにお師匠様は冗談半分で言っただけだけど、ボクも以前から外の世界を見てみたいなって考えていたから、丁度良い機会だと思つてあの人の誘いを受けたんだ」

天涯孤独の身でもあったリセリスは、即座にその申し出を受け取つた。旅に同行することになったが、旅人は驚くべき事に大人から見ても巨大な飛竜ドラゴンを相手としており、彼の竜に騎乗して海や砂漠、雪国など各地の国々を巡り、時には人が誰一人寄り付かないような秘境を冒険したと、リセリスは楽し気に当時の事を語った。

外周を石の巨壁で囲まれたオラリオで生まれ育ち、一度も外の世界に出た事が無いリルカからしたら、それはとても新鮮で、興味深い話であった。

「お師匠様はすごい強い人でね、旅をしている合間に剣の扱いや、ボクみたいに身体が小さくても、立ち向かえるような闘い方を手解きしてくれたんだ」

「それがリセリス様の強さの秘密ですか。……良いお師匠様ですね。でも、今ならばそのお師匠様を超えたのではありませんか？」

一般的にオラリオ外で強者と呼ばれる者のレベルは精々Lv2、3だと言われている。しかし話を聞く限り、件の旅人は特定の派閥に属していない無所属——つまり恩恵を保持しない、過去に冒険者をやっ

ていて保持していたとしても、上述のレベルくらいと思われる。如何にして飛竜^{モンスター}を調教したのかは不明だが、オラリオでLv6となった彼女ならば師匠を既に上回っているだろうと、リリルカはそう考えた。

だがリセリスはその言葉に対し、肯定しなかった。

「どうだろうねー。あの時は今よりずっと弱かったから仕合で一度もお師匠様に勝てなかったし、本気を見た事も無いからね。あの人の全力はボクは知らない。それに底が知れないって感じかな？ 対峙しているといつもそんな雰囲気纏っているんだよね」

「そ、そうですか。わかりました。…では話を戻しますが、オラリオも旅していた時に訪れて冒険者になったのですか？ そのお師匠様もご一緒に？」

「ううん。オラリオにはボク一人で門に入って、その時にお師匠様とは別れたんだ。ちょうど十年前かな？ ボクが十歳になった時に、お師匠様からオラリオに行つて冒険者に成れつて言われたんだ。」

曰く、世界の中心であるオラリオで生涯信頼できる神と仲間を見つ

ける。

世界に一つだけのダンジョンに挑み、未知を楽しみ、殻を破

れ。

世界最高峰の強者共が集う都市の荒波を潜り抜け、成長せ

よ。

大雑把にまとめるとこんな感じであり、要するに愛弟子にオラリオを知ってもらいたかったようだ。

そしてリセリス・フリーゼは師匠に言われた通りに今の主神であるカーディナルと出会い、冒険者となって神々から『絶剣』の二つ名を授かり、今や世界でも名だたる小人で女性初の第一級冒険者となつ

た。

「最初はお師匠様のように成りたいなくってそれを目標にしていたんだ。けど、冒険者をやっているうちにこのオラリオでの生活が楽しくなってきたね、カーディナルやこの都市で会った仲間と出会って良かったってお師匠様に感謝するようになったんだ。」

だからね、ボクは精一杯楽しもうって決めたんだ。お師匠様が今何処で何をしているのかわからないけど、あの人の耳に入るくらい、ボクがオラリオで冒険している事が伝わるようになって！」

「――」

彼女の気質を表すかのような、明るく、純真で無邪気な微笑をサポーターに向けるリセリス。太陽のように眩し気に輝くその笑顔を、サポーターは直視出来ず口を閉ざし、顔を俯け暗い地面をただ見つめるのみだった。

二人が会話している一方で、黒衣の剣士の猛攻には拍車がかかっていた。

「セイツー！」

少年が鋭く息を発すると共に、黒白の双剣が使い手に導かれて閃く。暗然たる迷宮内で刹那に輝く剣閃は、虚空に幾筋もの線を描き、数体のキラアアントを瞬く間に次々と葬ってゆくのであった。

「お疲れー、ベル」

単独での戦闘を終え、二つの剣を鞘に納める少年にリセリスは労いの言葉を掛ける。その間にリルルカはサポーターの務めを果たすべく、黙々と魔石とドロップアイテムを回収していった。稼ぎは上々、昨日の分も合わせれば五万ヴァリスを超えるのは確実だろうと少女は推測する。

―やっぱり、結局は才能と運なのですかね。

たった一人で1パーティ分の稼ぎをする少年然り、絶剣の過去然り、どちらも私には無い冒険者の才能が備わっていた。その上で彼らが慕う主神や旅人と出会う幸運にも恵まれていた。今の私には無い全てを、彼らは早いうちに手入れている。

完全に私とは正反対の星の下で生まれた存在だ。

彼らは私の知る冒険者とは違い、威張り散らかさず、自分を見下さず、敬意を表し、こちらを気遣ったり向こうから報酬の山分けを提案するなど心優しい冒険者であろう。

でも、この時ばかりは私の知る冒険者だったら良かったと心の底から思う。だって、彼らと出会わなかったら私は今まで通り冒険者を憎み、遠慮なく復讐嫉妬心にかけられる。この私の奥底から止むこと無く湧き上がってくる感情を知ることも無かった。

手に取った魔石を見つめながら、自分だけにしか聞こえない声でぽつりと呟いた。

「……ほんと、世界は神様よりも気まぐれで、不公平ですね」

……

「そうだ、リリ。明日の探索についてなんだが、明日は休みで良いか？」

広間ルームでの休憩中、リセリスが入り口を守っているのを見ていた俺は、リリに明日の探索は中止であることを言った。

「明日、ですか？　リリは構いませんよ。ちょうど明日はリリの方でも予定があったので、寧ろこちらからお願いしようと思っていましたから」

「そうか、わかった。じゃ、明日はお休みでこと頼む」

休みたいといっても、なにもダンジョンに潜るのが疲れたからという理由ではなく、これは我が主神であるカーディナルからの依頼要請、というかお願いであった。

— 昨日の夜 —

「そうそう、ベル。お主、明後日辺り予定が空いておらぬか？」

「ん？　普通にダンジョンに行くだけだから、予定は空けられるぞ。」
冒険者なので基本的にいつもダンジョンに潜っているが、毎日探索することを義務付けられている訳ではなく、気分がのらなければ自由に休むことだって可能だ。リリとの契約も互いに都合が合わなければ、別の日に変えられるので問題は無かった。

「そうか、ならば明後日に頼む。ちと人手が足りなくなてな。それにお主にも紹介する良い機会だから見せたいと思つていたのじゃ」

「まあ：俺は構わないが、一体何処で何をするんだ？」

カーディナルが普段働いているという学区か？　だが俺に勉学を教える程の教養は無いぞ。

「フッフ、お主はまだ此処に来て半月じゃからな。普段からダンジョンにしか行つておれば、知らぬのも当然じゃろう」

何も知らず、困惑する俺をカーディナルは愉快げに笑いながら、勿体ぶるように俺が初めて聞くその場所の名を言った。

「お主に行つて貰いたいのは――」

~~~~~

「……此処、なのか？」

「そうじゃ」

リセリスとリリの三人での探索をした次の日、俺とカーディナルは西ストリートに存在するある巨大な建物の前に立っていた。荘厳な石造りの外観に、ギルド本部――万神殿バンテノンと比べても何ら遜色無い規模スケール。

オラリオでは巨大摩天楼バベルを始め、上位派閥の神々がそれぞれ趣味趣向を凝らしたホームが有名であるが、目の前で屹立する建築物も都市の観光名所に分類されているのは一目瞭然であった。

「これはこれはカーディナル様。おはようございます」

「カーディナル様、昨日魔法国アルテナより入荷された書物は予定通り書庫に運びました。後、近隣国からやつて来た学者様がカーディナル様に面会したいと申し出ています」

「うむ、わかった。そちらはひとまず貴賓室で待たせておいてくれ」

中に入り、回廊を進んでいると職員らしき人達がカーディナルに挨拶や報告をしていく。それらにカーディナルは歩きながら対応していった。

その様子はカーディナルがどれだけ職員達に慕われているのかが窺えた。

「元々、この建物はわしが趣味で集めていた世界中の書物を始め、都市や迷宮の貴重な資料を保管する為に建てたのが始まりなのじゃ。」

「当時は今よりずっと小さい建物だったが、年々書物の数が増加して今のように再建築してこうなった。ついでに、一般解放して民間人や他国の者共も自由に利用できる図書館にしてな」

「……色々と初耳だぞ。でも、これだけの建物を建てる金はどうしたんだ？ 本を集めるだけでもかなりの額がしただろう。借金でもしたのか？」

「カーディナルが学区でどれだけの給金を貰っているのか知らないが、いくら何百年働こうと、これほどの建造物を建てるのは厳しい筈だ。」

「いや、借金ローンはしておらん。だが流石にわし個神の出資だけでは無理じゃからな、ちとコネを使つてオラリオの公共施設としてギルドに大部分出資させたのじゃ。実際の運営や管理権はわしが握っているがな」

「さらりと紡がれたギルドをも動かす謎の影響力に、改めて我が主神様に戦慄を覚える。」

「確かにカーディナルは千年前からいるオラリオでも最古参筆頭の神ではあるが、それだけでギルドを動かせる訳がない。だが俺は教師をやっていると聞いてはいても、それがどのくらい前から就いているのかは知らないままだ。」

「もし俺の予想通りならば、カーディナルが都市オラリオの発展に貢献したと言葉から推測するに、もしかすると、かつてはギルドの要職に就いていたのかもしれない。」

「いや、でもギルドは絶対中立だ。神がギルドで働く事なんて可能なのか？」

「少なくともギルドで働き、恩師としてカーディナルを慕ってるエインさんからは、そんな話は聞いた事が無いのは確かだ。」

「なあ、カーディナル……」  
「ここが本館じゃ」

「カーディナルに質問しようとしたが、目的地である本館に着いてしまっただけで、色々と気にはなるが、一端置いておくとして」

正面を向く。

そして：俺は眼前で広がる光景を前に目を見張り、息を飲んだ。

「凄い……」

広々とした円形の大広間<sup>ホール</sup>。吹き抜けとなっていておおよそ三階建て、しかしそれぞれの階の天井が高いので、実際の高さは天井部分も含めれば三十メートルはあるだろうか。

ホール内には巨大な書棚が木々のように立ち並び、二階、三階にもその影が覗けられた。その全てに書籍が上から下までぎっしりと納まり、隅にいたるまで隙間が存在しない。

背高い書棚の間を、紺色の制服を着た職員やローブを纏った魔導士、恐らく学者であろう研究職の者といった大勢の人間が通り抜け、または熱心に本を手に取り、ページを開いて覗いていた。

—本の森—

正にそんな言葉が思い浮かべられた俺は只、じつと釘付けとなつて見るのであった。

予想以上の光景を前に愕然と立つ少年に、カーディナルは厳かに、自慢気にこの大図書館の名を告げた。

「名は『万書殿』。これがわしの自慢の図書館じゃよ」

## 第24話 煌夜の世界

—古今東西、世界のあらゆる書物がそこにある—

世界の中心である都市オラリオに存在する、ある白亜の図書館を訪れた誰もがそのように評したという。

蔵書されているのは、本屋でも売られている一般向けの手軽な本を始め、重厚な皮装丁で羊皮紙を束ねた如何にも高価で貴重そうな本から、書き連ねられた文字も種族間で共有された文字である共通言語コイネーだけでなく、その作者の種族のみで使われる独自の言語で執筆された書物も混じり、絵本から物語、歴史、文化、学問、魔法、古文書等々、分類ジャンルを問わずそこに納められていた。

ありとあらゆる地上の叡智が厳かに眠る賢神の書庫—それが『万書殿』であった。

幅広く背高い書棚が、丁度オラリオの八つのメインストリートと同じ規則的な列を為して並び立つ。木々のようにそびえ立つそれらの間を通り抜け、吹抜けの大広間ホールの中央へと、俺とカーディナルは向かっていった。

中央は開けた空間であり、中心には受付カウンターと思わしきそれと、閲覧する為の長机が周囲に設置されている。カウンターに近づくと、カーディナルは中で書類整理デスクワークしていた数人の職員の内、その一人に声を掛けた。

「シャーロットよ。忙しいところを邪魔して悪いが、ちと良いかの？」

「ん？ あつ、カーディナル様！ ……それにベルも一緒に」

声を掛けた相手はつい先日裏通りの時に会った同じファミリアの団員で先輩であるダークエルフの女性、シャーロットだった。今日はいつも纏っていたローブ姿ではなく、紺色の制服をきつちりと着こなした姿だ。その様は彼女の凛とした容姿も相まって才女、または女史の印象を見受けた。

「よっ、久しぶり……という程じゃないが数日ぶり。ここにいるってことは、シャーロットも職員の一人なのか？」

「そうよ。そう言えばベルには教えてなかったわね。私は普段は

万書殿マンショテンで働いているの。カーディナル様の紹介でね。それで……今日イはベルを連れてどうしたんですか、カーディナル様？」

「うむ、ベルにこの万書殿を自慢するついでに、仕分けを手伝わせようと思つて連れてきたまでじゃ。量が多くて人手が足らん筈じゃつたらう？」

仕分け？ と聞いた俺が詳しい内容を尋ねると、カーディナルは頷き返して説明をしてくれた。

「この万書殿に納められている書物の大半は外の他国より輸入したもので占めており、時々新たに書物を取り寄せておるが、時にその量は膨大なものになる事もある。それらの荷解きや整理をする必要があるが……只でさえ図書館トクサンは広く、職員達にも他の仕事があるからあまり手が回らないのじゃ。

いつもは少しずつ分担して片付けておるが、今回はかなり貯まつているからの……」

そんなわけで、さして時間に追われていない俺にも助っ人として手伝つて欲しいとのことだ。元より、そのつもりで来ていた俺が快く了承したのは言うまでも無いだろう。

だが、話を聞いた俺は一つ気になることがあり、ここにはいない人物の事についてカーディナルに聞いた。

「手伝うのは別に構わないが、それならリセリスはどうしたんだ？」

あつちは何か用があるのか？」

「ああ、あやつは別件でウラ……ゴホンツ、……ギルドの強制依頼ミツシヨでダンジョンの調査に向かつておる。だから手伝いはお主だけじゃな」

どこか不自然な咳払いをして説明し終わると、カーディナルは人を待たせているということの後ノチの詳しい内容はシャーロットに任せると告げて、さっさとこの場を後にしたのだった。

小柄な少女の姿が人波に消えていくの見送ると、シャーロットに向き直り口を開く。

「……えーと、まあとりあえずそんな訳で来たんだ。よろしく。……それで俺はだだっ広い図書館の何処に行けば良いんだ、シャーロット？」



「ええ、わかったわ。ありがとうベル。そうね……私は今受付を離れられないから……シオン、事情は聞いていたでしょ。ちよつと彼の案内役を変わる？」

生憎、手が離せられないというシャーロットが代役を頼んだ相手は、話している間ずつと隣で書類整理デスクワークをしていたエルフの女性だった。

彼女の言葉に反応して顔を上げ、少年の方を振り向くとその整った美貌が露となる。先に少年の目に映えたのは、艶やかで清らかな流水のような水色の長髪と瑞々しい白い肌。エルフによくある鋭利でお固い印象を感じさせない柔らかくで優しい気な顔立ちとほっそりとした体つきから、さながら「淑女」のイメージを感じ取れた。

「シオン」と呼ばれた女性は椅子からスツと立ち上がる。そして少年に丁寧な仕草でお辞儀すると、淡い笑みと共に挨拶をした。

「初めまして、シオンと良います。お会い出来て光栄です。クラネルさん」

くくく

やっぱエルフの女性って皆綺麗なのかねー

俺の直ぐ前を歩き、先導する彼女の姿を見て、ふとそう思った。ハーフエルフのエイナさん然り、ダークエルフのシャーロットや目の前を歩くシオンという女性。当然ながら時折街で見掛ける彼女達以外の男女のエルフも総じて見目麗しい容姿だ。例え頭が固い、容易に他者に肌を触れさせない潔癖と云われようと、それでもエルフに惹かれる者が多いのも納得だろう。

俺は既に前世過去の話であろうと心の底から愛した人がいたため、そういった事は無いが、それでも目を奪われてしまうことがあるくらいだ。

まあそれはそれとして……

「あのーすみません。さつき受付で俺の名前を言っていました、何処で知ったんですか？」

気になるのはあの時、確かに彼女は「クラネルさん」と俺の苗字を言った。俺達の会話を聞いていたとしても、その言葉は出ていない。お会い出来て光栄です」とも言っていたから、同僚のシャーロットから予め俺の話を小耳に挟んでいたのだろうか？

不思議に思っただけで尋ねると、シオンさんに俺の質問を受けて後ろを振り返り、髪と同じアクアブルーの瞳を瞬かせると年下である俺にも敬語を使い、こちらの予想とは違った答えを出した。

「はい。それは以前リセリスから貴方のお話を伺っておりましたからです。兎みたいな新人が入ったって言っていましたよ」

「リセリスを知っているんですか？」

今この場にはいない少女の名前が出た事に、少年が彼女との繋がりを聞く。

「ええ、私はここの職員の仕事を与えてもらっていますが、こう見えて本職は冒険者をやっています。所属するファミリアこそ異なりますが、リセリスとは駆け出しの頃からの付き合いなんです。彼女には私ほかにもあと数人、気心の知れた仲間がいて、良く皆で派閥を越えたパーティを組んで、ダンジョンの探索をさせてもらっています」

……なるほど、ファミリアの団員が僅か二人の状態で今まで良くダンジョンに行けたなっと思っただけだが、他のファミリアの冒険者とパーティを組んでいたのか。そう言えば以前たった一人でロキファミリアと合同遠征したりと、割と交友関係が広いところがあったし他のファミリアとの付き合いも、ある意味カーディナルより多そうだな。

「主神同士の関係はどうなんですか？　うちの主神はあまり神付き合いの話は聞きませんが」

「というかカーディナルと付き合いのある神って誰だ？」

「私の主神はテミス様ですが、カーディナル様とは地上に降臨してから、そこそこの付き合いと申していましたよ。テミス様が言うにはそれなりに仲の良い神様もいるそうです。私の知っている限りでは……あ、ここです。こちらの部屋が資料保管室です」

二人が雑談を交わしているうちに、目的の部屋へと着く。扉は開

けつ放しで、少年が中を覗くと室内にある作業台の上には幾多の本と巻物スクロールが雑多に積み重なって山を成し、その周りに十数人の職員達が作業をしていた。

本のタイトルを記録して名簿を作成する者、手袋を着けた手で選び取り種類ジャンル分けする者など、数冊まとめて台車に乗せ何処かに運び出す職員もいた。

「既に話の方は通っていますので、後は彼らが教えてくれる筈です。何かわからない事がありましたら、気兼ね無くお聞き下さい。それでは、私はこれで失礼いたします」

「はい。案内ありがとうございます」

少年に軽く会釈してシオンは再び自分の仕事場へと戻っていく。そして水色の長髪を揺らしながら立ち去る彼女を少年は見送ると、部屋に入り彼らの作業の環に加わるのだった。

……数時間後

「ふうー、想像していたのよりも量が多かったな。……まさか別室にまだ大量にあったなんて」

手近にあった椅子にドカッと深く腰かけ、息をつく。休憩ということでつい先程まで一緒に作業していた人達は退出しており、今室内にいるのは俺一人だけであった。

思い返すは最初は百冊近くは有った書物も、ベテラン職員達の手際の良さでスムーズに片付いて残りがあと十数冊になった時、意外と早く終わるなど思ったのも束の間、実はこれらはまだほんの氷山の一角であり、直ぐ隣にある別室には先程の倍以上の書物が眠っているという話であった。

俺の仕事自体は指定された本を別館に運ぶだけで分厚い本を何冊持とうと、恩恵により筋力強化されているのでなんら問題はない。むしろ他の職員と雑談しながら運んでいるので、楽しくやっていたくらいだ。

とりあえず、昼時で腹が減ったので近くの食堂に行こうと席を立つ

た時だった。ふと、一瞬視界の隅に小さな紅色が目映り込んだような気がした。それが気になって近づいてみると、それは1冊の本だった。進呈品とか何処に配置するか決まっていなかったものを一時的に置いてある机。その上に置かれていた本達の中の1冊であった。

何気無く手に取ってみると、書店で売られている本よりも一回り大きいサイズに数センチ程の厚さ。そして、俺の目を惹くきつかけとなった特徴的な深い紅色の装丁。

別に読書家である訳ではないが、何故か、どこか異質な雰囲気漂わせるこの本から目が離せずにはいた。

『心象により導かれる魔法の業』……」

幸いな事に共通言語で書かれていたので、タイトルらしきものを読み上げる事が出来た。だが筆者の名は表紙や背表紙にも載っておらず、どうやら表記はされていないようだ。

魔法という言葉に惹かれ、最初のページを開いてみる。

「魔法とは本来、精霊やエルフを始めとした魔法種族のみが扱う古の業であった。しかし天界より神々が降臨して以降は、魔法の素質が無い種族でも恩恵によって後天的に得ることが可能になった……」

最初のページは魔法について簡単な概要。共通言語で書かれているが、文と文との間に数式のような、意味深に謎の記号群がページ全体に羅列している。ここまでは「普通の文」だった。

「恩恵により発現する魔法はスキルと同様に、本人の可能性の具現化に他ならない。故に、現れる魔法は千差万別であり、その内容は発現者の願望、欲望、気質、本質……憧憬に反映される……」

読み進めていくうちに、文字と記号が互いにグチャリと混ざり合うかのように融けていく。いつしか、つい先程まで確かに文を成していたそれらは意味不明な波文字に姿に変え、最早常人には判読不能とか思えない「魔文」へと化した。

そこまで冷静に判断しておきながら、俺は既にこの本を読む事に没頭してしまい、中断することが出来ずにいた。

『魔法とはすなわち、己を識る事から始まる。己を直視出来ぬ者に神秘の業が得られることは無い。故に、この魔導書を開いた見知らぬ者

よ、まずは自らの魂に問え、そして汝の心象を思い浮かべ、想像せよ。仮想の舞台はここに用意した。そこに汝の心象を反映させ、汝の本質を知るのだ』

口に出していないのに、頭の中で自分ではない声が響く。内容を理解する前に、この摩訶不思議な出来事に咄嗟に本を閉じようとするも時既に遅く、急に泥酔したように俺の意識は朦朧となった。最後に覚えていたのは、身体の力を失い呆気なく床へと崩れ落ちるところまでであった。

くくく

……気がつけば先程までいた筈だった室内でなく、全く見知らぬ場所にただ一人、突っ立っていた。

空は吸い込まれそうな深い黒の夜天に、さざ波のように揺れ動き多彩な煌めきを放つ無数の星々。その真下の地面はそれ自体が巨大な鏡かのように上空の星天を映し出すことで、まるで自分が宇宙空間に立っているかのような錯覚を感じさせた。

今の状況すら忘れてしまう程に美しい夜景なのだが、この煌夜の世界で最も存在感を放っているのは空ではなく、“一本の木”だった。それはバベルにも匹敵する高さに太い幹を持つ漆黒の大樹。

その黒き枝葉は夜空の漆黒と融合して一体化することで、まるで天と地を繋ぐ巨柱を思わせる。その威容を誇る様はサイズこそ異なれど、夜空の名を冠した愛剣の元となった前世である巨人の杉と瓜二つであった。

根元に近づき触ってみると、硬質な樹皮から仄かな熱が手のひらに伝わってくる。その暖かみはどこか懐かしく、突然の出来事に困惑していた俺の心を落ち着かせるのだった。

「ギガスシダー……何故この木が？ それにここは一体……」

「ここはお前の心の中にある小さな世界、その鏡像さ」「ッ!？」

疑問を口にした瞬間、突如隣からどこか聞き覚えのある声が静かに発せられた。誰もいないと思っていた俺は慌てて声のした方に振り

向く。そして、その人物の容姿を見て目を見張った。

「北欧神話では、九つの世界を一本の大樹が支えているという。……なら、多くの者達の抛り所となり、彼ら一人一人の世界の支柱を成していたお前を象徴するものとして、まさにうってつけだろう？ なにせ一度はコイツで世界そのものをまるごと夜で覆ったんだしよ」

気安い口調で話しかけるのは、白髪の少年と同じ年代と思わしき少年だった。痩せた体格に、女性と見紛う程の線の細い顔立ち。黒色のシャツとズボンの上に重ね着して艶のある黒のロングコートを羽織ったその姿は、黒髪黒目と相まって全身黒づくめであり、この世界の風景に溶け込んでいた。

白髪の少年にとつて、その見覚えの有りすぎる姿と落ち着いたトーンの声は親近感を覚えるレベルの話ではない。何故ならその姿は、少年の仮想世界におけるもう一つの姿とあまりに酷似していた。

「お前は……一体、誰だ……」

途切れ途切れに紡がれた白髪の少年の問いに、謎の黒衣の少年はニヤリと不敵な笑みを返すのだった。

## 第25話 魔法

水面みなもに浮かぶ揺光のように煌々と瞬く星屑が闇海くらみに漂い、鏡面の地が透き通った湖の如く夜天を湛える星月夜。

夜と星に包まれ、海の底のような静けさに満ちる世界の中心で、威風堂々とそびえ立つのは最も深い黒を彩るたった一本の木。されど天地を繋ぐと言わんばかりの背と太い幹を誇るその様は、神塔バベルにも比肩する程の巨樹であった。

雄大に、力強く、世界を支える柱の如く屹立するそんな純黒の大樹の根元で二人の少年達が向かい合っていた。一人は新雪の白い髪に紅い瞳、もう一人は夜空と同じ黒の髪と瞳をした互いに同年代と思わしき少年達。互いに似た黒のロングコートを身に纏うその様は容姿が異なれど、どこか似通った雰囲気きんぎを漂わせる両者。互いに鏡合わせのように見つめ合う中、片方が口を開いた。

「お前は……一体、誰だ？」

目を見開き、困惑と驚きが混ぜ合わさった顔をする白髪の少年。実際のところ、彼は既にその姿の正体を誰よりも知っていたが、その容姿故にあり得ない、信じられないと衝撃的なものであった。

「おいおい誰って、と聞かれてもなあ……。一度記憶喪失だった時でも自分が何者であったかぐらいは覚えていただろ、体うづわは変わってもまだ魂こゝろは残ってるはずだ。今更って言うもんだぜ。俺？」

片手を上げて後頭部を掻き、苦笑いを浮かべて話す黒髪の少年。もし、この場に少年達のどちらかを良く知る第三者が居れば、その何気ない仕草や語り口は当人そのものと全く差異が無いように見えたりも知れない。

緊張感の欠片も感じさせない緩んだ空気を漂わせるが、その飄々とした態度にあてられて当初は戸惑っていた白髪の少年は落ち着きを取り戻す。そして、改めて確かめるように黒髪の少年の……自身にとっても馴染み深いその名を紡いだ。

「ああ……よく知っているさ。俺の記憶が偽物でなければお前は……桐ヶ谷和人、俺の前世の名前であり姿の筈だ。だが何故お前がその姿

をしているんだ？」

「それは俺がお前の影、魔導書が造り出したお前の鏡像だからさ。まあ、この姿ならどっちかと言えば「キリト」の方が的確かも知れないな。俺という存在を何よりも示す言葉であり、この格好も桐ヶ谷和人という人間の本质を現す仮初めにして象徴たる姿だ。さしずめ俺はホロウキリトといったところかな」

自らをホロウキリトと名乗る黒髪の少年。白髪の少年？以下ここからはキリトと表す？の偽物と言う彼にキリトは前世の似たような出来事も相まって妙な感慨を抱くも、ふと湧いた疑問をホロウキリトに問う。

「お前が俺の影だと言うのは……まあ一旦置いておくとして、どうしてベル・クラネルじゃなく、キリトの姿なんだ？」

「最初にも言ったように、今お前が見ているこの俺の姿と俺達が居るこの箱庭はお前の魂が抱く自己像を投影して顕したものだ。なら現世と前世、外側と中身が別々の外見で異なっているなら……お前の精神はベル・クラネルではなくキリトっていうことなんだろうぜ」  
最後に眩かれた音が虚空に響くと、しんとした熱の無い空気に仄かな温度を感じた——ような錯覚が起こり、不意を衝かれたような軽い、しかし胸の遥か奥底にまで伝わる程の衝撃を……キリトは受け取った。

——俺がキリト……

『キリト』、元は本名を適当にもじっただけの仮想世界のアバターネーム。しかし仮想世界を旅し続けていくにつれ、いつしかその名前は本名と同等か、それ以上に付き合いが長くなつた黒衣の剣士のネーム。転生して以来久しく聞いたその名をキリトは心の中で反芻すると、言いも知れぬ不思議な感慨が湧き上がった。さながら生まれて初めて自分の名前を告げられ、自身の存在を認識したとでも言うべきか。

ホロウキリトは更に続ける。

「桐ヶ谷和人とキリト、どちらも同じ一人の人間を示す事に変わりはない。だが、お前の場合——」

「——仮想世界で培ってきた経験が現実の俺を成長させ、歩んできた



道のりが俺の目指す夢となった。転生して別人になっていようが、俺の根底にはまだ剣士だった時のキリト俺が色濃く残っているって事なんだろう？」

言葉を引き継ぎ、しみじみと語るキリト。現実世界で老いを迎え、最期の終わりの時が訪れようと、あの世界で見てきた光景が、過ごした日々が色褪せた事は一度も無く、転生した今でも時折ふと情景が映ることがあった。

オラリオで冒険者となった彼は黒衣を纏い、剣を取って自ら一人ッロで迷宮に挑む……その様はまるでかつての天空の浮遊城の攻略をしていた時の旅路きわくをなぞっているとも言えるかも知れない。

「お前の話はわかったよ、ホロウ。……なら次に移るが、こんな大層な世界に俺の分身アバターまで用意して、一体何なんだ？ さつき魔導書がどうのって言っていたが……」

「あくそーい、そっちが本題だったな。そんじや、ちと回り道しちまったが本題に入るとするか」

ろくに質問に答えず、いい加減なノリで話を進行させるホロウキリトに、「本当にこいつ自分の分身か？」と思わず呆れを抱いてしまふ。それでも脱力感を伴いつつ、キリトは問い掛けの意味について考える。

こうして……果ての無い漆黒の空からしんと淡い星光が二人に降り注がれる中、やっと本来の「問答」が始まったのだった。

『お前にとって魔法とは何だ？』

—魔法……咄嗟に思い浮かぶのは、仮想世界のアルヴヘイム・オンラインのようなゲームの魔法だろうか。攻撃、補助、回復、時には戦闘の流れをも左右する神秘の力。あの世界の魔法には幾度か世話になった経験があるが、俺が戦闘で魔法を使用する機会は大抵、戦闘の補助に使う時であった。

魔法が消え、使えなくなった設定があるあの剣の世界アインクラッド—SAOのデスゲームを経験した俺にとって、いつ何時でも頼りになったのは己の勘と、相棒である「剣」であった。

『お前にとって魔法はどんな存在だ？』

―勝負の機運を変える切り札。俺自身の力だけではどうしようもない時、抗えぬ現状を覆し反撃の隙を生む、勝利を引き寄せる切っ掛けをつくる力。脳筋の俺には魔導士のような魔法は性に合わない。

『お前は魔法の先に何を見る？』

―解放。脳裏に過るはある仮想世界の御業。主人に導かれ、前世の荒ぶる力を奮う剣を始めとした武器群。俺に“キリト”の力が眠っていたように、彼らの秘めし記憶を現世に呼び覚ます。彼らは使い捨ての道具に非ず、使い手と共に戦場を駆け抜ける半身だ。

『お前は魔法に何を願う？』

―エリユシデータ……あいつの力をまだ俺は完全に引き出せていない、今の俺のステイタスに合わせている現状だ。俺自身、剣が無ければ大したことは無い。エリユシデータが何故俺を主を選んでのか未だに不明だが、あいつの期待に応えられるように、いつの日か早く完全に使いこなしたい。

そして願わくば……俺が相棒の力をより発揮できる場面を描きたい。

「前世まえとホントに変わらないな……。新しい人生なんだぜ、少しは以前とは別の事をしてみたいとは思わないのか？」

―仕方無いだろう……。何の因果か、俺は前世の記憶を引き継いでいるんだから。一度死んでいようが、今までの在り方はそうそう変えられないさ。だからこそ、俺の影ホロウを名乗るお前はその姿なんだろう？

例え其処が全くの見知らぬ世界、仮想だろうと現実だろうが、俺という人間の本质は言うなれば――

「『剣士』だからな」

二人の声がそろったその瞬間、それまで夜を灯していた全ての星明かりが一斉に消え、世界は完全な闇に包まれた。

くくく

「ル、ベル……………いつまで眠っている、ベル！  
「ウワツ！」

誰かの声が頭の中で木霊し、体がゆらゆらと揺れ動くのを感じた。それを切っ掛けにして、最初はぼんやりとしていた俺の意識は僅かに瞼を開け、直後のビシツと吐かれた一喝で急速に覚醒し心身共に飛び上がった。

そして完全に目覚めて周囲を見渡すと見慣れた学士帽を被った小さな少女が目に入り、主神の存在を認知したのだった。

「……………って、誰かと思ったらカーディナルか。あれ……………俺は今どうしていた？」

「ワシが様子見に来た時には既にお主は床で気を失っていた。一体何があった？ よもやお主に割り当てられた仕事が倒れてしまう程の事では有るまいな？」

多少の呆れが含みつつも、眷属の身を案じるカーディナルに「問題無い」と首を振り立ち上がる。確か夢を見ていたような気がするが……………どうにも霧がかかったようにぼんやりとしか思い出せない。誰かと話していたのは思い出せるんだが……………

「まあとにかく、特に大した事が無いようじゃな。さて、ワシは探し物を……………ん？ これは……………」

何かを見つけたのか、カーディナルが屈んで床に転がっていた物を拾う。それは一冊の本であった。血のように紅い、深紅の色をした装丁のそこそこのサイズと厚みをした本……………というか、少し前に俺が手に取っていた本そのものであった。

「……………ベル、今すぐ背を向けよ。今ここでお主のステイタスを更新するぞ」

細く小さな手でパラパラとページを捲る。すると捲るにつれ、何故かカーディナルの表情がどんどん強張り始める。そして突然ステイタスの更新をすると重々しく宣言したのだった。

「へっ？ でも昨日したばかりだぞ。それに今日はダンジョンに

行つて―」

「いいから早うせい！ こっちは確かたいことが有るんじや!!」

「はっ、はいいイイイイ!」

有無を言わさぬ、初めて聞いた主神の強い口調に頭よりも先に体が反応し、即座に反転、あたふたしつとも上着を脱いで素肌を見せるのだった。

「やはり、『発現』しておつていたか……」

カーディナルは普段以上の速さでもって、瞬く間に俺のステイタスの更新を終えると、背に現れているであろうステイタス欄をじつと覗き込みながら一人納得した様子で呟やく。その様子に我慢しきれず、俺は訳を尋ねた。

「なあ……カーディナル。そろそろ何がどうなっているのか教えてくれないか?」

「ふむ。そうじゃな、急に言つてすまない。今ステイタスを写すところじゃ。それを見れば一目瞭然じやよ」

ローブから羊皮紙を取り出し、ステイタスを写すとほれつと俺に渡す。自分のステイタスが記載された羊皮紙を受け取つて確認すると、そこには………

ベル・クラネル Lv1

力 : B749 耐久 : D523 器用 : B758 敏

捷 : C651

魔力 : I0

〈スキル〉

アクセルアサルト

【攻撃加速】

・能動的動作の加速補正

・イメージ動作のアシスト補正

バトルボーナス

【戦闘功績】

・戦闘時の経験獲得量の上昇

・戦闘時の行動で追加ボーナス

・パーティを組んでいる際にメンバーにも適用

〈魔法〉

【ウエポン・マスター】

- ・解放魔法                   :   性質拡張及び特性強化。
- ・詠唱式

【瞑目せし先は夜淵の宙<sup>そら</sup>。降り立つ底は夜風の原。

夢路の果て、屹立する独つの巨杉に寄り添わん。

揺れる枝葉は汝の追憶。降れる星火は汝の情景。

仮想の分け身、虚<sup>から</sup>の断片を宿し再起せん。

汝<sup>なれ</sup>よ成れ。青薔薇の眠りより再醒し、凍てつく氷柩より再顕せ

よ。エンハンス・アーマメント】

- ・追加詠唱式【リリース・リコレクション】
- ・保持する記憶情報の具現化

「魔、魔法……」

目に飛び込んだのは魔法の発現。昨日までには確かに無かったはずの文の羅列。想像だにできなかった内容に思考はリリースして言葉が続かない。そんな愕然とする俺にカーディナルがやや疲れ気味に、祝福の詞を投げ寄せた。

「魔法の習得、おめでどうベル。さて困惑するのも無理なからうが、ひとまず状況を説明するぞ」

「ああ……わかった」

衝撃は未だ冷め止まぬも、カーディナルの言葉に我に返る。色々と気になるが、ひとまず彼女の話を優先することにした。

「コホン、さて最初に確認をとるが。ベル……お主この書物を読みおったか？」

カーディナルは先程自分で拾った深紅の本をこちらに見せる。中身が白紙のページだらけのそれに俺が頷くと、彼女は本の正体について語った。

「これは魔導書<sup>グリモア</sup>と呼ばれる魔道具<sup>マジックアイテム</sup>じゃ。その効果は本に目を通した読者に魔法を習得させる、謂わば魔法の強制発現じゃよ」

「なつ、魔法の発現！……そんな超レアアイテムがなんで此処にあるんだ!？」

魔法についての一般的な知識は知っている。本来はエルフを始めとした一部の魔法種族<sup>マジックユーズ</sup>の特権であったが神々が降臨して以来、魔法の素養が全くないドワーフのような種族でも、神の恩恵により稀に魔法が発現する事があるという話だ。

スキルと同様に狙って発現するのは厳しく、寧ろスキルよりも発現がまた難しい上にその効果も千差万別……という話をエイナさんから小耳に入れた覚えがある。

興味深い話ではあるものの自分には縁が無い話だと思っただけだが、まさか自分に……それも新人冒険者になって間もない俺が前触れもなく魔法が発現してしまうとは、誰が想像出来ようか。姿も名も知らぬ何処かの神の陰謀か？ と、思わず勘繰ってしまった。

言うまでもなく、魔法を強制的に発現させるという魔導書<sup>グリモア</sup>なんぞが其処らに転がっている代物であるはずが無いのは、その辺の事情に疎い俺でも直ぐに察せられる。

「それは——ワシの知神にプロメテウスという、以前オラリオに滞在していた神がおったのじゃが、この魔導書<sup>グリモア</sup>は其奴が「アルテナ」から他の本と一緒に寄越してきた代物でな。なんでも自分の眷属が初めて作成した物で、せっかくだからワシの自由に使って欲しいとの事じゃ。無論、作成者の許可を取った上でな。——ワシもついさっき手紙でその事を知って此処に来たまでじゃ。まあ、読んだのがお主であつたのは幸いと言えようぞ」

「……………ずっと遠くの国から、わざわざそんな超高価な贈り物を届けてくるって、どんな縁なんですか?」

普通なら自分の眷属にでも使うか売れば良いものの、それをぼんつとただ同然で別の神に差し出すとは太っ腹なのか、それともカーディナルに対し余程親交の縁が深いのか。

どちらにせよ、よくまあその作成者様が許可したものだ。手軽に創れる代物じゃないだろう、コレ。

「なに——ずっと古々の、旧き時代からの永き付き合いじゃよ。かつ

てはその先見の眼と秘密主義故に、あやつの突発な行動の尻拭いをさせられたものだが……この天上、地上において、ワシとの縁深き存在はあやつ以外におらぬ」

滅多な神付き合いをしない共通点を持つ両者が、互いに唯一無二の友神と認め合う関係だと。緋眼を綻ばせ、柔い表情と声音でそう語る。

「そうか、カーディナルと親しいんだから良い神様なんだろうな。でもせっかくの贈り物を俺が使用してしまっただけに良いのか？」

「ワシが持つておつても本棚の隅で埃を被るのがオチじゃ。なに、ワシの眷属に有効利用されているのならプロメテウスも本心であろう。心配は無用じゃよ。今更後悔しても手遅れじゃし有り難く使うが良い。その魔法は今後の戦いでお主の力となろう、ベルよ」

——こうして、思わぬ廻り合わせであったが俺は自分だけの魔法を習得したのだった。

「それにしても俺が魔法を使える日がくるとはな……名前は「ウエポン・マスター」か。えーと、詠唱は瞑目せしさあ「ド阿呆う!!」「ゴツンツ！」

何も考えず詠唱を口に出しかけたその瞬間、突如カーディナルの罵

声と一緒に頭上に振り下ろされた硬質の物体が脳天に直撃炸裂した  
のであった。

それはカーディナルが普段持ち歩いている杖であった。子どもとは思えぬ力で振り下ろされたその杖は、しかし見た目以上の重量と硬さを併せ持ち？後に聞いた話によると、件のプロメテウス様がカーディナルの為に特別に作成した特注の特殊武装<sup>スベリオルズ</sup>、らしい？、恩恵により日々成長している俺の耐久を難なく突破、床へと撃沈させたのだった。

「なっ……!?!」

床に叩き落とされ悶えるような苦痛が後からくるも、この時点で俺の意識は揺れに揺れ、闇の間へと手放される間際であった。

「魔法の詳細な効果も解らずに詠唱を口に出す者がおるか！ 迂闊に言うのではない。何か起きたらどうするのじゃ!! ……まあ魔法の内容からして、詠唱しても特に支障は無いかもしれんがな」

り、理不尽な!!

その一言を最後に、俺の意識は再び闇の海へと漕ぎ出すのであった。



## 第26話 剣の記憶

オラリオの真上を照らしていた太陽が西に傾き始めて数刻が経った午後、迷宮ダンジョンと地上を繋ぐバベルの一階では今日も大勢の冒険者達が行き交い、賑わいを見せる平常の光景。その人混みから避けるようにして離れた隅にヒューマンの少年と狐人ルナールの女性の二人が立っていた。

「どござ」

そう言つて少年は交差する形で背負つていた長剣の一つを鞘から引き抜き、目の前の女性に丁寧に差し出す。

柄から剣先に至るまで黒一色というオラリオでもあまり見かけない珍しい剣を、女性は慎重に受け取ると一言も発さずにじつと見つめ、時折剣を掲げては角度を変えて調子確かめる。

細く、薄い華奢な形状から工芸品にも見える黒剣を携える立ち姿は幽艶であり、女性の優雅な光沢を放つ絹糸に似た白い髪に気品ある容貌と、やや灰色がかつた桜色の和装姿が相まうことで女神達の華麗で神々しい美とはまた異なる――妖しくも幻想めいた美しさが、狐人ルナールという雅で神秘的な種族を表している――ように少年には見えた。

壁際に設置された魔石灯の光を反射しない、むしろ取り込むかのような黒き刀身に女性は自身のほっそりとした人差し指の腹と刀身の腹部分を触れ合わせ、スツと滑らし線を引く。そしてポツリと、静かに呟いた。

「ちよつと見ない間に、ずいぶん楽しんできたようね」

黒剣―エリユシデータとの数日ぶりの再会に、コウジロ・凜はクスリと微笑むのであった。

個人的な都合と主神のお詫びにより万書殿の作業を免除され、一度教会ホームに帰宅した少年はダンジョンに行く為の装備を整え、バベルに向かった。そして、いざ『穴』に入ろうと少年が長大な螺旋階段に足を踏み入れたその時、ちようど探索帰りの途中であつたコウジロ・凜とばったり会つたのであった。

互いに軽い挨拶を交わすと、彼女はせつかくだから少年が背負っていた長剣―自ら製作に携わったエリュシデータの様子を一目見たいと言ひ、その申し出を少年は快く受け入れた。

―そして、冒頭に至る。

「はい、ありがとう」

感謝と共に返却されたエリュシデータを受け取り再び鞘に納める。カチンツと短く涼やかな音を聴き、背から伝わってくる愛剣の重みに安心感に似たものを感じていると、凜さんはご満悦の表情で感想を述べた。

「悪くないわね。剣として存分に振るわれていて、丁寧に扱ってくれているのが伝わってくるわよ。貴方も前より成長してるようだし、その子の目に狂いは無かったってところかしら。フフツ…剣に目は無いけどね」

「見ただけで分かるんですか?」

軽い茶目っ気を出し、優しい気な笑みをエリュシデータに向ける彼女に俺が聞くと「ええ」と頷き返して語った。

「自分が製作に関わってる作品なら一目瞭然よ。特にエリュシデータは少しばかり主張が強い性格だから尚更ね。それに…何て言うか存在り方が変わったのかしら? 意思がはっきり感じ取れるの。私が所持していた頃はその辺がもっとおぼろ気だったと思うわ。」

「意思、ですか……」

そう言われて片手を背後に回し柄を軽く握ってみれば、大して力を入れて無いにも関わらず握りと手の内が磁石のように引かれ合い、自然とくっ付き合ってしまう。だが彼女が持っていた時はそのような事は一度も無く、普通に大人しく手に納まっていたという。

真意は解明剣のみぞ知るのだろうが、たとえ話す言葉は無けれど確かに、この解明剣の存在感と意思は担い手の俺にしっかり伝わってくる。それをこの数日で何度も俺は味わった。

「エリュシデータのお陰でダンジョン攻略はとても捗っています。今

はまだ、こいつの性能に甘えています。俺自身の腕をもっと上げて完全に力を引き出せるくらい強くなってみせますよ」

「そうね。貴方達ならそう遠くない未来、このオラリオでも有数の冒険者になることも可能な筈よ。その調子で頑張って頂戴ね」

少年の決意ある言葉を聞き、狐人の妖鍛冶師は子を見守る母親の気持ちで、一人と一つの剣を微笑ましく見つめるのだった。

「ところで……。ちよつとエリユシデータについて聞きたいことがあるんですが、構いませんか？」

「呼び止めたのはこつちだし、別に構わないわよ。何かしら？」

「はい。実はエリユシデータの歴史……いや、作製に使われた素材について知りたいんです」

「素材？」と不思議そうに聞き返す凜。てつきりエリユシデータの能力についてかと思っていた彼女だが、少年の質問を受けて記憶を振り返り、自身の知る限りの情報を思い出す。

「実は素材の大半はエルフのアイテムメーカーが用意してくれたものだから、私も良く知らないんだけど……。そうね、まず最初に説明するとエリユシデータは少し特殊な造りをしているの」

「特殊な造り？」

「ええ。色が黒だから少し分かりにくいけど、刀身部分が剣の刃と腹……それぞれ別々の素材で構成されていて、それらが互いに組み合わせさせた造りなの」

通常、というか一般的に武器を作製する際には金属等の材料を熱し、ハンマーで鍛える鍛造方法が主流である。そして鍛え上げられた武器を研磨して刃を付ければ立派な武器が出来上がる訳だ。

エリユシデータはよくよく刀身を見ると、薄い腹部分は少し透けた黒水晶モリオンのような黒ではあるが、それを囲む刃の枠部分は艶マツトブラックの無い純黒だ。てつきり俺は光の反射具合が異なっているだけだと思っていたのだが、どうやら違っていたらしい。

「あの人が言うには昔、当時のオラリオの最高派閥が今の二代派閥じゃなかった時代に、ある日ダンジョンの深層に出現したモンスターを討伐して入手したドロップアイテムが素材らしくてね。それを私

が妖術を加えて加工したり、あの人が他の素材と混ぜ合わせたのを接着したことで、今の形に出来上がったのよ」

剣の硬き心材を為すは、攻防一体の結晶を自在に生み出す白竜のクリスタライト竜晶鱗塊。

鋭き刃を為すは、エルフのアイテムメーカー自作の魔導人形の素材を流用した製法不明の特殊金属と、竜骨の姿をした異形のモンスター  
の爪。

これらを元にエリユシデータは形造られ、後は凜さんの家に代々伝わってきた黒宝玉と呼ばれる月嘆石が詰め込まれて創造された。

「大体こんなところかしら。改めて考えてみるとあまり聞かない素材を使っているわね…」

「そうですか、教えてくれてありがとうございます。」

予想以上にエリユシデータの成り立ちについて聞いた俺は頭を下げる。そして凜さんにお礼を言っ別れ、ダンジョンへと向かった。

~~~~~

さて……ここなら他の冒険者もいないし、モンスターも弱いから魔法を試すのに良いかな？

現在、俺がいるのはダンジョン3階層。正規ルートから外れた場所にある広間の付近には今のところモンスターと冒険者の気配が存在しない場所だ。

ここに来た目的は勿論、万書殿で偶然発現した魔法——「ウェポン・マスター」の効果を確認することだ。

名称と効果内容から察するに元となったのは武装完全支配術で間違いない筈だ。

しかし内容は概ね似ているが、あちらはどんな武装でも自由に行使できるものではない。武装と主人、両者が互いに通じ合っ始めて発動が可能な術技なのだ。その点、「ウェポン・マスター」はどうなっているのか、また今背負っているエリユシデータと兎剣はどのような作用するのか詳しい検証をする必要がある。

エリユシデータを鞘から抜き、覚えたての呪文―魔法の第一段階を詠唱する。

「とりあえず、まずは強化から試すとするか。――【瞑目せし先は夜淵の宙そら。降り立つ底は夜風の原因――】」

初めてにもかかわらず、まるで以前から知っていたかのように自然と次の詞が浮かび、滑らかに口が回る。

「なれ汝よ成れ、青薔薇の眠りより再臨、凍てつく氷枢から再顕せよ――エンハンス・アーマメント！」

唱え終えるのと同時に淡い白光がエリユシデータから発生する。瞬く間に全体を覆い、光は一瞬で消えた。

「成功…したのか？」

そう言ってみたものの、エリユシデータには魔法を発動する直前と何ら変わった様子が無い。何かしらの変化が起きるかと予想していたが、少し光り輝くに留まったただけであった。

発動に必要な魔力が足りない？ ならその場合、俺の精神力マインドが底を尽きてしまう筈だ。特に何ともないぞ

体力とは異なる精神力マインド。ゲームで言えばMPに相当するそれは消費し過ぎると精神疲弊マインドダウンをすると聞いているが、体に不調は感じられない。なら他に問題が。発動には詠唱と精神力マインド以外に別の要素が必要なのだろうか？

もしかすると…：イメージ力の問題か？

武装完全支配術の場合は武器の元となる素材、前世とも言える情報を使用者が把握して初めてその真価を発揮する。エリユシデータの素材は凜さんからある程度聞いたものの、伝聞だけの姿も名も知らぬモンスター…それも複数からなる素材の情報を具体的に想像するは…：うん、無理だ。

「まあまだわからんさ。エリユシデータコイが特殊なだけかもしれないし、次だ」

一旦エリユシデータを鞘に納め、次に兎剣―「ウサたん」なる珍妙なネーミングの付いた剣を取り出す。素材の情報を一切知らないという点ではこの剣も同様だが、こちらはエリユシデータと比べれば

至って「普通」の剣？銘を除く？だ。試すと違いがある可能性もある。

再度詠唱をして、今度は兎剣を対象に魔法を発動する。

そして結句を唱え終わり、先程と同様に剣に淡い光が灯り全体を包み込むとあっさりと消滅する——ここまででは同じだ。

—しかし—

？ツ！ これは…？

不意に、頭の中に一つのイメージが流れ込んできた。

小さい、といっても小人バルウムと同サイズの大きさをした一匹のモンスターだ。全身を覆うのは白い光沢がある硬質な毛皮—そう、丁度俺が身に付けている軽装鎧ピジョンギチと似ており、円らかな瞳が紅玉ルビーのように瞬く。

頭部に長い耳が生えるその姿は、一言で言えば—「兎」であった。

「今のは…：兎剣こいつの記憶、なのか？」

何のイメージも抱いていないにも関わらず、先程とは明らかに違う現象。手元を見下ろせば、兎剣には消えたはずの白い光がうつすらと刀身を纏っていた。

そして—何よりも少年には、自分と兎剣との間に微かに繋がり—魔力の経路パスが生じたのを、直感的に感じ取った。

くくく

オラリオが誇る、世界最大規模の大図書館—『万書殿』

公ではギルドが管理している公共機関の一つとされているが、実態はとある賢神が権利を保持する所有物でもあった。賢神は普段、オラリオの外れにある住処教会で暮らし、其処が賢神のファミリアの本拠地ホームとされている。しかし、あちらが生活上における拠点だとすれば、実質この万書殿こそが、賢神の…彼女のファミリアの活動における真の本拠地ホームと密やかに云われているのであった。

「うむ、ご苦労じゃったなフェルズよ。忙しい中、急な用件に答えてもらって済まない」

万書殿にある一室―執務室で、この大図書館の主―カーディナルは来訪者に労いの言葉を掛けた。彼女の後ろの壁には純白の生地に翼を大きく広げた鳥、彼女の髪と瞳と同じ色をした線で描かれた、燃え上がる炎を彷彿させる緋の鳥の織物タペストリーが飾られていた。

賢神の象徴―カーディナルファミリアの記章エンブレムを背景に佇むカーディナルに対し、全身を黒のローブで覆った来訪者―フェルズは恭しく一礼する。

「いえ。大した手間ではございません、カーディナル卿。そして、こちらがご要望された―ソーマ・ファミリアの内部資料です」

フェルズはローブの内から、幾枚かの羊皮紙が重なって巻かれたスクロール巻物をカーディナルに手渡す。ウラノスの指示の下、秘密裏に動くゴースト幽霊職員―フェルズ。

今日、ギルドでも知る者は極一部である彼、彼女？がカーディナルを訪れたのは彼女からの依頼、〃ギルドで確認されている限りでも良から、ソーマ・ファミリアの情報を持ってこい？意識？〃を受け、ギルドが管理している資料の複製書コピーと自身が持つ情報のそれを、わざわざ自分の足で持ってきたのだった。

フェルズの存在を知る数少ない神物の上に連絡を取り、動かす手段をも持つカーディナル。彼女とフェルズの間を一言で述べるならば同僚、又はかつての上司とその部下であり、ギルドの主神―ウラノスに仕える者同士だ。とある一時では、フェルズは彼女の命を受けて活動していた頃も存在していた。

オラリオで絶対中立の立場を一貫するギルド。しかし、その裏では秘密の繋がりが存在しない訳では無いのだった。

「ところで此度は一体どうなされたのですか？ ソーマファミリアは数こそオラリオの上位に入るものの、御身の派閥から見れば大して脅威にはなり得ません。何か問題でも？」

「いや、なにワシのファミリアの新人がきな臭い団員と組んでいてな。万一を考えて、対処しときたいのじゃよ。それに近頃巷ではソーマの

団員がトラブルを起こしていると良く耳にするからな。その辺り、ギルドはこの案件をどう考えているのじゃ」

「何らかの検討はされております。罰則ペナルティを与えるとしたら罰金か、活動の自粛あたりになるでしょう」

「果たしてそれだけで済むかのう。お主が調べてきた資料によると、裏で色々と動いているようじゃないか」

執務机と一緒に置かれた椅子に腰掛け、受け取った資料に素早く目を通し頭に入れるカーディナル。フェルズがもたらした情報にはソーマファミアの大まかな活動内容以外に、他派閥からの怪しげな依頼を多く受けていると記載されていた。

「使い魔を寄越し、内部を覗いたところソーマファミアが販売している酒、神酒―ソーマには製造に当たり多額の資金が必要とされており、その為に団長ザニス・ルストラの指示を受けて団員達は資金稼ぎに躍起だそうです。」

特に、金を多くもたらした者には褒美としてその神酒を飲む権利を与えられる事が起因でしょう。最早事実上、ソーマファミアの運営はソーマではなく、この男が握っていると言えるでしょう。それ故に、ソーマファミアは多額の金次第では何事にも手を染める、最も卸やすいファミアとされています」

ただひたすらに、唯一の酒造り趣味のみに没頭しているとされるソーマに代わって、団長のザニスが主にファミアを取り仕切り構成員を動かしているという。

フェルズの話聞いて、カーディナルはソーマファミアの現状を悟り、深いため息をついた。

「このオラリオに地をつけてはや千年、今まで数多くの神々共を見てきたが、己の恩恵が下界に与える影響力を最低限、考慮しても良からうに。まあ、そもそも娯楽と未知を目的に降りた者が大半を占めるのじゃから、仕方ないと言えればそれまでじゃがな……」

窓に目を向け、過去に神々が引き起こした厄介事トラブルの対処に幾度も追われた事を思い出して遠い目をする賢神に、自身も覚えがあるフェルズはフードの中で苦笑する。如何に全知全能と謳われる神と云えど

も、誰もが神格を伴っている訳ではなく、暇を持って余した神々の余興は時に、モンスターの脅威よりもたちが悪いのであった。

「いっそのこと、ギルドに戻ってみますか？　そうすればオラリオが抱えている諸問題も少しは改善できるやもしれませんよ」

「冗談拔かせ。数百年前ならいざ知らず、今の儂は一ファミリアの主神じゃぞ。もとより、儂が神々から無用な注目を集めるべきでない存在なのは、お主も承知の上であろう」

「御言葉ですが、それは既に手遅れでしょう」

ここ十年間で、カーディナルの存在はある一人の眷属が引き起こした話題により神々から大きく注目され続けてきたことを言及するフェルズだが、近い将来にまたしても、カーディナルの眷属が前代未聞の事をやらかすとは、この時、賢神同様に知る余地は無かつたのだった。

「わかっておる。…それはさておき、ダンジョンに潜む不穏分子について現状どうなっておる」

無然とした顔付きから一転、カーディナルの顔は重々しいものへと変わる。幼い少女の顔に似合わぬ真剣な表情に、フェルズもまた緊張感を纏って報告する。

「怪物祭で出現した食人花が先日、18階層のリヴィラの街に大量出現。モンスターはロキファミアを筆頭にその場に居合わせた冒険者達により討伐されましたが、その際に首謀者と思わしき調教師には逃げられました。」

また現在ダンジョン24階層ではモンスターの大量発生が起きており、関連の疑いがあります。既に異端児達にも被害は及んでおり、最早彼らだけで対処するのは難しく、事態は深刻の一途を辿っております」

怪物祭に起きたモンスター脱走事件とは別に、オラリオで暗躍する怪人達と闇派閥が起こした事件を、ロキファミア同様にカーディナルもまたウラノスと共に独自の調査をしていた。

尤も、流石にロキファミア程の戦力と人数を持ち合わせていない為に捜査には限度があったが。

「事態解決に向けて冒険者達を派遣する予定ですが、その際にフリーゼ殿のお力添えをお願い出来ますでしょうか？」

「うむ、わかった。調査隊にはリセリスも同行させよう。しかし何だな、最近どうにもダンジョンの動きに異変が生じつつあるのう。……うーん。これは一度、あやつを呼び戻して、調査するべきか……」

「それは、あの御方ですか？」

「ああ、戦力としては申し分無い。何処をほつつき歩いているのかは知らんが、必要とあらば何時でも呼び出し可能じゃ。例え世界の果てじやろうと、あやつフレイヴァーンの騎竜ライザールンならばオラリオまでひとつ飛びじゃからな」

そう言つてカーディナルが外に目を向ければ時刻は既に夕刻、空は焼けるように赤く染まる中、遠い地の果てではじわじわと、夜の帳が下ろされつつあるのであった。

~~~~~

ダンジョンに潜り、ウエポン・マスタリーの実験を行つてから数刻が経つたが、モンスター相手や剣以外にナイフや投げ針を用いて検証した甲斐はあり、以下の事が判明した。

・『強化』の効果時間はおよそ10分間。対象となる武器以外のコートと軽装鎧にも発動を確認したが、引き出す情報が少ないのか兎剣と違いイメージは現れず、効果時間中はうつすらとした光が覆うのみ。ナイフや投げ針もこれと同様。

・変化したのは鋭さや耐久力等の上昇。但し、兎剣はそれ以外に自身の敏捷が上がったことから、掛ける対象によつて効果に違いが生じる可能性あり。

・消費する精神力マインドはそこそこ。それ以外に武装の体力のようなものを消費し、ナイフは連続して3回、投げ針は2回発動するとバラバラに崩壊した。

? 大体、判明したのはこれくらいかな??

予め購入しておいたマジックポーションを呷り、頭の中で情報をまとめるとめる。

効果としては悪くないであろう。詠唱が必要とはいえ、場合によっては強化された武器は強力な一撃となり、コートや鎧の防御力も格段に上昇する。当然、使いどころを見誤れば逆に自身の破滅を招く危険もあるので使いすぎには注意が必要だ。ダンジョン探索を考えると戦闘中でも詠唱可能にしていきたいが、それは少しずつ練習していくとしよう。

—問題は……

「やっぱコイツだけ、何も変わらないな—」

ある意味、一番効果が気になっていた黒剣—エリユシデータ。何度か魔法を掛けたものの結局、基本となる変化すら起きずエリユシデータは俺からの干渉を遮断して、沈黙を保ったままだった。

俺自身の力量が低いのが故なのか、あるいは—今はまだその時ではないというエリユシデータの意思の表れ—なのか、その真意はエリユシデータしか知らぬであろう。

? ?とりあえず、そろそろ上がるとして最後にこれだけ試してみるか? ?

兎剣を取り出し、詠唱を開始する。既に『強化』での検証は終えた。だが、ウエポン・マスタリーにはその先がある—

「エンハンス・アーマメント」

発動した証である揺光が兎剣に灯り、俺との間に魔力で繋がった経路パスが生まれる。

そして—俺は最後の詠唱を唱えた。

「リリース・リコレクション!」

追加詠唱—その効果は『記憶解放』、それは—前世である武装達の在りし日の姿の顕現である。

詠唱を終えると同時に、兎剣の光がそれまでの弱々しいそれではなく、閃光のように強く輝いた。

—ッ!

視界一面を覆う程の光が兎剣から溢れ出したことで咄嗟に俺は目を瞑り、ほんの少し握りが弱くなったその一瞬に、柄は弾くようにして俺の手から離れた。

光はすぐに収まり、恐る恐る俺が目を開くとそこには—

『キュイツ』

—目の前に俺の下半身程の背丈をした、可愛らしい鳴き声を上げる一匹の生き物

『兎』がちよこんと立っていた。

## 第27話 ファミアリアの呪縛

「ふあゝあゝ」

のどかな空の下、往来もそこそこのストリートを歩いていた時だった。通りを隈無く照らす柔らかな陽ざしに当てられたのか、不意に開口した喉元から締めまりの無い、間延びした欠伸が洩れ出た。

「なんか眠そうだね。昨日、帰りが遅かったけどダンジョンに行つたの？」

陽の光の刺激を受けて、こそばゆい眼を指先で擦まなつていると自分の隣を歩く人物から聞かれたので頷いて答える。

「ああ、ちよつと魔法を試しにな。効果を確かめるのに夢中で遅くなつたよ」

「えっ、もうベルも魔法を使えるようになったの!? あー、だからナーザのところでマジックポーションを買っていたんだね」

魔法と聞いて、リセリスは驚きで目を丸くする。道中立ち寄つた【青の薬舗】でのマジックポーションの購入は俺用ではなく、他の誰かの為なのかと思つていたと言う。……そういえば、リセリスにはまだ昨日の事について教えていなかったな。

「経緯は偶然だが……昨日ステイタスに発現してな。〃も〃つてことはリセリスも魔法が使えるのか？」

「うん、一つだけね。ベルつて恩恵をもらつてそんな経つてないでしょ。Lv1で魔法を習得するなんて凄いことだよ！」

「お、おう……ありがたう……」

そんな大げさな……と思うも、それも当然かもしれない。元来魔法の素養があるエルフならばともかく、適正が高いとは云えないヒューマンの俺が恩恵を得て僅か数週間で発現したのだから。

とはいえ、そのきつかけが魔導書グリモアの力のお陰であることを知つている俺からしたら少々決まりが悪いもののだが、感嘆する団長様の姿を見て、ここは素直に受けとつて礼を言った。

こうして今朝はリセリスと一緒に大通りを歩いているが、普段の俺達はホームを出る時間や帰りなど結構バラバラである。俺は日々

ンジョン攻略に勤しみ、リセリスは探索以外にもファミリアの団長としての務めを果たしている——訳では無いが、第一級冒険者の肩書きもあって指名依頼<sup>クエスト</sup>が舞い込む事も珍しくなく、数日の間ホームを空けることもざらにあった。

今日はリセリスの冒険者仲間達とバベル前の円形広場で待ち合わせをしているらしく、「折角だから一緒に行かない？」と誘われて二人でバベルに向かっていた。

なお、カーディナルは今朝から何用か出掛けていた。

「そうだ、昨日万書殿でリセリスの事を知っているエルフの女性に会ったんだ。冒険者仲間って言っていたが」

「あ、それってシオンのこと？　へえー、もう会ったんだ。この前ベルの事を話してみたら、会ってみたいって言っていたんだよ」

「ああ、聞いたぜ。後リセリスは普段、別ファミリアの人達とパーティを組んでいるんだってな。彼女達とはどれくらいの付き合いなんだ？」

少年の問いにリセリスは虚空を見上げ、うーんと考え込む。

「皆と出会ったのはボクがまだ駆け出しだった時で……、カーディナルから恩恵を貰って2ヶ月ぐらい経った頃かな。ダンジョンを探索してたら、シオンや他の皆がモンスターの群れに襲われてたところを見掛けたのが始まり——」

リセリスが見たのは5人で構成された冒険者のパーティと、それに襲い掛かる夥しい数のモンスターの集団だった。どうやらどこかの冒険者にモンスターの群れを擦り付け<sup>トレイン</sup>られたらしく、更に運の悪いことに半端に傷ついたキラアントのフェロモンに引き寄せられて大量のキラアントが押し寄せる始末だったという。

逃げきれなかった彼らは必死に応戦するも、多数に無勢で危機に陥っていたところをリセリスは加勢、一抹の逡巡を抱くこと無く危地へと飛び込んだ。そうして自分達よりも若く、小柄な少女の獅子奮迅の働きに彼らも奮起して全力奮闘した結果、なんとか全員無事に生き残って、地上に生還を果たしたのだと言う。

「カーディナルから無茶するなって怒られちゃったな——で、そ

れ以来ボク達はパーティを組むようになって皆でダンジョンの探索を一緒にするようになったんだ」

「そうして数えきれない程の苦楽と冒険を共にした現在——」

硬い絆で繋がった少女と彼らの活躍は次第にオラリオでも名高く知られるようになり、所属ファミリアが異なる混合パーティでありながらも、高度な連携と高レベルによる裏打ちされたその実力は上級派閥のパーティにも引けを取らない程に成長したのであった。

「カーディナルもそうだけど、このオラリオで皆との出会いが無かったらボクはここまで来れなかったなって、今でも思うんだ。ベルにもそういった仲間が出来るの良いね」

ニツコリと、太陽にも似たあどけない笑顔を少年に向ける。

「……………そうだな」

そつと、少年は少女から目を離して空を仰ぐ。視界には白雲が気ままに漂う蒼天が広がり、1日の始まりを告げる朝日は既に東の市壁からすつかり顔を出していた。

白髪の少年にとつては幾度も見た光景あおぞら、されど自分の知る世界そらでは無い蒼空に、黒衣の剣士は秘めた郷愁——もういない……仲間達への想いを馳せる。

微かに吹いた涼風に白い髪が揺れ、深紅ルベライトの瞳の内には白亜パベの神搭ルがあつた。

~~~~~

清々しい快晴の空の下、完全武装した多くの冒険者達が行き交う中央広場セントラルパーク——その周囲を囲むようにして植えられた広葉樹の一角の出来事だった。

木漏れ日が降り注ぐ木陰の下、昼寝するには最適な場所だろうな——とアホな考えを抱く者もいるだろうが、生憎と三人の男に囲まれているリルカにはぐうたらと呑気に昼寝なんぞするよりも、一刻も早くこの場から逃げ去りたい気分であつた。

「いいから、さっさと持つてるもんを寄越せつ、アーデー！」

「ですから、本っ当にもうないんですっ！　ヴァリス お金は持っていないせんっ！」

？ああもう、しつこい!!?

声に出さず、心の中でリリルカは悪態をつく。少し前、リリルカが白髪の冒険者を待つていたら、いきなり彼らが押し寄せるなり有り金を寄越せとのたまってきたのだ。渡す程の金など無いと、必死に彼らを説得しようとするものの、金の亡者である彼らにはリリルカの言葉に耳を傾けようとする素振りにはまるで無く、むしろより声を荒げて強請を繰り返すのみであった。

日頃このようにして、彼らがりリルカから稼ぎや金品を奪い取るのは珍しいことではないが、今日は普段に増して強引に迫った。これは昨日行われたファミリアの集会で発表された、現在納められた上納金の上位の金額とカヌウらが集めた金額とで差がついてしまい、その差を埋める為にカヌウらは必死なのだろうとリリルカは推測した。

？つい先日リリの稼ぎを奪った癖に、まだ絞り取ろうなんて、やっぱり冒険者なんて大っ嫌いです!?

ここ最近、風変わりな白髪の冒険者と組んでいた影響で秘めた憎悪は少しばかり薄らいでいたが、今にも力づくで奪いかねないカヌウ達を前にして再認識する。本来、サポーターである自分の周囲にいる冒険者というのは粗暴な連中であることを。

……あの少年も自分の裏稼業を知ればきつと、彼らと同じ冷めた目で自分を見下すだろう。

とはいえ今はまだ、少年に知られる訳にはいかない。怪しまれてはいるだろうが、まだ直接的な行動に出ていないお陰で自分を雇ってくれている。金払いが良い彼にはまだまだ自分の目的の為に稼いでもらいたいのが本心だ。万一この場を見られれば、正体を勘繰られて彼の方から縁を切られかねない。ならば彼が来るまでにこの現状を何とかしたいところだが、周囲を歩く冒険者達は面倒事はご免だと、ちらりと視線を投げ掛けるだけで足早に立ち去ってしまう。

孤立無援の状況に、リリルカは必死にこの場を切り抜ける打開策を考える。一方、中々に強情なりリルカにカヌウもいい加減苛立ちが増

してゆくが、それを堪えて低い声で脅す。

「お前がそんな態度を取るなら、こっちも考えがあるんだぜつアード。俺達があのがキにお前の全てをバラしても良いんだぞ。……いや、いつそ嵌めてやつても良いかもな……」

ニタリつと口端を歪ませ、ボソツと小声で呟くカヌウの目を見て、リリルカは青ざめる。自分の正体がバラされることではない。金の為——いや、『神酒』^{ソーマ}を得る為なら本気で少年の命をも奪うことを辞さない事を、狂気に淀むその目が物語っていた。

——正気ですか！

そんなこと、下手すればカーディナルファミリアにソーマファミリアごと滅ぼされかねないカヌウの言動に、そうリリルカが叫ぼうとした——その瞬間だった。

「ちよつと、そこにあんたら！」

突然の呼び声が耳を打ち、バツとリリルカとカヌウ達は声のした方向を振り向く。視線の先には二人組の冒険者が立っていた。

「さっきから大の男がその子を取り囲んで、無理矢理迫っているけどみつともなくないわけ？ その子も困っているでしょ！」

威勢良く、啖呵を切って男達を非難するのは若い、黒髪のダークエルフの冒険者だ。金属を使っていない道着ふうのゆつたりとした紫色の布防具を纏い、背丈よりも高い金属製の長棍^{クォータースタッフ}を担ぐ。女性にしては大柄で太い眉ときりりとした両眼、男勝りな口調で頼もしさを感じさせる印象から、リリルカは姉御のイメージを受けた。

「ちつ、うるせーな。こっちは大事な話をしてる途中だぞ、邪魔すんな。それにこいつと俺達は同じファミリアのもんだ。てめえらよそのファミリアには関係ねえ話だろ、首突っ込んでねえでダンジョンにでも潜つてろ」

カヌウの仲間の一人が舌打ちして苛立ち気に言う。確かに冒険者同士の、特に違うファミリアの揉め事というのはあまり関わるべきものではないのも事実ではある。

しかし、彼らもはいそうですかと引き下がらず、もう一人の冒険者が前に出た。

「ええ、確かに貴方のおっしゃる通り、違うファミリアである私達が貴方がたのいさかいに介入するのは褒められた話ではないでしょう」

一步も引かず、毅然とした態度で話すのはエルフだ。エルフらしいひよろつとした細身の体に、髪色と同じ黄銅色の服の着てその上に真鍮色のライトアーマーで包み、手にはこれまた恐ろしく長いスピアを携えていた。相方とは違って鉄色の丸眼鏡を着けたその細い顔立ちには頼り無さげに見えるが、背筋を伸ばし堂々と話す姿からは到底その印象は見受けられなかった。

「なら、さっさと――』ですが！』」

男の言葉を強い口調で遮り、エルフの青年は続けた。

「失礼ながら少し前から見させてもらいましたが、貴方がたの行いは無視するにしても少々見逃せないものが多々ありました。

貴方がたがその子に何の用があるのかは存じませんが、これ以上この公共の場で事を荒げるといふのなら……、このオラリオに住む者の一人として、見逃すことは出来ません」

眼鏡の奥にある両の瞳には強い意志が込められており、その視線の圧に押されたのか、男は思わずといった感じにたじろいだ。

「あの装備、この雰囲気、この人たち上級冒険者だ。……それもかなり高レベルの？」

会話中、ずっと二人を観察していたリリルカはそう推測する。長い間、数多くの冒険者を見てきたリリルカにはすぐにわかった。この二人がそこらにいる下級冒険者には到底出せない「圧」を纏っているのを。

確か名は……とリリルカが脳内の上級冒険者名簿を捲っている間に、カヌウの三人いる仲間の一人が先に気づいた。

「っ！ まさかお前ら^{スプリガン}と^{レフラカーン}創工精、第一級冒険者か!？」

二つ名が、男の口から零れた。第一級冒険者という思いもよらなかった事実、カヌウともう一人は両目を見開き驚愕を露にした。

「クソっ……おい、どうするカヌウ？ 流石に上級冒険者二人は分が

悪いぞ」

「……しかたねえ、一旦出直すぞお前ら」

風向きが変わり、不利を悟るやいなやカヌウ達は少女を置き、そそくさと足早に立ち去った。

然しものカヌウも、上級冒険者を前にして強引な手には出れないよ。うだ。実力がものを言うこのオラリオではカヌウ達、ならず者が弱者相手に幅を利かせる事は珍しくはないが、所詮Lv1に過ぎない彼らがより上位の冒険者……それも第一級クラスの強さを誇る彼らと事を構えれば、痛い目を見るのはこちらだと判断してのことだろう。

カヌウ達が群衆の中に消えていくのを見届け、リリルカはホツと息をつく。その様子を見たダークエルフの女性が口を開いた。

「大丈夫？ 見てられなかったから口を挟んだけど、あいつらギルドにでも報告した方が良くないんじゃない？」

「ノリの言う通り、あの手の輩はしつこいものです。よそで被害を出しているかもしれないし、差し出がましいかもしれませんが、一度ギルドに相談して働きかけてはどうですか？」

「いえ、大丈夫です。ご心配は要りません。それよりも助けて頂きありがとうございます」

ペコリと、リリルカは腰を曲げて小さな頭を下げる。純粹に、こちらの身を心配してのアドバイスなのだろうが、ギルドに報告すれば彼らが自分の裏稼業についても暴露しかねない為、実行は出来ない。彼ら——いや、ソーマファミリアの呪縛から永久に逃げたいならば、主神自らが動くかファミリアを脱退するしかない、前者は特に望み薄だ。

——だからこそ、リリルカには脱退金——大量のお金ヴァリスが必要であり、早く稼がなくてはいけないのだ。

「ご迷惑をお掛けして申し訳ありませんが、リリは人と待ち合わせしていますので早く行かなければいけません。では、これにて失礼します」

そう言つて、この場を後にしようとしたその時だった。

「おおい、ノリー、タルー！」

リルルカの耳に聞き覚えのある、明るく快活な声が飛び込んできた。

「あっ、リセリスだ」

えっ、とダークエルフの眩いた名に反応して振り向くと、少女と少年の二人組がこちらに向かって来ていた。

第28話 思惑

? やつぱり、どこよりもオラリオが一番活気あるなあ……? ?

眼前に広がる人海―ヒューマン、亜人、獣人と多民族で構成された冒険者達の往来で賑わうバベル根元の広場を見渡し、リセリスは感慨に浸る。

子ども同然の背丈である彼女の視点から覗けば、当たり前前のように彼らが各々の完全武装した多様な姿で一挙に集う様は実に圧倒されるものがある。世界広しと言えど、この日常こうけいが見られるのはオラリオならではのと云えよう。世界で最も活気ある都市と謳われるのも頷ける。

実際、リセリスは師と共に世界を数年間旅した果てにこの地に居住してもう十年程になるが、何度見ても色褪せず彼らから滲み出る熱気を前にすると、リセリスは初めて迷宮都市オラリオに來訪した時のワクワクとした高揚を常に感じるのだった。

——とはいえ、

「えーと、みんな何処にいるのかな?」

その小さな背丈が災いして周囲の見通しはあまり良くなく、肝心の待ち人の姿を見つけるには些か不便ではあったが。

「どんな人達なんだ? 俺も探すよ」

精一杯背と首を伸ばし、きよろきよろとあちらこちら辺りを見回すリセリスを不憫に思い、俺も手伝おうかと声を掛けた。

「あ、ごめんね。じゃあ手伝ってくれるかな、割りと目立つ外見だからすぐに見つかると思うよ」

とりあえず如何にも歴戦っぽい装いをした五人組、という曖昧な情報ほうほうを元に広場を軽く見渡してみる。夕暮れの時間帯程ではないとは

言え、日が登った朝の広場にはそれなりの数の冒険者達が行き交っており、これからダンジョンに向かうパーティやソロ、同じく待ち合わせをしているであろう者達がちらほらと見受けられた。

(リリだったら、でっかいバッグで見つけやすいんだけどなあ……)

脳裏に小柄な体を軽く上回るサイズのバック目バック甲を背負った小人の姿が過る。そういえば彼女は何処にいるかと見回した矢先、タイミング良く視界の隅に見覚えのある大きなリュックを背負った小さな人影―リリの姿を捉えた。

ラッキーと思いつつひとまず合流しようと歩み寄ろうとしたが、彼女の周囲を見て立ち止まる。よくよく見ると側に見知らぬ二人組が佇んでいたのだ。両者共に背丈を上回る長柄の武器を携えた格好から冒険者だと判断した俺は、もしやと思念のためリセリスに振り返って聞く。

「なあ、リセリス。もしかして……あの人達か？」

「ん？ あ、そうだよ！」

指し示した方向に顔を向け二人の姿を視界に納めるとリセリスはパアツと明るげな笑顔になり頷く。五人組ではないのでどうかと思っていたが無事当たっていたようだ。思いのほか早く見つけられたのは僥幸と言えよう。何で一緒なのかは判らんが、後でリリにお礼を言っておかねばなるまい。

彼らに向かって歩み出す彼女に続き、俺も片足を踏み出す。

「おーい、ノリー、タルー！」

快活な声が朗々と広場に響き渡る中、彼らの名にピクつと記憶の一部に引っ掛かりを覚えるも、それが浮き彫りになるよりも早く時は進む。

「おはよう、二人とも。シオン達は来てないの？」

「シオンは今日、万書殿の用事で来れないとのことですよ。二人は途中でアイテムの補給に行ってますので僕達だけ先に来ました」

「まあそんなに必要な訳じゃないから、そんなに時間かからないと思うよ」

リセリス達三人が会話している中、俺はリリに近づき言葉を掛け

る。

「よっ、リリ。おはよう」

「お、おはようございますベル様。その……いつからこちらに？」

どこかソワソワと落ち着きがない態度で返すリリの反応を気にはなるが、とりあえず正直に答える。

「こつち来たのはついさっきだ。どうかしたのか？」

「いえ、ちよつとガラの悪い冒険者様に絡まれてしまっていたところをあのお二人に助けてもらっただけです。なので、ベル様がご心配なさるような事はありません」

どうもあまりこの話題に触れて欲しくない様子を見せる。何か言おうと口を開きかけるが、リセリスの呼び声が背中を打った。

「ベル、二人を紹介したいんだけどちよつと大丈夫？」

「どうぞ行ってください、ベル様。リリは待っていますから」

「ああ、……わかった」

リリにも促されたことで、一度リセリス達へと振り返る。

「丁度、二人が買い出しで居ないけど先に紹介するね。この二人はボクが普段組んでいる仲間だよ」

側で佇む二人に視線を向けると、最初に快活そうな褐色肌の女性が名乗った。

「オッス、ウチはダークエルフのノリン。アータル様んとこのファミリアの冒険者だよ。今いないけど後二人がウチと同じとこなんだ」

女性は最後にニツと笑みを加える。続いて隣で立つ丸眼鏡を装着したエルフラしき青年が名乗る。

「初めまして、エルフのタルケルと言います。今いませんが同じパーティメンバーのシオンとは同じテミス・ファミリア所属です」

ノリンさんにタルケルさん、両者とも年齢は二十代前半といったところだろうか？ どこか覚えのある響きと雰囲気併せ持つ二人に俺も自己紹介をする。

「どうも、カーディナル・ファミリアのベル・クラネルです」

互いに挨拶を交わしている彼らを、少し離れた位置でリリルカは沈黙を保ったまま見つめていた。フードの陰に隠されたその顔は暗く、重い表情で固まっていた。

「へえー、もう9階層まで進出したんだ！ リセリスもそうだったけど年齢に見合わず結構手練れなんだな。どう？ ウチらと一緒に潜ってみない？」

「よして下さいノリ、今日探索する場所は中層とはいえ下層手前ですよ。Lv1の彼に何かあったらどうするんですか？」

「わかってるって、タル。聞いてみただけじゃん」

『いつそ、嵌めてやっても良いかもな』

数分程前に脅しとして吐かれたカヌウの言葉が脳裏にこだまする。単なる戯れ言として忘れてたくとも、あの神酒の亡者が発した台詞はこびりついた汚れのように耳から離れない。どうしてか、かつて自分を優しくしてくれた、しかしある日突然忌々し気はこちらを見つめる花屋の老夫婦の冷たい目と、少年の優しい紅い目が脳裏で重なるのを幻視してしまう。

「流石に中層まで行ったのがバレたら最後、ウチのアドバイザーさんに大目玉食らっちゃいますね。ところで今いない二人、シオンさんは除くとして後二人はもしかして男性だったりしないか、リセリス？」
「そうだよ。良くわかったね！」

「何、重く受け取っているんですか！ 本当に彼らが実行したとしても彼らに利があるとは思えませんしベル様に通じるかも怪しい。寧ろベル様に私の裏稼業をバラされてしまう可能性がずっと高い……？」

彼らがどうなろうが構わないが、自分がとぼちちりを食らうのだけはご免だ。厄介事が起きないうちに少年とのパーテイ契約を解いて縁を切るべきか、このまま継続するか、どちらが自分にとって利があ

るのか迷っていると思考に集中し過ぎたのか、いつの間にか絶剣達と話を終えた少年がこちらに来ていたので一旦、問題を先送りにして思考を切り換えた。

「お待たせ、リリ。それじゃ行こうぜ」

「もう、お話は済んだのですか?」

「ああ、リセリス達はそのまま仲間を待っているそうだ。俺達はこのままダンジョンに行ってくれと」

「分かりました。それでは本日もよろしくお願いいたします、ベル様」
何時もの、人懐っこい声音を出して少女は返事する。害の無い、無力で真面目な愛らしいサポーターの役にリリルカは徹する。先を歩く白髪の少年の背中を追う中、少女はボソツと吐露した。

「そろそろ、潮時なのですかね……」

小さな呟きがフードより零れるも、聞こえた者は誰もいなかった。

~~~~~

少年がリセリス達と別れ、サポーターの少女と共にダンジョンへと向かう光景を少し前から彼らの遥か真上―バベルの最上階ですつと視続けていた者がいた。全面ガラス張りの都市全体を一望できる窓際に立ち、その真銀の輝きを湛えた目蓋を薄く閉じ、じつくりと少年の「内側」を凝視し続けるのは美の女神―フレイヤだった。

バベル内に少年の姿が視界から消えると彼女はそれまで一抹の變化すら見逃さない観察者の面持ちを解く。そして背後に備えられた肘掛け椅子に深く腰を降ろすと、美の女神は物憂げな表情でハア―と小さな嘆息を溢した。

「ダメね、まるで変化がないわ」

「ここ最近、半ば習慣のように少年―ベル・クラネルの魂を観察しているが、彼の輝きに目立った変化は見受けられずにいたのだった。

思い出すのは相反した矛盾の色。曇りの無い黒水晶の如き黒に満ちる世界の中心で冥い深海の奥底に沈む白真珠ホワイトパールのような、或いは透いた夜空の果てで星屑のように小さく、でも確かに白く煌めく揺光。

それは初めてあの子の内側を覗いた時と同じ、それこそ騒乱に終わった怪物祭の戦い、あの子がシルバーバックを討伐した時でさえ何ら変わらなかつた純白の輝き。

「日々成長しているのは確かなのに、未だに光は遠いまま、輝きも初めて見た時から全く変わらない。……これは想定外ね」

予想外の困惑と、望む光景が見れぬが故の多少の苛立ちが混じり合つた女神の独白が広い室内に流れる。

長い神生で数えきれない程の人間の……時には英雄と称される魂をも見てきたフレイヤではあるが、少年の奇妙なまでに変わり映えの無い魂に不満を吐露せずにはいられない。

少年の短期間での攻略速度、その戦闘力が目を見張る程のものであることは既に隠密に優れた自らの眷属、傘下の男神達の子ども達の調査によつて知らされている。彼らの報告書にはどれも少年がこのままペースでいけば1ヶ月も経たない内に中層手前にまで進出する可能性が高い、とそう最後に締めくくる程の驚異的な成長だという。

しかし、それに反して少年の光に変化の兆しは訪れず、フレイヤの望む輝きは淡いままだつた。

——まるで、揺り籠の中で眠りに就いている稚児のようね。

ふと、漆黒の帳に包まれて深い眠りにつく子兔のイメージが浮かび、その愛くるしいイメージとやたら活発に動き回る本人とのギャップに失笑してしまう。お陰で積もつていた鬱憤が和らぎ、冷静に思考することができた。

？考えられるとしたら、いくらステイタスが日々成長していようとあの子自身からしたら特段変化をもたらさず程の……それこそ魂に影響を与える経験ではない、ということかしら？？

多種多様な子ども様々な魂を視続けてきた経験則からフレイヤはそう、推測する。オラリオの冒険者達はモンスターが跋扈する迷宮での戦闘を通してステイタス——心身を鍛え上げていく。オラリオの冒険者が都市外の恩恵持ちよりも段違いの強さを保持する由縁だが、『器』の成長と『魂』の輝きが常に釣り合うとは限らない。

元より不変たる神々とは異なり、地上を生きる者達の魂は不定。些

細な切っ掛けでそれまで燦々としていた輝きが陰りを帯び、鮮やかだった色彩が濁ることもあれば、たった一つの出来事——「出会い」でその輝きを増す者もいる。神の視点から見れば一瞬に等しい生涯でどのように移ろいでいくか、然しものフレイヤもその道筋までは見通せない。

—故に、いつの時代も神々は未知ひとに惹かれ、魅せられ、焦がれる。

フレイヤに知る由が無いのも無理はないが、白髪の少年—キリトは前世の記憶を保持する転生者。仮想の世界と云えど、生涯を通じて培ってきた戦闘勘は決して都市の冒険者達に劣らず、剣を振った回数も潜り抜けた死線の数も並みの冒険者とは比較にならない程に多く、濃厚だ。上層だからというのも関係あるが、エリユシデータを片手に振るうキリトに敵うモンスターは強いて言えば、インフアントドラゴンくらいだろう。

ともかく、フレイヤが望んで止まぬのは少年の内より眠る、揺光の全貌のみ。その輝きを引き出す為に差し向けたシルバーバックも少年にとつては少々苦戦する程度の相手に過ぎず、全力を引き出すには至らなかった。

そもそも早い話、少年をいつもの常套手段みりようで自派閥に引き抜いても良い話だ。わざわざ遠くから見守る必要がなく、間近で少年の成長ステイタスを見られる。少年が冷めぬ熱あひに魅力まどわされていようと、眷属の脱退の意志をカーディナルは否定しない。仮に賢神と戦争になっても所詮は第一級冒険者がたった2名、少年を含めてもたった三人しか在籍していない超少数ファミリア。オツタルを始めとした幹部勢だけで簡単に決着がつく。

しかし、今回のフレイヤは少年に対しその手に出ることは控えた。

それはカーディナルと交友関係？主にリセリス繋がりが？ある他派閥からの援軍や、……一握りしか知らない、賢神の【守護者】の存在もあるが一番の理由は何となく、強引に少年を自分の「色」に染め上げてしまえば、あの揺光は更に深く沈む—丁度、外敵に警戒した兎がずっと巣穴に隠れ潜むように—根拠は無いが、そんな予感が漠然とフレイヤはしたのだった。

また少年自体に関心は抱いてはいるものの、そこまで事を急ぐ—手に入れる必要がある訳ではないこともあり、今回は趣向を変えてこの距離感から少年の成長を見守ることにした。例えるなら、雛鳥が成長する様子を観察する、星空の変化を眺めるといった感じだろうか。

—しかし、

？でもいい加減、何かしらの変化ぐらいは見せて貰いたいわね？

生憎、天界一の美神は気になる対象を遠くで眺めるのみで満足出来る性分ではなかった。

「ねえ、オツタル。ちよつとお願いがあるんだけど——」

だからフレイヤは自らが最も信頼と信用—愛を寄せる眷属子どもに、ひとつの神命お願いを言った。

## 幕間 少女に囁くは、笑う悪魔

日が地平線に没して数刻が経った夜間、蒼夜に浮かぶ幾多の星光が静謐に揺れるその水面下で、オラリオは街の灯火で燦々と眩いていた。

大通りでは日中の活気とはまた異なる熱気と人だかりでごった返し、女主人の店を始めとした酒場では冒険者が各々お気に入り料理を飲んで食うやの陽気な宴会を開く中、リリルカ・アーデは一人、孤独にポツポツと帰宅していた。

コツ、コツ、コツ??

少女は周囲の喧騒から避けるように大通りから離れて裏路地へと体を滑り込ませ、より奥へと進む。表通りとは一転して人気は疎らとなり月明かりのみが照らす裏通りを暫し歩くと、ピタツとリリルカは歩みを止め周囲を警戒するように辺りを見回す。そして誰もいないと判断すると魔法を解いて本来の姿に戻った。

「フウ、どうやら尾行られてはいないようですね」

まだまだ安心とは言えないが、それでもアジトを目前にしてほっと一息ついてしまう。朝の広場みたく、カヌウらと遭遇しないかとギルドから此処まで気を配りながら帰宅していたが、どうやら今日のところはこちらに来ないと考えて良いだろう。

しかし広場の一件以降、少年との探索を終えた今でもなお心の重荷となつて背にのし掛かっていた。カヌウらの横暴ぶりは今に始まつたことじやなく、何度痛めつけられようと我慢は出来た。なにしろ自分には密かに蓄えてきた『隠し財産』がある。あれがある限りいつかは念願の脱退が叶えられる。辛い今を生きる最後の希望と言っても良い。

ただ、自分の問題に黒衣の少年が絡むとなると妙に胸がざわついた。

少年との探索が心地良かったせいで自分の裏稼業を知られたいくない気持ちが募るからか？ だが彼との関係にも限界が訪れる予感があった。カヌウ達が金儲けとなれば犯罪にも手を染め兼ねないのは明

白、少年に対し魔の手を向けることも辞さないことが欲に淀んだ瞳が物語っている。自分と居る限り干渉が途絶えることは決してないと断言出来よう。

「ハア……」

嘆息を漏らす。

少年に助けを求める選択は端からない。例え善人だろうと所詮は他ファミリアの冒険者、基本的にファミリア間の内情は互いに干渉が暗黙の了解である。少年のファミリアの力ならば実力行使に出るのも可能かもしれないが、自分一人の為に動くほど甘い主神の筈がない。ファミリアの利益にならぬものにどうして好き好んで首を突っ込もうか？

？何より、〃救い〃を求めるには自分は汚れ過ぎた。

ならば、化けの皮が剥がれぬうちに少年との契約を打ち切るかと思うも踏ん切りがつかず、ぐるぐると思考がさ迷う。

「全く、リリらしくありませんね。今更リリに他人を気にする余裕がありますか？　いいえ、自分のことで精一杯です」

初めて正當にリリルカ・アーデとして扱ってくれた経験に困惑し気持ちが揺れているだけ、目的を見失ってはいけないと固く再認識する。

誓うように呟いた？その時だった

「よおーその陰気くせえお嬢ちゃん。なんか悩み事かい？」  
「ッー」

不意に、男の呼び声が私の小さな背を打った。それまで確かに周囲には自分以外の気配がなく、そう思って油断しきっていた私は驚愕しつつも即座に振り返る。

外敵に警戒する小動物みたく見やった先には数メートル離れた先に立つ魔石が切れかかった街灯？その途切れ途切れに点滅する明かりの下で、不気味に浮かび上がる『黒い人影』が佇んでいた。

白髪の少年のと同じ黒色の外套……しかし少年のとは異なり一体化したフード付き、丈も膝下までしかない雨具に似た装いを見た見知らぬ男だ。先の声からして少なくともカヌウ達や先日追い回された

男、以前パーティーで組んだことがある冒険者でない。こちらからは初対面の筈だ。

「……どちら様で、ごございましたでしょうか？」

夜間からくる周囲の暗さといつの間にか背後にいたことが、その外見も相まって暗殺者然とした雰囲気醸し出す男に少女は緊張を抑えつつ警戒を多分に含んだ問いを逆に返す。対して男はフードに隠された顔を俯け、気取った仕草でやれやれと通り肩を竦める。

「オイオイ、そんな風に怯えられると悲しいだろー。俺はお嬢ちゃんが心底悩んでいるように見えたもんだから、声を掛けただけの親切者だぜ」

謎の男は張りのある、だが異質なイントネーションが伴った声音で少女を優しく、安心させようと語る。しかし言葉とは裏腹に態度は軽く、胡散臭いものであった。少女は培ってきた観察眼からそれが薄っぺらな建前だと即座に見破ると、冷たく対応した。

「ご親切にどうもありがとうございます。ですがお生憎、リリに同情は無用です。リリは明日も忙しいのでこれで失礼させていただきます」  
「おーおー、連れないな〜」

これ以上話す気は微塵も無いと、少女に素っ気ない態度を取られるも男は何が面白いのかニヤニヤとフードの下で口元を弧に曲げる。

これまでオラリオで冒険者問わず様々な人物を見続けてきたが、彼らとはまるで異なる男の得体の知れなさに、異質な空気を感じ取った少女は一刻も早く立ち去ろうと足を動かした時だった？

「朝、広場で揉めてたよな？」

「?!」

ボソツと吐かれた予想外の言葉に、少女は足を止め見開いた瞳を男に向ける。狙い通りの反応を前に男はニヤツとより笑みを深めて軽い調子で続けた。

「なに、情報収集がてら広場をぶらぶらとしていたら、偶々お前と野郎共のやり取りが耳に入っただけさ。残念ながら近寄る前に先客に入られっちまったがな」

「二体、わざわざリリに何の用ですか？ あの人達に頼まれてリリを

脅しに？」

「いやいや、会いに来たのは俺の意志、あいつらとはなんも関わりは無いさ。ホントだぜ。ぶっちゃけ言うとな、正直俺はお前達の口論になんぞ微塵のキョーミがねえしな」

「じゃあ、一体……」

あつさりと白状する男に少女はいよいよ意図が分からず困惑する。

「実はな、お嬢ちゃんに聞きたいことがあるんだ。朝、迷宮に行く時にお嬢ちゃんと一緒にいた『相方』に関してな」

『ベル』様？ あの人が何か？」

少女の口から思わず洩れてしまった少年の名を聞き、男はフツと笑う。

「へえーベルって言うのか……ああ、少し俺の昔の知り合いに似ているもんだからな。……気になって、気になって、堪らなくしようがないのさ……。直接本人に会っても良いが、もう少し情報を仕入れたくてな。それで傍にいた同伴者サポーターに近づいた訳よ」

それまで流暢に話していた男であるが、「誰か」の面影を感じさせる少年の話題になると軽薄さを消し、熱のこもった声を震わして胸の内を吐露する。その言葉の節々に少年に対して本心からくる思いが込められているのが伝わってきた。

(これは、どうすれば良いでしょうか……)

礼は弾む？と男は謝礼の意を示すが、胡散臭い以前にそもそも常識からして知人に似ているからという理由で、本人の了承も得ずに勝手に教えて良い筈がない。ましてや自分は少年と同派閥ではなく少年と組んでまだ数日の関係、自分が所持する情報は些細なものだ。

そう断ろうとすると、男は察したのか「まー待て」と止め懐を探ると「何か」を取り出し、こちらに見せ付けた。

「お前が出す情報次第によっちゃ……特別に『コレ』をやろうじやないか」

「？……宝石、ですか？」

二つ指に挟まれているのは血のように紅い、ルビーらしき玉石であった。見た目に合わず随分気前が良いと思う少女だが、男が次に発



した言葉に途方もない衝撃を受け、愕然とした。

「ところがどっこい、これはそこいらにあるただキラキラしただけの屑石じゃねーぜ。これはな、俺が迷宮で偶然手に入れた『ヴァイレブル竜女の涙』だ！」

「!!? ツツツツツ?! ツ」

自分の予想を遙かに上回る代物の名に、覚えがあつた少女は目と口を限界まで開く。裏通りに彼女の驚声が響き渡りかけるも、ぎりぎり瞬時に少女の眼前に移動した男が口を塞いだ為に未遂に止まった。

「おい、でけえ声を出すなって、他の奴聞こえたら面倒だろ? 少しは落ち着け」

「?プハアツ、あんなの見せられて誰が冷静でいられますか!? あれ一つで一体どれ程の値打ちがあると思ってるんですか貴方は!」

解放された少女は必死に声を抑えつつも荒立ち、興奮して捲し立てる。熱くなった顔で男に正気なのかと問うも、無理はない。割りに合う、合わないで納まる話ではないのだ。

『ヴァイレブル竜女の涙』?それは迷宮下層に出現する希少レアモンスター『ヴァイレブル』が落とすレアドロップアイテムである。

だが滅多に出現しない竜女の額に紅石が埋められており、入手するにはこのモンスターを傷付けることなく抜き取るしか方法がない。その為地上でも市場に出回る機会は年に一度有るか無いかという程の超希少アイテムであるのだ。

たった一つでもオークションに出せば、場合によっては生涯不自由なく過ごすことも決して夢物語ではない価値を秘めるこの宝石を、男は情報を提供するだけで少女に譲ろうと宣うのだ。価値を知る者ならば誰であろうと眉唾物だと否定し、男は正気でないと断言するのも至極当然の流れだ。

当然ながら少女は実物こそ見たことはないが、縁は無いだろうと思いつつも存在だけは知っていた。

「いくらなんでも、旨すぎます。本物かどうかはさておき、リリに得が有りすぎませんか? 一財産築ける程ですよ」

「生憎、俺に余る程のカネは無意味なのさ。本物かどうかは、信用出来

る鑑定屋にでも聞きな。それにタダでくれてやるとは言っておねえぜ。お前が持つ情報ネタに俺が満足したら、だ。

……まあ安心しな。別にお前をどうこうする気はねえよ。」

完全に話を鵜呑みした訳ではないが、この時点で少女の心内に男の話を断る気はとうに消え失せていた。例え精巧な偽物を掴まれようと、元より自分が損するものは一つもないのだ。万が一にも本物であるのならば、目標金額にも一気に近づくどころかお釣が来るレベルである。

正直、少女の秤はほぼ男の誘惑に傾いていた。それでも僅かに残った良心が辛うじて食い止めていた。

？ 追い打ちと言わんばかりに、男は少女の耳元で囁く。

「カネに困っているんだろ？ 別にお前がすることはなにも犯罪じゃないさ。この俺が『聞いて』、お前が『教える』だけで済む話だ？」

？ アイツに義理立てる程の余裕が、信用を、お前は持ち合わせているのか？

「もし、お前が俺の為に『協力』してくれるならば、更に報酬を約束しよう。なーに、ほんの少しだけ指示に従ってくれるだけで十分さ」

(……)

少女が沈黙に没頭する中、冷えた夜風が路地を吹き通り、二人の間を過ぎ去る。

外套の擦りきれた裾がパサパサと揺らめいた。

気付けば夜空を暗雲が覆い被り、今や裏通りは暗闇に充ちる世界。ボツボツと頼り気ない街灯が僅かに大小二つの影を浮かび出すと、小さな影は大きな影を見上げ、か細く短い音を発した。

男の楽し気な笑いが、暗夜に木霊した。

## 第29話 裏切りの末路

「ベル様、今日は十階層まで行ってみませんか？」

いつも通り、ダンジョン探索を目的にバベルへ向かっていた時だった。唐突に横を歩くリリから階層進出することを提案された俺は「十階層？」とこちらを見上げる彼女に聞き返す。

「はい。リリの見立てではベル様の実力は十階層でも十分通用すると思います。既に九階層まで順調に進出したんですから、ベル様ならそのまま突き進んでも大丈夫だと、リリは保障します」

確かに、俺の実力は十階層攻略するだけの適正数値は一応満たしているしアドバイザーエイナさんからの許可も得ている。リリのサポートがあつたとしても九階層までの道中は十分手応えを感じていたので階層を増やしてみる気は前からあつた。

「そうだな……まあ俺ももう少し深く潜ってみたいと思っていたし十階層で『慣らし』ていくのもアリかもな——良いぜリリ」

「そうですか！ サポーターのご意見を聞いて頂きありがとうございます。ベル様だけです、こんなにリリに『優しく』して下さったのは」

俺が賛同を口にするのと分かりやすくリリは嬉しげに笑う。そんな大袈裟なと言うと彼女はちよつと意見を口にしただけで『サポーター風情が生意気だ』とキレる輩もいたから、気兼ねなく意見を出せるのは俺が初めてなのだと思ひ明けた。

「全てとは言いませんが、どうしてもサポーターというのは他の冒険者様方から軽んじされ易い職業なのです。特にへつぽこなリリなんてちよつと荷物を多く運べるくらいにしか能がありませんから、お叱りを貰うこともしばしばでした」

所詮は荷物運びに過ぎない——とフードの下で自嘲する彼女に、咄嗟に俺は否定の言葉を口にする。

「いや、そんな事はないさ。的確なサポートがあつたから俺は戦闘が楽にやれたし分かりやすい案内ナビのお陰で迷うことはなかったんだ。他のサポーターは知らないが、今組んでる優秀な相棒サポーターが居なかった

「ら今頃俺は六階層をさ迷っていたと断言するぜ」

不憫な扱いをされてきたリリに慰めの言葉を掛けず、偽らざる本音を述べると彼女は瞳を見開き、一瞬ぽかんとした顔になった―かと思えばフードに両手を当てて更に深く被る仕草をしてじつと俯く。小柄な体が微動する様に（あれ、やらかしたか？）と内心焦るが幸いなことに顔を上げてくれた。

「フフツ……すみません。ベル様の勿体無い御言葉にリリは思わず感極めてしまいました。ならばリリもベル様の為により一層奮起しなければなりませんね」

見事なまでの「清々しい微笑み」と一緒に、少女は少年の『サポーター』を努めると快く告げた。

「さあ、そろそろダンジョンに行きましようかベル様。十階層は色々「仕様」が変わりますから、十分に慣れる必要があります」

「ああ、そんでもって昨日の倍は稼ごうぜ」

調子を取り戻したららしい彼女に目標を掲げて応える。そうして歩みを再開すると彼女は「そうそう……」と思いついたように尋ねた。「その……不躰ですがベル様、今日リセリス様はどのようなご予定でいらつしやるでしょうか？」

「リセリスか？ んーと、とつとつと昨日の人達とダンジョンに向かっていると思うが。確か中層でモンスター的大量発生の原因を見つけたとか口にしてたな……」

「どうやら昨日の探索で何らかの収穫を得たようで、「嫌な予感」があるから万全な布陣で挑みたいと昨夜に教会で教えてくれたが、詳細はいつの間にか少女の背後にいた主神カーディナルに（物理）中断されて不明に終わった事を思い出す。」

「そうですね、わかりました。すみません変な事を聞いてしまつて……」

ペコリと頭を下げる彼女に白髪の少年は怪訝に思うも、早くいきましようかと催促されて気にしないことにした。

——都合が良いですね……

先に行く少年の背後で吐かれた、小さな謀事こえに気づかないまま——

くくく

「此処が十階層か……なるほど、聞いた通り『難易度』が上がっているな」

初めて踏み入れた領域を前にして初の一言を呟いた。

空間に余裕のある広間を天井から落ちる燐光が内部を照らし、短く生えた草の草原が薄く地面を覆っているのは8〜9階層と同じ構造、しかし大きく異なるのは辺り一面にたちこめる「霧」の存在だった。薄ぼんやりとした白霧により視界は良好とはいえないが、接近戦に支障をきたす程ではないのが救いか。

「リリ、あまり俺から離れるな」

「はい……」

確認する俺にリリは背後で応える。

そして通路を抜けて次のルームに入ると其処は枯れ木が幾つも点在したエリアであった。大体が身長と同じか少し上回る高さしかなく、上にゆくほど極端に先細りした地上のそれとは異なる奇妙な構造に自分の持つ情報と照らし合わせる。

「どうする？ 念のために壊しておくか？」

「いえ、その暇はないようです」

カチャツと前方にハンドボウガンを構えると共にリリは返事する。その先には霧の中で蠢めく一つの大柄な影がこちらに近づいてきた。

『ブグツオオオオウウウ』

「早速おでましか、『オーク』」

重い足音を伴いながら霧より姿を現した豚頭のモンスター、『オーク』を見据えると少年は背負っていた双剣の黒い方―エリユシデータを抜剣。相手も少年を認識すると近くに生えていた枯れ木に手を添え―引き抜いた。オークの手に納まった枯れ木は今や無骨な棍棒と化した。

『迷宮の武器庫』―迷宮より生まれしモンスターがこの生けるダンジョンから天然武器の支援を受ける厄介な特性。

『ブゴオオオオオツツ!!』

オークの醜い咆哮を合図に少年は躊躇いなく駆け出す。

黒コートをなびかせて疾走してくる小さな敵を見て、オークは棍棒を高く掲げるとその巨体に見合う膂力でもって勢い良く振り下ろした。直撃すれば虫みたく潰される致死の一撃が正面から迫り来るも、だが少年の目には単純な一撃に過ぎない。かつて怪物祭で相対し死闘を迎えたシルバーバックと比べればスピードは遅く、攻撃も見切りやすいものだった。

「フツ！」

『プギイイイイ!?!』

少年は攻撃を横ステップで危うげなく回避し直後に攻撃加速アクセルアサルトを発動。兎を彷彿させる俊足でオークの脇を駆け抜けると共に、たるんだ脇腹に剣閃を走らせる。突進の勢いが乗った黒剣の一閃はオークに浅くない傷を与え、豚頭の怪物は苦痛に悶える。怯み出したオークの反応を前に少年は更に追撃をかける。再び自身の攻撃を加速させて今度は「剣技ソウドスキル」を無防備な背中に目掛け、繰り出した。

弧を描く水平斬りがオークの無傷な脇腹を切り裂く。内部の詰まった脂肪で剣は中半ばに止められるも無視して強引に突き入れる。そして埋めり込んだ剣身を九十度回転させると少年の手が柄を押し下げ、梃子みたく跳ね上がった剣がオークの背を垂直に切り上げて血肉と共に漆黒の剣身が頭になる。剣撃はこれで終わるかと思いきや、最後に上からの垂直斬りがオークを襲い、その意識と命を両断した。

―計三連重攻撃、《サベージ・フルクラム》

大型モンスターに有効な連撃技を攻撃加速スキャルで再現した少年の剣技により、オークだった肉の巨体は魔石を残し灰と消えた。

「ベル様、もう二匹来ます！」

少女の声に導かれて少年が視線を向けると、その先には霧をかき分けて二体のオークが同時に現れた。興奮に鼻息を鳴らし地響きを伴って迫ってくる姿に少年が叫ぶ。

「リリ、十秒間頼む！」

一息に指示を出し終わると少年は空いた手に白剣の柄を握り勢い

良く振り抜く。少年の意図を察した少女がハンドボウガンを連射して足止めに徹する中、少年は白剣を身体の中に構えると精神統一し、「詠唱とかなえた”

昨日の探索で既に少年は発現した魔法について少女に教えている。長文故に発動には多少の時間がかかるが、それでも訓練により静止した状態ならば十秒以内に発動タイムを縮められるようになった。

「エンハンス・アーマメント!!」

少女の精密射撃が的確にオークの頭部を攻撃し気を逸らした隙に無事、少年の魔法は完成した。揺光を纏った白剣と依然と変わらぬ黒剣を握り締めると、先の戦闘と同様にオーク達へ駆け出した。

……………

「どうやらキチンと”指示通り”、アイツを誘導してくれたようだな」少年達が今居るルームの端で濃霧に紛れて隠密する黒ポンチョの男が目の前の戦闘風景を眺めながら独り言つ。

離れた先では双剣を携えた少年が最初の戦闘より一段と高い敏捷でオーク達の周りを疾走して翻弄する姿があった。動きがトロいオークでは兎のようにそこかしこに動き回る少年を捉えきれず、二体が全力を振るうも兎は容易くかわしていく。その生じた隙に少年が双剣を閃かすと彼らは一方的に屠られ、狩られるに終わった。

「オーク程度は楽勝か。まあそれぐらいはやってくれなちや興ざめつてもんだ。……そんじゃ、準備運動を終えただろうし始めるとするか」

男はそつと立ち上がると愉しげに、開幕の言葉を紡いだ。

——イツツ・シヨウ・タイム

ピクツ―何処からか、密かに囁かれた合図おとに自分の偽りの獣耳が反応する。それと同時に転がってきた物体に気づいた私は即座にあの少年から離れ、霧に身を潜めた。

「フウー、お疲れリリ。ナイスアシストだ……リリ?!」

戦闘を終え、私の元に戻ろうとするも其処に自分はおらず、彼は当然の如く当惑し私の名を叫ぶ。はぐれた私の姿を必死に探そうと辺りを見回すと彼も気づいたようだ。生々しい強臭を放つ、特殊加工された血肉が詰まった塊の存在に。

「ッ！これは――モンスターを誘うトラップアイテムです、ベル様リリ！」

顔を見せず声だけを送る。あの人から去る前に、どうしても置き言葉を残していきたかったからだ。

「申し訳ありません、ベル様。残念ながらサポーターを努められるのは此処までです。リリは自分の事を優先致します。許してくれとは言いません。ベル様になら恨まれても、憎まれても、リリは甘んじて受け入れましょう。……それではさようなら、ベル様。もう会うことはないでしょう――」

「リリッ！ 何の話だ。待ってくれリリ!!」

少年は突然の事態に困惑し消えたサポーターの少女の名を絶叫するも、少女は一方的に少年に語ったきり沈黙して答えない。一刻も早く少女を追いかけようとする少年だが、そこに血肉の匂いに惹かれてきたオークの集団が押し寄せて来たことで相手せざるを得ない状況に陥るのだった。

「ごめんなさい……」

ルームの出口に向かう途中で黒ポンチョの男とすれ違っても、互いに一言を交わすことなく走り抜ける。既に私の仕事は完了した。内容は単純、少年をこの階層に私とだけで連れていかせること。後のことは男に任せれば良いだけだ。最後に報酬の受け取り場所に指定したノームの古道具屋で鑑定の終えた『ヴィーブルの涙』と金銭を受け取れば、あの男との関係は全て終わる。

「……」

十階層を脱しても走りを止めずそのまま上層を駆け抜ける。八階層に着いてやっと足を止めると私は魔法を解き一息ついた。



「これで……全てが終わる」

天井を見上げ、ボソツと吐露した言葉に私の全てが込められていた。この一件で莫大な財産を得てファミリアを抜け出せば私は晴れて自由の身、長年の呪縛から解放される。その裏で幾人の冒険者が被害にあつていようと知ったことじゃない。ソーマファミリアに産まれてから自分が苦しんできた過去に比べれば、窃盗で済む分まだ遙かにましだと断言できる。

ただ唯一、最初から最後までこちらを信頼してくれた少年には申し訳なさを覚えた。例外的に自分が手を下さずあの目的も定かでない怪しげな男に売り渡す感じとなった少年に対して、私は今まで抱いていた憎悪と復讐心ではなく、“完全な私利私欲”で動いた。それが自分自身に嫌悪感を感じさせ、彼に罪悪感が込み上げてくるも奥底に押し込める。

僅かな休憩を経て、再び地上を目指した。盗賊業で叩き込んだダンジョンの脳内マップに沿って速やかに上層への近いルートを走る。ただひたすらに、モンスターにも冒険者にも見つからないことだけを考えて移動するうちに気づけば7階層に到達した。

(ここを乗り越えてしまえば、地上は間近！)

その性質から相手にすると非常に厄介なモンスターも上層には出現せず、自分のステイタスのみでも十分に戦えるモンスターしかいない。見えてくる次のルームの入り口を前に僅かながら頬を緩め、ルームに身を飛び込ませた——次の瞬間だった。

「嬉しいねえ、大当たりじゃないか」

「えっ?」

突然の男の声に少女は間の抜けた声を漏らすも、意識する間もなく衝撃が彼女を襲った。

「おらよっ!!」

「ブハアッ!」

不意打ち気味に横腹に蹴りをもらい、バックパックごと少女の小柄な体が吹っ飛ぶ。そのまま壁面に衝突すると人形みたく手足を広げ、地面へと崩れ落ちた。その際にバックパックが離れるも気にかける

暇すら少女には無かった。

「あつ、づたあつ、うあああ……!?!」

「覚えているか、糞パルウム？ まあ、別に忘れていようが俺は構わな  
いぜ。何度でも思い出させてやるよ、こんな風にな!!」

叫ぶやいなや、男は追い打ちをかけるように少女の体を遠慮なく蹴  
飛ばした。無様に転がって苦悶の呻き声を上げる少女の反応を見て、  
男は高笑いする。

「はっはははははははっ！ いい様じゃねえか。こうして網を張って  
りやあ、ガキ」を捨てたお前に絶対会えるって思っていたぜえ！」  
「ッ！」

衝撃的な発言に私は驚愕に瞳を大きく見開き、狂笑する男の正体を  
思い出す。名はゲド、自分の元雇い主でふとした切っ掛けで正体がバ  
レてしまい、路地裏で追いかけ回された男だ。

彼は私を見下し声高に告げる。

彼は昨日の広場で偶然私達を見掛け、私が自分がされたのと同じよ  
うに今度は少年をターゲットに近づいたのだろうと推測したと（実際  
途中までその予定だった）。

そして協力者を募り連携することで私があの人から逃亡した時に  
備えて、この階層の正規ルートで待ち伏せていたことを。

「協力……者、ま……さか、黒い、人？」

「ああっ？ 誰だそいつは？ ガキのこと言ってるのなら、知らねえぞ」  
どうやら本当に知らないらしい。少年を嵌めるついでに用済みにな  
った自分のことも消すつもりで情報を流したかと思いかけたが、こ  
れに関しては全くの偶然のようだ。

「ぶっ殺す前に、俺の剣を盗っていつてくれた落とし前、つけさせても  
らうからなあ……！」

男は少女に嗜虐的な目を向けると躊躇なく、身ぐるみを剥いだ。  
バックパックの中は当然、彼女の所持している全ての金品を洗いざら  
いに奪い尽くす。

「おいおいお前、魔剣なんか持ってやがったのか!? くくくつ  
……………！ 良いぜ、こいつは俺が上手く使ってるよ」

紅いナイフ状の魔剣を見つけ、手に取った男は愉悦気に笑いを噛み殺すと魔剣を外套の懐に入れた。ご機嫌に物色する男を尻目に少女は何とか逃げ出さければ悲惨な末路を迎えると悟るも、鈍い痛みが体を縛りつけ思うように動けない。

そうこうしているうちに、第三者の声が投じられた。

「派手にやってんなあ、ゲドの旦那」

「……ッ!？」

入ってきた男を視認し、その見覚えのありすぎる姿に少女は驚愕に顔が青ざめた。ゲドが言う協力者とは、同じく自分に執着していたソーマファミリア金の亡者達の事だったと悟った。

「おー早かったな、カヌウ。聞けよ、てめえらの読み通り、こいつたらふく金を溜め込んでるみたいだぜ、くははっ」

「そうですかい……なあ、ゲドの旦那。一つ提案があるんですがね……」

予想以上の収穫に機嫌良く語るゲドだが、カヌウの反応は薄い。沼のように淀む瞳を細め、ゲドに要求する。

「アーデと一緒に、奪ったもん全部置いていって欲しいんでさあ」

「は？ 何言ってーオイ?!」

問い質すゲドの眼前に、カヌウは隠し持っていた塊を放り投げた。地面に転がり落ちた塊の正体は瀕死状態のキラアントの上半身であった。更に続けてルームの別通路からカヌウの仲間の二人が同じものをゲドの前に投げ捨てる。

「正気か?! てめえらあああっ!!」

「早く逃げなちや、ドえらい数の蟻共が押し寄せんでしような。旦那一人で、蟻と俺達相手にしてどうにか出来やすか?」

「ツッ! ……くそつたれがあ!」

自らの命をも危険に晒す行為にも関わず、カヌウは至極平然に淡々と状況を告げる。狂気的な真似を取るカヌウ達にゲドは盛大に顔をしかめるも、最終的に要求を受け入れて奥の通路へ逃げ去った。

「……さて、アーデ。俺らがここまでした理由、わかるよなあ？」

「は、はいっ」

不気味な程に落ち着いた声音でカヌウは少女の『隠し財産』について問い詰める。これ以上出し惜しみすれば本気で命は無いと判断した少女はやむを得ず、カヌウに財産の入った金庫の鍵を差し出した。「ノームの貸し出し金庫の鍵です。……中に、ノームの宝石が入っています……」

「なるほどなあ………そんじや、悪いがお前もちよいと手伝つてくれ」

鍵を受け取り、素早く金品を回収したカヌウはおもむろに少女の服を掴み上げると、少女にキラアアントの大群が周囲を包囲する地獄絵図を見せつけ、下卑た笑みと共に言い捨てた。

「俺らの為に、囹になつてくれやー“サポーター”」  
「ツツ!？」

キラアアント達の後方に、少女を投げた。

キラアアント達が少女に注意を取られた隙を見てカヌウ達は即座に逃げ出す。残るのは大量のキラアアントと、大の字に地面に転がった丸腰の少女のみ。

「はっ、はははっ……」

通路を照らす燐光を見上げながら、乾いた笑いが腹中から漏れだした。

(ざまあ無いですね……)

多額の金に目が眩んで少年を窮地に陥れたその直後に、罰だと言わんばかりのこの皮肉な状況に怒りよりも諦念が込み上げてくる。自業自得、といえばそれまでだ。あいつらに隠し財産の鍵を奪われたが、まだ黒ボンチョコがくれた宝石に関して黙っていたので、地上に戻ればまだ全てを取り返す望みはあった。

だがこの大量のモンスター達に囲まれて、どうやって生き延びれば良いのだ？ 何も持たぬ無力なサポーターではキラアアント一体でもろくな抵抗も敵わず、無駄に肉片を散らさかれる結末しかないのはわかりきっている。

(ああ………これで、本当に終わりですね)

命の瀬戸際だと言うのに、不思議なまでに私の心は落ち着いていた。

この世にリリとして生を受けた不満も、盗賊に落ちる原因となった神様ソーマや冒険者達に怒りが全く無い訳ではないが、今となつては虚しさが上回りどうでも良かった。

ギチギチ、ギチギチギギ――

モンスター達が私に近づいて包囲網をつくるのを視界に収めるも、他人事を感じながら最期の時を待っていると、ふと脳裏に白髪の冒険者の顔がちらついた。

(……あの人、大丈夫かな?)

弱い自分と違つて卓越した強さと魔法を持つ少年ならば、多少モンスターに集られようと切り抜けられるだろうが、あの得体が知れぬ男が待ち受けている。流石に殺す気は無いと思うが、決して穩便には終わらせないだろうことが予感できた。

自分で嵌めておきながら、せめて少年だけでも無事でいられるように願う。

『ギシィシヤヤー!』

(もし、リリに次があるなら、あんな人と一緒に居たかったなあ……) 心の中でずつと秘めていた願望を吐露する少女に向けて、近くにいた一体のキラアアントが鉤爪を振る。鋭利な爪が少女の顔面を引き裂こうと落ちた――その瞬間だった。

「キュイイイイイイイツ!!」

細く、鋭い鳴き声がダンジョン内に轟くと同時に、“横槍”が猛烈な勢いでキラアアントを襲った。

『ギィシヤツ?!』――

完璧な不意打ちクリーンヒットを食らい、キラアアントは体ごとぶつ飛ばれて壁に

ぶつかる。突然の事態に他のキラリアント達は動揺に狼狽え、九死に一生を得た少女すらも「へっ？」と間の抜けた声を洩らす。

全員が意識を奪われる中、謎の闖入者は少女とキラリアント達の間を陣取り、立ち上る。

燐光に照らされて白く細いシルエットが浮かび、闖入者が少女の方を振り向くと紅い円らかな瞳がぱちくりと少女の瞳を見つめた。

そして、長く立った両耳をピョコピョコ揺らすと、可愛らしい一声を上げた。

「キュイッ！」

### 第30話 霧中の襲撃者

「ハハハツ、やったなカヌウ！」

「これで神酒は俺達のもんだぜ！」

迷宮上層のとある区域で息を潜めるような静けさが充ちていた時であった。突如として耳に障る笑い声が静寂を打ち破ると同時に、慌ただししい走音が通路内に反響する。

哄笑と共に現れたのは三人の男達、その横顔を覗いてみれば各々が狂喜に顔を歪ませ、その瞳は欲望の色でギラついていた。

名を呼ばれた男、カヌウら一派は少し前の事、幾らかの手間と時間を費やす苦労を経て迷宮より目的の物を奪取した彼ら三人は地上へと盲進していたのであった。

目的はただ一つ、全ては神酒を得るが為に。

たかが酒の為―されど見返りがたった一杯分の夢と散りようとも、彼らにとつてその至高たる妙味の酒が黄金に勝る……至福の一時であつたのだ。

その過程で同じ主神の恩恵を賜った同胞の命が失われようが、彼らにとつては然したる問題では無い。良心、罪悪感―人情では渴いた舌を潤せない。

「よおし、ここまで逃げればもう良いだろう。少し休もうぜ？」

おう、とカヌウの一言に他の二人も足を止める。

キラアアントが大量発生していた七階層から脱した後、彼らは五階層へ逃げ延びた。ここまで上がれば脅威となるモンスターはほぼおらず、大量発生にでも遭わぬ限り窮地に陥ることはまず無い安全圏である。

どかつと腰を下ろし、一息をつく三人。その真上では迷宮を灯す燐光が地面に黒々とした三つの影を作り出していた。

その後、カヌウ達は休憩がてら暫しの間雑談を交わした。

哀れな男と少女の惨めな最期を好き勝手に喋っては嘲笑い、未だ手にしていない神酒の味を想像しては酔いしれる。自分達を誘った男もサポーター同様に迷宮の闇に消えた今、自分達の所業を知る者はこ

の世に存在しない。ダンジョンの“不幸な事故”は珍しい話では無く、気に掛ける者はそうそうにいない。

「そーいやアーデの奴、パーティを組んでいたんだよな。そいつはどーうなつたんだ？」

「確か……『白髪』の青臭え冒険者だつてゲドが言っていたよな……。まあ大方、アーデに盗やられたまつたんだろ。くたばつてなけりゃアーデに恨み言を溢してらるだろうぜ」

「ギャハハッ!! もう存在しない相手にか?!」

ゲラゲラと嘲笑を上げながら聞くに堪えない会話を繰り広げる三人。付近には自分達以外に生き物の気配がしないこともあつて隠し気なく会話を繰り広げる三人だが、この時……彼らはほんの僅かにも気づくことは無かつた。

彼らが座するその場に、淡い燐光がつくる彼ら三人の影から少し離れた位置に、いつの間にかうつすらとした地面の影よりもほんの少し濃い一つの影溜まりが存在していたことを。

—自分達は既に、トラップ巣にかかった獲物である事実を。

「……良し、じゃそろそろrナツ?!」

カヌウが休憩を終えて立ち上がろうとした瞬間ときであつた。

不意にそれまで当たり前のように動かしていた身体が“束縛”された。異変に気づくも時既に遅し、硬直した体は崩れ落ち地に転がる。咄嗟に起き上がろうと胴体に張り付いた手を伸ばそうとするも、両腕はおろか両手両足—いや全身が“不可視の糸”に縛られたように自由が効かず、精々身体を揺らすのがやつと。

気付けば他の二人も同様の状態であつた。

モゾモゾと、蜘蛛の巣に捕まった哀れな小虫と同じく身を振り掻く。だが身体を縛る謎の拘束力は予想以上に強く、もがけばもがく程その縛りが彼の身をきつく縮み、抑え込む。



突然の事態に先程までの夢心地から一転、カヌウの思考は困惑と混乱の渦が巻く。天井と地面、あちらこちらに視線を一杯回すも周囲には自分達以外にモンスターと冒険者、誰も視野に入らず、物音一つ聞こえず、何者の気配すら感じない。

冒険者になつてから幾年間、かつてない迄の不可解極まる現象に胸の奥底から恐怖心が込み上げる中―状況が動いた。

「一体なんだ?! おい、お前らア『ツイン!』――」

カヌウが仲間へと声を発したその時、突如として空気を裂く―無音の―鋭い衝撃が頭部に発生した。

だがそれに反応する間もなく、彼の意識は雷魔法を食らったかのようにはビクンツ! と身震いした身体と同時に思考停止され、他の二人と全く同じタイミングで沈黙した。

再び静まりかえつた迷宮。

薄ら寒い暗澹とした通路内で捨て置かれたように転がるカヌウらが無気味な静寂が取り囲む中―「影」が揺らめいた。

誰もいない通路の薄闇より、一切の音も無く人のシルエツトをした影が浮かび上がった。

もしカヌウに意識が残っていれば、そこには全身を黒くモヤツとした煙か霧を隈無く纏った、ゆらゆらと絶えず揺らめいた「人影」が見えていたであろう。

似たような特徴を持つモンスター『ウォーシャドウ』を彷彿させるが、鋭爪やマスクといった細かいところに差違が存在するソレと別物なのは一目瞭然。

その輪郭は曖昧にぼやけて捉えどころが無く、今にも迷宮の暗闇へ溶け消えそうな儚さ、希薄さを醸し出し不安を掻き立てる様はまるで黒い亡霊ゴーストを彷彿させた。

人影の手と思わしき部分の先には細く長い黒鞭が握られており、地に垂れた先が緩く弧を描く。そして人影は読み取り難い動作で歩み寄り、横たわる男達に近づいて彼らの意識が完全に断絶している事を確認すると、纏っていた影の衣を解いた。

影が霧散するようにして掻き消えると、燐光に照されて顕れたのは

紫髪に褐色の肌をした妙齡の女性であった。

女性は紫水晶アメジストの瞳を通路の角に向けると、その奥で待機していた“相方”の名を呼ぶ。

「捕獲完了。——もう出てきて良いですよ、『ユリエル』さん」

「——お疲れ様でした。シャーロットさん」

通路の角より一人の女性が現れた。銀色の長髪をポニーテールに束ね、怜悧という言葉が良く似合う鋭く整った顔立ちの中で空色の瞳が印象的な光を放つ長身の麗人。

人影の正体——カーディナル・ファミリア所属のシャーロット・アラネアを労うと地面に横たわる男達を一瞥する。

「思ったより早く見つけられて良かったですね。もう少し発見に時間がかかるかと思いましたがよ」

「ええ、手間が省けました。上層とはいえ結構広いこの階層で、絶好のタイミングで居座っていたんでしたから。後はコイツらを地上に引っ張り出せばよろしいですか？」

「はい。後は我々、ガネーシャ・ファミリアとギルドの方で処理しておきます。以前から問題となっていた彼らの狼藉含め、秘密裏に絡んでいたであろう裏仕事の情報も引き出せれば申し分ありません」

ユリエルはぐったりと気を失った男達のうち、一人に近づくと難なく持ち上げて背負う。シャーロットもまた残りの二人の襟首を掴み、苦もなく持ち上げる。無論、彼らの所持品の回収も忘れずに。

「さあ早く地上に戻りましょう。私の糸で縛り上げているとはいえ、途中で覚めると面倒です」

「はい、まだ何名か捕らえる必要も有ります。——今回はご協力頂きありがとうございます。ありがとうございました。ガネーシャ・ファミリアとしても感謝致します」

“群衆の主”ガネーシャと声高に宣言する主神の意向で都市の治安維持、管理など行うこの大手派閥はギルドと協力することも珍しくない。

先日のこと、ユリエルの元にギルドからの依頼クエストが舞い込んできた。依頼内容はソーマ・ファミリアの一部悪質な犯罪容疑のある冒険者の捕縛——。

依頼を受けたユリエルは先ず詳しい情報を集めんと知り合いが働くギルドに向かうと、そこには偶然カーディナルから似た仕事を託されていたシャーロットが居合わせ、引き合わされた。目的の一致した彼女らは互いに協力することとなり、現在に至るのだった。

歩きつつユリエルは一時的な協力者に礼を述べると、ダークエルフの麗人は頭を左右に振って彼女に告げた。

「礼は不要です。私はカーディナル様からの神命を受けて動いていただけです。私が率先して動いてくれた方が手早く済むので有難いのはこちらと同じことです」

「それでも他派閥、それも第一級冒険者の手を借りている事に違いはありません。私も一応Lv3ではありますが、流石に一人で捕縛していくのは苦勞します。ファミリアも今、手が空いているのは少ないですから。――あ、すみません。それでは地上に戻りましょうか」

会話をそこそこに終えると二人はならず者達を連行し、迷宮を後にする。

しかし、シャーロットはふと歩みを止めると背後を振り返った。

（そういえば、何か気になる言葉<sup>ワード</sup>を口にしていた気がするけど……まさかねえ？）

彼らの会話の中に出た『白髪』という言葉にシャーロットの脳裏には一人の少年の姿が浮かぶかけるが、ユリエルの呼び掛けに中断されると「何でもありません」と返し、ひとまず歩みを再開するのだった。

現在、下層で発生している後輩の苦闘を知らぬままに――

「はあ……はあ……一体どうしたんだ？」

突然リリが俺の元から離れたかと思いきや、狙い済ましたかのようなタイミングで現れた複数のオーク。動揺しつつも愛剣達の力もあって何とか計四体のオークを倒し終えた時には、既にリリの姿は薄霧の向こう――恐らく上層に続く階段へと消えていた。

「攻略は中止だな。とにかくリリを追いかけないと……」  
「リリース・リコレクション!!」

兎剣を掲げ、追加詠唱―兎剣に眠るかつて在りし姿の記憶の解放―を唱う。

するとそれまで兎剣に纏っていた揺光が一際強く光輝くと同時に、兎剣は勝手に俺の手元から離れて目の前に着地した。

「キュキュツ―」

光が収まるとそこにいたのは白い剣ではなく、白色の光沢をした硬質な毛皮、円らな深紅の両眼でこちらを見つめる白兎の姿のソレがあった。

一時的に再臨した兎剣の前世の姿―『メタルラビット』に、俺は一つの指示を下す。

「お前の鼻と足で、彼女を追跡してくれ！」

古来、モンスターとは人類の敵である。調教師テイマーでもない限り人の命令に従うことは決してない。しかし魔法の影響か、白兎へと姿を変えた兎剣は俺自身を襲うといったことはなく、「キュイツ！」と一鳴き返すと猛烈な勢いで駆け出していった。

自身も後を追おうと駆け出す。だがそれを妨げるようにして、突然霧の中から謎の飛来物がこちらに迫り、咄嗟にエリュシデータで打ち弾くと金属質な音を鳴らして落ちたのは投擲ナイフであった。

「誰だっ!？」

視線を向けた先はオークが転がり、薄霧が広がるだけの空間。だが霧り紛れて乾いた拍手が鳴り響き、次いで滲み出るように黒い影が出現した。

「ブラボー！ 話には聞いていたが、あのオークの数相手に流石の腕前だ。レベル1とは思えない戦いだっぜ」

張りのある、だが妙に耳に障るイントネーションでこちらを褒め称えるのは黒い、雨合羽めいた外套を羽織った男性。顔は目深に被ったフードで良く見えないが、ニヤニヤと弧を描く笑みがやたらと印象に残る。

愛剣の柄から伝わってくる危険信号を感じながら、謎の冒険者？

に口を開く。

「そりゃどうも……誰だか知らないが生憎、こっちは忙しいんでな。

用件なら後にしてくれないか？」

「せっかちは損だぜ？ お前のその実力、もう少し見せてくれよ」

警戒しつつ軽口を叩く少年に飄々と言い放つや、男は腰に手を回すと自らの得物を抜き出す。

その見た目は出刃包丁に似た大型サイズのダガー。だがその刀身は黒ずんでいる上に、表面には脈打つ血管のような筋が這うように覆うという不気味な禍々しさを感じさせるデザインであった。

「本当は直接刃を食らわしたいところだが、残念だが今のお前じゃゴブリンみてえに死ぬのがオチだからな。……代わりに、〃こいつ〃を使つて様子を見させてもらおうとしよう」

男は少年から目を離し、何故か近くに転がっていた瀕死のオークへ近寄る。意図不明な行動に少年は訝しむも警戒を怠らぬ中、男は倒れ込むオークの傍らに立つと手に持っていた包丁の切っ先を膨れた腹に向けると、突き刺して紡いだ。

― 〃血を荒らし、肉を侵せ〃

「グアオオオオオオオオオッ!!」

「!!」

オークの腹に包丁の刀身が沈み込んだ瞬間であった。つい先程までその命が尽きる寸前であった筈のオークが突如として大咆哮。あらゆる苦しみを吐き出すかのような絶叫はルーム全体に響き渡り、その声量たるや思わず少年が耳を塞ぐ程であった。

程なくして咆哮が止むと、男は包丁を引き抜いて少年に告げる。

「さしずめ、『凶化種』といったところか。どう抗ってくれる？ 『剣士様』？」

― さあ、イッ・ツ・シヨウ・ウ・タイム第二ラウンドの開始だ

### 第31話 退魔の光

「迷宮<sup>ダンジョン</sup>」という名に相応しく複雑怪奇に入り組んだ通路を、一陣の「風」が疾走する。

金色に瞬く長髪をたなびかせ、飛ぶような速度で疾駆する風の正体は【剣姫】の二つ名を持つ少女―アイズであった。

（そろそろ、「あの子」のいる階層に着いた筈）

少し時を遡った地上でのこと、彼女はとあるハーフェルフのギルド職員から一つの依頼を受けて彼女の言う、白髪<sup>ペル・クラネル</sup>の冒険者の行方を追っていた。

先日ランクアップしたLv6の脚力を活かし、さほど時間を労せず  
に易々と十階層へと突入する。すると踏み入れると同等に、突如としてモンスターの大叫声<sup>モンスター</sup>が通路の奥から音高に反響し、鼓膜を激しく震わした。

同族ですら逃げ去る暴力的な反響音にアイズは足を止める。その整った顔が僅かに歪む中、咄嗟に彼女の脳裏に浮かんだのは一人の少年だった。

（まさか、あの子が巻き込まれた？）

少年との関連性が頭の中を過り、迷わずアイズは音がした方角へと急行した。そして発生源と思わしき広間<sup>ルーム</sup>に足を踏み入れたアイズはそこで一体のモンスターを見つけ、その異形に目を見開く。

「あれはっ?!」

アイズが視界に捉えたのは、オークと思わしき怪物であった。

でっぷりと大樽の如く膨れた腹をした巨体、しかし胴体とはアンバランスに小さな豚頭と短足……全体の面影こそアイズの良く知るオークの形を成してはいるが、アイズの視界に映るオークはまさしく異常な外見をしていた。

―全身の所々に存在する腫れ上がった肉の盛り上がり、長虫<sup>ワーム</sup>が纏わりついたかのように浮き彫りになった赤黒い脈筋―アイズの知る通常種とも強化種とも違う、異様な有り様。

数瞬、その特異な外見に目を奪われたアイズだが、即座に戦闘<sup>バトル</sup>状態<sup>モード</sup>

に切り替<sup>ス</sup>え<sup>イ</sup>る<sup>ッ</sup>。疑問が湧くも目の前の異常種を危険と判断し、直ちに瞬殺するべく臨戦体勢へと移行する。

だが駆け跳ぶ直前、オーク以外の“人”の存在に気付き、突撃を踏みとどまった。

「！ あれは、ベル?！」

極度の興奮からか、獯猛に血走ったオークの視線を追った先では一人の小柄な冒険者が対立していた。その特徴的な姿に一目で気づいたアイズは冒険者の名を口に出す。

見覚えのある黒のロングコート、それに映えた真つ白な髪、一時の<sup>ひととき</sup>出会いに終わったが、アイズにとって印象深く記憶に刻まれた<sup>ベル・クラネル</sup>黒衣の少年がそこにいた。

「グオオオオオオオオオ!!!」

呼び掛ける間もなく、少年へ目がいった隙に状況が動く。オークは張り上がった雄叫びを上げると同時に、見た目にそぐわない速さで少年へと迫った。

—危ない!

少年を守ろうとアイズは咄嗟に飛び出す。矢を上回る速度でオークへと接敵、いつかのミノタウロスの時と同じように、そのでっぷりとした巨体を斬り飛ばさんと愛剣デスペレート<sup>!!</sup>を振るう——しかしガギンツ!!

「?!」

突如視界外から黒い影が間に入り、アイズの剣撃を弾いた。

甲高く鳴り響く金属音、勢い良く跳ね上がる剣。邪魔されるまで全くその存在に気がつかなかったアイズは驚愕に金の両眼を見開くも、長年培ってきた経験から身体は反射的に距離を取った。

着地と同時に体勢を立て直したアイズは動揺を抑え込み、警戒度を最大まで引き上げると謎の人物に問いかける。

「貴方は、一体誰?」

「ヒューー…こりゃとんだ珍客じゃねえーか。まさか、いきなり【劍姫】がお出ましとはなあ!」

口笛を吹く、如何にも怪し気な黒衣の人物は彼女の質問を聞き流

し、アイズの登場を驚いているようであり、どこか面白気に言う。第一級冒険者<sup>劍姫</sup>を前にしてもその軽薄な態度と口調からは緊張の色が然して伺えず、その飄々とした様子にアイズは小さな違和感を抱く。

だが今は目の前で佇んでいる得体の知れぬ男に専念することに決め、再度質問を変えて男に問う。

「何で、私の邪魔したの？」

「そりゃあ、ちやうど今面白いところだからさ。外野のアンタはあつちへの手出しは無用に頼むぜ。冒険者らしく下層にでも潜つてくりや良いのさ。——ハアン、聞く気はねえって顔だな。なら、しゃーない。計画外だが劍姫、俺と少しばかり殺り合おうぜ。丁度……うちの『同僚』が世話になったことだしな」

ユラリと、男は手に持つ大型の包丁めいた得物<sup>ダガー</sup>をアイズの心臓に突き付け、宣告する。常識から考えれば男の言葉は大言壮語、身の程知らずと一蹴される類いだが、先の出来事にアイズの冒険者の勘が頻りにざわつき、男への警戒を促す。

男をどうにかしない限り少年の元には行けないのは明らか。そう判断してデスペレート<sup>ム</sup>の柄を固く握り締め、しかし身体から余計な緊張を解いて構えるアイズに男の口が歪笑を象る。

ピリピリと両者の間を張りつめた空気が<sup>ルム</sup>困む一方で、霧の向こうではモンスターの叫びと破壊音が<sup>ルム</sup>広間に絶えず轟く。

(私が行くまで、無事でいてね)

異常種のオークと闘っているであろう少年に、アイズは心の中でエールを送る。そして間もなく、少年とオークの死闘が行われている側でもう一つの激闘の火蓋が切られたのであった。

くく

耳をつんざくような絶叫が止むと、異変はすぐさま起きた。

男の手により何らかの処置がされたオークはその巨体を小刻みに痙攣させたかと思えば泡立つように皮膚が膨れ上がり、皮膚下にある青ざめた血脈が身悶える蛇みたく浮かび体表を這う。



『グフウ、グフウー、グフウ……』

荒い鼻息と共にのっそりと、心なしか大きくなったように見える巨体を起こし立ち上がったオークはこちらに真つ直ぐ顔を向ける。

悪鬼の形相に込められたその両目には、自身を瀕死に追い込んだ俺に対する憎悪と、自らの肉体からくる苦痛が混沌と滲み出していた。

(こいつは、かなりヤバイぞ……)

ひしひしと突き刺さってくる剣呑な眼差<sup>殺意</sup>しにゴクリと喉が鳴るも、必死に思考を巡らす俺はそれを意識する余裕は無かった。

あの男の言葉から察するに、この醜く変貌したオークが通常と同じ強さとは思えない。最悪、Lv2のミノタウロスに匹敵する可能性すら存在する。

(メタルラビットを呼び戻すべきか？ いや、もうこの階層から遠く離れ過ぎて俺の声が届かない！)

魔法によって繋がった魔力経路<sup>パス</sup>により大まかな位置と距離は把握出来るものの、こちら側が遠く離れた武器に指示を下す手段が叶わぬ以上、アイツ自身の意志で俺の元に戻ってくるしかない。

オークの周りを見れば、あの元凶の男はいつの間にか姿を消していた。恐らく霧に紛れて一人高みの見物といったところだろう。

気の抜けない状況下であるのに、ふと以前エイナさんに言われた忠告が脳裏に過る。

—良いこと！ 戦闘で危ない状況になったら真つ先に撤退することを優先すること。間違っても無理に立ち向かおうなんて考えない。絶対遵守よ、ベル君!!

今のオークの強さが未知数である以上、まさに今は撤退を選択すべきところだが、こちらを見張っているだろうあの男がみすみすと俺を逃すとは考えられない。

都合良く高レベルの上級冒険者が助けにきたとしても邪魔を入らせない—あの執着心を孕んだ笑みが、そう思わせた。

そうして逃げ道と仲間共に無く、いよいよと腹を括る少年に先手はオークが取った。

『グオオオオオオオオ!!!』

牙を剥き、哮りを上げて少年へ一直線に突進する。地面を踏み砕きながら猛進する様は異変前の鈍重であったオークとは思えず少年は驚くも、間一髪衝突する寸前で横に回避<sup>ローリング</sup>して逃れられた。

目標が外れたオークは制止を掛けて方向転換を試みるも、腫れ上がった胴体とはアンバランスな短足のデメリットもあって自らの勢いを制御しきれず、バランスを崩して足を滑らす。

(こっ)だー)

地面に横転したオークの隙を逃さず少年は反撃へと転じる。エリュシデータを上段に構えると同時に、地を蹴って「跳んだ」。

―上段突進技『ソニックリープ』

かつての剣<sup>ソルトスキル</sup>技を再現した次の瞬間、少年は音の如き速さでもってオークへ接敵、その勢いに乗せた剣を振り下ろす。純黒の刃は主の期待に応えて肉の厚みをもとせずつ胴体を深く切り裂き、更に離れ際にクルツと手首を返しV字に斬り上げる。

オークは痛苦の叫びを伴いつつ手足を振り回し反撃を試みるも、あえなく後方に避けられてしまい空振りに終わった。

(こ)いつ、増大した力を制御出来ていないのか?)

深追いは避け、距離を取り冷静に思考を巡らす。

力は増せど肥大化した胴体と釣り合いが取れておらず、急な動作にも反応が鈍い。その圧倒的膂力は脅威的ではあるが、怪物祭で遭遇したシルバーバックの身軽さと比べれば、このオークの動きは単調かつ攻撃<sup>リリ</sup>範囲<sup>チ</sup>が短い分、ヒット&ウェイに徹すれば相手取することは決して難しくくない―

―そう思考するも、だが少年にとって予想外の異変がオークの身に起きた。

「なっ、嘘だろ?!」

再起したオークの様子に、少年は驚愕の言葉を洩らし凝視する。

再起したオークの血塗れた腹を見れば、いつの間にか出血は止み代わりに胴体―いや傷口より溢れているのは真っ赤な血ではなく、「赤い粒子」であった。エリュシデータによる深い損傷を負った部位か

らは赤い光の粒子が発散されていき、光の粒が立ち上がる側から傷は見る見るうちに癒え、完全に損傷が無くなった。

それは己の魔力を用いた再生能力。本来ならば階層主クラスの可能な力業であり、上層程度のモンスターが抱える魔力量などたかが知れているが、現にオークは階層主達と同じ現象を引き起こしたのであった。

『フングツ！』

少年の動揺をよそに、オークはおもむろに地面へと両腕を突き出す。地面を割り、地中から引き出すようにして現れたのは二振りの棍棒であった。広間に生えていた木と同じ、武骨な天然武器を軽々と両手に携えたオークは少年へと襲いかかる。

デタラメな勢いで振り回される棍棒の嵐に少年は迂闊に接近出来ず、やむを得ず後退した。

それを逃がすまいとオークは追撃を仕掛ける。少年は残り全ての投擲針を放ち足止めを試みるも、より厚みを増した体皮を前に効果は薄く、止めるには至らなかった。

(やばいな、このままだとこっちの身が持たない……！)

状況は一転して、少年の横顔に焦りの色が浮かび出る。

影りをみせる俊足

徐々に落ちゆくパフォーマンス

荒くなる呼吸

苛烈さを増す猛攻はとどまることを知らず、直撃すれば最悪即死に陥りかねない猛撃を必死に回避または剣で反らし続けるも、その重い一撃、一撃が少しずつ使い手に負担を蓄積させていった。

暴走状態に陥ったのか、時を経るほど荒れ狂うオークに対し、立て続けの戦闘に少年の心身に疲労の影が忍びよる。

限界の訪れを察知した少年は一か八か攻勢へと打って出る。

敏捷の優位に加え、攻撃加速の加速をも利用した攪乱攻撃をオークに仕掛けた。周囲を目まぐるしく駆け跳ね、牙を剥く白兔にオークの

怒咆と破壊音が広間に反響する。

だが奮戦虚しく、好転の兆しは現れなかった。

「グハアッ！」

振り下ろしの一撃を避けた途端、間髪入れずに強烈な雑払いが続く。

回避不可能を悟った少年は咄嗟に剣の腹を盾に棍棒を受け止めるも、その暴力的な衝撃に耐えきれず、盛大に吹っ飛ばされた。

「ベル!？」

聞き覚えのある、女性の悲鳴が耳に入るも少年はそれを意識する暇もない。

広間の壁付近に迫る程派手に吹き飛ばされ、少年はまともに受け身も取れず落下する。直撃は避けられたものの全身を襲う苦痛に体が悶えるが、轟き渡る重低音に気づき無理矢理体を起こす。

「はあ……はあ……」

少年はふらつきながらも剣を杖に立ち上る。オークの一撃を正面から耐え切り、主の手元からも決して離れなかった黒剣の刀身には一切の亀裂は無く、その透き通った黒水晶の腹に接近するオークの姿を写し出す。

(はやく……い… 避けないと)

迫りくるオークに少年は回避行動を取ろうとするも、それよりも早く巨影が自身を覆い息を呑む。見上げるまでもなく、視界に入ったのは頭上高く掲げられた両棍だった。

一つに束ねられた両の棍棒の振り下ろし―回避はおろか防御すら許されない単純にして致命的一撃―が少年を襲う――

『!』

―その直前、眩いまでの“閃光”が奔った。

「?!」



その煌めきに勇気付けられた俺は決意を固め、ある作戦を実行する。

「瞑目せし先は夜淵の宙、降り立つ底は——」

少年は、反撃の詠唱を紡ぐ。

くくく

白霧が漂い、荒野が占める広間の一角。白髪の少年と異形化したオークの戦闘から離れたその場所では、熾烈な戦闘が繰り広げられていた。

数瞬に満たぬ、刹那の間に響き渡る無数の剣戟音。

下級冒険者では到底、視ることすら叶わぬ攻防。

時折宙の僅かな一瞬に浮かぶのは、金と黒の残影。

「シヤア！」

「！」

自身の首元を狙った斬り払いを、アイズは首を傾けることで回避する。真横を過ぎ去る黒々とした刃に異様な剣気を感じつつ、素早くお返しの回し蹴りを男に放つ。

それを男はひらりと黒衣を翻し、軽やかな動作で避けると後方へ下がった。

「ほう、存外にやるな。【剣姫】の二つ名を賜るだけのことはある」  
「……」

深く覆ったフードの中で、男はアイズの強さを称賛する。

それに対しアイズは無表情、無言を貫くも、内心動揺の渦が巻き起こっていた。

（この人、強すぎる！）

戦闘中、アイズは魔法を使っていないとはいえ、手加減抜きで剣を振るい続けた。しかし男はアイズの剣戟を悉く回避または弾き、果てにはカウンターすら放ってきた。

この迷宮都市でLv6の高みに至ったアイズと同等レベルの冒険者は、ロキ・ファミアリアの三大幹部や美神の眷属の幹部……そして絶剣のほか数名と考えれば、この黒衣の男が最低でも第一級冒険者クラスの実力を保持していることを示していた。

（まだ私は「調整」を終えていないから、思うように動けないけど。それでも簡単に、私の剣筋が見切られている！）

レベルアップして間もないため、急激に能力が向上したステイタスと肉体で動きに大きなズレが生じている。とはいえそれでもアイズの剣筋は速くて鋭く、見切るのは容易ではない。だが男は戦闘中、アイズの剣戟を易々と大型の包丁で巧みにあしらい続けた。

予想外なまでの男の強さにアイズの警戒が更に強まる中、男は続けて話す。

「事前に仕入れていた情報でLv5と聞いていたが、明らかにそれ以上の強さ。……剣姫、お前もしやLv6に上がったか？」

男の指摘に、アイズは隠し気なく驚愕の顔をする。推測が的中した男はを口端を歪め、更に指摘した。

「だが半端に動きがちぐはぐ、ブレが目立つことから察するにランクアップしたのはつい最近つてとこだな。どうだ、違うか？」

（完全に、こっちの事情が見透かされている!?!）

短くも高速な戦闘の最中、男は少女の些細な挙動からアイズのステイタス事情を完璧に把握した。その事実、いよいよアイズは男の正体がただ者でないことを確信する。

「貴方は、何者なの？ ……闇派閥？」

「ハッ、さてどうだか。それをご丁寧に説明するとも？ この場では関係ない、どうでもいい話だ。……まあ、ここそと迷宮を動き回っているところだけは同じだとお答えしよう」

男はニヤニヤと、質問をはぐらかすように鼻で笑う。

——舐められている。自分をなんら脅威と認識していないかのよう、男の余裕綽々な態度に矜持を刺激されたアイズが攻め掛かからんと踏み出したその時、モンスター<sup>の</sup>咆哮と——鈍い、何かが弾かれた衝突音が響いた。

咄嗟にアイズが霧の先へ視線を向けると、視界に入ったのは少年の小柄な体が大きく宙に舞い、霧の奥へと沈みゆく光景であった。

「ベルー！」

「おっと、行かせねえぜ」

悲痛の叫びを上げ、今にも飛び出さんとしたアイズを、それよりも速く男が牽制する。

「ギイーン！」

銀の細剣と黒き包丁が斬り交される。互いの刃が食い合う衝突点からは火花が散り、甲高い、耳を裂く金属音が鳴り響いた。

「そこを退いて!!」

「言った筈だ。邪魔はさせねえ」

一瞬の硬直後、両者の激しい斬り合いの応酬が再開した。男の足止めには埒があかないと考えたアイズは魔法の行使に踏み切る。

「―目覚めよ」

少女を中心に強風が渦巻く。それは少女の唯一にして、神々からは反則と称される最強の魔法であった。

「……『精霊』の風か」

「!!? 何で、貴方がそれを?!」

少女の魔法を見た男の眩きに、アイズの金の瞳が大きく見開く。無表情だった仮面は完全に剥がれ、その動揺と驚愕が入り混じった素面が顕となった。

声を荒げる少女の追及に、対する男の返答はどこまでも嘲き、煙に巻くような一笑だった。

くくく

少し刻が進み、白髪の少年が危うくオークの目から逃れ、一生の窮地を脱した頃。

「【瞑目せし先は夜淵の宙。降り立つ底は夜風の原因】」

小柄な人間が隠れるには十分な大きさの岩陰に身を潜める少年は、オークにばれぬよう声量を極力抑えた小声で魔法を詠唱していた。



出来る限り最速、しかし焦って詠唱を途絶えさせ、発動失敗するよ  
うな愚行を犯さぬよう細心の注意を払いつつ内に高まる魔力の制御  
にも集中する。

「仮想の分け身、虚からの断片を宿し再起せん。」『ブゴオ！』!!?」

詠唱完成までもう少し、といったタイミングでオークが遂に少年に  
気づいた。ドガン！ と隠れていた岩が棍棒で打ち砕かれるが、辛  
うじて少年は逃れることに成功した。

少年は少しでもオークから距離を取ろうと一気に駆け出す。だが  
唐突な動作に詠唱の一時中断を余儀なくされ、制御されていた魔力が  
途端に狂い出す。魔力の制御を失えば、使用者の末路は魔力爆発イグニス・フラトスに  
よる自滅。

「クッ、なれ汝よ成れ。青薔薇の眠りより再醒し、凍てつく氷枢より再顕  
せよ！」

回避移動を取りながらも詠唱を再開する。

胸の内が大きく脈動するに合わせ、集い、高まってきた魔力の塊が  
一気に外へ溢れ出さんと揺れ動く。それを鎮めんと少年は転生して  
以来、最大の集中力を発揮して途切れ途切れの詠唱を紡ぎ出す。

『グオラツ!!』

だが後僅かというところで少年の行動に本能が危機感を抱いたの  
か、突然オークは前方を逃げる白兎に狙いを定め、両手に携えていた  
棍棒のうちの一本を勢い良くブオンとぶん投げた。

避ける間もない、飛来する棍棒に少年が紅い瞳を見開く。

「吹き荒れるろ!!」

その時、「神風」が吹いた。

ビュオツと風鳴り音を轟かせ、少年とオークとの間を強烈な突風が横  
切る。そのまま突風は少年へ襲い掛かるとした棍棒を吹き飛ばし、  
あらぬ方向へと追いやった。

千載一遇のチャンスを見逃さず、少年は最後の詠唱文を一気に吐き  
出した。

「エンハンス・アーマメント!!」

光が、<sup>ルーム</sup>広間を白く染め上げた。

### 第32話 闇を祓う光剣

視界一面を染め上げる白き極光を前に、オークは反射的に太い腕を掲げて視覚を守った。光の氾濫はすぐに衰え、完全に消え去るとまた先刻と同じように逃げられたのかと、少年を探す。

少年はすぐに見つかった。しかしさつきまで脱兎の如く必死に逃げ回っていた筈が、どこにも隠れず、逃げ出さずにオークの前方で静かに佇んでいた。

だが何よりもオークの目を惹き付けたのは白髪の少年ではなく、少年が握っている一振りの“剣”であった。

自身の体を幾度となく斬り刻んだ黒き剣は、その漆黒だった刀身が氷塊を削り上げたかのような、うつすらと透いた青色へ染まり。

純白の光を発した黒の宝珠は、今はその光が淡い青緑色ベールグリーンとなつて宝珠から溢れ出し、刀身全体を薄いベールとなつて覆いつくす。

その広間ルームに満ちる薄闇を祓う、その幻想的なまでの輝きは……まるで漆黒の夜空に包まれて、ささやかに、淡く、しかし見上げる者を惹き付けて止まない、星屑の煌めきかのようなであった。

―後に、少年は魔ウエボン・マスター法で強化されたエリュシデータの形態を“闇を祓うもの”と名付けた。

その名称は此処ではない世界、黒の剣士と呼ばれた英雄が操りし双剣の片割れ。白き竜が精錬したクリスタルを、マスタースミスの少女が一振りの剣に鍛え上げた、黒き剣の対となる白き剣の名であった。

(流れくる……エリュシデータに眠っていた記憶の断片が……)

握りを通じて、夢現ゆめうつにエリュシデータの情報きおくが伝わってくる。

魔ウエボン・マスター法で解放された力の特徴、性質といった詳細な情報を、エリュシデータが教えてくれた。

その過ぎ去っていく記憶の奔流に触れていく中、揺れ動く光に人の姿らしき影を垣間見たような気がした。だがそれは空白に近い朧気な残像であり、意識する間もなく光に溶け込んでしまった。

光は収まり、目を開けば前方には呆然と立ち尽くすオークの姿と、

手元には神秘的な光を纏ったエリユシデータがあつた。その刀身から発せられる青い月光を彷彿させる燐光に、言い難い懐かしさを覚えると同時に柄を握る手が仄かに熱を帯びるのを感じ取る。

俺の手の上に重ねて、見えざる手が触れたような暖かみは戦闘で消耗した身体へと染み渡り、痛みと疲労が癒されていく気がした。

(……次の一撃で、決着を決める)

残された時間マインドの限界を感じ取り、次が真正銘の最後の抵抗になるだろうと察した俺はオークを真っ直ぐ見据え、構えを取った。

大きく体を右に開き、腰を沈める。その姿を変えたエリユシデータを肩の高さまで持ち上げ、大きく後ろに引く。空いた左手は剣先にかざし、その照準をオークの胴体に狙いを定める。

自身の誇る剣技で、最強の一撃技を選択する。すると俺の戦意に応え、エリユシデータはその“形状”を変えた。

キン、キン、と澄んだ音を微かに響かせつつ、刀身が巨大化していく。より正確に言えば、青い刀身の上に重ねて次々に結晶が生じていき、一体化していく。そのサイズは身の丈に迫った。

長さや厚みを増したことで重さや重心にも変化が生じた筈が、変化前と何ら変わらない。その理由はエリユシデータが俺に合わせ、“調整”してくれているからだ。

「いくぜ、相棒」

少年の言葉に宝珠はその輝きを、眩く煌めかせた。

『グオオオオオ!!』

光に反応し、今や全身が赤黒く変色したオークは巨体を揺らし、少年に突撃した。握り締めた棍棒を高く振り上げ、今度こそ白兔をミンチに潰さんと接近する。

「ヴオーパル——」

少年は言葉を発すると同時に右腕を限界まで引き絞り、攻撃加速スを發動した。スキルのアシスト補正が少年の体を動かし始め、大きく開いた両足で思いきり地を蹴った。

スキルでブーストされたその加速を回転力から直線運動へと変換し、その全ての力を、右腕と一体化した白い剣に叩き込む。

「ストライクウ!!」

金属質の轟音と共に、少年は叫びを上げて剣を一直線に撃ち放つ。

—単発重突進技《ヴォーパルストライク》

かつての黒の剣士が愛用した剣技は、彗星が如き極光を帯びて撃ち出され、オークへと炸裂した。

くくく

—何の音!?

突然炸裂した異質な轟音に、アイズは両目を見開いた。

今までに聞いたことがない、太く、重く、硬く、鋭い、——まるで、剣そのものの怒りの叫び。

轟音の源は、少年が構えた剣だ。青水晶の輝きを持つ刀身から強い純白の閃光が生み出され、鋭い刃を激しく震わせながら、耳をつんざくような咆哮を上げている。

更にアイズは息を呑んだ。少年の持つ魔法かスキルによるものか、光の中で青い刀身は伸長し始め、その大きさを増す。最終的には細めの大剣のような形状に変化を遂げた。

起きた変化はそれだけではない。眩い光に照される少年の横顔に、アイズは一瞬だが確かに幻視した。

雪のような白髪が黒一色に染まり、僅かに伸びて横顔を半ばまで隠した。激しく揺れる黒い前髪の隙間に覗く深紅ルベライトの瞳もまた、髪同様に黒くなり鋭利な刃が如き眼光を発する。

全く別人の、しかしどこことなく似た面影を彷彿させる少年の横顔は次の瞬間には幻のように消え、元のアイズの知る少年の顔に戻った。

アイズが見たのは少年の前世の残像とでも云うべきものだが、何が起きたのかアイズには知る由がない。

黒衣の男と戦闘中であるにも拘らず、アイズは目の前の光景に没頭した。いや、アイズだけではない。男もアイズから少し離れた場所で戦闘を中断し、少年の動向を見守っていた。フードで隠された顔は光に照らされ、その満面に興奮した、異様な笑みと眼差しが露となった。

二人が見守っていることなど露知らずに、少年が技名らしきものを咆哮する。直後少年の姿が消え失せると同時に、猛烈な速さで剣が打ち出された。長いコート裾が、飛竜の翼のように激しくはためく。

アイズの必殺技——リル・ラファアガと同じ、敵を貫くことだけを目的とした一撃は数メートル以上も離れたオークとの距離を瞬時に駆け抜け——。

迫っていたオークの膨れ上がった腹、肉の鎧めいた厚みある胴体の真ん中を、呆気なく貫いた。

光の刃はそのまま更に二メートル近くも伸び続けてから、粒子となって分解する。本体の刀身もまた、氷が割れるような音を立てて破片が剥がれ落ち、本来のサイズへと戻った。

胸に秘めた、核たる魔石を穿たれたオークは絶命の叫びを残す間もなく息途絶える。その巨体を灰と化し、残滓が宙に漂った。

〃〃〃

(……勝ったのか?)

呆然とした、間抜けな言葉が真つ先に浮かんだ。そして勝利した余韻に浸るよりも先に、急激に体が冷え込み意識が遠のいていく。

(まずい、マインドダウン精神枯渇だ!)

考える間でもなく、当然の事だ。ただでさえ兎剣の発動維持にマインド精神力を送っているというのに、加えてエリユシデータに魔法を掛け合わせたのだ。

Lv1の、魔力アビリティ最低ランクな俺がここまで魔法を使用できたのが奇跡と言ってもいい。

だが、まだ魔法を解く訳にはいかない理由があった。兎剣——メタルラビットが元の剣に戻ってしまえば、俺はもう、リリの行方を追えなくなるのだ。

歯を食い縛り、気合いと根性で意識を保ち抵抗を試みる。だが呆気なく脛は重く沈み、意識も曖昧に陥って体は地面に崩れ落ちる——

「ベル!？」

完全に俺の意識がブラックアウトする寸前、幻聴か少女の声が聞こえたような気がした。

「アイ、ズ……?」

幻聴ではなかった。俺の頭上で、見知った金髪の美少女がこちらを焦りと心配が交ざり合った表現で覗く。辛うじて、少女の名を呟いた。

彼女は腰のポーチから何かを取り出した。液体の入った瓶だ。『これを飲んで!』と彼女は言うな否や、蓋を外しその開いた口の先端を俺の口へと突っ込んだ。

「んん?! ゴバツ、ゴボツゴク、ゴク——」

突然の行動に動揺し、危うく喉に詰まりかけたが少しずつ喉奥に流し込む。すると一口飲むごとに意識ははつきりと甦り、視界が良好になる。それだけではなく、驚くべきことに傷の痛みや疲労も和らいでいき、全て飲み終える頃には俺の体と精神力は、ほぼほぼ回復を果たしたのであった。

「具合はどう、大丈夫?」

「ケホ、ケホツ……ああ、何とかな。これは、ポーションか?」

「うん。……『二属性<sup>デュアル</sup>ポーション』? 前にリセリスから貰ったの。なんでも、体力と精神力<sup>マインド</sup>が同時に、回復するんだって」

ポーションの効果を聞き、感嘆の息を洩らす。通常、ポーションとは傷や体力を回復するものと、魔導士御用達の精神力<sup>マインド</sup>を回復する二種類がある。俺の知る限り、それらを同時に回復可能なポーションの話など聞いたことが無かった。

アイズが言うには、ある零細商業系ファミリアがごく最近、開発に成功したものらしいとのことだ。なんでも開発の一環にリセリスが関与していたらしく、その報酬に手渡された完成品をリセリスから貰ったと言う。

「そうか……後でリセリスにも礼を言っかないとな。ああそうだ、アイズは何でここに?」

「地上で、君のアドバイザーさんから頼まれたの。……ごめんね。君

がオークに襲われているのを見て、すぐに助けようとしたけど、変な人に邪魔されて駆け付けられなかった」

「いや。戦闘中に吹いた突風、あれはアイズのдаро? あれが無かったら俺は間違いなく死んでいたさ」

しよんぼりと申し訳なさそうに頭を垂らすアイズに、俺は否定して元気付ける。エリユシデータの助けもそうであるが、彼女の介入が無かったら俺の命は当に潰えていたと確信する。

なお、元凶の男はアイズ曰く、俺がオークを貫いた時にはいつの間にか姿を眩ましたらしい。

「と、そうだった! アイズ、すまん!! 今すぐ追いかけてなくちゃいけない人がいるんだ。お礼とポーシヨン代はまた後日、地上で頼む!」  
頭を下げ、一気に言葉を捲し立てると少年は彼女の返事を聞かず、上層へと走った。一人取り残されたアイズは何が何だか解らず、ただ困惑した。

そんなポツンと座る劍姫に、どこからともなく話し掛ける者が現れたが——それはまた、別の話。

「くくくっ……く、くははは!!」

一方で、人もモンスターも居ない通路の暗がりには男は紛れていた。壁にもたり掛け、哄笑を必死に噛み殺すも我慢しきれず、くぐもった笑いを洩らす。

「確かに見たぞ、あの『顔』だ。それにあの技、間違いなく覚えている! ああ……こんなことがあるのか!! くそつたれな神共が仕組んだ運命か、偶然か? んなもんどつちでも良いさ!?! アイツをこの地



に呼び込んだ野郎かみがいるなら、今だけはそいつに感謝の祈りを全力で捧げようじゃないか!!」

男は壁から湧き、目についたモンスター達を狂喜乱舞して包丁で切り刻んでいく。おびただしい血と臓腑を撒き散らし、ひとしきり笑い、興奮が収まると男は冷静に戻った。

「ふう……さてそろそろ戻らんな。いい加減、あいつらも俺が消えて痺れを切らしているだろうよ。……また会おう、『黒の剣士』。次会う時は、本気の殺し合いを楽しもうぜ……」

愛する恋人に手向けるような、異様な熱を孕んだ言葉を少年に送ると、男は迷宮の闇にその身を溶け混ませて消えた。

同胞という名の、単なる同種に過ぎない二人が潜んでいる階層に戻るべく。

### 第33話 涙の果て

それは正に、悪夢の光景だった。

リルルカ・アーデが見渡す限りの、通路という通路から溢れ出しては埋め尽くし、壁一面を夥しく這いずり回るのは、赤い甲殻を持つ異形のモンスター『キラアアント』の群塊。

ビクビクと怯えた小動物のように、小さな身体をより縮ませる少女がどこに視線を回しても、爛々と彼らの無機質な紅眼が迷宮の暗がり で不気味に瞬き、ギチギチツと神経を絶えず逆撫でする不快な歯軋り音が幾重にも重なり合い、迷宮に鳴り響く。

小人という脆弱な身にして非武装、丸腰を晒すリルルカでは巨大蟻に抗う術など一切無く、贄に等しい。その矮小な命が無残に容易く食い散らされるのは、避けられぬ未来——その筈であった。

「キュイイヤアアア——！！」

『『ギイシャアアア——！！』』

少女の目の前で巨大蟻の集団を果敢にも、小柄な白い兎が俊敏に跳ね回る。

キラアアント達は鉤爪を振るい襲いかかるも、小さな乱入者はヒョイヒョイツとそれらを悉く背中の中甲殻から甲殻へと飛び跳ねてかわしていくか、自身の硬い毛皮で爪撃を弾く。煽るかのように鳴き立てる白兎に、キラアアントらは怒りの金切り声を鳴き散らす。

—現在、迷宮の七階層の一角は少女の予想もつかない大混戦と化していた。

（一体、どうゆう状況なんですか?!）

目の前で盛大に繰り広げられている白兎と蟻達による大乱闘を、リルルカはただ愕然と目を見開く。

事の経緯は少し前、瀕死の仲間が発するフェロモンに惹かれたキラアアントの群れを前に、用済みとなったリルルカがカヌウ達に無慈悲にも囮として見捨てられた時に遡る。

カヌウらの一計で続々と押し寄せてくるキラアアントの集団を、

Lv1の非戦闘職に過ぎぬリルカでは立ち向かうはおろか逃れることすら叶わず、少女が生還あらゆる全てを諦めるのにさほど時間は掛からなかった。

最後に、己の宿願の為に黒衣の男の囁きに乗り、自分を信用してくれていた少年を利用したことへの後悔を胸に少女は訪れる死を受け入れようとした、その瞬間だった。突然、何処からともかく白兔が颯爽と跳び込み、今まさに少女の命を奪う直前だった凶爪を退けた。

間に割り込んだ謎の白兔は少女に危害を及ぼす真似はせず、何故か同じモンスターであるキラアートの集団にたつた一匹で飛びかかる。

―あたかも、キラアートの敵意を少女から自分へと惹き付けるかのように。

人類の敵である筈のモンスターが人を庇う行動など、一度も聞いた覚えがない少女は困惑するしかない。

突如湧いた闖入者にキラアートの注意の矛先はリルカから鬱陶しい白兔へと変わり、少女には一切の目もくれない。白兔の乱入により辛うじて生き永らえたりリルカだが、しかし彼女はまだ自分は窮地の真ん中にいると気付いていた。

(今のリリは袋のネズミ。今は無視されていますが、それもあの白い兔が惹き付けている間だけ。それが終わった時、今度こそリリは一卷の終わりでしょう)

全ての通路口が塞がれて逃げ道が存在しない現状、今も眼前で蟻の大群を跳び交い、大立回りをする白兔が己の唯一の生命線。

救いの兔は跳び交うのみでキラアートを倒す力は無い。だが、リルカの目には何かを待っているかのように見えた。

―白兔が介入してから十数分を経た頃、白兔の身体に異変が生じる。突如小柄な真っ白い全身から、淡い光の粒子が立ち上り始めた。

「！」

『キシャー！』

自身に起きた変化に白兔の動きが止まる。その隙を見過ごさなかった群れの一体が大顎を開き襲いかかるが、咄嗟に高く跳躍して回

避する。飛び上がった白兔は空中でクルツと宙返りすると少女の近くに着地した。

「きゆう……」

全身から発せられる粒子の数はその勢いと輝きを増していく中、さつきまでの決死の勢いが一転、弱々しい鳴き声が白兔から溢れる。何が起きているのか詳細は知らずとも、少なくとも自分にとつてよろしくない事態だろうことは、リルルカは予想出来た。

キラアートの群れはジリジリと迫り、白兔と少女を一部の間もなく包囲する。

最早これまでだと諦観した少女は、儂い希望だったと顔を伏せる。

—その中で、背後の少女に近づけまいと群れに紅眼の睨みを利かせていた白兔の耳が、ピクツと震えた。

そして――

「ヴォーパルストライクウ!!」

轟音と閃光。

「えっ……?」

極光を纏った光閃が、キラアートの群れのど真ん中を貫いた。

くくく

薄暗く録に先も見通せない入り組んだ通路を、一陣の風のように駆け抜ける。

道中、コボルトやウォーシャドウなどといった他のモンスターと出くわすが、先を急ぐ俺はそれらを悉く無視して振り切るか、すれ違い様に一撃で斬り伏せることで極力戦闘を避けていく。

(「反応」は近い、間に合ってくれ!)

階層を越えて尚足を止めず、敏捷を全開にして目指すは、先行したメタルラビット―に姿を変えた兎剣。

予想外の襲撃により一度その姿を見失ってしまったが、幸い

魔<sup>ウエボン・マスター</sup>法で繋がっている魔力のリンクを辿ることで、兎剣が何処に向かったのか追跡可能であった。

しかしそれも魔法が発動している間のみ。顕現可能な制限時間を過ぎ、効力を失えば全てが手遅れとなる。変異したオークとの戦闘で時間を浪費してしまったことで兎剣に掛かる、魔力の繋がりが刻々と薄くなるを感じていく俺はこれ以上ないまでに全力で疾走した。

そうして、遂に――

「……ッ！ あれは!!」

俺と兎剣を繋ぐリンクが極細の線にまで途切れかけた時、遂に兎剣の元に追いついた。だが進行先で無数に蠢く、赤黒い影を視界に捉えた俺は猛烈に嫌な予感を抱く。

予感の中。影の正体、キラアアントの集団に完全包囲されているのは、光輝く粒子に包まれたメタルラビットと、その背後にいる小さな人影。

―その危機的状況を目にした俺の脳裏に、古い一つの記憶トラウマが甦る。けたたましくアラームが鳴り響く広間に、怒涛に押し寄せるモンスターの一団。その圧倒的数を前にがむしやらに剣を振るうも、救う間もなく自分を除き、雪片のように儚く四散していった者達の最後の場面。

それはキリト―桐ヶ谷和人という人間が招いた前世の所業。死して転生していようとも忘却の彼方に置き去りにできぬ、魂に深く刻まれた許されざる罪の記憶。

あの時と同じ悲劇を繰り返さぬと誓った俺は、咄嗟に集団に狙いを定めエリユシデータを後方に引き絞る。

ウエボン・マスタリ

魔 法の掛かった黒剣は、その刀身をキンツキンツと澄んだ音を

立てながら青白く染まり、伸長し厚さを増して巨大な刃と化する。

「……繰り返しさせてたまるか、――ヴォーパルストライクウ!!」

暗い感情を塗り潰すような裂帛の叫びと共に、渾身の突きを撃ち放つ。

金属質の激しい重低音を轟かせ、青緑色の光を帯びた斬撃が、エリユシデータから迸った。

くくく

一直線に、月光の巨刃は巨大蟻の大群を突撃槍の如く抉り裂いて突き進み、少女と白兔の前まで一つの道筋を斬り拓いた。

突如として炸裂した後方からの襲撃に、キラアアント達は阿鼻叫喚の悲鳴を撒き散らす。その慌てふためく混乱の中をつくように、黒衣を纏った人影が少女と白兔の前に躍り出た。

兔を彷彿させる、雪のようにまっさらな髪と深紅の瞳をした少年、ベル・クラネル。

「キュイキュイ！」

「べ、ベル様?!」

白兔は待ちわびたと言わんばかりに興奮に鳴き、一方で少女は更なる予想外な助っ人に動揺で狼狽える。

「悪い、待たせたな。……俺が来るまで、良く持ちこたえてくれた」

少年は、思わずリルルカがぞつとするような鋭い眼光を、次の瞬間には優しい眼に変わり、見事役目を果たした白兔をねぎらう。

主の言葉にメタルラビットは光に包まれる。光が収束し、その身に掛かった魔法の効果が解けると元の物言わぬ、白い一振りの長剣へと戻っていた。

「ゆっくり休んでくれ。後は任せろ」

少年は優しく兔剣にいたわりの言葉を掛け、カチンと背中中の鞘に丁寧に仕舞い込むと少女の方を向く。少し前、少年に行った自身の所業の件で思わず少女の体はぶるりと震えしまい、それを見た少年は苦笑いした。

「ベル様。あ、あの……」

言い淀むリルルカに、少年は周囲が騒がしいから少し待つようと告げる。

そして再び双眸を研ぎ澄まされた刃のように変え、少年が後ろを振り返ると既に巨蟻達の混乱は収まっており、少年に対し警戒心を募り上げていた。更にその奥から続々と増援が押し寄せる。

「エリユシデータ、もう一踏ん張り頼む」

——すぐに終わらせる

そう気負いなく宣うと少年は剣を逆手に持ちかえ、勢い良く剣先を地面に突き刺した。

孤立無援の状況だというのに、少年の意図不明な行動にリリルカが困惑する中――少年の口が開く。

「――エンハンス・アーマメント」

短文の詠唱ことばを紡いだ途端、生じた変化は劇的だった。

エリユシデータが突き刺さった根元の地面から黒い波紋が発生する。波紋は地面を音も無く伝い、周囲に拡散して霧散する。

不発？ と少女が思った直後だった。突如キラアアント達の足元から、無数の「黒い刃？」が一挙に生え、飛び出した。

解明剣エリユシデータの黒水晶のような刀身と同じ黒々とした深い、夜闇を彷彿させる漆黒の結晶は少年と少女を除く地面を遍く覆い尽くし、その鋭利な刃が大蟻の群を悉く甲殻ごと斬り裂き、串刺していき、一匹残らず瞬殺する。

頃合いを見て少年がエリユシデータを地面から引き抜くと、同時に黒結晶の剣山は硝子が砕け散るような音を立てながら崩壊し、微細な破片となって分解した。

全滅。

数瞬前まで圧倒的な数の優位を保っていた大蟻達の一団は、その全てが少年の手により増援ごと一瞬で殲滅されて息絶える。後に残るのは、斬り刻まれた大蟻だった残骸とその飛び散った体液、そして黒ずんだ灰の山のみ。

「嘘……………」

少女の呆然とした言葉が洩れる。

この状況を生み出した張本人である少年はヒュンヒュンと黒色に戻った愛剣を左右に軽く払うと背中の鞆に納め、後ろで座り込む少女に向き直った。

「…………ベル様、どうやってここまで？」

「いやあ、あの後何とか頑張って全部倒しきったのさ。……途中ちよいつとヤバい奴が現れたが、まあ結果オーライ？ 無事に乗り切ったよ。後は兎剣コイツのお陰でリリを追いかけられたのさ」

少年は背中に背負った白剣を指差す。軽い調子で答える少年だが、纏っている軽装は凹み、黒コートやズボンに汚れて所々がボロボロに破けおり、その下の露となった皮膚には痛々しい傷や掠り傷がまだ残っているのを、リリルカは見逃さなかった。

「……どうしてですか」

「ん？」

「何でリリを追いかけ、助けたんですか？ とつくに分かっているんですよね？ リリはベル様を見捨てたんです。あの男に、ベル様を売ったんですっ！」

「……」

黙りこくる少年に、リリルカは更に続けて己が行った悪行を告白する。

「多分気づいていないと思いますが、リリはこれまで換金の際にこっそりお金をちよろまかしていました。分け前もリリが上、調子に乗ってアイテム代の費用を定価の倍以上吹っ掛けたりしました！」

「そもそも、ベル様と出会った目的だつて最初は装備狙いだつたんです!!」

「お、おう。そうか………換金は気づかんかった」

「がーっと声を荒げ、途中から涙目となつて一気に吐き出すリリルカ。一方で少年はポカンと珍妙な表情を浮かべると、小声でぼそつと騙されていたことをこっそり自覚した。」

「リリは盗人です。金に目が眩んだどうしようもないクズです、悪人なんです！ ……こんなサポーターの風上に置けない最低なパルウムを、どうして助けたんですか？ 復讐ですか？」

「君が、寂しそうに見えたからさ」

少年の言葉に、へえっ？ とリリルカはその瞳を見開いた。

「俺と居る時は気丈に元気良く振る舞っているけど、時々リリの背中がどうしようもなく心細そうに暗く見えたんだ。」

「……君の言う通り、裏で色々悪い事をしてきたのかもしれない。でも、君のほんとに楽しそうな笑顔を見てみると、本当は根は良い子なんじゃないかなつて俺は思っちゃうんだよ」



だから、信じてみたい。それで騙されてしまうなら、仕方ないと笑って受け入れよう。

—だが、それだけではない。

少年は一拍置くと、ふてぶてしい見馴れた笑みを浮かべて続ける。「俺はな、自分のパーティは決して一人も死なせないって心に決めるんだ。君は自分を蔑んでいるかもしれないが、俺にとってリリ、君は俺の〴〵大事な仲間パーティの一人？ なんだぜ」

「あつ、あつああ……………い！」

気づけば、大粒の涙が瞳から零れ落ちていった。

ぼろぼろと溢れるそれをリリルカは堪えることは出来ず、嗚咽からやがて声を出して泣き始め、迷宮に響き渡る。

主神からは見向きもされず、他の団員や冒険者からは都合の良い道具扱い。今まで誰一人、リリルカそのものを真つ直ぐ見てくれる者はおらず、彼女は何時だつて一人ぼっち。

しかし少年の発した言葉は少女が長い間待ち望み、しかし絵空事だと諦めていた、かけがえのないものであった。

自分に抱きついて泣きじやくる少女の背中を、少年は振りほどくことはせずそつと手を回し、ボサボサに跳ねた少女の頭を優しく撫でる。

少年の手の温もりが、自分の荒んだ心と傷を癒し、少女は心地良かった。

—少女の涙声が途絶えるまで、少年は彼女から離れず、側に寄り添い続けていた。

「はあ、はあっ……くそ、一体ここは何処だ!？」

一人の男性の冒険者が迷宮を彷徨っていた。

息切れを起こし、足元がふらつくその様子は到底余裕は伺えず、消耗しているのは明らかである。

「……あのくそつたれ共、絶対に許さねえぞ！俺を虚仮こけにしたこと覚えていやがれよ。地上に戻ったら、ただで済まずと思うな!!」

男性―ゲドは自身を裏切り、自分を都合良く利用するだけ利用したカヌウらへの恨み節を口ずさむ。

上層でカヌウらに裏切られたゲドはリリルカを置いて一人先に脱したあの後、キラーアントの群れから逃げきる為に、咄嗟に近くにあった下層に続く穴に飛び込んだ。

何とか無事、巨大蟻達に貪られる未来は回避したは良いものの、飛び込んだ穴はゲドの予想以上に深く、体感的に2フロア分は落下したとゲドは推測する。

その後上層へ続く階段を探すも、しかし正規ルートから外れて自身の現在地が分からず、ならば同業者に尋ねようとも、運良く遭遇する幸運にもゲドは恵まれなかった。

上層と云えど自分は一人。実力に覚えがあるとはいえ、キラーアントの群れに襲われた時のように多勢に無勢な状況では、自分の命は呆気なく散らされるとゲドは迷宮の危険性を十分承知していた。

その上サポーターがおらず、手持ちのアイテムが心元無いこともあり、ゲドが苛立ちを高める原因にもなった。

「落ち着け、俺にはまだ、これ？が残っているんだ。いざとなりやモンスターから身を守るし、地上で売ればこれ一本で多額の金が付く。糞。パルウムに盗られた損失分を除いても、軽くお釣が来るんだ」

ゲドは懐から紅いナイフを取り出し、自らに言い聞かせる。

紅いナイフの正体は魔剣。リリルカを罠に掛けた際、彼女から強引に奪取した代物だ。早めに仕舞い込んだ為に、金目の匂いに貪欲な力又ウラム魔剣の存在に気づかなかったのだ。

ゲドは唯一の収穫物である魔剣を見てほくそ笑む。地上に戻った後の明るい未来を想像し、蓄積していた怒りと不安が少しは紛らわすことに成功した。

「しかし、上層の階段は一体何処に在りやがるんだ？ ……ん、あれは？」

魔剣を仕舞い、顔を上げるとゲドは前方の通路に一つの人影を発見した。

最初はモンスターかと警戒したが、自分より少し小柄な人影は裾がボロボロの薄汚れたフード付きの外套を身に付けており、両手にはそれぞれ片手斧と円盾バックラーを携えている。——自分と同じ冒険者で間違いないだろう。

「おい、そのアンタ！ お前だ、ちよつと待ってくれ!!」

ゲドが叫ぶとその人物は足を止め、後方を振り返った。フードの中の顔は暗くて伺えない。道を尋ねようとゲドは無用心に近づく。

「わりの、道に迷っていてな。上層に続く階段を——」

——教えてくれ、その続きをゲドは発することは出来なかった。

「ゴツ、ブハアツ?!」

突然、ドスツと胸に重い衝撃が襲うと同時に、灼けつくような痛みがゲドを襲った。喉奥から迫り上がり、口内へと溢れるのは鉄の味。

「なつ、っこれえは……」

息絶え絶えに顔中を苦痛に歪ませながら視点を下ろすと、ゲドの目に飛び込んだのは己の胸に突き刺さった、斧だった。

視線を前に向ければ外套を羽織った人物の手にはさつきまで握られていた斧は無く、自分に目掛けて投擲されたという事実を把握するのに、さほど時は要らなかった。

ゲドの脳内では思考が混乱の渦を巻く。どうして、何故、反撃、治療？ ——ぐるぐると答えが出ず立ち尽くすゲドを置いて、謎の人物は次アクションの行動に実行を移した。

意識が散漫していたとはいえ、ゲドの目にも止まらぬ速さで目の前まで接敵する。そして胸元に刺さった斧を片手で引き抜くと一息にゲドの胴体に向け、勢い良く振り下ろす。血しぶきを飛ばし深々と斬傷を刻まれたゲド。致命傷どころか、呆気なく命そのものを絶ち斬った。

「フン、フン?」

反撃の隙を与える間もなく、一人の冒険者を殺したその者は亡骸をあさり、使えそうな代物を物色する。フードの下にある鼻息を鳴らすその顔は、人間のそれではなく犬に似たモンスター、「コボルト?」のそれであった。ガサゴソと冒険者が纏っている丈夫な「皮?」の内に手を入れる。すると冷たく硬い感触が伝わり、コボルトはそれを取り出した。

手に取った物を見ると、それは異質な空気を漂わす紅いナイフであった。しげしげと眺めたコボルトが適当に振ると、刀身から火炎が飛び出し壁の一部を焼いた。

コボルトは驚愕に耳を立て、あんぐりと口を開く。

元々下層でモンスター達を狩ってその魔石を食らい続けていたが、久しぶりにどれくらい強くなったかと思いついて立って上層に上がっていた。そこで偶然、遭遇した冒険者に見つかってしまった。まずいと慌てたコボルトは反射的に攻撃を仕掛けてしまった。

幸い冒険者は大して強くなかったので始末できたから良かったが、予想外の得物（おもちゃ）が手に入ったことでコボルトの口端が歪む。

—しかしその浮かれた喜びも、束の間であった。

「ほう、強化種のコボルトか。……底辺のモンスターが成るとは珍しい」  
「?!」

不意に背後から野太い男の声が耳に入り、コボルトは驚愕するも身体は反射的に飛び下がった。声が響く直前まで、コボルトには全く気配が何一つ感じられず、その事実がコボルトの背筋をぞっとさせた。

「……なるほど、良い反応速度だな。まだレベル1の範囲内だが、その上に届きつつある素質を持つということか」

姿を見た瞬間、コボルトは一瞬で力の差を脳ではなく、本能が先に理解した。この自分よりもずっと大柄な冒険者には絶対に勝てない。例えば自分が何百匹いようと、この絶望的なまでの暴力を秘めた冒険者からすれば、一瞬で全て肉片に変えることなど造作も無いという事実を。

「……試練の為、ミノタウロス辺りを用意しようと考えていたが、やめだ。お前に決めた。」

お前の秘めた素質ならば必ずしや、あの者が越えるべき試練に相応しい相手となるだろう」

今ここに、大男とコボルトは運命の邂逅を果たした。

〓番外編2〓

「レヴィス！ おい、レヴィス！」

何処とも不明な迷宮にある階層の一角で、男の喧しい声が彼女の耳朵を打った。

苛立ち気に閉じていた瞼を開けると、青ざめた体に異形の頭蓋骨を頭に被った男が慌ただしく目の前にいた。

「うるさい、聞こえている。一体何だ？」

「ッアイツ？だ。アイツは何処に消えた!? また勝手に持ち場を離れやがったんだぞ！」

(またこれか……)

これで何度目だと、レヴィスは頭痛の思いをした。彼女からすれば、全くもつてどうでもよい、下らん話だ。

「大方、何処かの階層かクノツソスか、あるいは地上に出向いているん

だろう。好きにさせとけ、いずれ戻ってくるさ」

「適当な事を抜かすな！ お前も我らの使命がどれほど重要なことか分かっている筈だ。……それをあの男は好き勝手に動き回ることはおろか、彼女？の命令すら無視し続けてきた。くそ、いよいよもって彼女に逆らうアイツに罰を与えるべきか……」

「止めておけ、お前程度の実力では私と二人がかりで挑んでも殺せやしないさ。……飄々としていよう、かなり頭も回る。何より、アイツの強さは私達の中でも別格だという事実を忘れたのか？」

「……ふん、私達よりも先に彼女から力を授かっていたからであろう。いつか必ず、私がアイツを越えてみせるさ。彼女の真の忠臣は、この私だ」

果たしてそんな日はいつ訪れるやら……

レヴィスは投げ槍に返事を返す。まず十中八九、この男があのにヤと殺意が湧くような笑みを浮かべるアイツを上回ることには無いだろう、というのがレヴィスの本音であった。

Lv5の冒険者だろうと圧倒する強靱な肉体と力を持つ彼女であるが、自分や目の前にいる男よりも何年も前から彼女の下にいるあの者の実力は、レヴィスの目を持ってしても得体が知れず、底がしれなかつた。暗躍、策略にかけては闇派閥すら上回っているのではと時折思うほどに。

なおもグチグチと不満と文句を垂らす男に、レヴィスは嘆息を洩らして諫めようとした時だった――

「よおーお二人さん。今帰ったぜ？」

不意に何処からともかく、第三者の声が響く。二人が同時に振り返ると、膝上までにしか届いていない黒い外套を纏った男が壁に背を預けて立っていた。

……気のせいかな、いつも浮かべている人を嘲笑うような笑みが、今は機嫌良さげな笑みのようにレヴィスには見えた。

「?! ……ふん、一体何処をほつつき歩いていた？ 遊んでいたとは言わせないぞ」

気配を感じ取れなかった男は一瞬瞠目すると、声を荒げて追及す

る。

「おいおい、ひでえな。俺は顔の割れているお前らに変わって、ちよつくら地上まで情報収集してきた帰りだぞ。守りだったら俺が外出している間は、代わりの「番犬？」を残しておいただろうが。少しは俺様に日頃の感謝でも捧げてもらっても良いんだがな」

「ならば、アリアに関する情報は無いのか」

男のどうでもよい話をズバツと切り捨て、レヴィスは本題を聞いた。

男は特に気に障った様子は見せず、ニヤリと仕入れてきた新鮮な情報を切り出す。

「ああ、勿論あるぜ。アリア、というよりは剣姫アイズ・ヴァレンシユタインに関することだが……まあ、どうせ変わらんだろう？ お前との因縁もあることだしな……？」

フードから覗く瞳が、ゆらりとレヴィスの姿を捉える。

「剣姫はちようど、迷宮18階層にある冒険者の街に滞在している。直接目にしたから本当だ。目的は中層の大量発生の原因調査みてえだが、間違いなく大元の此処にたどり着くだろうさ」

「ならば我々が出向く必要はなからう。此処で大量の食人花ヴィオラスと闇派閥の下位団員と共に待ち構えていれば良い。剣姫は一人か？」

「確認した限りでは、同じ派閥の仲間つれは居ねえようだ。……但し、その代わりに他の冒険者のパーティと合流している。全員、剣姫に負けず劣らずの結構な手練れ揃いだ」

小人の女性剣士に率いられた、多民族で構成されたパーティだという。

「剣姫一行がここに上がり込んで来るのも、時間の問題だ。精々、もてなしの準備を整えおけよ、てめえら？」

男の高笑いが、広間に響き渡った。

### 第34話 神と眷属

窓は無く、外の喧騒が一切届かない、外部との繋がりが遮断された個室。隅に置かれた小さな魔石灯のランプが控え目に照らすその部屋の中に、少女は一人きりで居た。

室内はさほど広くなく、設置されている調度品は簡素な作りのベッドのみという都市にある最低辺の安宿を上回る殺風景さ。

だがそれも当然と云えよう。何故ならこの部屋は決して少女に休息や安らぎをもたらすことが目的ではなく、彼女を監禁することが狙いなのだから。

そして彼女は、その部屋に自ら望んで足を踏み入れたのだ。

コツコツコツコツ――

部屋の外の通路より、人の足音が静かに響いてくるのがリリルカの耳に入ってきた。定期的に来る見回りかと思われたが、足音はリリルカの入っている部屋の前で途絶える。

「リリルカ・アーデ、君に面会者だ。出なさい」

格子の付いた扉の外からこちらを呼ぶ男性――ギルド職員の声に、ベッドで踞っていたリリルカは顔を上げる。大人しく職員の指示に従い、身の着そのままの格好で錠の解けた部屋から出た少女の身には拘束具らしき物は一切見受けられないが、特例で免除されていた。

その理由は彼女に反抗の意志が無い事に加え、既に冒険者の力が失われている一般人の身である為であった。

職員の案内に従って通路を歩くこと数分、リリルカは複数ある面会室の一つに通される。面会室は真ん中を細長い机と格子の仕切りで二つに分断されており、互いに会話は出来れど向こうを行き来できない構造をしている。

そして、少女の居る反対側には彼女に面会を申し込んだ二人の人物が既に入室していた。

「……ベル様」

そのうちの一人、彼女のよく見知った白髪の少年が立っていた。自分の名を口にする少女の顔を見て、少年は優し気な顔で微笑みを返



す。

残る一人はリリルカが初めて見る顔であった。自分とさほど変わらぬ背丈に学者を彷彿させる紫紺のローブ服を着込んだ外見の少女。しかし顔つきは凛々しく、佇まいは大人びている。丸縁眼鏡の奥に秘めた、その円らな瞳は年齢に不相応なまでに理性的であり、リリルカには到底推し測ることが出来ない、深い叡智が緋色の目から覗いていた。

―少女の幼い身体から微かに感じ取れる異質な空気に気づいたりリリルカは、目の前の存在が女神だということを自然と認識するのだった。

リリルカと女神は互いに設置されている椅子に座ると、始めに自己紹介を行う。

「さて、こうしてお主と相對するのは初であるな、リリルカ・アーデよ。既に気づいておるやも知れぬが、わしの名はカーディナル。後ろに立つベルこやっが所属しておる、カーディナル・ファミリアの主神を務めておる者じゃ」

「初めまして、…元？ソーマ・ファミリアのリリルカ・アーデです」  
年寄り染みだ、可愛いらしくも威厳の込もった声。自然と流れるように、ベルの主神たるカーディナルへリリルカは深々と頭を垂れた。

「……それで、今日お二人はリリに何の御用でしょうか？」  
「ふむ。そうじゃな、わしはお主の今後の身の振り方について話をしに、ベルは様子を見たいと同行を申し出たのじゃ」

「そうですか、ありがとうございます……ベル様」  
「礼はいいさ。俺にできるのは、側で見守ることだけだからな」

申し訳なきように頭を掻く少年に、リリルカは首を左右に振る。  
「いいえ、リリにとっては十分に過ぎますよ。またベル様とお会いできて嬉しいです」

少女は笑顔を綻ばせる。こうして少年とリリルカが互いに顔を見合わせるの、あの迷宮の一件から実に数日ぶりになる。その後、少年と共に地上に帰還したりリリルカは、己の犯してきた盗賊業の全てをギ

ルドに告白した。ギルドで少年と別れたのを最後に、彼女の身柄は留置所で拘束処分されることが決まった。

―その裏で少女の所属するファミリアでは一大事が発生し、それが彼女に伝えられたのは、その次の日であった。

「……コホン、色々お互いに積もった話があるのじやろうが、ひとまず込み入った話から始めて良いかの？」

「は、はい。申し訳ありません。リリは構いませんので、どうぞ」

小さく、可愛い咳をつく賢神に慌ててリリルカは佇まいを正し、話を促す。

「さて、まずはお主の現在の状況確認から行うとしよう。……お主は我が眷属ベル・クラネルを窮地に貶めた件に加え、今まで積み重ねてきた盗賊業の数々の罪。これらの罪状を償う為に課せられた処分――お主の恩恵封印及び財産の一部没収、そして数週間の監禁。――これらに相違はないか？」

「はい、間違いありません」

サポート―業の裏で行ってきた盗賊行為。少女とパーティを組み、彼女に装備アイテムを盗まれた冒険者達への賠償として彼女が蓄えてきた隠し財産―宝石類やレアアイテム等は全て金銭ヴァレリスに換金された後、そのほとんどはギルドを通して被害にあった冒険者達に渡されることとなった。

リリルカの手元に残ったのは数万ヴァリス程度の金額と、盗みとは関係なく入手した一つの紅い宝石。その宝石も騙した少年へのお詫びとして、断る少年に半ば強引に押し付けた。

隠し財産を全て失ったりリリルカだが、それは大して気に留めていない。元より、ソーマ・ファミリアを脱退する為に蓄えてきた資産。本来の計画とはだいぶズレたがファミリアを脱退し、罪の精算に使われるのならリリルカとしても本望である。一度カヌウ達に金庫の鍵を奪われた挙げ句、命をも失うことを覚悟した彼女に、財産への未練は無かった。

「……正直、まだ実感無いです。本当にリリがソーマ・ファミリアを脱退したなんて。リリが牢屋に入っていた間に、団長様やカヌウ達が捕

まったく聞いた時は信じられませんでした」

「名は確か、ザニス・ルストラといったか？ 主神が派閥の運営に無關心なのを良いことに、团长権限を用いて神酒を勝手に利用、欲の限りの所業を尽くしてきたそうじゃな。」

本来、神々が己の派閥をどう運営しようとするかはその内情に口出しする権限と力を持たぬが、主神本人が最低限の眷属の管理すら放棄しているならば、もはやファミリアとしての体裁は為しておらぬ。迷宮都市の秩序を預かるギルドとしても、到底看過はできん。ならば、ギルドが介入するのは正当な権利じゃよ」

—元々以前から一部団員達による市民への被害が度々ギルドに報告されていた事に加え、密かに内情を探らせれば次々に犯罪行為が見え、それらの確固たる証拠や告発者のお陰で堂々と逮捕に踏み入れたと、賢神は言う。

捕縛する際、团长のザニスと悪事に加担した団員は往生際悪く抵抗したそうだが、職員に同行していたガネーシャ・ファミリアの団員にあつさりとは無力化されたそう。

なお一連の原因であるソーマ本人の扱いだが、たとえファミリアの悪事を知らず行為に加担していないと謂えど、無責任極まる派閥管理、下界の人間には過剰と云える神酒の製造は大いに問題視された。

最終的にギルドが下した判決は、派閥の解体—ではなく全体的な規模の縮小。今後の運営はギルドの監視が付くことに加え、神酒の製造禁止、派閥の資産の何割かを罰金として没収、悪事に加担した団員は全て恩恵の剥奪などを命じられた。また以前から改宗を望んでいた者は脱退金関係なく自由に脱退が可となった。

リルカの脳裏に、ソーマの顔が過る。

恩恵を消す為に最後に主神と面会した時の顔は、今でも印象に残っていた。唯一無二の趣味である神酒を取り上げられたソーマの顔は、これ以上ないほどに酷く憔悴し、目線は虚無を捉え、身体は無気力に打ちひしがれていた。

周囲の呼び掛けも完全に届いておらず、賢神が杖で整った美顔を引つ叩くまでは、ずっととうわ言を呟く一方。超越存在というには、あ

まりにも情けない様。恩恵を破棄する際も何も考えず、ただ言われた通りに作業する心あらずの様子は、いつそ不安を抱かせる程だ。

「今更リリが心配するのはどうかと思いますが、あのままで大丈夫でしょうか？ あの様子ですと、ある日自殺して天界に戻りかねませんでしたよ」

今でこそ全くの無関心な状態ではあるが、幼少の頃にリリルカは一時期ソーマの世話を受けていた。未練とは異なるが、育ててもらった恩を多少なりとも感じており、脱退した今でも元主神を気にかける自分があった。

「グダグダと下界に居座るよりかはマシかもしれない。気分だけで下界に降り、勝手に人間に期待しては勝手に失望する。神業<sup>ソーマ</sup>がもたらす悪影響を、人間の弱さを、露にも考慮しなかったのは紛れもない、あやつ自身の愚行じゃ」

そこで一旦言葉を切ると、カーディナルは遠い目を浮かべ、しみじみと続けた。

「……あやつは神酒<sup>ソーマ</sup>に溺れるヒトの醜さに幻滅したのかもしれないが、一つの側面を全てと一方的な見方をした挙げ句、お主のような現状に抗い未来を変えようと足掻く者を見向きせず耳を傾けなかったあやつも、わしから見れば那由多を生きる神とは思えぬ、実に薄っぺらい存在じゃよ」

ソーマの神としての視野の狭さ、浅慮な思考を、同族に対して辛辣なまでに酷評するカーディナルは、少女にはどこか異質なものに見えた。

リリルカが普段都市で見かける神々は皆一様に超然とした雰囲気纏いながらも、下界の子供よりも人間臭い俗っぽさを漂わす、良くも悪くも己の神意に忠実で自由気儘<sup>フリーダム</sup>な存在だが、相對しているカーディナルからはそれらの空気が伺えない。

「賢神が見せる感性は他の神々とは異なり、下界の住人？に近かった。」

「少々話が脱線したな。まあ、ソーマとて永劫を生きとる神の一柱には違いない。今後あやつ<sup>あやつ</sup>の動向が失意に引きこもるにせよ、立ち直る

にしても、神々らは存外に過去に拘らぬ性格じゃ。お主がいつまでも気に留めておく必要は無い」

「……そうですね。今のリリは自分のケジメをつけるのが先ですから。——それで、ギルドの刑期を終えた後のことですが……またリリは、冒険者へ復帰が可能でしょうか？」

少女は気にかかることを止め、自分が一番気になっていた部分に触れる。

「その最終的な判断はギルドが出す故、ワシの口からは言えぬが……そうじゃのう。お主の場合、ファミリアの悪辣な環境要因による情状酌量の余地が大いにある。また幸い被害に遭った者達は多くいれど、それで死した者が一人もいなかった事に加え、自ら告白をした点からも恩赦の考慮はされている、とだけ言っておこう」

リルルカは与り知らぬことだが、彼女が短い刑期で済んだ裏には一柱の神と一人の若き冒険者の弁護があった。ザニス達の悪事に一度も加担していなかった事が幸いとなり、彼女がファミリアの悪意に振り回された被害者であると述べた両者の弁は、ギルドも聞き入れた。「再び冒険者の道に戻るのはお主の勝手じゃが、それで良いのか？」

念願じやったソーマ・ファミリアから解放されたお主はオラリオ外へ出る選択肢もある。——それに前科持ちの冒険者を受け入れる派閥はあまり多いとは言えぬ。復帰するのは厳しいかもしれぬぞ」

「正直に申し上げますと、まだ決めかねています。……リリは少し前まで冒険者という存在を増悪していました。ファミリアから脱退した後はオラリオを出て人生をやり直したいと心から望んでいました」少年と出会うまでは毎日が辛く、録な思い出が無いサポーター業。

——だが、

「ベル様と出会って考えを改めたんです。リリも嫌いだったリリを受け入れてくれたベル様に、出来る限りの恩を返したいと。可能ならばもう一度、またサポーターとしてベル様を支えたいと考えています」これまでは自分が生き残る為であったが、今度は真にサポーターとして、一人の冒険者の迷宮攻略を補佐したいと、少女の願いは変わった。

「ですが、ベル様を裏切ったりリリにその資格があつて良いのかとも思っています。お優しいベル様はリリを赦してはくれましたが——」  
「——善意に甘えていると感じ、罪悪感に苛まれていると。……真面目じゃのう。ベル、お主の気持ちはどうなのじゃ?」

言葉の続きをカーディナルは引き継ぎ、会話中ずつと背後で聞いていた少年に問う。

「俺自身も、リリさえ良ければまた一緒に冒険したいと思っっているさ。……なあ、カーディナル。リリが自由になつた後、彼女を俺たちのファミリアに入団させることは出来ないか?」

「ベル様……!?」

少年の思いがけない提案に、少女は見開いた瞳を少年に向けた。賢神を見やれば彼女は瞑目し、腕を組んで黙考する。硬直したような時間が数秒ほど経た頃、再び賢神の双瞼が上がった。

「ふむ……ベル、それにリリルカ。お主達の気持ちはよく分かった。特にリリルカよ、お主の言葉に込められた嘘偽りなき想い、しかと聞いたぞ。」

—その上で答えよう。リリルカ・アージェ、お主の入団許可は「出せん?」

「!!?」

緋の瞳を細め、冷徹に断言する。二人は愕然し、同時に息を呑んだ。

「カーディ——落ち着かんか、まだわしの話は終わつたらん——!……すまん」

慌てる少年を宥めると、賢神は少女の固まった顔を真つ直ぐ見据え、その真意を説く。

「さっき言った通り、お主のベルに対する誠意に偽りは無いことは承知した。——じゃがな、リリルカよ。それはお主を我が派閥に迎え入れる理由には為らぬのじゃ」

「それでしたら、何が問題なのですか? やっぱり、罪人のリリが入団したらファミリアの名声に傷を付けることに繋がるからですか、……それとも、リリの実力の不足でしょうか?」

自らを卑下する言葉に、賢神はふんと鼻を鳴らし一蹴する。

「名声、実力？ そのようなものはなから興味など無い。……理由は一つ。わしはな、お主を安い同情で眷属にしたくないのじゃ」

賢神の言い放った最後の言葉に、へっ？ と二人は揃って同じ間の抜けた顔をする。呆然とする二人に、幼き女神はその秘めた神意を語った。

「そも、神々と眷属の関係とはファミリアの数ほど違いがある。ある神は血を与えた眷属を家族と言うが、ある神にとっては単なる娯楽の駒、あるいは偶々発見したお気に入りとして愛でる対象。八百万も神がおれば、眷属への認識も接し方も大いに異なっておる。

—眷属もまた然り、主神を崇拜対象と見るか、己の野望を叶える為の手段、あるいは思慕を寄せる異性と様々なものじゃ。

……わしの場合、リセリス、シャールロット、ベル——こやつら三人は大事な存在ではあるが、断じてそれは替えの効かぬ手駒、娯楽心を刺激する対象として「上？」から愛でるものではなく、近しい「友？」として見ておる。無論ベル達にも、ワシのことは神ではなく友人のように接して良いと伝えている」

（ああ、そうか……カーディナルは、俺達を「対等？」に見ているんだ。リリの境遇が哀れだから比護するような、慈悲ある神として接したくないんだ）

傍らでじつと聞いていた少年は、主神の神意に触れる。

賢神の話は続く。

「わしのファミリアには、これまで多くの者が入団を申し込んできた。その多くはリセリスの名声に惹かれてやってきた者じゃ。リセリスのように一旗を上げようと大層意気込んでおるが、そもそもわしのファミリアはな、よその神々のように下界生活を謳歌する為に結成したものでない。

ファミリアの名声や権威なんぞ、わしやベル達は最初から興味なんぞ無ければ、オラリオで成し遂げたい野望がある訳でもない。

—我が眷属達は皆、わし自身に仕えたいと心から望み、それをわしが受け入れて出来たのが、カーディナル・ファミリアなのじゃ」

遙か昔、まだ迷宮 〃都市？ではなかったその地に翼を下ろした緋の大鳥は、発展を重ねゆく都市の調和をただ静かに望み、その地で暮らす人間達と、そこでできた眷属<sup>とも</sup>達の日々を慈愛の眼差しで見守り続けてきた。

—少年は回想する。

初めて自分がカーディナルの恩恵を受ける時にも、彼女は本当に自分で良いのかと再三も確認した。他の神々のことは知らなくとも、自分是一目会った時からカーディナルが良いと心から告げた。

……かけがえのない大恩人に似ていたから、という気持ちも少なからずあったかもしれないが、彼女の神格に惹かれたのは紛れもない本心だ。

「神々が下界の子らに分け与えし恩恵<sup>ファルナ</sup>とは、言ってしまうえば可能性という成長の促進剤に過ぎん。しかし、その対価に眷属<sup>イコル</sup>は主神の血を媒介として物語という、自ら歩んだ旅路を主神に 〃捧げる？」。

……長々と話したがリリルカよ。お主は自ら望んだものではないとはいえ、長らく派閥の荒波に身を揉まれる日々を送ってきた。個々人によつて考えに違いはあれど、一度神の眷属になったものは、良縁であれ悪縁<sup>えにし</sup>であれ、その縁を易々と切り捨てに出来ん。

—そなたの中には未だ、ソーマ・ファミリアへの畏れとしがらみが渦巻いておる。それらに何らかの決着を付けぬうちは、お主の歩みを預かることは出来ぬ」

厳かに、神意の込もった言葉が一語一句紡がれる中、賢神から炎の熱に似た波動<sup>オーラ</sup>が立ち昇り始める。猛禽類を彷彿させる奥の瞳が、まるで灼熱が渦巻くかの如く緋色に煌めく。拝聴するリリルカを圧倒するには、十分過ぎるものだった。

少女の中にあつた幼い賢者のイメージが、ガラリと強大な力を秘めた畏れ大きい存在に一変し、確立する。賢神が語った内容を、少女は否定出来ずにいた。

「むー！ 少々気が高ぶってしまったな。……………これで良し、すまぬな。話を戻すが、どのみち恩恵<sup>ステイタス</sup>を封印された者は封印を施した神が



解除せぬ限り、他の神が恩恵を上書きすることは叶わぬのじゃ。

改 コンバージョン 宗するにしても、先ずはソーマに掛け会わなくては話にならない」

「……………分かりました。確かに御身の仰る通り、リリとソーマ様との関係は完全には切れていませんでした。なのに何もしていないリリはベル様の厚意に甘え、カーディナル様の許しを得られないかと期待していました。―申し訳ありませんでした」

「リリ……………」

少女の謝罪する言葉には覇気は無い。少年は名を呼び掛けることしか、何も出来ずにいた。重い沈黙が部屋に漂う中、カーディナルが口を開く

「……………色々と申ししたがリリルカよ。わしはお主の入団それ自体は否定的では無い。ソーマとの精算を付けた後、お主の中で我がファミリアに所属することが本心より望んだ悔いなき選択ならば、我らが教会ホームの門を叩くことを許そうぞ」

「寛大な心、ありがとうございます。リリは自分の犯した罪を償い、自分の本意を全てソーマ様にぶつけた後、完全にフリーの身と成ってから、胸を張ってカーディナル・ファミリアを訪れたいと思います。……………最後にベル様、いつになるかは分かりませんが暫くの間、ベル様のサポーターを休業してしまいましたが、よろしいでしょうか？」

堪えているような表情と打ち震える声には気付かないフリをして、俺は精一杯の笑顔でリリに言った。

「ああ、いつでも待ってるぜリリ。その時はまた、俺とサポーター契約を結んでくれ」

少女との再会を誓って、面会の時間は終わるのだった

### 第35話 遠征までの一時

「さてと、この後はどう過ごすかな？　今から迷宮に向かうというのも手間だしな……」

リリとの再会を約束した後、面会を終えて手持ち無沙汰となった少年は一人先に出口へと目指していた。同行していた主神のカーディナルは別件でギルドにまだ残るらしく、別れている。

「これでまた一人に逆戻りか……寂しくなるな」

誰に言うわけでもない、小さな呟きがギルドの廊下に零れる。

リリと一緒にいたのは短い間であったが、俺にとって彼女はこのオラリオで初めて組んだ仲間だった。彼女の一時離脱は仕方がないと理解はすれど、少なからず寂しさを覚えていた。

次リリと再会する時は彼女がギルドで己の罪を償い終えた時、その日が訪れるまでの暫しの別れ。その後リリが俺達のファミリアに移籍できるかどうかは彼女の行動次第だが俺にはリリが、俺と結んだサポーター契約<sup>束</sup>を果たすであろうと、確かな予感があった。

後はただそつと見守り、彼女の復帰を信じて待つのみだ。

とりあえずリリの一件は終着したものの……結局のところ、リリを教唆して俺を罠に嵌めた謎の男の正体はわからずじまいに終わった。リリ曰く、質問しても男は名乗らず、どこ<sup>ファミリア</sup>の所属かも頑なに明かさなかつたという。

迷宮での行動も変異したオークを俺にけしかけたのみで最後まで奴自身が直接手を出すことはなく、俺がモンスターを倒した時にはあっさりと消え去って影を掴ませない。

モンスターを謎強化させた行為といい、全くもって得体が知れない人物だ。言動からして俺の殺害が狙い、というよりは俺個人の實力を見極めるのが目的と考えられるが何故L<sup>ル</sup>V<sup>キ</sup>の新人冒険者<sup>キ</sup>なんぞを？　と疑問が湧く。

面会室で聞いたリリの話を思い出す。

——詳しい理由までは教えてくれませんでした。あの人はベル様が

「知人？に似ていたと言っておりました。普段の戦闘や言動に周囲の仲間の有無など、ベル様に関するあらゆる情報を欲していてかなり執着を抱いているようです—

「ベル・クラネル？という人間について全くの無知であったにも関わらず男は黒コートを纏い、双剣を帯びた俺の姿に何者かの『面影？』を見出だした。そして手始めに俺の傍にいた少女サポーターに接近した……。

話を聞いた時、真っ先に浮かんだのは、

（『前世の俺？』を、知っているのか……!?）

仮にあの黒衣の男が俺と同じ世界出身の『転生者？』だと仮定するならば、今回の襲撃は俺の正体が黒の剣士だと気付いての襲撃なのか？

もし俺の推測が正しいければ……そいつと俺は恐らくかつて敵対関係にあり、仮想世界で剣を交えていたのかもしれない。僅かな会話からは俺に対する憎悪や恨み怒りといった悪感情を感じ取れなかったが……かといって男がした行為を省みれば到底、良心的な人物とは言い難い。

思い出すのは数日経って尚脳裏にこびりついたように忘れられぬ、ニタニタした不気味な笑み。フードから僅かに覗く狂執を色濃く滲ませた、男の暗い微笑が俺の古い、古い記憶溜まりの奥底に眠っていた棺桶もを揺り起こす。

蓋を開け、這い上がってくるのは忘却の果てへ何度追いやり斬り払おうと何処までも付きまとってくる、死を纏った『影？』だ。

『影？』は背後から無音で忍び寄り、携えた友切包丁メイト・チョッパーの刃を俺の頸に当て、耳元で流暢に囁く。

「何度だって、オマエの前に現れる。オマエと——の喉を掻き切り、心臓を抉り出すまで、何度でもな……」

もしかしたら……もしかしたら、アイツの正体は……

「……ベル君？」

不意に後ろから声を掛けられ、俺は危うく悲鳴を上げそうになった。びっくりと全身を震わせてから振り返ると、そこにはギルドの制服を着た女性が困惑気に立っていた。

「エイナさん……」

「あ、驚かせてごめんね。ベル君を見掛けたからつい声掛けちゃったけど……大丈夫？ 君の顔色、とても青ざめているように見えるよ」「え？ ……ああ、大丈夫です。……少し気疲れしたみたいです」

少年は安心させるつもりなのか作り笑いをアドバイザーに向けるも、その笑みは引きつっており、声は弱々しく覇気が感じ取れない。エイナが普段見る少年の飄々とした態度も今は見受けられず、色素の薄い肌もまるで病人を彷彿させる青白さだった。

彼女の緑玉色エメラルドの瞳が、不安気に揺れる。

「ホントに？ ……そうは見えないけど。アーデ氏との面会で何かあったの？」

「あーいえ、そっちの方は問題ありません。……ただ色々とありましたから、つい気が弛んじやったのかもしれないですね」

軽く告げて尚も心配そうにこちらを見つめる彼女を見るに、どうやら今の俺はよほど不安定に見えるのだろうか。彼女を心配させてしまったことに自己嫌悪するが、それを押し殺し無理矢理にでも落ち込んでいた気持ちを取りセットする。

俺の誤魔化しめいた言葉にエイナさんは納得しきれてはいないようだが、とりあえずは受け入れてくれたようだ。

「もう、君はいつもそうやってはぐらかすんだから。聞いたよ、今回のサポーターの件も危ない目にあっただんでしょ？ こうして無事にしてくれたから深くは聞かないであげるけど、……ホントに無茶だけはしないでね——ベル君キルト」

——最後に発せられた言葉は、俺の幻聴だ。

それが分かっているのに、こちらの身を真摯に案じるエイナさんの顔に、俺が今世いまも愛する女性の顔が一瞬重なるのを幻視する。

ズキリと鈍く痛む頭と胸の疼きを、どこか他人事のように感じなが

ら張り付けた笑みと共に会話を続行する。

「あははは……鋭意努力します。——あ、そういえば迷宮でアイズさんに助けられたんですが、その時エイナさんについて聞きましたよ。遅くなりましたが俺の為に動いてくれた事、ありがとうございます。……色々と後回しになってしまったが、後でアイズにも礼を言う為に会わないといけないな。」

俺は深々と頭を垂らし、エイナさんに感謝を述べた。

アイズが救援に駆け付けてくれた原因を辿れば、エイナさんもまたアイズと同じく俺、しいてはリリの命の恩人に違いない。……色々と後回しになってしまったが、後でアイズにも礼を言う為に会わないといけないな。

頭を下げる俺を見てエイナさんは顔を紅くし、あたふたする。

「い、いいわよ私に頭下げなくても。私がしたのは偶々居合わせたヴァレンシュタイン氏に依頼しただけだから。きっかけも怪しい人達の会話の盗み聞きだし、全部偶然よ」

「偶然だったとしても、エイナさんが俺の事を思って尽くしてくれた事実には変わりないですよ。エイナさんのファインプレーが無かったら、俺は迷宮でお陀仏になっていたかもしれないんです」

少年の本心からの感謝を浴びるエイナ。自分には身に余るものだと居たたまれない気持ちになる中、ふと彼女は大事な事を思い出したように、あ、そうそう?と少年に告げた。

「今ちようどね、ロビー付近にヴァレンシュタイン氏とリセリスが居るの。良かったらベル君も会ってくれば?」

「えっ、今二人が居るんですか?」

「うん、実は私もここに来る前に話していたの。まだそんなに時間は経っていないから、まだ二人は居るんじゃないかな? お礼を伝えに行ってみると良いよ」

「そうですね、分かりました! 教えてくれてありがとうございます、エイナさん。——それじゃあ、俺はこれで」

そうして言われた通りにロビーに足が向かいかけたが……ふと思いついたことがあり、立ち止まった。

「？」

俺の行動を訝しむエイナさんに近づくと、そつと彼女の片手を取って持ち上げる。当然ながら困惑するエイナさん。

それを尻目に俺は彼女の柔らかな手の甲に顔を近付けると白い手袋越しに、軽い口づけを落とした。

「——大好きです、エイナさん」

「……えうっ!？」

硬直したエイナさんにそう囁くと、彼女は面白いように真っ赤な顔になる。それを確認した俺は悪戯が成功した悪ガキのように笑うと駆け出し、今度こそその場を立ち去るのだった。

………

ギルドの正面口から入場すると、まず最初に広々とした大広間<sup>ロビー</sup>を目にする。ギルドの受付窓口が設置されているそのエリアは大人数での利用が想定されている為非常に奥行きがあるほか、白大理石の磨かれた床面が良く目立つ。

オラリオを統括する機関の総本部だけあって常に沢山の人々がギルドに出入りしているが、昼時に近い現在<sup>いま</sup>だと混雑時と比べて人の数は圧倒的に少ない。

「えーと、二人は何処に居るかな……」

キョロキョロと視線を回し二人の姿を探すと、幸い二人はすぐに見つけられた。

ロビーに設置された長椅子に座った二人の女性——それぞれの金色と藍色の長髪が目に残った俺は彼女らに近寄り、声を掛けた。

「よおー！ リセリスにアイズ」

「………わかった。遠征までの間、アイズに付き合おうよ——うん？ あ、ベルだ！」

「ベル………!」

俺に気付いた二人は会話を中断し、こちらを見遣る。

「悪いな、会話を遮って。二人がここに居るってエイナさんから聞い

て来たんだが、ちよつと良いか？」

「ボク達は全然構わないよ。ベルの方はカーディナルが居ないけど、サポーター君との面会はもう済んだの？」

「ああ、カーディナルと話し合って彼女の今後の処遇について決めてきた。一応後でリセリスにも教えておくよ。——つと、数日ぶりだな、アイズ」

「うん……ベルも、元気そう良かった」

最後に少年を見たのは迷宮でのボロボロな姿以来であったが、今のピンピンした様子を確認したアイズはうつすらと口元に笑みを浮かばせる。

少年はアイズに、迷宮の一件での遅くなった礼を告げた。

「……ありがとな、ホントにアイズのお陰で助かったよ。あの時のポーシヨン代、今払おうか？」

「ううん、それは気にしなくて良いよ。……それよりも、あの時の君の闘い凄かった。リセリスからも聞いたけど、もう十階層まで進出したんだね……」

「イレギュラー黒衣の男に遭ったお陰で満足に探索しちやいないが、……まあ一応な」

「そう……」

変化に乏しかったアイズの顔が俺の階層進出スピードの話題に触れた途端、興味を注がれたのか金の双瞼をスウツと細め、ジロジロと俺の全身——特に背中方面を隈無く注視する。

そんな彼女に成長の秘訣でも追及されやしないと、内心ヒヤヒヤした俺はこのままだとマズイと感じ咄嗟に話題を変えた。

「あくそっだ、さっき遠征がどうたらって会話が聞こえたんだが、何の話をしていたんだ？」

俺の質問に答えたのはリセリスであった。

「うーん別に秘密事項じゃないから話して良いかな？ ベルにはまだ言っていないんだけど、近々ロキ・ファミリアで遠征があるんだよ。その遠征にボクも参加することが決まっているんだ」

——彼女の話を要約すると、リセリスが参加した前回の、俺がまだ

カーディナル・ファミアリアに入団する前に深層への合同遠征が行われたが、そこで予期せぬイレギュラーの存在モンスターに遭ったせいで撤退―途中失敗に終わってしまった。

そして暫く期間を空けた後、前回よりも更なる準備と万全の対策を整えた―そんなリベンジの意味合いも多分に込めた遠征に、今度もリセリスはロキ・ファミアリアの団長直々に参加要望のお声が掛かった。

リセリス  
団長ただ一人のみの参加オレ（新人は論外、副団長は冒険者業を引退しているので除外）という異例の合同遠征ではあるが、ロキ・ファミア同様にリベンジに燃える彼女は特に断る理由も無いし、二度目なのでこれを了承。主神カーディナルも俺達、眷属の行動に関してはほぼ放任主義である為、彼女の自由意志に任せている。

「―それでね、出発までまだ期間が空いているから、その間ボクとアイズは互いに特訓しないかって相談していたんだよ」

「二人だけだから、こっっそりだけどね」

「へえー、二人が特訓か……面白そうだな。実際どんな事をやるんだ？ やっぱり迷宮で強いモンスターを倒すとか？」

「ううん、ボクもアイズも遠征準備や他の用事が有ったりするから、流石にそこまで時間を取れないよ。特訓って言っても少し地上で手合わせして、戦闘の技術でも高められないかなって感じだから」

「私からリセリスにお願いしたの。リセリスはね、剣の扱いが私より上手いから、色々参考になる」

彼女のファミアリアには三大首領を始めとした第一級冒険者達が何名かはいるが、剣姫アイズに匹敵する程の卓越した同スタイルの剣士となると居ないらしい。

他の派閥ならば都市筆頭の剣士達――『絶剣』を始め、噂に聞くダイインスレイブ『黒妖の魔剣』、シルフィールド『薫風主』、ヴォルカニック『猛炎將軍』といった数名が挙げられるが、アイズが派閥間のしがらみ関係なく親好的に接触可能なのは、友人たる絶剣リセリスただ一人に限られるらしい。

「良かったら、ベルも一緒にどう……？」

「えっ、良いのか!? そりゃ……正直俺も参加してみたいけど、遠征の



為の特訓なんだろう？ 二人の邪魔になるだけじゃないか？」

彼女からの突然の誘いに、思わず目を見張る。

リセリスとは時々教会ホームで剣を打ち合ってはいるが、彼女に全力で手加減してもらって成り立つ、はつきり言ってLv6からすれば兎戯み  
たいな試合だ。興味こそ惹かれはするが俺が加わっても時間の無駄  
なのでは？ と思うも、

「良いんじゃないかな？ ベルってレベルに見合わず結構強いから、  
アイズの刺激やベルの成長にも繋がる良い機会だとボクは思うよ」

団長様直々のお許し。

普通ならばたかが新人冒険者ルー風情が都市最高峰の冒険者、それもオ  
ラリオの神々や人間達からの人気がぶつちぎりな女性冒険者二人に  
指南させてもらえる何ぞ、贅沢なんてもものじゃないが……。

「私……君の実力こと、もつと知りたい」

真っ直ぐとこちらを見つめ、何か誤解しそうな発言をするアイズの  
―その神秘的な金色の瞳からは気まぐれではない、強い意志がありあ  
りと伝わってくる。

「オークと戦った時の君は、何だろう……全く、別人？に見えた？  
それに私が認められ使ないでいた、あの黒エリユシデーダ 剣を君が振るえた理由わけも、  
どうしてかなってずっと気になるの……」

たどたどしくも自分の考えを口にするアイズは最後に―ダメ？  
と恐らくは天然であろう、俺の両手を握り持ち、とどめと言わんばか  
りに幼子のようにか細く呟いた。

戸惑いもそこそこに、最終的に俺は――

「ご期待に添えるかは了承しかねるが……俺で良ければ喜んで参加さ  
せて貰うとするぜ、二人とも」

こうして二人が遠征に向かうまでの間、俺は思いがけず第一級冒険  
者達の特訓に混ざることとなった。

この遥か格上達との連戦・同時試合で培った成長が、後に起こる出  
来事に一役買うとは、この時の俺は思いもしなかった。

## 幕間 若猪の追憶

遙か古より存在する深遠にして広大な地下迷宮を、ギルドはモンスターレベルと迷宮の構造に応じて上層、中層、下層、深層と大きく階層の区分をしている。

それらの内、中層と呼称されるエリア。

上層のレベルを凌駕し本格的に迷宮の過酷さが顕となるこの階層域では、より知能が高く脅威的な能力を秘めた多種多様なモンスター達が母胎から生まれ、本能に従い跋扈していた。

石製の天然武器を持った兎―『アルミラージ』が長い耳をゆらゆらと立ち揺らし、徒党を組んでさまい。

放火魔の異名こと黒犬―『ヘルハウンド』が爛々と両瞳を深紅に輝かせ、彷徨き。

強靱な四肢と太く尖った剛角を持つ牛頭の怪物―『ミノタウロス』が咆哮し、己の存在を誇示して闊歩する。

そして中層の数多く存在する広間の内の一つ、探索を生業とする冒険者ですら滅多に寄らぬ程に正規のルートから離れた、その広間には一匹のモンスターと一人の冒険者が対峙していた。

『グルウオラッ!!』

野太い吠え声を上げるのは、犬のような頭部を持つ獣人型モンスター『コボルト』だ。だがその体格は通常種をずっと上回り、その身体に冒険者から略奪した装備を纏った、特殊な個体であった。

本来の活動域よりも何故か下層に居るこのコボルトは、巖のように屹然と佇む冒険者に向かい、決死の覚悟で挑まんが如く突撃する。

振るう武器は己の爪でも天然武器でも無く、戦う前に男から投げ与えられた大剣だ。両の手で力強く握りしめたそれをコボルトは後方に引き絞ると、次の瞬間には胴体のうねりとともに一気に振り下ろす。

自身が引き出せるあらん限りの威力を大剣に込め、全力でもって男に叩き込んだ。

次の瞬間、コボルトと男の大剣が激しく衝突し、広間中に甲高く金

属音が反響する。交差した大剣の間からは刹那の火花が飛び出し、薄闇に光り散っていく。

『グウ、グルオオオオ……い！』

渾身の一撃を受け止められたコボルトは、そのまま押し破ろうと両腕に力を込める。しかし大男の大剣は微動だにせず、こちらの刃だけがギチギチと震えるのみ。

「温ぬるい」

男は小揺るぎしない顔でコボルトを見下すと、淡々と評価した。

「少しは武器の扱いには慣れたようだが、まだ重みが足りん。その辺のミノタウロスに劣る。——一撃で仕留められないならば、確実に次に繋げろ」

言うやいなや、冒険者オツタルは受け止め続けていた大剣を動かし、無造作に払う。オツタル本人からすれば虫を払う程度の力加減、それだけでコボルトの体は意識する間も為す術も、呆気なく吹き飛ばされた。

何が起きたのかコボルトが知覚したのは、地面をゴロゴロと数転し終えた時だった。

『グボオ、ゴバア……い！』

地面に倒れ伏し、肺に詰まった空気を吐き出す。

突如始まった調教もとい鍛練、既にこのようなやり取りは両手両足の指をとうに超えていた。

その巨身を両断する気で何度打ち込もうと、自らの刃は大男の鋼が如き肉体に掠り傷はおろか、己が持つ全ての攻撃手段が完全防御か無効に終わり、意味を為さなかった。

なまじ他の冒険者やモンスター達を観察、戦鬪を繰り返してきたコボルトだが、どれだけ成長しているようが大男との隔絶した実力差の前には取るに足らない戦歴、最底辺ゴブリンも同然だという事実を心身ともに痛感させられた。

「立て」

「時間の無駄だ？」と冷徹に告げられる声に沸々とした、言い難い一つの念がコボルトの内から湧き立つ。

このまま身を任せられるならばどれほど気が楽か。だが一時の激

情に突き動かされてしまえば即座に手酷い一撃でもって戒められることを、既に我が身でもって散々と学んだ。

全身を侵す苦痛と疲労を強引に無視し、転がっていた大剣の柄を手繰り寄せる。くらくたとよろめきながらも四肢に力を込めて起き上がった。

コボルトの胸中に込み上げるのは、諦観からの屈伏心ではなく、誕生してかかってない自身への煮え滾るような怒りと、それを上回る力への渴望だった。

「脆弱、懦弱、劣弱、いつまで己は無様な醜態を晒し出すのか

これが持てる力の全てか、自分の限界なのか？

否!! 越えたい、超えたい、目の前で君臨する遥か強者を!!! ?

大男よりも遥かに劣っていることを思い知らされて尚、矮小な肉体に抑えきれぬ猛々しい熱情と己の弱さへの唾棄を糧にして、弱者の咆哮が広間の空気を激しく震わす。

昂る闘志に感化されたのか、全身が灼けつくような熱を感じながらコボルトは再度頂点に挑むべく、大剣を振りかざし地を蹴った。

—死に物狂いで迫るコボルトの猛攻が、一段と殺意と動きのキレが増す。それらを悉くオツタルは片腕のみで弾いていく。

彼の不動の面持ちは以前として固く変化は無いが、内心コボルトの不屈の気概と成長ぶりには目を見張るものを感じており、今後の成長に期待を抱いていた。

当初の予定こそ、女神の試練に相応しいモンスターとしてミノタウロスの選別を考えていた。だが中層に向かう道中で偶然、強化種と思わしきコボルトに遭遇したことでオツタルは彼に一抹の可能性を感じ、急遽予定を変更した。

その後は魔石を食わせて地力を高めつつ、武器を扱った戦闘を実戦形式で体に徹底的に叩き込むの繰り返し。ここでオツタルの予想以上に、このコボルトは存外に知能が高いことが判明された。

元々オツタルと出会った時より、手持ちの武器を効果的に運用し、一人の冒険者を殺害した一連の行動など、その器用さと咄嗟の判断力はオツタルをして悪くない、と一定の評価を下す程。

その手際は闘争本能に任せるモンスターよりも、『冒険者』の動きに近いものだ。

そうして僅か数日間で並みのLv1を圧倒するほど順調に成長したが、オツタルはまだ試練としてお膳立てするには十分ではないと考えていた。

現時点でのコボルトとミノタウロスの強さを比較するならば、如何に前者が少しばかり技量が高かろうと、それを膂力と耐久で上回る後者にまだまだ軍配が上がる。

それでは足りぬ。苦戦して倒せる程度のモンスターでは、神の試練に足り得ない。試練に挑む挑戦者が己の力と技、身命の全てを擲つことで、初めて神々は『偉業』と見なす。

主神が望むのは、少年の眠りつく魂を輝かせる死闘。永遠にして絶対なる忠誠と崇拜、そして己の愛の全てを捧げる美の女神の眷属として一切の手抜かりは赦されない。

故に都市最強は主の神命を遂行すべく許された時間の全てを使い、コボルトをミノタウロスに勝る猛き戦士に鍛え上げることが自らの使命とした。

——自分よりも遙か格上の存在にがむしやらに挑み続けるコボルトと、それを真つ向から受け止めつつ時折戦闘に関する指摘を下す猛者。

その光景はさながら修練に臨む未熟な若輩に、遙か先を征く先達が実戦でもって武芸を教える様の如き。

この構図に、オツタルは妙な既視感を抱き始める。

（突然現れた見知らぬ存在に鍛練を施される。……ああそうだった、覚えがある筈だ。この俺自身も、かつてコイツと似た状況にまみえていたではないか）

ふと愚直に挑み続けるコボルトの顔に、若造だった頃の己の顔が一

瞬重なるのを幻視した。

鍛練を通して埋もれていた古い記憶が再浮上していく武人は、思考の片隅で追想する。遠い過去の記憶に刻まれた、オツタルが猛者たる『可能性』を提示した、『あの旅人』との一時を。

くくく

それはオツタルがまだ『頂点』には程遠く、都市最強の『猛者』の二つ名を授かる以前であった。

時は迷宮都市において最強と最凶の二大巨頭が世界中にその威名を轟かし、現代の道化と美神の両派閥をも超える隆盛を極めていた時代に遡る。

その頃のオツタルは当時、Lv4の第二級冒険者だった。

フレイヤ・ファミリア史上、最も苛烈であった戦いの野の『洗礼』を駆け抜け、当時の団長手ずからの料理をたらふく食らい力を蓄えては鍛練に励み続けていた日々。

その当時から将来有望な若手筆頭として周囲から注目されていたが、しかし常に本人の胸に占めていたのは飽くなき強さへの飢えだった。

その理由はただ一つ、『フレイヤ・ファミリア』は頂点の称号を手にしていなかったから。都市には自分以上の才能と英雄の器を併せ持った『化物』達が周囲に存在していたのである。

女神が味わった遙か昔日の屈辱を拭う為に、世界の中心と同時に彼女の自由を縛る檻とも云えるオラリオを玉座に変え、主神を据えようとオツタルと他眷属達は頂点に戦いを挑み——敗北し続けた。

ある時は末端の構成員による一撃で地に沈められ。

ある時は自分より年下の少女による手刀の一閃で吹き飛ばされ。

彼等彼女等に幾度ともなく敗北に打ちのめされたオツタルは、しかしそれでも際限が見えぬ頂を目指すことを諦めなかった。

愚直に、病的に、本能なまでに不屈の闘志と己の弱さへの唾棄を糧にして、強さを求め続けた。

——そうした血と泥にまみれた敗北の歴史の、とある一幕。

「おい、大丈夫か坊主。まだ意識はあるか？」

幹部の一人に戦闘を仕掛けるも、予定調和の如くあつさりどひねり潰されたある日のこと。倒れ伏す自分に話し掛ける者がいた。

低く錆びているが、よく耳に通る声。昏倒しかけていた意識を辛うじて起こすことに成功したオツタルが重い瞼を開けると、そこにはガタイの良い一人の旅人ヒューマンが立っていた。

フードが下ろされた顔から見るに、年の頃は恐らく二十代後半から三十代前半の男か。だが若々しく力強さを感じさせる見かけにそぐわず、男の短く刈り込まれた髪は老人のように色素が抜け切った白色だ。

男は黒い眼でオツタルを見下ろすと、彼の眼を覗く。

「ほう……中々覇気の込もった目をしているじゃないか。お前さん、名は？」

叩きのめされて尚決して衰えることのない、強靱な意志が込もった眼光を目にした男は、にやりと口元の端を上げると若者の名を聞いた。

「俺の名はザール。しばらくの間、都市こに滞在予定の放浪者さ。どうだ坊主？ お前さんさえ良かったら、少しの間俺が鍛練に付き合おうか？」

後の契機となる邂逅は、こうして果たされた。

——暗黒に満ちた天がおぼろに白けてゆき、徐々に青みがかっていく大気。白雲が緩やかに薄明の空に流れる一方、迷宮都市を囲う巨大な市壁の一角では、凄まじい程の剣戟の嵐が巻き起こっていた。

その発生源は二人の人間。オツタルと白髪の男の両者が引き起こす、剣の打ち合いによるものだった。

猛猪のように猛々しい勢いと膂力で、しかし兎の如き俊敏な拳動と繊細さでオツタルが絶えず攻めていく。だが大木のように佇む白髪

の男は恐ろしいまでの精密かつ必要最小限の動作でもって猛攻の嵐を受け流し、お返しとばかりに刹那の隙を鋭く斬り込む。

男の強さは、オツタルの想定を大きく上回るものだった。

スキルこそ発動はしていないが、オツタルがLv4に至るまでに培ってきた己の技と力、その全てを引き出す勢いで苛烈に攻めるも、男の巧みな身体捌き、卓越した剣の技量、死角の一撃すら防ぐ予知染みた先読み能力……等々。

純然たる『技』と『駆け引き』が、若きオツタルとは隔絶した力量差であった。

その不動な様は例えるならば、難攻不落の要塞の一言。

オツタルが鍛え上げた肉体を用いた体技を織り混ぜたとしても、しかしその堅牢な砦の如き男の守りは僅かにも崩せず、攻めあぐねる。

「――よおし、一旦ここで切り上げとしようぜ」

そして地平線から昇る朝日が完全にその円輪を頭にした頃、拮抗した戦闘は男は言葉により終タイムアップ了となる。

結局この戦闘でオツタルが男の体に一太刀入れたことは、一回足りとも無かった。

「坊主、やはりお前さん才能あるぜ。剣を打ち合っただけこれ半月、最初の時と比べりゃ、動きがかなり洗練されている。こっちは防ぐのでやつとだ」

「はあっはあっ……抜かせ」

悠然と、戦闘前と同じように自然体で佇む男に疲労の影は無い。惜しめない称賛を送られるも、だがオツタルは苦々しく否定する。

「お前は始終余力を保ちながら、俺の攻撃を悉くあしらい続けていたではないか。俺の誘導にも虚攻フェイントにもものらずにだ。つまりぬ世辞はやめろ」

「そう卑下するな坊主。単純に経験値の違いってやつだ。こう見えて俺はお前さんが想像する百倍以上の戦場いくさばを経験してるもんでな。坊主のような血気盛んな相手から小狡いチンピラにと、戦り合ってきた機会なんてのは灰に尽きる程あるのさ」

暗に自分の戦闘は簡単に行動が予想できるものだと言われた気



がした。男の余裕綽々な態度にイラツとくるが、それを示せるだけの  
実力を十分思い知らされている。

オツタルとて猪突猛進に攻めるしか能のない脳筋イリシシではない。己が  
未熟も未熟だと自認する彼は、これまでの数多くの敗北で得た失敗や  
至らぬ点を猛省、研鑽し、更なる向上への礎へと変えてきたのだ。

だが半月も及ぶ挑戦でオツタルがどれだけ攻め方を改めようが、男  
の『予測』の範囲を超えるには至らなかつた。

「しかしあれだな、Lv4ともなつてくると恩恵を上手い具合に身体  
と調整している者が多いもんだな。流石はオラリオの冒険者と云つ  
たところか」

顎に手を当て、しみじみと男は語る。

「階位レベルが高みに至るほど急上昇する能力を、大抵の持ち主はもて余し  
がちになつちまうもんだが……その点第一級クラスの奴らは総じて  
『貯金』分含めたステイタスの全てを、完璧に引き出す術を心得ている  
印象があるな。——恩恵が何たるかを、理解していやがる」

「それは、どういう意味だ……?」

首を傾げるオツタルに、男は外周の縁に腰を下ろすと説明を語り始  
めた。

「坊主もLv4まで登り詰めたんなら、既に実感しているだろう?」

神様方が刻みし恩恵はそこらの子供でも大人を打ち負かす力を無条  
件に与えるが、その本質は俺達が得てきた経験値エクセリアを元にした才能、『可  
能性の具現化』である」と

「そうだ……オラリオでなくとも周知の事実だ。その尤もたる例こそ  
がスキルと魔法。数値を意図的に伸ばすことは可能なれど、この二つ  
はどうにもならん」

「おう、種族の特性や外的要因で顕れる例もあるが、『ちーと』やらで  
強制発現しない限り原則的には個々人が抱く願望や素質とやらに由  
来する。……その内容がどうであれな。

恩恵は万能に非ず、生かすも殺すも己次第、千変万化の苗木そのも  
のつて訳だ」

「何が言いたい……?」

「簡単な話だ。坊主、お前は何の為に強さを求め、何者に成りたい？」  
刻々と陽に染まる世界で、涼風と共に男の問いが流れる。オツタルは、迷いなく即答した。

「——女神の為。この身は主神より名を拝命し御血を授かった時から、あの方の神意を遂げるに相応しい女神の勇士エインヘリヤルに成ると誓った」

一切の揺らぎがない、不動の信念が込められた宣言。

彼の答えはフレイヤ・フアミリア眷属達の総意にして、存在意義でもある。

愛に報いる為、寵愛を賜る為、美神に相応しい己に至る為——望みは様々なれど、オツタル達眷属の根源の想いはただ一つ。全てはフレイヤの為に。

敬愛せし主神が命じれば、彼ら勇壮な戦士達は相手が『頂点』だろうと合戦を挑むのを厭わない。

「そうだろうな。お前達、美神様の眷属共はいつだって主神おや一筋だからな。……まあ、俺も人のことは言えねえし、それが坊主の本心なら良いと思うぜ」

返答を聞いた男は苦笑を浮かべながら、元から分かっていたように頷くと更に質問を重ねた。

「——で、それだけか？ 数多くいる眷属共の中で、ただ他の奴らと同じ目的と望みを抱くだけの、女神エインヘリヤルの忠僕の一人に過ぎないのか？」

「?! ……何をっ」

思いもしなかった言葉に、オツタルは口ごもる。

否定は出来ない。上述したように、オツタルは先達と同じ志と目的を胸に秘めて戦い続けてきた。女神が命じたからではなく、彼自身がそう在りたいと願ったから苛酷な試練にも耐え続け、Lv4にまで至れたのだ。

「……あの方に仕えられ、鍛え上げた力を奮えるならば、これに勝る喜びは存在しない。——俺達の在り方を、愚弄するのか……!!」

一人の人間から放たれる重圧が、平穏な朝の空気を一転させる。

先の戦闘では常に平静を保っていた感情を剥き出すオツタルに、男は気圧されずやれやれと呆れる。

「はあ……たく、そう猛るなつて坊主。そうやって主神と矜持を傷つけられたと思えば、すぐに血が上るのがお前達の悪い特徴だ。だからいつまで経つても、彼奴らに及ばないんじゃないか？」

「グッ!？」

「お前達の在り方を否定はしねえさ。誰が為、何を目的に強くなるうが、そりゃ個人の勝手つてなもんだ。——俺が言いてえのは、お前だけしか至れぬ可能性を見出だせつて話だ」

「可能性……？」

怒りを抑えたオツタルが聞き返す。

「言つただろう？ 恩恵は可能性の具現化。極論すりゃ、究極の自己実現でもある。無論、空を自由自在に飛びたいと心から願つたところで翼が生える訳でも、不老不死の肉体に変えるような都合の良い力じゃない。」

——だがな、坊主。抱く夢想が星屑みたく遠く、手に届くのがあり得なかつたとしてもだ。そこに繋がる道筋が僅かにでも存在し心に願うならば、その願望を恩恵は汲み取りステイタスに反映される——  
こともある。要は、きっかけは己の気持ち次第なのさ」

「疑わぬこと、それが強さだ？」

最後に男はそう断言し締めくくると、男は若き武人に激励を送る。

「オツタル？ お前は女神に尽くすことが本懐であるからこそ、あのおつかない連中に何度も折れず挑み続け、強くなれたんだろう。」

だが彼奴らを越えたくば無限の可能性に眠る、『最強』の自分を選び取れ。数多の眷属の一人ではない、己のみしか保持しえない存在の証に相応しいのをな」

力強く紡がれる男の言葉が、彼の胸中を鋭く突きつけた。

「最強の、自分……」

復唱するオツタルは考えた。自身が望む、理想の『最強』を。程なく漠然と浮かんだのは、一つの情景だった。

——その地は女神の居城。天に座する銀月の燐光が注がれて、黄昏に輝き充ちる戦いの野の世界。

黄金の原野に存在するのは、一匹の猪と一柱の女神。

あらゆる戦場と強者を越え、戦の猛猪おとうと謳うたわれるに至った巨猪と、その背に乗る絶世の美神。

巨猪は原野を駆け抜ける、気紛れな風と共に、女神の神意のままに。立ち塞がる障害てきが道を阻もうとも、物ともせず疾走する。

女神の名はフレイヤ。ならば、その猛猪おとうの名は――

「何か掴んだようだな。……忘れるなよ、その感覚イメーヅを」

深く思考の海をさ迷っていたオツタルの意識が、男の声に呼び醒まされた。

「俺は今日、この都市を発つ。毎朝の稽古もここまでだ、後は坊主自身で頑張りな」

「待てザール?! まだ俺はお前を超えていない」

軽い調子で告げられる別れの言葉に、驚くオツタルは引き留める。

男は苦笑した。

「俺なんぞに執着するな。戦い続ければいずれお前も猛追する側から、される側が変わる時が訪れるだろうよ。それでも常に初志を忘れず鍛練に励みな」

「……」

男との関係は不思議なものだった。師と弟子と呼ぶにはあまりに期間が短く、他人というには与えられた影響が濃い。

彼が目指す強さを得るには男の存在はまだまだ必要で、気づけば超えるべき対象の一人になっていた。

「……ザール、お前は一体何者だ? 恩恵への理解の深さ、実際に第一級冒険者と戦ったかの物言いといい、ただの放浪者ではあるまい」

男の名前以外、その素性を彼はまるで知らない。一度、男が何者であるか質問したことがある。

例えば白髪の男がどれだけの戦地を渡ってきた戦上手だとしても、仮にも都市外オラリの人間一人がLv4じぶんをこうも容易く相手取れるほど、迷宮都市は甘く無い、と。

オツタルの追及を、だが男はレベルはおろかファミリアに所属して

いるのかすら曖昧に流し、静かな笑みと共に内緒だと返した。寧ろ知りたければ自分に一撃ぐらいは当てて見せろと、こちらの戦意を煽るように。

彼の問いかけに、白髪の男は無言を返す。男は彼から視線を離すと昇天した朝日へ眼差しを向け、静かに語った。

「俺が何者であつたところで、坊主が気にする必要はないさ。……お前の目には俺が若く映っているかもしれないが、このオラリ都市市で名を馳せている数多の英傑達と比べりゃ、所詮俺は人よりも少しばかり生き永らえているだけの、老兵に過ぎん」

「じゃあな、坊主。お前さんが生きていりゃ、そのうちまた巡り会おうぜ」

最後にそう言い残すと男は市壁から飛び降り、活気づく都市へと姿を眩ました。

くくく

時は現在に戻る。

月日が流れ、オツタルは都市最強の地位に至った。先代の団長を超え、かつての最強達も都市から消え去り、オツタル達次代へと望みを託した。

あれから二十年近くも経て、一度も男との再会は果たしていない。だが未だ自分が真の最強に到達していないと自覚するオツタルは、男の言葉に従い鍛練を怠らなかつた。

オツタルの強さの根源は変わらず今も昔と同じ、フレイヤの為に。だがそれだけでなく己だけの、唯一無二の頂を築き上げることを同時に目指した。

その決意を象徴するように、男が都市を去った後に一つの『魔法』が発現した。

一時の回想を終えたオツタルは自身に立ち向かうコボルトを見下

ろす。

強い意志が込められたコボルトの眼に、かつての自分を見出だす。情弱な自分を呪い、強さに対する飽くなき飢えを抱き、がむしゃらに挑み続けていた頃の自分。

だが悲しいかな。強くなることを望まれてもそれは試練として、その役目はあの少年が限界を超える為の踏み台に過ぎない。

だがそうだとしても、それをコボルトに告げる気は無い。オツタルの役目はコボルトを試練に相応しく鍛え上げることのみ。両者の関係は、それだけで語るに十分。

「さあ来い。時間は限られている。強くなりたくば、死力を尽くせ」

強さを求めるのは、必ずしも冒険者達だけではない。

### 第36話 特訓の終わりに

「今日で、終わりだね」

「ああ。一週間鍛えさせてもらってありがとな、アイズ。この礼は、特訓の成果で返させてもらおうぜ」

そんな軽口から、一週間に及んだ稽古は最終日を迎えるのだった。薄蒼く、平穏な静けさに包まれた夜闇の都市の一角。黒い剣閃が鋭く旋り、風踊る身のこなしが連撃を次々律していく。

都市を優に見下ろせる巨大な高壁の通路上では、二名の若き剣士達が剣戟を絶えず奏で上げ、反響が澄んだ大気へ溶け込む。

日の光すら登りきらぬ、早朝の少し前の出来事だった。

垂直を描く四連撃技を少女は全ていなし、お返しとばかりにヒュツと軽い仕草で突きを放つ。急迫する刺突に少年は即座に攻防を切り替え、純黒の長剣の腹に左手を添えた。

一瞬後、受け止めに成功するも突撃槍と錯覚させる重い衝撃が剣越しに両腕を伝い、踏ん張る両足をザザツと引き下がらせる。威力を減衰させて尚、痺れる感触に少年は顔をしかめた。

恐るべしは“鞘”でありながらも研ぎ澄まされた斬撃を彷彿させる剣筋に、可憐な外見とは裏腹に少しでも受け損えば烈風に吹き飛ばす如く、体を持っていく馬鹿力もとい膂力。

少年が自前の反応速度と蓄積されたバトルセンスをフルに駆使すれど、辛うじて攻防を成立させるのが精一杯。敢えてスキルと二刀流を封印してるとは云えど、一週間に及ぶ鍛練を重ねても未だ少女に掠りすら叶わぬ事実、少年は何度レベル差の壁を痛感したか―無論、彼女自身の実力もあることは言及する迄も無い。

Lv1とLv6を隔てる壁は都市を囲む絶壁にも似て、少年が睥睨する彼女を超えるのは前世のアドバンテージが有つてなお、至難の挑戦であった。

一方で、手加減に手加減をしているとはいえ、鍛練を重ねる毎に体技と剣技が洗練されて―あるいは思い出すかのように―動きのキレと反応速度が増してゆくのを、少女―アイズは改めて少年の驚異的な

成長ぶりを再認識していた。

時々小人の団長バルウムと朝練しているのは聞いてはいるが、こちらの意図的な隙には乗らず、力加減が上手いとは言い難い一撃に即座に順応する技と駆け引きが、既に第一級冒険者と遜色が無いレベルなのだ。

少年―ベル・クラネル。同じ剣士仲間の友人リセリスが言うには恩恵を授かって2ヶ月にも充たない駆け出しルキながら、ほぼソロの身で十階層到達を為し遂げた類い稀な成長速度と、年齢に見合わぬ高い実力の保有者。

また、自身を始めとした複数名の剣士達を悉く拒否してきた問題児エリユンデータがほぼ唯一使い手と認め、その身を抱くことを許した剣士。

かつて自分がテスターとして握った際は何故か、自らのモンスターを斬り刻みたい意志に反するように、終始違和感ある感覚となまくらも同然な切れ味だったかの長剣が、今はどうだ。

死していた刀身は煌々と漆黒に瞬き、両刃はゾクリとした凄みを感じさせる、別剣と見間違えう変貌ぶりを見せつけていた。

再会時の衝撃は大きく、自らも大概な存在チートであることを天界に上げ、ズルいと内なる幼児アイズが少年に猛烈な嫉妬心を抱いたのはここだけの話。何なら自分の愛デスベレイト剣よりも遙かにお似合いの関係に見えてしまいい、謎の敗北感が襲う。

「君は、どうしてそんなに強いのか？」

何者よりも強さを渴望する少女は初日の鍛練を迎えた後、少年に強さの源を我慢しきれず聞くのだった。

「うん……？ アイズの方が俺よりもずっと強いと思うが」

「今」はね。でも君の戦い方は昔の私よりも、ずっと考えられている。誰かに、学んだのか？」

少女の疑問に少年は悩まし気に顎に手を当て、唸りながら考え込む。

「難しいな。これはリセリスにも言ったが、俺の剣技は我流も同然なんだ。……ただ強いて言えば、俺の剣は迷宮ミコウと変わらない場所で培われた賜物かな―悪い、これで勘弁してくれ」

「？」



結局、露骨に話題を逸らす彼からは期待した答えこそ得られなかったが、それでも模擬戦を通じてアイズは少年の実力の根底にあるものを、何となく理解しつつあった。

それは――対人、対怪物問わず幾戦もの戦闘経験。

臨機応変な立ち回りからわかる、彼は知っているのだ。自分よりも正確で手数を上回る速い剣を。打ち合いすら赦さぬ圧倒的厚重的な剣の一撃を。

只管に力ステイタスの向上のみを求心し、幾百、幾千の怪物を塵に変え続けてきた己の剣とは異なる研鑽の積み重ねが、彼の成長に一役買っているのかもしれない。

風と共に心が舞い踊る。当初は少年の急成長の秘密を探っていた筈が、今やアイズはこの鍛練の時間を純粋に楽しんでいた。リセリス以来だろうか、誰かと剣をぶつけ合うことがこれ程ワクワクするのは。

Lvは遥かに劣る筈なのに、少年の並外れた技量と纏う剣気の圧が自らの剣士の矜持を刺激させ、抑制していた闘争心を揺り起こさせる。

彼もまた同じ思いを抱いてるのだろう。深紅の眼差しは常に好戦的に灯っており、時折こちらの抑えきれぬ戦意に呼応して不敵な笑みを浮かべてさえた。

心地良い鍛練じかんは、しかし終わりの刻が訪れる。

地平の彼方で柔い光が刻一刻と夜空を明けに染めてゆくに並行して、彼らの剣戟が佳境を迎える。

立て続けの攻撃に押し込まれ、接近戦に不利を悟った少年はバックステップする。それを見たアイズは畳み掛けんと真つ向から追撃する。

石床を一蹴りで数mある距離を瞬く間に接敵し、プレモーション無しはやや突き気味の縦斬りを放つ。

迫り来る一閃に対し、少年は避けず両手に構えた剣を向けた。鞘へ真つ直ぐに注がれる彼の眼差しに、一瞬アイズは違和感を抱くも勢いは止められない。

訪れる衝突——しかし

「え？」

予想したインパクトは生まれなかった。代わりに。

ふわりっと、シルクのような柔らかい手応えを感じ、思わず困惑と驚きが入り混ざった声を洩らす。

エリユシデータが彼女の鞘をシュルリツと、巻き込んでいく——錯覚だが、見開かれた金の瞳には鞭に変じた長剣が鞘を螺旋状に絡め捕っていかのように見えた。

だが、そう感じたのも束の間。

「ふっ！」

瞬間的な呼気と共に少年は一步、だが激しく踏み込みながら黒剣を握る右腕を鋭く震わせた。途端、爆発的な反発力がアイズを襲う。

「っ……………!!」

最早、手加減だの相手がLv1だのは彼女の思考から消えていた。思考は臨戦<sup>ガチ</sup>モードに突入し、咄嗟の勘で彼女は反動に逆らわず後方へ跳んだ。

勢い良く引き下がると自らの状態を確認する。瞬時の判断は功を成し、本来なら腕はおろか胸部にまで及んだであろう衝撃は、やや右腕に痺れを感じさせる程度に抑えられた。

(今のは、受け流し……いや、受け返し?!)

アイズは気づく。それまではパライカブロックで武器防御し続けていた少年が、この最終日の終盤で自分が新たに見る技術<sup>スキル</sup>を披露したのだと。

自らの攻撃を逆に利用された事実には、怒りは無く深い衝撃が彼女を襲う。この少年は、どれほど手札を隠し持っているのだろうか。

多少の慢心こそあったかもしれないが、油断は一切していない。にも拘わらず己の想像を超えた少年にゾクゾクとした感覚が背筋に走る。胸中に込み上げるのは果たして戦慄か、あるいは感動か。

ちょうど、開始前と同じような距離感を空ける両者。互いに相手を見やり、深紅と黄金の視線が交錯する。

一つの攻防を終えた事で、高まっていた緊張の圧が緩んだ——その

時、〃第三者の声〃が二人の間に入った。

「そこまで！ 二人とも日の出だよ」  
タイムアップ

張りの良い、元気に満ちた少女の声に従って二人は戦意を解き得物を納める。少年はアイズに近寄ると背筋を伸ばし、頭を下げた。

「一週間、ありがとうございました」

開始前の慣れた口調とは異なり、先輩冒険者であると同時に自らを鍛え上げてくれた恩人として感謝を告げる。

アイズもまた少年の健闘を労う。ついでに最後の受け返しについて触れた。

「最後のアレ、驚いたよ。君が編み出した技？」

「いや違うな。……昔伝授された柔法さ。いやー土壇場で通じるかヒヤヒヤしたが、我ながら上手くやれたもんだ」

体全体を柔くし、相手の攻撃をそっくり巻き込んで反撃する柔法。その使用には深い集中力は当然として、自らの体のみならず相手が生み出す力を精密にコントロールする技量が必要となる。

最終日に見せたのは手札の温存もあるが、最大の理由としてはアイズの荒ぶる力、繰り出す速度を正確に見極めていたが為、と少年は説明した。

「只でさえ、アイズの力も敏捷も俺よりずっと上回ってるんだ。下手に受けようもんなら、初日のようにこっちがぶっ飛ばされていたさ」  
遡るは特訓の初日。リセリスを始めとした同格と手合わせする機会が多々あれど、彼女が下級冒険者に実戦形式の稽古を施す機会は無。

そんな訳で、少年から見た初稽古は率直に評してウルトラハード状態。変異オーク戦が生易しく感じる程に少年が攻撃を防ぐはおろか、彼女の動きに反応することも間に合わず。何度も蹴られや叩かれと、身体と一緒に意識を一撃ノックアウトされて散々な目に。

朝練で団長ことリセリスが自分に合わせ、如何に絶妙な力加減で接してくれたか再認識し、感謝を抱いたのは別の話。

ついでに―技の性質上、相手の攻撃を誘う必要があるが、初見のアドバンテージが無かったら二度目は叶わなかったであろう、と少年は付

け加えた。

なるほど、とアイズも納得の首肯をする。

そうして、互いの動きを評価し合うなど戦闘談義に花を咲かす二人に、焦れった気に見ていた傍観者が割って入った。

「二人ともー。ボクのこと忘れないうでね。それにアイズ、今日は遠征日でしょ」

「ああ。勿論忘れちゃいけないさ、団長殿―それじゃ、アイズにリセリス。二人の特訓に参加させてもらってありがとな。お蔭で良い経験値を貰えたよ」

「うん。私も、君と手合わせ出来て、楽しかったよ」

微笑みを浮かばず彼女と少年の間を、爽やかな風が吹き抜ける。

一週間に及んだ三人の特訓は日の出と共に終わりを迎え、新たな一日が幕を開けるのだった。

~~~~~

「――更新完了。うむ、もう服を着て良いぞ」

背後でステイタス更新を告げる主神カーディナルの言葉に、上裸の少年は上着を着込む。

朝練後。アイズと別れ、リセリスより先に教会ホームに帰宅した少年は起きていた主神に一週間ぶりの更新をお願いした。

「ほれ、今回の結果じゃよ。この短期間で、今のお主はステイタスを極めつつあるぞ」

ステイタスを書き写した紙を手渡され、その内容を覗く。

【ベル・クラネル】 Lv1

力 : S903 耐久 : A823 器用 : S958

敏捷 : B751

魔力 : E426

〈スキル〉

アグセルアサルト

【攻撃加速】

・能動的動作の加速補正

・イメージ動作のアシスト補正

バトルボーナス
【戦闘功績】

- ・戦闘時の経験獲得量の上昇
- ・戦闘時の行動で追加ボーナス
- ・パーティを組んでいる際にメンバーにも適用

〈魔法〉

【ウエポン・マスタリー】

- ・強化魔法 : 武装の性質拡張、特性強化
- ・詠唱式【瞑目せし先は夜淵の宙。降り立つ底は夜風の原。夢路の果て、屹立する独つの巨杉に寄り添わん。揺れる枝葉は汝の追憶。降れる星火は汝の情景。仮想の分け身、虚の断片を宿し再起せん。汝よ成れ。青薔薇の眠りより再醒し、凍てつく氷枢より再顕せよ。エンハンス・アーマメント】

・追加詠唱式【リリース・リコレクション】

・対象の構成を成す記憶情報の解放

「アイズとリセリス、二人との手合わせのお蔭だな。それでも、ここまですべてが上昇するとは予想外だが……」

(変異したオーク戦後の更新でも、ここまで伸びなかったぞ)

戦闘功績スキルの補正が関与しているとはいえ、あの戦闘よりも上回る伸び幅に、当初は驚いていたカーディナルですら今や呆れる始末だ。

とはいえ、早朝の短い鍛練でも第一級冒険者二人にしごかれてきたことを考えると、こんなものかもしれない。

こんな事実を世の冒険者達に知られれば、二重の意味で彼らが嫉妬に怒り狂つても文句は言えなからう。

—くわばら、くわばら、と決して有り得ぬとは云えぬ未来を想像し、背筋が震える。改めてカーディナルが嚴重注意をした理由に身が染みるものだ。

「確か、レベルアップの条件はどれかアビリティ1つがDランク以上なんだっけか？」

「うむ。付け加えると、何かしらの偉業を果たす必要もある。そういう意味では、今のお主はいつ何時にランクアップしても可笑しくない

と云えよう……並み大抵ではないがのう」

「決して、くれぐれも早まるな。とカーディナルは最後に重々しく告げる。

「ああ、わかっているさ。もう、懲り懲りだからな……」

己の前世の所業を振り返り、苦笑する少年。

例え急速な成長を遂げていたとしても、生命は一つ。強くなることを望んでも、生き急ぐ程ではない。

前世とは異なり、閉ざされた世界からの脱出や、世界の果てに到達しなくてはならぬ理由もある訳で無いのだ。

もっとも、某女神に目を付けられたのが運の尽きと云わんばかりに、厄介な試練トラブルが多発するのは少年も預かり知らぬが……。

「わかつとるなら、もはや何も言うまい。これでランクアップも果たそうものなら、ワシは他の神々共への上手い言い訳を考えねばならん」

「ははは……苦勞かけて悪いな、カーディナル。——ところで話は変わるけど、リセリスはまた遠征で暫くホームを空けるんだよな？」

「然り。ロキファミアリアに同伴する形での深層攻略じゃからな。暫くの間は地上に戻ってこれん」

「わかった。それじゃ、俺は部屋に戻るよ。サンキューな。カーディナル」

カーディナルに礼を言い残し、俺は自室へ戻った。

「深層か、負けていられないな」

部屋に入ると、別れ際に見た遠征に意気込む二人の顔を思い出し、ウズウズした気持ち共に独り言つ。

攻略済みの、前情報ありの階層を回る俺とは違って、前人未到の地へ挑むのだ。そこにあるモノを目に出来るのは、遥か高みにたつ第一級冒険者の特権だ。

「『エリユリシデータ』。お前もそうだろうか？ 一緒に高みを目指そうぜ」

不敵な笑みと決意を向けた先には、壁に立て掛けられた漆黒の長剣。だが、主の言葉に呼応して、柄に填められた月ルナティックライト、嘆息が同意する

ように青白く瞬くのだった。

ソロに戻れど一人に非ず。少年と黒剣が歩む物語は、まだまだ序章に過ぎない。

「——もう十分だ。後は暫し身体を休めろ。そう遠くない先で、存分に力を奮ってもらおう」

「グルウウウウウ……」

——本当の冒険しれんが、今こそ始まる。

第37話 宿命の邂逅

『オラリオの中心にいけ』

富も、名声も、女子も、望むモノ全てがそこにある。――特に男の浪漫は至高云々……。

日頃から口癖のように豪語していた祖父は、亡くなる数日前にも同じことを言い残していた。

俺が単身オラリオを目指したきっかけも、もしかしたら祖父の言葉に起因するのかもしれない。

同時に祖父は「冒険者」に成れとは一度も言わず、「やりたいようにやれ」と笑って告げた。今思えば彼の地で何を成し、何者になるかは全て己の意志で決断しろ、という意味合いがあつたのだろう。

祖父が亡くなつた知らせを聞いた数日後、俺は祖父の言葉に導かれるようにしてオラリオに着いた訳だが、そこで剣を執らずに地上で暮らす未来もあつた筈だ。

だが、俺は自らの意志でギルドに赴き、危険が渦巻く冒険者への道を真っ先に選択した。

仮想世界ではない、リアルな苦痛と生死が伴う異世界の迷宮^{ダンジョン}では何時でも自他を問わず生命が砕け散る可能性があることを、他ならぬ俺自身がよく知っているにも関わらず。

――転生された理由を求める為

――同じ境遇の人物、またはかつての仲間を探す為

あるいは、遙か遠き日に夢想した憧憬を一途に求め続けた。あの男“と同じように、理性ではわかっていても俺自身もまた真の異世界を前に探求せずにはいられなかつたからなのか。

つまるところ、元来の好奇心や剣士の性が俺の魂に根強く残つていたからに過ぎないのではと、今でも自問する。

気付けば、ありふれたヒューマンの冒険者――今世の呼称となつて一ヶ月とその半分が経過した。

短期間で突発的な波乱には何度か巻き込まれたが、神格ある主神と頼りがいある先輩団員、そして唯一無二の相棒に等しい愛剣との出会

いを考えれば、駆け出しには勿体ない程恵まれていると思う。

剣士として、冒険者として、そして……『ベル・クラネル』として第2の生を歩むの俺の物語は今後どのような変遷を辿るのか、神ではない俺には見通せない。

ただ一つ言えるのは、迷宮都市でこれまで巡り合った“出会い”を、悔やむことはあるかもしれない、だが否定はしない。

これからも、その生涯が冒険者として幕を閉じたとしても祖父の導きが間違いではないと俺は信じたい。

例え―その出会いの対象が“怪物”モンスターだったとしても。

(おかしい……静かすぎる)

違和感を覚えたのは異質なまでの静寂だった。

冒険者はともかく、9階層に踏み込んでから一度も怪物達に遭遇せず、壁から生まれる気配すら無い。

にも拘らずフロア中の生き物が息を、気配を押し殺すような強張った空気に満ちている。

体がザワつく。この得も言われぬ感覚に覚えがあった。そう、忘れもしない1ヶ月前に発生したミノタウロスの上層進出。その時の前触れも今と似た状況だった。

……否、少し違う。

この広間ルームに入り込んだ時から、時折ヒリつくような、チリチリとした殺気しせんを首筋に感じるのだ。

俺が入る前から“何者”かは広間の暗影に身を潜めど、滲み出る気配きはいを隠しきれていない。

少年は背に負った双剣を一息に抜き放つ。その片方の切っ先を視線の“出所”へと突き付け、鋭く言った。

「出てこいよ……“そこ”に居るのはわかっているぜ」

『——ツツ!!?』

ピタリと突き付けた先は、広間の隅にあたる壁際付近だった。

壁の凹凸を利用して潜んでいた何者かはバレるとは思わず、少年の言葉に動揺を露にする。やや間を置くも、無理を悟りヌウツと暗がりから全身を現した。

『フグウルルウウ……』

広間ルームの天井から降り注ぐ淡い燐光で浮き彫りになるのは、犬頭の怪物コボルトであった。

だがその様相は少年の知る姿と大きく異なる。細身の自分を優に上回る体軀に、ミノタウロス程ではないが隆々とした筋骨。

それだけでも威圧プレッシャーを放つには十分だというのに、何よりも目を引くのは全身が鮮血を浴びたように紅く染まった体皮と、片手のみで握られた分厚い大剣。その他にも腰の付帯ベルトにナイフ状の武器が吊り下げられている。

（「ッ “強化種”?!」）

気づいた瞬間、息を呑む。

アドバイザーエイザー曰く、自分以外のモンスターが持つ魔石を食らい続け、通常種を上回る自己強化を果たした个体。その強さは脅威の一言、過去の事例では大派閥に討伐されるまで数多くの上級冒険者が返り討ちにされたと云う。

運悪く遭遇した日には逃走を最優先に、交戦は極力避けるよう口酸っぱく忠告されたのは記憶に新しい。

『グオオアアアアアアアア——!!』

コボルトの雄叫びハウルがビリビリと広間中の空気を轟かす。備えていながらも身を竦めてしまいそうな迫力に、鼓動が否応なく一気に高まる。

「——やるしか……無いのか!!」

全力で挑まなければ即殺される——鬼火のように赤々と輝く双眼にそう悟った俺は二刀流の構えを取る。

奴もまたこちらの戦意に呼応するようにフンと鼻を鳴らし、大剣を両手で構え直し戦闘態勢を取る。

……その様子がどこか、これから俺と戦闘することへの高揚を覚えているように見えた。

間もなく、どこかの広間で冒険者と怪物が交戦を開始した。
コボルトは運命の好敵手と出会い、そして少年は、真の冒険へしれんと挑み立つ。

~~~~~

《ダンジョン地下迷宮7階層》

ロキ・ファミリア主導による合同遠征―その道中の出来事。

「アイズ、リセリス、聞いた!? 【ヘファイストス・ファミリア】の上級鍛冶師達が付いてきてくれるんだって。前よりも賑やかになったね!」

「うん……聞いたよ。すごいね」

「しかも凜さんに椿さん……Lv5が二人も加わっているもんね」

緊迫感とは程遠い、地上も同然の空気で話す陽気なアマゾネスのテイオナに、アイズとリセリスは首肯を返す。

前回の遠征がリセリス一人のみの外部参加であったのに対し、今回はヘファイストス・ファミリアの主力たる上級鍛冶師ハイ!スミスが多く同行している。

更にその中には鍛冶師の名声以外にも、冒険者としても第一級の二人が参加しているのだ。如何にロキ・ファミリアが今回の遠征に心血を注いでいるかが伺えられよう。

「えーと確か、リセリスの剣って【妖工白狐】が打ったんだよね。……

妖剣だっけ? 魔剣とどう違うの?」

「……私も、気になる」

魔法を放出できる魔剣が製作可能な鍛冶師は希少であるが都市内にはそこそこ存在し、質に差はあれど市場にも出回っている。だが、狐族特有の妖術を用いた武具の作製者はオラリオでは唯一、コウジロ・凜のみである。

彼女が手掛けた妖具は特殊な製法が伴うために市場に流通することはなく、その全てが特注品オーダーメイドであった。

故にこそ、妖剣への知識不足はアイズやテイオナに限った話ではな

く、大多数の冒険者からは魔道具と同じ。何か不思議な特殊能力が備わったモノ”というのが一般認識されていた。

「うーん……何て言えば良いかな」

二人からの質問に、リセリスは腰に帯剣した自身の主武装たる愛剣の柄頭に片手を置き思案する。そうして内容がまとまったのか、クルリと二人に愛らしい小顔を向けると、逆に二人に問いを投げた。

「二人はさあ、魔剣の最大の特徴って何だと思う？」

「魔剣の、……特徴？」

二人が咄嗟に思い浮かんだのは、やはり何といっても手軽に魔法を放出するイメージだ。回数制限あり、一部の例外を除き本職の魔導士には劣るとはいえど、魔法の才が皆無の者でも振るうだけで即座に発動が可能というメリットは戦闘時では非常に大きい。

概ねそのように答えると、リセリスは頷きながら補足を加える。

「魔法をすぐに射てるのも勿論だけどさあ、一番大きいのは、誰でも扱える点じゃないかな。昔ボクのお師匠様が言ってたんだけど、手軽に発動できるほど使用に自制心が効かなくなるものなんだって」

「……過ぎた力は身を滅ぼす。かつての軍事大国がそうであつたな」

「……リヴェリア」

同意するのは、背後で会話を聞いていた王族エルフのリヴェリアだった。かつてラキアが魔剣でエルフの森を焼き払った所業は有名な話。エルフならば誰一人として知らぬ者は無く、また現在も尚赦されざる行為として憤怒を抱く者も数多い。

「魔剣と聞くと大抵は簡易的な魔法の行使がイメージされるが、最大のメリットにして危険なのは、我々のような力ある冒険者でなくとも扱える利便性。……そういうことだな、リセリス？」

「流石リヴェリアさん！ お師匠様と全く同じです！」

オラリオにいる全種族の中でも、特に博識にして聡明なエルフたる彼女にリセリスは惜しみない賞賛の言葉を送る。——即ち、誰でも扱える力は時として脅威に成り得るのだ。

「えーと、要は魔剣がすごい簡単に使えられるってこと？　じゃあ逆に妖剣はどうなの、扱いにくかったりする感じ？」

「アンタねえ……」

「いまいち内容を理解しきれしていない妹テイオナに呆れ、ため息をつく姉テイオネ。そんなアマゾネス姉妹を尻目に、アイズはリセリスの腰元に吊るされた剣にちらりと視線を向ける。

今は黒鞘に納められているが、いざ露になると剣身全体は黒紫色を成し、十字状の柄をした鍔の中心には彼女の瞳の色と同じ瑠璃ラピスラズリが覗けられる。一見するとシンプルな直剣に見えるが歴とした妖剣である。

同じ妖剣であるエリュシデータは扱えなかったが、彼女の剣はどのようなだろうとアイズは興味を抱き聞いてみた。

「私でも、その剣を振えるの?」

「そうだね……ボクの剣、『アンリーシュ』はアイズでも武器としてなら使用出来ると思うよ。でも真価を發揮できるかはアイズ次第かな?」

「……どういふこと?」

アイズの頭上に疑問符が浮かぶ。

「凜さんの受け売りだけ……妖剣にはね、人の『思念』が宿っているんだ。だから例え担い手の腕が優れていても、互いの相性が良くないと本来のスペックを發揮するのは難しいんだって」

「はあ? そりゃつまり、武器に意志があるってことかよ。ンなもん役に立つのか?」

口を挟むのは彼女らの前方で密かに聞き耳を立てていた狼ウエアウルフ。人のベートだった。彼からすれば如何に強力な代物であったとしても、武器の機嫌次第で使用に制限が掛かるならば邪魔でしかない話だ。

「妖剣の殆どは普通に扱う分には支障は無いらしいよ。でもボクのアンリーシュの場合だと、他の剣を使うのと比べて全然使い心地が違うんだ」

言うなれば、剣の形をした恩恵ファルナ

柄を握れば自らの手足の延長かのような感覚に陥り、意気が増せば呼応して切れ味が増幅する。

そして、担い手と深く精神がリンクすれば妖剣の真骨頂たる

固有能力ユニークスキルが発現される。

リセリスにとって妖剣アンリーシユとは、己の半身―“魂の写し身”も同然であるのだ。

「ふーん……何か話を聞いてると、私も欲しくなっちゃうな。地上に戻ったら依頼してみようかな？」

「何言ってるの、アンタには大双刃ウルガがあるでしょ。それに新造した分の借金だつてまだ結構あるでしょうが」

「もおー、わかってるよティオネ。言ってみても良いじゃんかー」

「ハハハ、ティオナは止めておいた方が良いと思うよ。妖剣は色んな意味で替えが利かないから、荒く扱いがちの人に向かないんだって」

大雑把に、無鉄砲に飛び込みがちのティオナでは前回の遠征で遭遇した異常発生イレギュラーのように、専用武器を消失ロストしてしまう危険性が非常に大きいとリセリスは言う。

これはリセリスのように妖剣を専用武器とする冒険者の数が希少である理由にも結びついている。

単に製作に掛かった希少な素材や多額のヴァリス等が無駄になる話だけでない。妖剣と担い手の関係とは、冒険者と恩恵の間柄に近いとされる。

互いに深く結び付くほど両者の資質が高まるが、万が一に迷宮探索等で妖剣が修復不可能なまでに壊れる事態に遇えば、それは最早、恩恵に刻まれたステイタスの一部を永久的に喪失するに等しい。

例え一流の冒険者であっても、あるいは一流だからこそ時に武器の消耗を考慮した上で限界まで運用する。だが、妖剣は安易に使い潰せられない。

故に、「妖工白狐」は必ず最初に依頼主に問うのだ。『妖剣と運命を共に出来る』か、その覚悟に望むぬ者には膨大なヴァリスを報酬に出されようと、決して妖剣を鍛え上げない。

それだけでなく……

「……それに相性が最高でも、使用者にとって良い影響を与えるかは限らないんだ」

「……………」

朗らかな笑みから一転、リセリスは意味深な呟きと共にちらつとアイズに視線を向ける。

アイズがその意味を言及しようとした矢先、彼らの進行先の通路から複数人の足元がバタバタと慌ただしく響き渡る。程なく向かってきたのは四人組のパーテイであった。

「ねーどうしたのー?」

「止めなさいって、迷宮内では基本不干涉よ」

「だれ……なっ! ロキ・ファミリア!!」

「そ、それに【絶剣】! え……遠征?!」

第一級冒険者達の集団を前に四人組は驚きを露にする。その切羽詰まった様子にただ事ならぬ気配を感じ取ったのか、先頭のベートが問い詰める。

「お前ら、何してんだ!」

「ゴ、コボルト」がいたんだ」

「……ああ?」

この時、ベートに限らず四人組を除いた全員が底辺モンスターの名称を聞き耳を疑い、困惑する。

しかし、続けて発せられた言葉に衝撃が彼らを襲う。

「強化種」だ! ただのコボルトじゃねえ!!」

「並みよりもデカイ! しかも武装してやがった?!」

「白髪のがきが襲われていたのを見て……あれはLv1の強さじゃない」

「!?!」

「そのコボルトはどこで見たの?!」

心当たりがあり過ぎるワードにリセリスとアイズは同時に反応し、真っ先にリセリスが場所を聞き出す。

彼らが強化種のコボルトを見たのは地下9階層、第一級冒険者の敏捷ならば直ぐにでも赴ける階層だった。

「みんなごめん! 行ってくる!!」

「リセリス! つな、アイズも!? 何やってんだお前ら!!」

より詳細な居場所を聞き出すやいなや、一時離脱を宣言したりセリ

スは弾かれるように奥へ駆け出す。それにやや遅れてアイズもまた皆を置き去りに彼女へ続く。

少年の無事を心より願いながら一刻も早く、彼の元へと向かう二人。

—その先で、彼らが動き始める。



## 幕間 衝突

(アイズ……ごめん！)

「ベルは——必ず助ける！」

その一念で迷宮を猛スピードで奔走しながらも、胸の内でもリセリスは剣姫への謝罪と彼女の身を案じる。

……事の経緯は遡ること少し前だった——

「【剣姫】と【絶剣】、手合わせを願おう」

「どうして……貴方が此処に?!」

上層で後輩の窮地を知ったりリセリスと剣姫が共に救助に向かう道中であつた。突如として他派閥の冒険者が彼女らの前に立ち塞がつた。

驚愕するべきは、その人物が冒険者の『頂点』こと猛者——オツタルであつたこと。

「後にしてくれない? ……ボク達は今、すごく急いでいるんだ」

「敵対する積年の派閥の一人に、主神の寵愛を拒みし者と迷宮で相見えたのだ。——殺し合う道理に足りんか?」

先を急ぐ二人に一切聞く耳を持たず、猛者は冷徹な眼差しと共に大剣を突き付ける。その厳然とした顔からは衝突を避ける望みを見出だせそうにない。

苦渋を浮かべるリセリスに、アイズが小声で話し掛ける。

「リセリス……先を行って」

「ッ!? ……大丈夫?」

たった一人で猛者を食い止めるといふ無茶にリセリスは懸念するも、アイズは二人で挑むよりもリセリスが一番出し抜ける可能性が高いと説く。

それでもリセリスは逡巡する。だが結局ベルの身と彼女の決意の固さに承知し、抜剣する。

「……話し合いは終わったか?」

屹立する頂点への返事は、絶剣による超短文詠唱だった。

「【バースト】!」

その場で剣を握る片腕を頭上にまで振りかぶり、詠唱<sup>と</sup>えるやいなや、猛者に向け一気に振り下す。

一連の予備動作を終えた一瞬後、猛者の視界一面が明滅<sup>フラッシュ</sup>した。

「ッー！」

即座にオツタルは歴戦で培った戦闘勘に従い、構えた大剣を盾に防御する。その刹那に遅れるタイミングで、弩砲<sup>バリスタ</sup>のような一閃の「光波」が大剣越しに直撃し、重々しい衝撃が腕へと伝わる。

辛うじて絶剣の先制を防いだオツタルは、その無詠唱に等しい絶剣<sup>リセリス</sup>唯一の魔法に瞠目する。

<sup>ランクアップ</sup>Lv6で昇華された事を考慮しても、Lv7の動体視力<sup>ステイタス</sup>を伴わなければオツタルでも対処は困難極まる脅威的な発動速度。

その速さはかつてオラリオの冒険者を震え上がらせた、「音魔法の使い手」に比肩するとも囁かれている。

だが今は関係無い。真の狙いは魔法に付随する閃光を囿にした「目眩まし」だと、オツタルは意図を悟る。

瞬時に視界の隅を横切る小さな影を捉えると同時に、大剣を振り下ろし行手を遮らんとする。

しかし――

「ッー！ 剣姫！」

「行つて！ ……リセリス!!」

割つて入った剣姫が繰り出す無数の剣嵐に強制防御を取らされ、行動を阻止されてしまう。

その隙にリセリスは魔法で自身にブーストを掛け、通路の奥へと閃光の如く姿を眩ました。

不味いとオツタルが追いかけてようにも、絶剣と同じLv6<sup>ステージ</sup>に到達し、更に剣技に磨きが掛かったアイズに妨害される。最早、猛者として足止めを余儀なくされたのだった。

――こうして、今に至る。

共に鍛練を積み重ね、同じレベルに至ったアイズならば早々やられることはない<sup>と</sup>と信じた<sup>が</sup>、相手は猛者。樂觀視は出来ない。

後から駆けつけてくるだろうロキ・ファミリアの面勢に託す他にな

い。

オツタルの襲撃理由にはリセリスすら怪訝を抱くに十分だが、それを考えるのはベルの救出が済んだ後だ。

〔9階層― ……反響して分かりづらいけど、ベルが闘っている!!〕

9階層に突入すると、一度急停止して耳を澄ませます。

フロア中に響き渡る怪物の叫びに紛れ、硬く、鋭い剣戟の音が微妙に耳に入る。

詳細な位置は事前に上層のパーティから聞いた。移動していなければベルと強化種もそこに居る筈と判断し、再び駆け出そうと足を踏み締める――

―その瞬間、視界外から猛烈な悪寒を感知する。

「―ツツ?!」

思考を置き去りにリセリスは超反応で真横に跳ぶ。

その直後、さつきまで彼女がいた場所に「銀の一閃」が炸裂した。激しく抉れる地面、飛び散る土屑。その立ち込める土煙に紛れ、一つの小柄な人影が揺れる尻尾と共にユラリと浮かび上がる。

「チツ……」

「君は…… 【ヴァナ・フレイア女神の戦車】!?」

不意討ちが空振りに終わり、苛立ち気に舌打ちする猫 キャットピープル 人の正体にリセリスは驚愕する。

オツタル 猛者に並ぶフレイヤ・ファミリア幹部にして副団長 Lv6 アレン・フロ―メル。

だが、彼だけではない。

アレンに気を取られると不意に自分の頭上に複数の影が差す。

「―ツ― 【バースト】!!」

気づいたりセリスは今度は避けず、咄嗟に魔法を発動した。

彼女の全身を覆うように「光の膜」が顕れた―次の瞬間、泡が弾けるように破裂を起こす。

「―っウワア?!」

衝撃波を伴う閃光が放たれ、彼女の頭上にいた今まさに不意討ちする直前だった襲撃者達を全員木っ端の如く吹き飛ばす。

空中で身動きは叶わず、まともに閃光に呑まれた彼らは同時に四つの驚声を洩らす。

それでも急襲を逆返しされど、四人は息を合わせたように身を振って壁や天上を蹴り、一挙に体勢を整え着地した。

小人バルウムの自分と同じ体格に、個別に色の異なる一式鎧と武器を携えた四人組。

その正体はオツタル、アレンと同じくフレイヤ・ファミリア所属、全員がLv5の小人四兄弟。通称――

「『ガリバー兄弟』……【炎金の四戦士】までも……」

オツタルに続くフレイヤ・ファミリア幹部の登場に、最早驚きよりも困惑の方が上回る。

そんなリセリスの動揺をよそに、彼らは進行先の通路を封鎖するようにして集結する。

「……猪野郎め、何をしくじってやがる。……確実に一番の懸念要素は抑える手筈だろうが」

「だが、先の反応はお見事！」

「完全に不意を取ったと思ったぞ！」

「流石は小人達！」

「小人族の『超新星』！」

ここには居ない猛者を扱き下ろすアレンと急襲が失敗したにも関わらず、むしろリセリスを称賛するガリバー兄弟。

いつでも動けるよう臨戦態勢に入りつつも、一応はとりセリスは彼らに目的を問う。

「キミ達も猛者と同じ、ボク達の邪魔？」

「てめえには関係無い話だ……ここを通るなら殺る。それが嫌ならとつとと下層したでモンスターを狩ってる、小人風情が！」

「……黙っている、糞猫！」

悪態を吐くアレンに間一髪、一変して強烈な殺意を発する四兄弟。今にも仲間割れの空気を醸し出しているが、これでもまだまだ日常会話の域に過ぎない。

「悪いけど、ここから先は通せない」

「出来れば退いてほしいけど」

「押し通るなら、俺達も本気で」

「相手をさせてもらおうよ」

順次答えるやいなや、四兄弟はガチャリと一斉に自分らの得物をリセリスに向ける。アレンとは違い友好的だとしても、主神の命なら目を掛けている相手でも実力行使を厭わない気だ。

鋭利すぎる刃のように睨み、暴力的な威圧を放つアレン。

四つの燃える闘志を統一し、静かに奮い立つガリバー兄弟。

五対一の孤立無援。都市筆頭の第一級冒険者である彼らを前に、さしものリセリスも鼓動と緊張を高めざるをえない。猛者の時のように彼らの目を盗むのは困難極まる。

（ごめん、ベル。……ボクが行くまで、無事でいてね）

敵を見据える。戦闘は不可避、ならばリセリスは覚悟を決める。

相手が本気で立ち塞がるなら、こちらも真っ向から突破するまで。

決意を胸に、柄を握る小さな手にいつぱいの握力を込める。

「闘ろう……アンリーシュー！」

主人の声と強い心意に呼応するように、アンリーシューの柄に詰められた瑠璃ラピスラズリが青紫色の光彩を放つ。

そして絶剣は、再度詠唱を力強く告ぐ。

「[バースト]!!」

光源乏しく暗然とした地下迷宮。

その中で柔らかくも炯然とした光を纏う彼女は、まるで遙か天上に閃々と瞬く星彩を彷彿とさせた。

今も主舞台で冒険者少年と怪物コボルトらが雄々しく叫び、互いに刃を交わす毎に死闘の熱気を広間ルームに滾らせる。

その幕裏で繰り広げられる都市最高峰たる第一級冒険者彼らの戦闘は

——速い。移動、攻撃、一挙一足にいたる、あらゆる挙動全てが並みの冒険者を凌駕する。

劍戟は一切途切れず、限られた空間を縦横無尽に飛び交う。少年が見れば感嘆を抱くほどの刹那に極まった超高速の応酬が、そこにあった。

胴体を狙う銀槍の穂先が、暴威的な威力と速さを伴ってリセリスへ急迫する。

点に近い一撃をリセリスは並み外れた動体視力で正確に見切る。払う剣で柄を打ち、軌道を逸らす。だが、それを見通していたアレンは瞬時に銀槍を引き戻し、更なる連撃へと繋げる。

熾烈に放たれる刺突の猛攻に、リセリスも負けじと応戦する。攻防の応酬は数十を軽く超えて展開され、その度に銀と紫紺の閃きが両者の間に発生しては瞬散していく。

「……糞がー！」

「反応がイカれてやがる！」

己の槍捌きを的確にあしらい続け、注ぐ槍時雨に躊躇を唆にも出さない小人の劍士に、アレンは忌々しげに舌を打つ。

射程範囲、威力共に槍が上。にも拘らず攻め崩せない。全力の本気でなくとも、抵抗力を失くす程度にはダメージを与える気で放った。しかし未だ掠りすら叶わない。

その理由は既にわかっている。【絶剣】と足らしめるだけの卓越した技量——も関係あるが、その根底には同レベル帯でも特出した、尋常を超える「反応速度」にある。

『超反応』——そう神々が評する図抜けた反射速度。

速すぎるのだ。スキルかアビリティ？ と勘繰りたくなるほど、一瞬の思考判断から身体動作に移るまでの流れに淀みが無い、或いは極めて短い。それに加えて、

種族的特徴の高い視力と器用の高さ

魅力する美神の勧誘を堂々拒める胆力

これらが合わさることで勇者も賞賛の、不屈の精神力を持つ冒険者として高い資質を發揮する。

とはいえ、総合的な経験値に限ればアレンに軍配が上がる。その恩恵の差を埋め、超反応と合わせて彼女を何よりも厄介足らしめるの

が——魔法。

<sup>Lv6</sup> 同格と刹那の接戦を繰り広げる絶剣。しかし、相手はアレンだけではない。

「ッ！」

四兄弟のうちの二人が、リセリスの後方死角から襲い掛かる。

不利を悟り緊急回避の選択肢が浮かぶが、それを阻止せんとアレンの槍捌きに密度が増す。

回避は間に合わない。よって—— // 迎撃 // を選択する。

戦闘の最中、彼女の身を覆う光膜が剣へと流動するように広がり、瞬く間に剣身全てをコーティングしていく。

気づいたアレンは閃光を発する前に阻止せんと、猛烈な速さで槍を旋す。彼女の剣を弾き飛ばそうと、鋭い一撃を剣身に見舞う。

交錯する銀槍と妖剣。

しかし、彼女の手元から剣が離れることはなかった。アレンが勢いに任せ槍を振り抜く直前——光が揺らぐ。爆発的な // 推進力 // を発揮した剣が逆に槍を大きく弾き返した。

「ッ?!」

「——ハアアアッ！」

余りある威力に圧され、後退るアレンを尻目にリセリスは反撃する。勢いをそのままに後方へ身体ごと半弧を描き、勇ましい掛け声に合わせ一気に剣を振り抜いた。

次の瞬間、妖<sup>アンリッシュ</sup>剣の華奢な剣身と、兄弟二人の大型武器が盛大に衝突する。

「力を振り絞れ、グレール！」

「押し返すぞ、ベリング！」

ウオオオオオオオオ——と意気を合わす大<sup>ベリング</sup>斧と大<sup>グレール</sup>剣。

あらん限りの力を四肢に込め、彼女の激しく律動する刃を押し破ろうとするも——。

「閃け——『クロスセーバー』!!」

リセリスが咄嗟に空いた片手で懐を探り、取り出したのは十字架の形状を為した第二の武装——『クロスセーバー』。

オラリオを立ち去ったエルフの魔道具製作者お手製の魔道具は、彼女の叫びに呼応して光の刃を伸長する。

ぎよつと両目を大きく見開く二人。

動揺に僅かに勢いが緩んだ隙を、絶剣は見逃さない。妖剣と光剣をクロスさせ、身に纏う全ての光を二剣へ集中——魔法を解き放った。

『!!?!』

一瞬——通路中に溢れる光の氾濫。薙ぎ払いから同時に放たれた光の斬閃は互いに重なり合い、巨大なX字の光芒を描く。

「ベーリング、グレール!!」

回避も、声を上げる間もなく光波に吞まれる二人に、通路の奥で警戒機していたアルフリッグとドヴァリンが叫ぶ。

そのまま二人は抗えず壁面にまでぶつ飛ばされ、勢い良く壁と衝突する。ドサリツと倒れ伏し、得物を手放す様子から二人の気絶は見て明らかだった。

「ハア……ハア……」

後退するアレンと慌てて倒れた弟二人に回復薬を飲ます長兄を確認し、リセリスはまず呼吸を整える。

(精神力は……まだ大丈夫。でも、このままじゃ埒があかない)

フレイヤ・ファミリア最高幹部だけあり、一筋縄ではいかない。

執拗なまでに攻め立てるアレンに、巧みな立ち回りで動きに制限を掛けてくる四兄弟の二人。

魔法で正面突破を試みれば、途端に残った二人がサポートへ加わり立ち塞がる。

これ以上ぐずぐずと時間を取らされる訳にはいかないが、かといって相手方の執念も凄まじい気迫があった。

『魔法』は彼らと真っ向からの対峙を可能とさせるが、其ゆえに相手に最大の警戒を与えてしまっている。

やはり、〃奥の手〃を行使せざるえないか。

脳裏に浮かぶ選択肢に、妖剣を握る手に力がこもる。

リセリスが使用の是非を判断する側で、復帰を果たした兄弟達が魔法の脅威を口々に語り合う。



「おい、以前の勝負より滅茶苦茶速くなってるぞ」

「後、勢い。あんなの見てから反応できるか？」

「付与魔法なのに放てるのはズルい……」

「地味に超眩くて厄介。目が潰れる」

「だが、小人を示す威光として申し分なし！」

「「それなっ!!」」

「……相も変わらず、目障りな魔法だ」

何か盛り上がりを見せる四兄弟を尻目に、アレンは淡々と評し、脅威度を上方に改める。

絶剣と劍姫―二つ名に相応しい卓越した剣技が巷で知られるが、彼女らは保持する魔法でもある共通点を持つ。

即ち反則と揶揄される程の、超短文詠唱でありながら戦闘で猛威を奮う付与魔法。

——『フレアスター』

劍姫の『エアリエル』に並ぶ、絶剣の魔法。

属性はアイズの風に対し、リセリスが付与するは『光』。無論只の光ではなく、付与すれば任意で瞬間的な加速力を発揮し、また衝撃を伴う光波として攻撃にも転用可能。

リセリスは魔法を駆使することで時に威力不足を補い、また超高速の機動力を実現させてきた。

攻防一体と謳われるアイズの風と比較して魔法の規模こそ劣るが、最大の強みは猛者も認める回避不能の発動速度。

そこに彼女の優れた戦闘勘と組み合わせることで、格上にも引けを取らぬ戦闘を可能とさせる。

だからこそ、美神は何よりも絶剣の介入を警戒し、万一を考えてアレン達を差し向けた。

少年と同じ派閥かつ、彼女の人格を考えれば少年の窮地に赴くのは至極当然。

単独ならばオツタルのみで対処可能だが、現在彼女は合同遠征の最中にある。親交の深い劍姫と行動を伴にする可能性を考慮し、その読みは当たっていた。

都市最速のアレンと都市最高峰の連携を誇るガリバー兄弟。彼らを前に出し抜ける者は極めて少ない。

しかし、彼らは微塵も油断をしない——いや、出来なかった。

「……君達が絶対に、ボクを行かせたくないのはわかった」

絶剣の強さには、まだ「先」がある。

幾度の応酬を重ねて尚、一切の陰りを見せぬ紫紺の刃——『妖剣』が持つ秘技スキルの存在を忘れていない。

「でもね、ボクも引き下がる訳にはいかないんだ。大事な家族の危機に何も出来ないのは、もう嫌なんだ……」

使用者の魂に干渉リンクすると噂される妖剣は、絶剣を——リセリスを更なる『高み』へと衝き上げる。

不意にリセリスは後方へと引き下がり、アレン達から大きく距離を取った。

前傾姿勢を取る彼女の手元のアンリーシュー——その鍔ガードの瑠璃ラピスラズリが妖光をともし。爛々と青紫に煌めく度に絶剣を取り巻く空気がガラリと重圧に、剣呑なものへと様変わりしていく。

不穏な気配にアレン達は一斉に押し黙り、顔を引き締める。それぞれが最大限の警戒態勢で身構えた。

「アレ」が発動すれば目的の足止めどころでなく、自分達の身が危うくなる。

超短文詠唱同様に発動の阻止なんて、端から不可能に近い。

「——衝リンク・スタートき動かせ」、「リミッター——「そこまでだ!!」」

妖剣の秘奥技を、今まさに発揮しようとする直前だった。突如リセリスの後方から張りのある制止の声が投げ掛けられた。

リセリスは急遽、発動を中断する。謎の乱入者は彼女の真横を猛烈な速さで通り過ぎると、彼女の正面へ躍り出る。

「——ッ！——【勇者】ッ!?!」

彼の二つ名が叫ばれる。その見た目は鮮やかな金色の髪に甘いマスクをした、聡明な雰囲気パルサムを醸し出す小人の男性。

フィン・デイルムナ——第一級冒険者にして、ロキ・ファミリア団長の肩書きを担う者。

黄金の穂先をした長槍を携えた彼は地面に柄頭を突きつけると、アレン達へ警告を言い放つ。

「女神の戦車」、【炎金の四戦士】に告ぐ。これ以上、彼女への狼藉はロキ・ファミアリアに対する敵対行為と見なす。それでも君達が戦闘をご所望するなら——」

——とことん、僕が相手をしよう。

そう言い終えると、フィンは後ろを振り変える。

冷徹な眼差しから一転、優しいものへと変えてリセリスを労った。「遅れてすまないリセリス。僕が来たからには、もう大丈夫だ。後の事は全て任せて欲しい」

「ありがとう……ディムナさん。ボクは大丈夫。でも、アイズの方は？ あつちには猛者が居た筈……」

「安心して良い、アイズは無事だ。すぐこちらに駆け付けてくる筈だ」  
詳細はアイズから聞いた。自分が先に追い付いたのは「親指」が疼き、居ても立ってもいられなかったからとフィンは言う。

またオツタルに関し、アレン達へ補足を加える。

「ああ、それと既に【猛者】は退いたよ。彼は独断に基づき動いたと言っていたが……君達はどうなのかな？」

「遅れて来た分際で、なに騎士を気取ってやがる」

「美味しいところを持ってくんナ。お呼びじゃねーよ」

「しれっと彼女の手を握んじやねーぞ、ゴラア」

「戦る？ 闘ろうぜ、殺つちまおう」

「……チツ、退くぞ——もう十分だ」

形勢が変わった。

最早当初の目的の達成は困難と悟ったアレンは銀槍を下ろし、口々に勇者へ毒舌をぶつけるガリバー兄弟に撤退を促す。

これ以上の戦闘続行はフレイヤ・ファミアリアが合同遠征の妨害——強いては道化らの派閥との全面戦争を臨んでいると受け取られかねない。それは彼らと、主神の本意ではない。

四兄弟は渋々と従う。立ち去る間際、リセリスに一瞥をくれるとアレンは迷宮の暗影へと姿を消す。

「それじゃ絶剣<sup>リセリス</sup>、名残惜しいがここでお別れだ」

「俺達も現状に満足しちやいな。すぐ追い抜いてやるからな！」

「だが、ずっと応援者<sup>フアン</sup>で在り続けるぞ！」

「また今度、手合わせしようぜ！」

立ち去るアレンに続き、四兄弟もまた言葉を残して去っていく。

後に残ったのはリセリスとフィンの二人きりだった。

「すみません、ディムナさん。ご迷惑をかけました」

「ハハハッ、頭を下げなくて良いさ。団員の危機なんだろう？ なら仕方ないさ。君は団長としての務めをこなそうとしただけなんだ」

畏まる彼女へ気にしなくて良いと、フィンはやんわり言う。

「フィン」として、一番の問題はそこでは無いのだから。

「前から言い続けていたが……そろそろ、僕のことには「フィン」と呼んでも差し支えないよ。敬称も無しだ。互いにファミリアの団長同士、対等でいようじゃないか」

キラツと瞬き<sup>ウインク</sup>を向ける勇者に——絶剣<sup>リセリス</sup>は硬直する。

「えーと……それは、色々……「怖い」ので……あ、そうだ。早くベルの所へ行かないと！ 「ディムナさん」、ごめん。その話はまた今度で!!」

目的を思い出した——というより、話題そのものから避けるように奥へ奥へと、逃げる勢いでリセリスは走り去る。

如何にリセリスが強者との勝負を楽しむ気概だとしても、深層のどのモンスターよりも遥かに凶暴で恐ろしい、「怒り狂う大蛇」目覚めの嫉妬を促す度胸を、蛮勇を持ち合わせていない。

フレイヤ・ファミアリア幹部総勢と闘ってこいと言われた方が遥かにマシ。というか、そっちの方が楽しい。

「……フィン？」

一人置き去りにされ、極寒魔法<sup>ウイン・フィン・ブルウエトル</sup>を食らったように凍り付く勇者。そこに追い付いたアイズが駆け寄ってきた。

リセリスが一人先行したと聞かやいなや、アイズがちよつと見たこと無いぐらいの速さで追跡したのは記憶に新しい。

アイズの呼び掛けにもすぐに応えず、やや間を置いて反応する。

「……………アイズ。僕は象徴として一族を照らす前に、一人の同胞に振り向いてもらえるよう、努めるべきなのだろうか……………」

「……………」

悩める勇者の眩きは、アイズには理解しきれず迷宮の虚空へと溶け消えゆくのだった。